2019年度　文部科学省委託事業　専修学校による地域産業中核的人材養成事業

地域活動による高齢者支援・介護支援の学習プログラムの研究開発事業

成 果 報 告 書

令和2年3月

学校法人敬心学園　職業教育研究開発センター

本報告書は、文部科学省の生涯学習振興事業委託費による委託事業として、《学校法人敬心学園　職業教育研究開発センター》が実施した2019年度　文部科学省委託事業「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」の成果です。

成果報告書の刊行にあたって

わが国では、65 歳以上の高齢者は、2025 年には 3,675 万人になると言われています。また、高齢者人口のピークは、2042 年に 3,878 万に到達すると予想されています。

高齢者人口が増加する中、過疎化が進行している地方都市においても、高齢者が住み慣れた地域で生きがいを持って自立した日常生活を送るためには、積極的な社会参加や世代を超えたつながりを促進する支援・サービスが必要となります。

2018 年度に改正された介護福祉士養成カリキュラムにおいては、「チームマネジメント能力を養うための教育内容の拡充」、「対象者の生活を地域で支えるための実践力の向上」、「介護過程の実践力の向上」、「認知症ケアの実践力の向上」、「介護と医療の連携を踏まえた実践力の向上」があげられています。また、「求められる介護福祉士像」には、「介護ニーズの複雑化・多様化・高度化に対し、本人や家族などのエンパワメントを重視した支援」、「QOL（生活の質）の維持・向上の視点」、「地域の中で、施設・在宅にかかわらず、本人が望む生活を支える」等といったことがあげられております。

つまり、求められている介護福祉士像としては、学生が地域に暮らす人と自発的にコミュニケーションを取りながら、地域に暮らす多種多様な人と協働・共生し、地域社会のニーズへ対応し、積極的に高齢者の社会的活動へとコーディネートできることであり、今、求められている介護福祉士とは、介護の専門的知識や技術だけではなく、介護予防等、地域社会の人材の活性化を含めたリーダーの役割も求められています。

そこで学校法人敬心学園は、昨年度より文部科学省より委託を受け、「地域活動による高齢者支援・介護支援の学習プログラムの研究開発事業」に取り組んでおります。

本事業では、学生の主体的な学びを育む教育として、地域社会の現状と向き合い、課題に気づき、理想と現実の差を解決するための計画を立て、実行し、評価することを自ら進んで行うことができるような学習プログラムの研究・開発を行っております。

2 年目である今年度は、以下の 3 つをまとめました。

① 学生が地域社会の中で課題解決のサイクルについて実践できることを目指した「学生用ワークブック」

② 学生が主体性を持ちながら取組むことを支援する「教員用　学習支援資料集」

③ 学校と地域が共生するための「参考資料」

最後になりましたが、この場をお借りし、委託事業にご理解いただき、ご指導やご協力をくださった専門学校や学生の方、研究者や専門家の皆様方に深く感謝申し上げます。

令和 2 年 3 月

「地域活動による高齢者支援・介護支援の学習プログラムの研究開発事業」

事業代表　小　林　　光　俊（学校法人敬心学園　理事長）

2019 年度　文部科学省委託事業　専修学校による地域産業中核的人材養成事業
地域活動による高齢者支援･介護支援の学習プログラムの研究開発事業

目　次

成果報告書の刊行にあたって

第 1 章　地域活動による高齢者支援・介護支援の学習プログラムの研究開発事業の概要 ････ 1
1．事業の名称 ･･ 1
2．事業概要 ･･ 1
（1）事業の趣旨目的 ･･･ 1
（2）目指すべき人間像 ･･･ 1
（3）事業の実施体制 ･･･ 1
（4）組織体制 ･･ 2
①教育機関･･･ 2
②企業団体･･･ 2
③行政機関･･･ 3
④構成員（委員）の氏名･･･ 5
3．事業の実施内容 ･･ 5
（1）地域課題解決学習カリキュラム及び地域課題解決プロジェクトの
企画運営マニュアルの作成 ･･･････････････････････････････････････ 5
（2）実証講座の実施検討 ･･･ 6
4．事業実施のスケジュール･･･ 6

第 2 章：今年度の研究調査活動･･･ 7
1．求められている介護福祉士の現状と課題 ･･････････････････････････････ 7
（1）求められている介護福祉士の現状 ･･･････････････････････････････････ 7
（2）今後の介護福祉士養成のための課題･････････････････････････････････ 11
2．介護福祉教育の動向 ･･･ 13
（1）介護福祉教育の現状 ･･･ 13
（2）今後の介護福祉士養成のための課題･････････････････････････････････ 14
（3）学習プログラム開発委員会における協議 ･････････････････････････････ 16
① 今年度の取組み内容と実施報告･･････････････････････････････････ 16
② ワークブックガイドブック ･･････････････････････････････････････ 17
③ 実証講座報告 ･･ 82
ア．北海道福祉教育専門学校･･･ 82

イ．関東福祉専門学校 ･･･84
ウ．YMCA健康福祉専門学校 ･･･86
（4）地域活性化推進委員会における協議 ･････････････････････････････････････88
① 今年度の取組み内容と実施報告･･･88
ア．北海道福祉教育専門学校･･･88
イ．関東福祉専門学校 ･･･90
ウ．YMCA健康福祉専門学校 ･･･93
② 参考資料 ･･･95
（5）学校教員学生が地域と共生するために･････････････････････････････････････157
① 専門学校が地域に溶け込むために･････････････････････････････････････157
② 教員が地域に溶け込むために･･･160
③ 学生が地域に溶け込むために･･･162
（6）地域コーディネーターの役割 ･･･166
① 地域コーディネーターの役割･･･166
② 地域コーディネーターの課題･･･170

第3章：今年度事業の評価 ･･･176
1．評価委員会における協議 ･･･176
2．モデル校3校における実証講座の評価 ･････････････････････････････････177
（1）北海道福祉教育専門学校 ･･･177
（2）関東福祉専門学校 ･･･179
（3）YMCA 健康福祉専門学校 ･･･180

第 4 章：今後の展望･･･181
1．今後の展開について･･･181
2．目指すべき人間像に向けて ･･･181

第1章　地域活動による高齢者支援･介護支援の学習プログラムの研究開発事業の概要

1. 事業の名称

「地域活動による高齢者支援･介護支援の学習プログラムの研究開発事業」

2. 事業概要

(1)事業の趣旨･目的

過疎化が進行している地方都市において、高齢者が住み慣れた地域で、生きがいを持って自立した日常生活を送ることができるようになるためには、積極的な社会参加や世代を超えた交流、つながりを促進する支援・サービスが必要となる。

しかし、世帯数の減少や高齢化の進展などの理由から町内会・自治会の加入率が低下している。

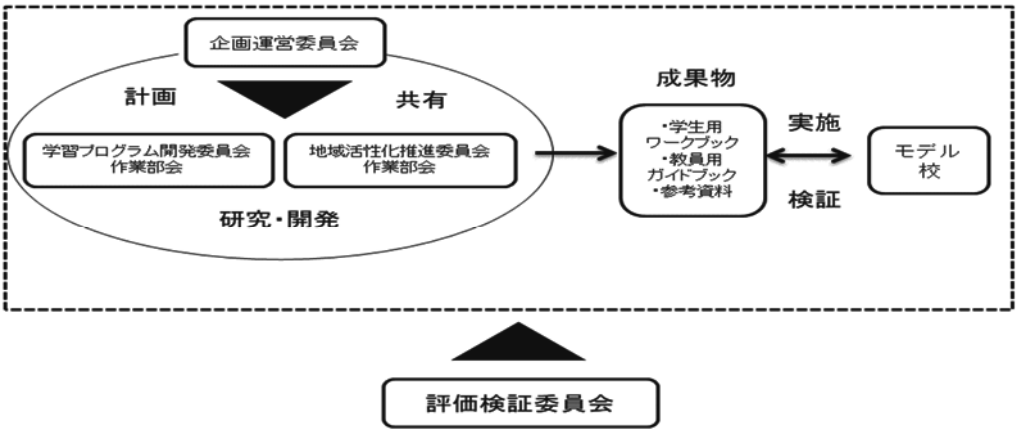
そのような中、専修学校の学生が自ら進んで地域社会に入っていくことで、主体的に地域福祉の担い手として地域住民と共に地域活動に参加し、創りあげていくことで新たな高齢者支援の仕組みの構築が可能となる。

そのためにも、この度の学習プログラムを開発・運営し、学生が学ぶことにより、地域社会に暮らす各々に興味を持ち、体験活動を通じて、一人ひとりのニーズを認識し、そのニーズに対するサービスを組織化する方法を学び、地域の活性化へ結びつける「良い循環」をつくることができる。また、地域の課題に気づき、理想と現実の差を解決することができるような力を修得し、卒業後においても地域住民のみならず、地域の企業も含めた連携・協働を期待することができる。

(2)目指すべき人間像

･地域に暮らす人と共に活力溢れる地域社会を創るために介護福祉士である自分が持つ能力を役立てることができる人
･自分ができることを理解できている人
･自分の特性を熟知し、課題解決に活かすことができる
･地域に暮らす人と協働･共生できる
･同じ地域に暮らす生活者として共働関係を創り、共に生きることができる

(3)事業の実施体制



(4)組織体制

①教育機関

	名称	役割等	都道府県名
1	北海道福祉教育専門学校	モデルプログラム試行協力校	北海道
2	関東福祉専門学校	モデルプログラム試行協力校	埼玉県
3	YMCA 健康福祉専門学校	モデルプログラム試行協力校	神奈川県
4	帯広コア専門学校	事業の検証･評価	北海道
5	学校法人昌賢学園	事業の検証･評価福委員長	群馬県
6	早稲田速記医療福祉専門学校	学習プログラム開発	東京都
7	日本福祉教育専門学校	学習プログラム開発	東京都

②企業･団体

氏名		所属・職名	役割等	都道府県名
1	小林　光俊	学校法人敬心学園理事長	事業の検証・評価委員長	東京都
2	川廷　宗之	大妻女子大学名誉教授、学校法人敬心学園職業教育研究開発センター	事業全体の統括責任者	東京都
3	齊藤　貞夫	特定非営利活動法人福祉と市民活動研究所理事長	企画運営副委員長、地域活性化副委員長	東京都
4	安岡　高志	帝京大学高等教育開発センター客員教授	企画運営委員、プログラム開発委員、地域活性化委員	東京都

5	永嶋　昌樹	東京都介護福祉士会会長 日本社会事業大学講師	プログラム開発副委員長	東京都
6	菊地 克彦	聖徳大学文学部教授	企画運営委員、プログラム開発委員、地域活性化委員	東京都
7	蔵本　孝治	認定特定非営利活動法人外国人看護師・介護福祉士教育支援組織	企画運営委員、地域活性化委員	東京都
8	佐々木綾子	千葉大学国際教養部講師	企画運営委員、プログラム開発委員、地域活性化委員	千葉県
9	押江　善正	(株)わかばケアセンター教育担当	プログラム開発委員、地域活性化委員	千葉県
１０	小林　香織	株式会社リエイコミュニケア２４事業部業務支援課	プログラム開発委員	千葉県
１１	田中　康雄	浦和大学総合福祉学部准教授	企画運営委員、プログラム開発委員、地域活性化委員	埼玉県
１２	中浜　崇之	社会福祉法人慈雲福祉会グランアークみづほ副施設長	企画運営委員、プログラム開発委員	東京都
１３	上野　興治	社会福祉法人福祉楽団杜の家なりた	地域活性化委員	千葉県
１４	頓所　澄江	学校法人恵済学園理事長	地域活性化委員	埼玉県
１５	金川　宗正	池袋敬心苑施設長	評価検証委員	東京都
１６	清崎　昭紀	特定非営利活動法人アジアン・エイジング・ビジネスセンター	企画運営委員	福岡県
１７	島谷　綾郁	学校法人敬心学園職業教育研究開発センター	企画運営委員、プログラム開発委員、地域活性化委員	東京都

③行政機関

氏名		所属・職名	役割等	都道府県名
1	堀籠　善之	北海道 胆振総合振興局 保健環境部 社会福祉課主査	福祉行政等の情報の提供	北海道
2	花島　啓子	室蘭市保健福祉部 高齢福祉課主幹	福祉行政等の情報の提供 社会福祉協議会や地域包括センター等へ本事業の紹介や協力呼びかけ等	北海道

3	福島　光一	鴻巣市健康づくり部長 長寿いきがい課　課長	福祉行政等の情報の提供 社会福祉協議会や地域包括センター等へ本事業の紹介や協力呼びかけ等	埼玉県
4	大野　徳一	厚木市福祉部福祉総務課 地域包括ケア推進担当課長	福祉行政等の情報の提供 社会福祉協議会や地域包括センター等へ本事業の紹介や協力呼びかけ等	神奈川県
5	鈴木　恭智	多摩市役所教育委員会事務局教育振興課課長	監査	東京都

④構成員（委員）の氏名

	氏名	所属	企画運営	学習プログラム開発	学習作業部会	地域活性化推進	地域作業部会	評価検証	都道府県
1	小林　光俊	学校法人敬心学園 理事長						○	東京都
2	川廷　宗之	大妻女子大学　名誉教授、学校法人敬心学園職業教育研究開発センター	○	○	○	○	○	○	東京都
3	阿嘉　優	北海道福祉教育専門学校 自立支援介護福祉学科　専任教員		○	○	○	○		北海道
4	石島　美紀	YMCA 健康福祉専門学校専任教員		○	○	○	○		神奈川県
5	岩崎　雅美	東京家政大学　子ども学部 子ども支援学科准教授		○	○				東京都
6	生方　薫	関東福祉専門学校教務主任		○	○	○	○		埼玉県
7	上野　興治	社会福祉法人 福祉楽団杜の家なりた				○			千葉県

8	大内　陽子	ボランティア活動センターこくぶんじ				○			東京都
9	奥園　一紀	YMCA 健康福祉専門学校　学校長	○	○		○			神奈川県
10	押江　善正	(株)わかばケアセンター教育担当		○	○	○	○		東京都
11	尾島　朱美	関東福祉専門学校学校長	○	○		○			埼玉県
12	金川　宗正	池袋敬心苑施設長						○	東京都
13	兼子　久	(公財)全国老人クラブ連合会理事				○			東京都
14	神山　恵美子	学校法人コア学園理事長						○	東京都
15	岸田　京子	地域コーディネーター				○			北海道
16	菊地　克彦	聖徳大学文学部教授	○	○		○			東京都
17	清崎　昭紀	特定非営利活動法人アジアン・エイジング・ビジネスセンター	○						福岡県
18	蔵本　孝治	認定特定非営利活動法人　外国人看護師・介護福祉士教育支援組織	○			○			東京都
19	小玉　忠顕	北斗文化学園室蘭事務所所長				○			北海道
20	小林　香織	株式会社リエイ　コミュニケア24事業統括部海外課課長		○					千葉県
21	齊藤　貞夫	特定非営利活動法人福祉と市民活動研究所理事長	○			○	○		東京都
22	佐々木　綾子	千葉大学国際教養部講師	○	○		○	○		千葉県
23	澤田　乃基	北海道福祉教育専門学校学校長	○	○		○			北海道
24	島津　淳	桜美林大学教授				○		○	東京都
25	白井　幸久	群馬医療福祉大学短期大学部医療福祉学科教授		○				○	群馬県
26	鈴木　利定	学校法人昌賢学園理事長						○	群馬県
27	鈴木　恭智	多摩市役所教育委員会事務局教育振興課課長						○	東京都
28	田中　康雄	浦和大学総合福祉学部准教授	○	○		○	○		埼玉県
29	頓所　澄江	学校法人恵済学園理事長				○			埼玉県

30	永嶋 昌樹	東京都介護福祉士会会長 日本社会事業大学講師	○	○	○				東京都
31	中浜 崇之	社会福祉法人慈雲福祉会グランアークみづほ 副施設長	○	○	○				東京都
32	野村 義	松戸人権擁護委員協議会会長				○			千葉県
33	橋本 正樹	学校法人川口学園早稲田速記医療福祉専門学校 校長	○						東京都
34	府川 充博	YMCA 健康福祉専門学校専任教員				○			神奈川県
35	松永 恵	地域コーディネーター				○			埼玉県
36	宮脇 文恵	宇都宮短期大学 教授		○					神奈川県
37	安岡 高志	帝京大学高等教育開発センター 客員教授	○	○		○			東京都
38	東 康祐	日本福祉教育専門学校専任教員社会福祉学科専任教員学生副部長		○					東京都
39	齊藤 美由紀	日本福祉教育専門学校専任教員介護福祉学科専任教員		○	○	○			東京都
40	中嶋 裕之	日本福祉教育専門学校次長	○						東京都
41	中村 信	臨床福祉専門学校理学療法学科		○					東京都
42	神山 資将	評価検証コーディネーター				○	○	○	神奈川県
43	松田 郎	学習プログラムコーディネーター		○	○				東京都
44	島谷 綾郁	学校法人敬心学園職業教育研究開発センター	○	○	○	○	○		東京都
45	石投 知佳	学校法人敬心学園職業教育開発センター 事務局							東京都

3. 事業の実施内容

(1)地域課題解決学習カリキュラム及び地域課題解決プロジェクトの企画・運営マニュアルの作成

「ワークブック(学生用)」、「ガイドブック(教員用)、「参考資料」の作成

(2)実証講座の実施・検討

モデル校3校(北海道室蘭市、埼玉県鴻巣市、神奈川県厚木市)による実証講座の実施と検討

4. 事業実施のスケジュール

会議名	7月	8月	9月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月
企画運営	第 1 回 合同会議 事業計画の確認 第 2 回 全体会議	第 3 回 合同会議 ワークブックの企画･運営 第 4 回 合同会議 地域課題解決の検討	第 5 回 合同会議 地域課題解決に向け運営マニュアルの検討	第 6 回 合同会議 実証講座の検討 第 7 回 合同会議 参考資料の検討	第 8 回 合同会議 ワークブック・ガイドブックの検討	第 9 回 合同会議 参考資料の目次の検討	第 10 回 合同会議 成果物の検討 第 11 回 合同会議 成果物の検討	第 12 回 全体会議 及び 成果報告会
学習プログラム開発委員会	第 1 回 全体会議			第 2 回 合同会議 実証講座について検討	第 3,4 回 合同会議 ワークブックの検討		第 5 回 合同会議 成果物の検討	第 6 回 全体会議 及び成果報告会
学習作業部会	第 1 回 合同会議 事業計画の確認	第 2 回 合同会議 ワークブックの企画･運営						
地域活性化推進委員会	第 1 回 全体会議	第 2 回 合同会議 地域課題解決の検討	第 3 回 合同会議 地域課題解決に向け運営マニュアルの検討	第 4 回 合同会議 参考資料の検討		第 5 回 合同会議 参考資料の目次の検討	第 6 回 合同会議 成果物の検討	第 7 回 全体会議 及び成果報告会
地域作業部会	第 1 回 合同会議 事業計画の確認							
評価検証委員会	第 1 回 全体会議		第 2 回 会議 評価枠組みの検討		第 3 回 会議 評価方法の検討			第 4 回 全体会議 及び成果報告会

第2章：今年度の研究・調査活動

1．求められている介護福祉士の現状と課題

(1)求められている介護福祉士の現状

ア)．社会が望む『介護福祉』とサービス提供側が考える『介護福祉』のズレ

「介護福祉士」の本来の仕事は、生活していく上で何らかの障害を抱えた方々が、それまでの生活を維持し発展させていく上で必要な生活支援[1]を行うことである。多くの人が求める『介護福祉サービス』はこのようなイメージで良いのであろう。しかし、現実の「介護」の展開はこうなっているとは言えないだろう。現実の「介護」の大半は、何らかの「介護施設」での、定型的な生活(生存)介助業務として捉えられている傾向は強い。この施設による介護は、一般社会が求めている介護イメージとかなり異なっている[2]。

イ)．「求められる介護福祉士像」の変化

こういう問題に関して、介護関係者は気が付いていないわけではなく、その事は最近、改訂された表 1 に見るように、「求められる介護福祉士像」の変化[3]に表れている。

表1 「求められる介護福祉士像」 新旧比較[4]

「求められる介護福祉士像」(旧)	求められる介護福祉士像(新)
①尊厳を支えるケアの実践 ②現場で必要とされる実践的能力 ③自立支援を重視し、これからの介護ニーズ、政策にも対応できる ④施設・地域(在宅)を通じた汎用性ある能力 ⑤心理的・社会的支援の重視 ⑥予防からリハビリテーション、看取りまで、利用者の状態の変化に対応できる ⑦多職種協働によるチームケア ⑧一人でも基本的な対応ができる ⑨「個別ケア」の実践 ⑩利用者・家族・チームに対するコミュニケーション能力や的確な記録・記述力 ⑪関連領域の基本的な理解 ⑫高い倫理性の保持	①. 尊厳と自立を支えるケアを実践する ②. **専門職として自律的に介護過程の展開ができる** ③. 身体的な支援だけでなく、心理的・社会的支援も展開できる ④. **介護ニーズの複雑化・多様化・高度化に対応し**、本人や家族等の**エンパワメントを重視した支援**ができる ⑤. **QOL(生活の質)の維持・向上の視点**を持って、介護予防からリハビリテーション、看取りまで、対象者の状態の変化に対応できる ⑥. 地域の中で、施設・在宅にかかわらず、**本人が望む生活を支える**ことができる ⑦. 関連領域の基本的なことを理解し、多職種協働によるチームケアを実践する ⑧. 本人や家族、チームに対するコミュニケーションや、的確な記録・記述ができる ⑨. 制度を理解しつつ、**地域や社会のニーズに対応**できる ⑩. **介護職の中で中核的な役割を担う** ※(特別の位置付けで)高い倫理性の保持

---

[1]介護福祉士が介護するのは、基本的には要介護者の生活機能である。この場合、支えるのは「生活機能」という側面と、「人」を支えるという二つ側面があることに留意しておくことが必要であろう。

[2] 日経ビジネス誌 2020 年 1 月 13 日号・・68～69 ページ「型破り介護で能力引き出す」などを参照

[3]平成 29 年 12 月に社会保障審議会福祉部会で福祉人材確保専門委員会報告書として、新しいバージョンの「求められる介護福祉士像」が提示された

[4]第２０回社会保障審議会福祉部会　平成２９年１２月１８日　「介護人材に求められる機能の明確化とキャリアパスの実現に向けて」（福祉人材確保専門委員会報告書）について

この中で注目すべき点の一つは、「地域や社会のニーズに対応」しつつ「介護職の中で中核的な役割を担い」ながら「専門職として自律的に介護過程の展開ができる」という自立した専門職としての活動を明確に求めた点である。もう一つは、「本人が望む生活を支える」や「QOL（生活の質）の維持・向上の視点」など、「生活」を支えるという視点が強く打ち出されている点である。また要介護者本人の「介護ニーズの複雑化・多様化・高度化に対応」という点も、生活の質につながる内容である。「旧」から「新」への主な変更点に見るように、生活重視、地域重視の方向にかなり変化しているのを見てとることができる。本稿に関係があるのは主に「地域や社会のニーズに対応」という部分であるが、今回の改訂は全体的に個の生存を重視する「医学モデル」から、快適な生活の支援を考える「生活モデル」への転換だということもできるであろう。また、この「快適な生活」を問題にすれば、その基盤である「地域」を無視するわけには行かないという点も指摘されるだろう。

ウ）．介護福祉サービスが支えるべき『生活』とは何か

では、「介護」が支えるべき、人間としての活動（人生や生活）とは、どのような内容を指すのであろうか。この参考となる資料が 2 点ある。第 1 は、以下の表 1－2に示すように日本の国民生活白書（平成 11 年頃）で示されている、新国民生活指標の生活分析指標としての「八つの活動領域」[5]である。

表1-2 ＜新国民生活指標の8つの活動領域＞

住 む	… 住居、住環境、近隣社会の治安等の状況
費やす	… 収入、支出、資産、消費生活等の状況
働 く	… 賃金、労働時間、就業機会、労働環境等の状況
育てる	… （自分の子供のための）育児・教育支出、教育施設、進学率等の状況
癒 す	… 医療、保健、福祉サービス等の状況
遊 ぶ	… 休暇、余暇施設、余暇支出等の状況
学 ぶ	…（成人のための）大学、生涯学習施設、文化的施設、学習時間等の状況
交わる	… 婚姻、地域交流、社会的活動等の状況

※．新国民生活指標には、生活評価軸と言う指標もある。

この八つの活動領域は、生活のすべての活動を包括している。しかし、いささか包括的であり、具体的には見えにくい部分もある。

この点に関して国際的にはどのように整理しているのであろうか。WHOが 2001 年に採択した国際生活機能分類（以下、略称の「ICF」と表記）は、「人間の生活機能と障害について『心身機能・身体構造』『活動』『参加』の3つの次元及び、『環境因子』等の影響を及ぼす因子で構成されており、約1500項目に分類されている。[6]」このICFは、1980 年に発表された国際障害分類（以下、略

[5]日本の現在の介護では、この生活活動領域の中で、「癒す」「費やす」「住む」といった点については触れるが、「学ぶ」といった側面は、「法」に介護福祉士の業として「その者（要介護者）及びその介護者に対して介護に関する指導を行うこと」となっているのに、ほとんど考慮されない視点である。また、事例にも見るように人間の生活の中で極めて重要な意味を持つ「働く」「遊ぶ」「交わる」などについても、あまり重視されない場合が少なくない。

[6]厚生労働省ホームページの「国際生活機能分類－国際障害分類改訂版－」（日本語版）の、「１．ＩＣＦについて」から引用

称の「ICIDH」と表記）を改訂したものであるが、特にICIDHが疾病等に起因する障害が社会的不利につながるという構造で考えられていたのに対し、構造とは一度切り離したうえで個々の因子に分類するという意味でかなり性格が異なっている。従って、ICFは障害を持たない人の「生活分類」やその生活の分析にも有効な分類となっている。ICFは国際文書であることもあり主要単語に関しては定義が添えられている。生活・人生領域での定義は以下の様になっている。

＊活動とは、課題や行為の個人による遂行の事である。

＊参加とは、生活、人生場面への関わりの事である。

＊活動制限とは、個人が活動を行うときに生じる難しさのことである。

＊参加制約とは、個人が何らかの生活・人生場面に関わるときに経験する難しさの事である。

エ）. ICFモデルによる「介護福祉サービス」の業務内容

つまり、否定的側面である「活動制限」や「参加制約」などの「阻害因子」による否定的側面から、「促進因子」に焦点を移しそれを活用して、生活、人生場面に「参加」しながら、課題や行為を遂行「活動」していくことが求められているということである。この資料をベースとして、介護福祉の業務内容などを図解化すると下記の図のようになる[7]。

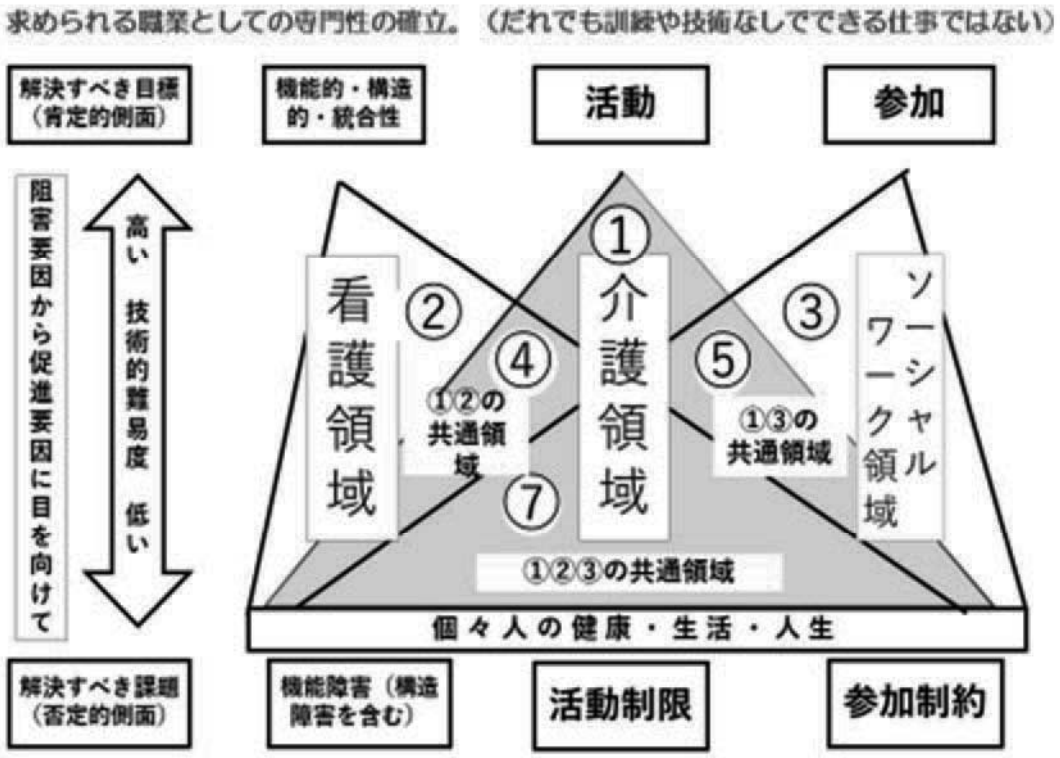


図　ＩＣＦによる「生活・活動」支援（介護領域）の枠組み

作図：川廷　宗之

このように図解化してみると、『介護』の役割や機能が①の領域としてはっきりしてくる。

---

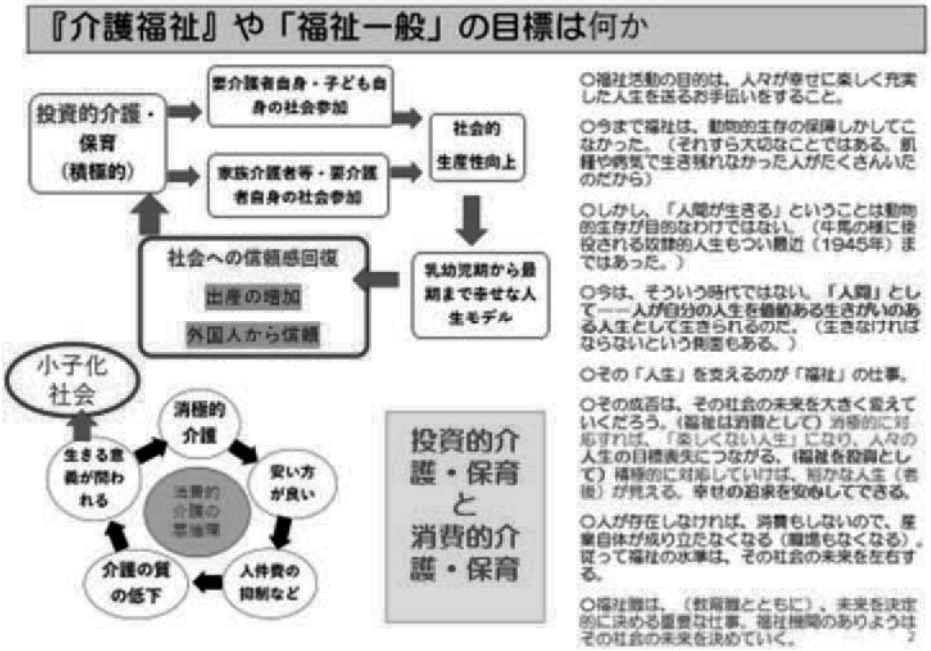
[7] 拙編著「介護教育方法の理論と実践」弘文堂 2019 年 12 月 30 日　P.7. 以下参照

また、対人援助業務は、一人の人を対象に、その人が持つ様々な障害レベルに対応して、色々な専門職が関わる構造になっている。他業種との役割分担としては、①介護福祉領域、②医療・看護・リハビリテーション等・領域、③ソーシャルワーク領域、として整理出来るであろう。さらには、それぞれの専門に関してのレベルが下がる部分での業務領域での重なり④⑤が示されている。この重なりは、どの領域がメインであるにせよ、色々な生活機能での課題を持つ総合的人間としての一人の利用者に関わるのだから、他領域に関わることもある程度は、理解している必要がある。そうしないと、他職種連携がうまくいかない、という事である。この専門領域が重なる領域として、看護－介護共通領域（介護が医療行為に入り込む領域）も④で明確になり、介護―ソーシャルワーク領域（介護が「参加」の問題に入り込む領域）も⑤で明確になる[8]。更に、④⑤の重なりの部分は、それぞれの専門領域の専門職が業務として行えなければならない[9]領域を指している。（理論上も現実問題としても、看護師とソーシャルワーカーの共通領域⑥も存在するのであるが、この図では表現されていない。）

(2)今後の介護福祉士養成のための課題

ア）. 地域社会と介護福祉サービスの関係

介護福祉サービスと（地域）社会との関係を、投資や消費という観点から整理してみると以下のような説明ができるであろう。



作図：川廷　宗之

[8]当然、医療看護領域とソーシャルワーク領域の重なる「機能的・構造的統合性を実現していくための参加」の部分もあるが、この図は『生活支援』を中心に作図しているため、表現されていない。

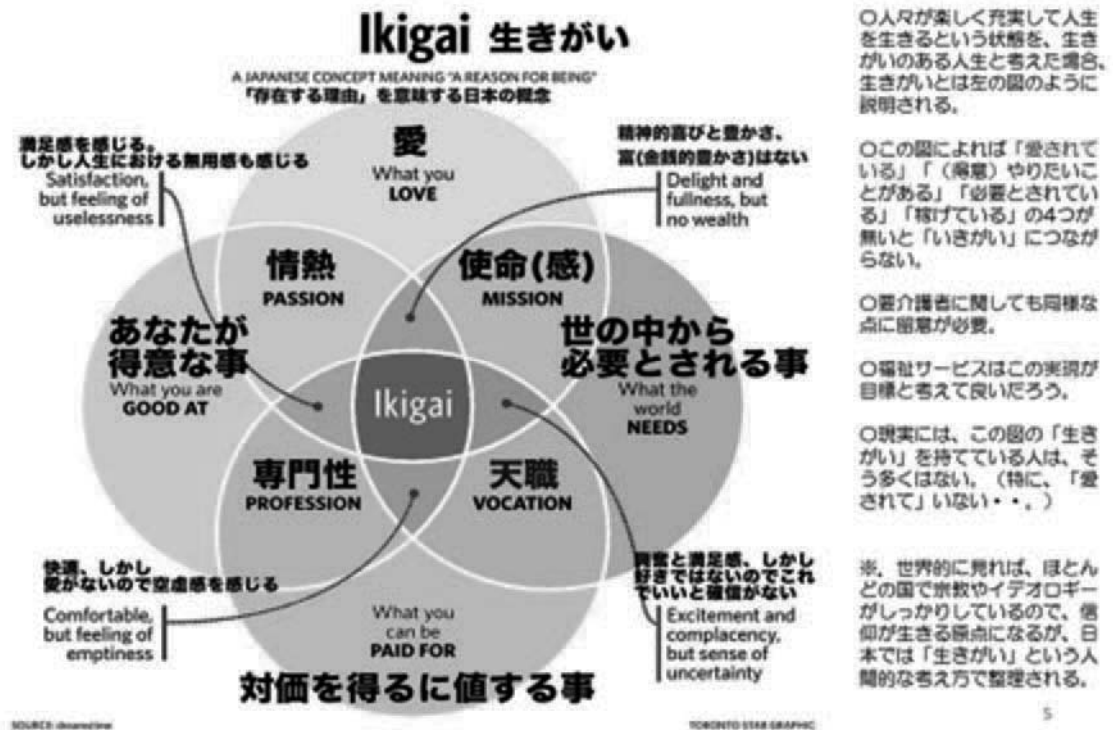
[9] 介護から見れば④は看護師でも対応できるし介護福祉士でも対応できる領域である、⑤は介護福祉士でも社会福祉士などのソーシャルワーカーでも対応できる領域である。

なお、介護福祉士制度発足当初は、この①と②の間に保助看法などによる縦の線を引いて、介護福祉士の業務を制限しようという動きもあったが、家族や本人にも許される医行為もあるのだから、この図のように考える方が常識的であろう

「介護福祉サービス」を単に人間の終末期のケアなどという消極的なとらえ方をして、そういう消費的な介護であれば出来るだけ低廉なサービスで済まそうとすれば、下のような循環構造になる。そうではなく社会に必要な方の生活支援だと考えて、投資的介護を行えば、上の循環図となり、地域社会への貢献は大変大きくなる。

イ）. 介護福祉がささえる「人が生きる」という内容は何か

現在の介護福祉士養成も問題点は、このような将来展望を切り開く、投資的な介護福祉を想定しないことから起きる問題が大きいと考えられる。その背景には、介護の前提となる人間が生きるということに関する整理も、形式的に人権論議にとどまっていて、リアリティを持つ「生きがい」が、明確になっていないのではなかろうか。この「生きがい」については、最近注目されている下記の図によって、かなりのリアリティをもって説明される。



この図の内容から、要介護者の「生きがい」も想定できるし、介護者自身の生きがいも想定できる。特に、医学モデルで機能主義的な介護になりがちな中で、生活としては（一人の人間として、人類の仲間として）「愛し」「愛される」点が個別の人に生きがいに大きくつながっている点を指摘していることは、大変大きな意味を持つだろう。また、現実的な問題として、すべての人に何らかの形であり得る「得意なこと」「世の中から必要とされること」、そして極めて現実的な「対価を得る」という内容に触れており、従ってこの「生きがい」は「勤労」（日本国憲法第27条）と大きくつながっているとも言えるだろう。これらを考える「介護福祉サービス」社会からも求められている『介護福祉』であるという言い方もできるであろう。

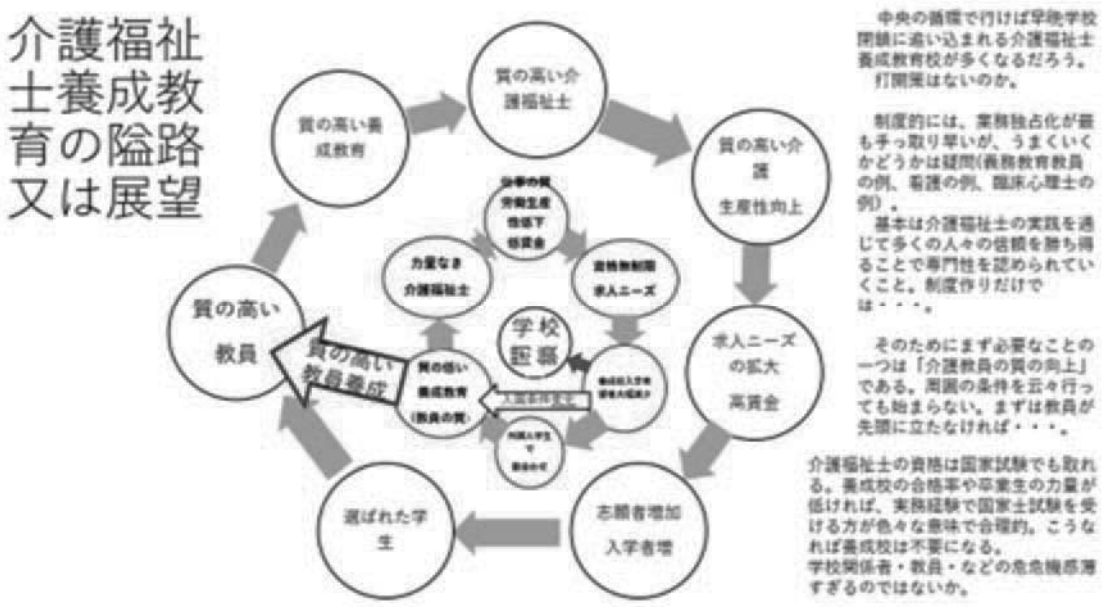
ウ）. 「生活」や「人生」の原点を踏まえた『介護福祉教育』の必要性

今後の介護福祉士養成のための課題は、まさにこのような『生活』や「人生」の原点を踏まえた、生きがいのある生活や人生を遂行するための行動などで困っている点を支えうる仕組みであると言えるだろう。それを踏まえた教育が行われないと、単なる技術教育に留まってしまって、職業教育としては成り立ちにくいのではないか。

2. 介護福祉教育の動向

(1)介護福祉教育の現状

社会福祉士養成教育の現状は、下記の図の内側の回転に示す様に、非常の悲観的な状態である。その原因としては、「介護」業界の様々な問題(低賃金、業務内容の未整備、介護福祉士を含むスタッフの力量低下、野放図な経営、などなど)を、受けて「介護福祉」を目指す人々を遠ざけてしまったという事が上げられるであろう。しかし、学校運営として見過ごせないのは、むしろそうなる以前からの問題を含めて「介護福祉」の仕事の「魅力」を打ち出せなかったという所にあるだろう。介護福祉士養成校の多くは、(最低限度の基準を定めているはずの)厚生労働省が定める教育課程に依存し、学校運営としての授業時間を増やす時間割り上の余裕があるにもかかわらず、もっとも学校が儲かるギリギリの開講しかしないタイプの学校に引きずられて、その教育の質の低下を止められなかった。学生たちもバイトの時間が多く取れる授業時間の少ない学校を選ぶ傾向もあり、結果的に教育の質の低下は避けられなかった。



作図：川廷　宗之

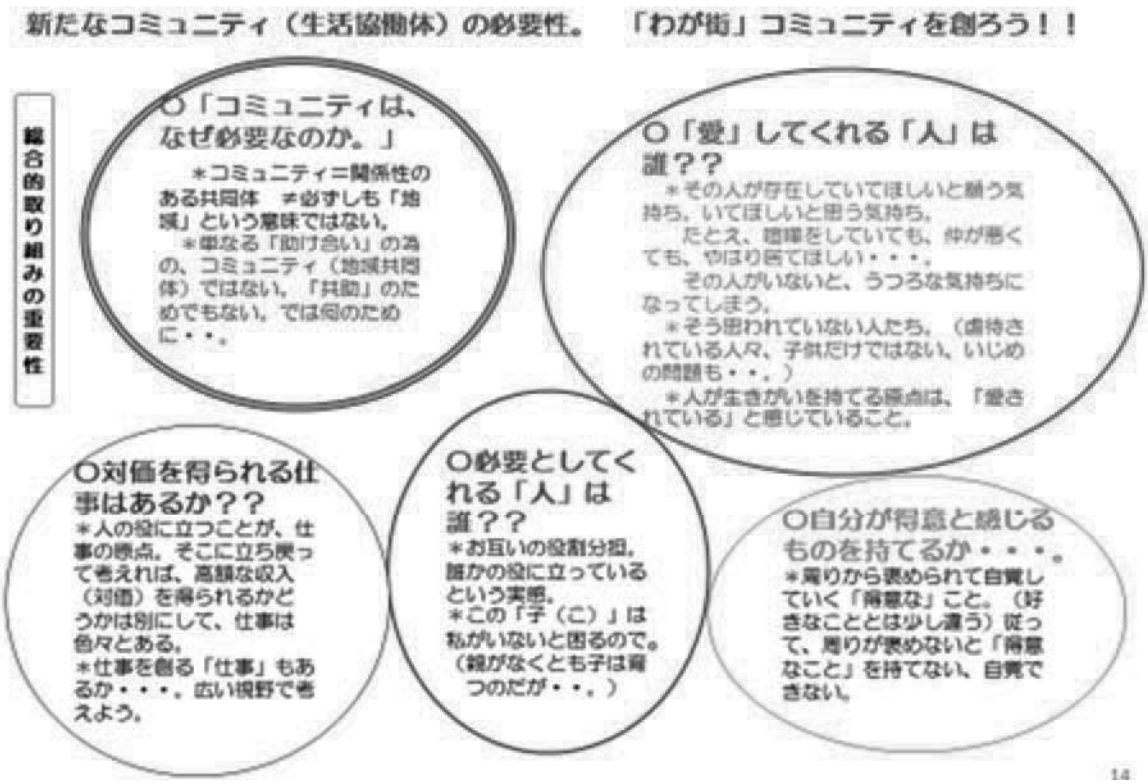
このような学校運営では、「介護福祉」の魅力や仕事の面白さを丁寧に伝えていく教育活動は望むべくもない。これに輪をかけて、「医学モデル」中心の教育課程化が進んだため、極端に言えば、「介護福祉」とはいうものの、実態は中途半端な看護助手の養成の様になりかけているともいえるだろう。

(2)今後の介護福祉士養成のための課題

今後の介護福祉士の養成教育を改善していく手立てとしては、いくつかの方策が考えられる。その第 1 は、介護福祉士養成校の不振を、「介護」を囲む外部事情のせいにはしないことである。介護で働く人の状況は筆者の見立てでは、養成教育の質の改善が先行しなければ、そう簡単には改善しないであろうからである。

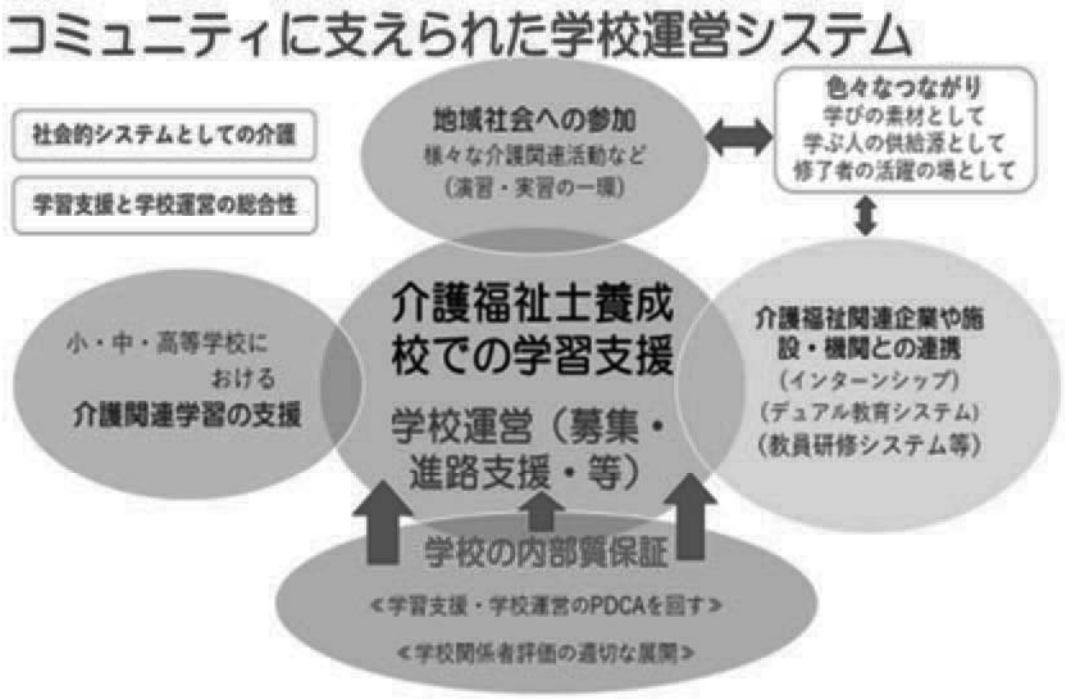
とすれば、第2の改善課題は、介護福祉士の養成教育を担う介護教員の質の向上に取り組むことである。ここで言う「質」は、介護福祉の仕事の魅力や社会的意義をきちんと自覚しているという事であり、その内容を的確に他者に受け継いでもらえるように伝承できるということであり、それらを実践するために「介護」に関する研究開発を怠らないという事である。この題の具体的内容や改善方法に関しては、色々な見解や提案があり得るのだが、本稿の主題から外れるので詳論は別な機会の項を改めたい。

第 3 の改善課題は、介護福祉が中心課題とする「生活行動力弱者」の支援は、当該地域のとって必須の課題であり、その意味で介護福祉士養成校の存在は、当該地域社会を支える重要な基盤であることを、学校も地域社会も自覚し、両者が連携して学生を支援していく仕組みを構築していくことである。このテーマが、この研究全体のテーマとなっている内容である。従って具体的な内容は、以下に紹介する。が、この問題整理のための図を二つ、以下で紹介しておこう。一つは、「介護福祉」それ自体が、地域社会と密接につながる必要を示したものである。



作図：川廷　宗之

第2番目の図は、学校での教育の内容に関して、地域社会との関係を示したものである。



作図：川廷　宗之

以下、本研究では、上記の内容をどう実践していくかを検討している。

（大妻女子大学名誉教授　川廷　宗之）

(3)学習プログラム開発委員会における協議

① 今年度の取組み内容と実施報告

2018年度では、①モデル校3校（北海道福祉教育専門学校、関東福祉専門学校、YMCA 健康福祉専門学校）の地域活動の概要検討、②モデル校3校の当該地域の行政への取組みに対する支援協力依頼、③地域の基幹組織活動（社会福祉協議会、地域包括支援センター）と連携した取組み概略の決定、を行った。

これらをもとに、2019年度学習プログラム開発委員会（以下、「委員会」とする）では、最終的には目指すべき人間像に到達することのできる「ワークブック（学生用）」と目指すべき人間像へと導く指導の1つのきっかけを目標とした「ガイドブック（教員用）」の作成を行っている。

作成するにあたり、委員会では、学生が地域に興味を持ってもらう「しかけ」を組み込むことの必要性のほか、学生が進んで取り組みたくなるような「play（遊び）」の要素を取り入れたらどうか、などといった意見が出た。それらをもとに「ワークブック（学生用）」、「ガイドブック（教員用）」の作成を行い、内容について何度も見直しを行ってきた。

その後、モデル校3校による実証講座を経て、学生が目指すべき人間像に向かうためには、何よりもまずは学生が地域に入っていくことが必要であり、教員はそれをサポートすることが重要となるのではないかとの考えに至った。

上記のことからはじめることで、「ワークブック（学生用）」や「ガイドブック（教員用）」は、より学生が抵抗なく地域に対して興味を持つことができ、親しみを持ちやすくなり、価値のあるものとなるのではないかとの意見が出た。

今年度の活動状況は、以下のとおりである。

会議日	会議名	内容
8 月 16 日（金）	企画運営委員会（第 3 回）及び学習プログラム開発作業部会（第 2 回）による合同会議	カリキュラムの検討 実証講座の実施概要の検討
10 月 11 日（金）	企画運営委員会（第 6 回）及び学習プログラム開発委員会（第 2 回）による合同会議	新モジュール案の検討 ワークブック等の検討
11 月 2 日（土）	学習プログラム開発委員会（第 3 回）会議	学生用ワークブックの検討 教員用ガイドブックの検討
11 月 13 日（水）	企画運営委員会（第 8 回）及び学習プログラム開発委員会（第 4 回）による合同会議	学生用ワークブック、教員用ガイドブックに該当する養成カリキュラムの検討 実証講座について検討
1 月 10 日（金）	企画運営委員会（第10回）及び学習プログラム開発委員会（第 5 回）	実証講座の報告 成果物作成に向けて、資料の見直し・検討

（文部科学省委託事業　事務局）

②ワークブック・ガイドブック

「過疎や地域産業の不振による地域社会の衰退を何とかしなければ・・・」、「介護業界の担い手不足による介護福祉士養成施設の没落を何とかしなければ・・・」、「介護福祉士の実践力が伴わないことによる資格価値の消滅の危機を何とかしなければ・・・」。この3つの問題を一つの課題として「何とかしてみよう！」というのが、「地域課題学習プログラム」です。この「三方よし」を実践（実現）するためのツールが学生用ワークブックであり、学生の学習支援のために創られたものが教員用ガイドブックです。因みに、ここでいう学生とは介護福祉士養成施設に通う学生であり、教員とはその養成施設の教員を意味します。

学習（教育）、生活（福祉）、生死～命～（医療）。これらはかつて、全てが日常生活の一部として日常生活習慣の中に溶け込んでいました。経済的な発展とそれに伴う技術革新により日常生活習慣の在り方が大きく変わり、より合理的でより便利な社会が造られた結果、“生活するところ”から「教育」・「福祉」・「医療」が切り離され、代わりに“教育するところ（学校）”・“生活を護るところ（介護施設）”・“心と身体を治すところ（病院）”が棲み分けられました。この棲み分けは、地域社会が本来持っていた人を育み人と人との関係を生む機能を著しく低下させてしまったのではないかと考えます。

学習プログラム開発委員会がこの問題を解決するために打ち出した課題が、「学習の場をもう一度地域社会に戻す」ことであり、そのために掲げられた目標が「学生が自ら地域社会に入っていけるようになる」ことです。学生が地域社会に入っていくことで得られる学習体験は、介護サービスの質の向上は勿論、サービスを受ける対象者の生活の質の向上、つまり対象者の「生きる喜び」につながるものと考えられます。また、地域社会における学習体験は、学生自身の生活体験としても大いに役立つものと考えられ、学生の「生き抜く力」の涵養につながるものと考えました。一方学生が地域社会に入ってくることで地域社会にどんよりと横たわる停滞感が破られ、悪い循環から善い循環への再構築のお手伝いができるものとも考えます。その願いが、ワークブックとガイドブックには込められています。

希望が持てないところで人は学ぼうとは思いません。希望が持てないところで人は働こうとも思いません。希望が持てないところで人は暮らせません。「地域課題学習プログラム」は希望に満ちた未来からのプレゼントなのです。

（学習プログラムコーディネーター　松田朗）

文部科学省委託事業　2019 年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」
～地域活動による高齢者支援・介護支援の学習プログラムの研究開発事業～

地域課題学習プログラム

学生用ワークブック

Ver. 2020. 2 .15

目次

地域課題プログラムって ???

ジモトって楽しい！？

どんな人になればいいの？

どんなことができると楽しくなるの？

どうすればジモトで活躍できるの？？？

“はじめの一歩”（すべての学生に共通の課題）

＝チャレンジサイクル＝

Player’s map（学習構造図）をつくろう

チャレンジを決めよう

目標を設定しよう

“アクション”（チャレンジ材料）を選ぼう

評価をしよう

新しい課題を見つけよう

付録：ワークシート ①～⑧

地域課題学習プログラムって ？？？

このプログラムは、皆さんが地域社会（以下：ジモト）で活躍できるプロフェッショナルな人になるためのサポートツールとして誕生したよ。このサポートツールを使いこなすコツは、ドキドキしながらチャレンジすること。とにかく“やってみる”ことが活躍できるプロフェッショナルな人への１番の近道だよ。

皆さんがジモトで活躍できるようになると・・・

ジモトって楽しい ？？？

うちらのジモトって、なんかオモシロイ人がいっぱいいて楽しくない？

マジ？

マジで！　オモシロイキャラの人とか、話がオモシロイ人とか、
なんでも修理しちゃうとか（笑）　あとっ、漬物つくっちゃう人とか！
“昭和感”っていうかさ、なんかいいんだよね～

ふ～～ん、ジモトか・・・

とりあえず行ってみるってことで。どう？

こんなことが楽しいよ!

ジモトで暮らす人たちの気持ちが伝わってくるから、共感できるっていうか楽しい！

ありがとねって言ってもらえるのが嬉しい！

マジでうちらの役に立つことがいっぱいあって、いろいろ教えてもらえるのがケッコウ楽しい。
なんかマジで一人暮らしとかしたくなるっていうか、あと介護の役に立ちそう！！

ジモトで活躍できると、ジモトの人たちの楽しみとか困りごととかが少しずつわかってくる気がするんだよね。あと、うちらのこととかも聴いてくれるから嬉しい。だから例えば地震とか具合が悪いときとか、顔も名前もわかるからすぐ助けてあげられるし、助けてって言いやすいんじゃないかなって思う。あっこういうの、誰も取り残されない共生社会って言うらしいよ。なんか良くない？

どんな人になればいいの ？？？

楽しくおしゃべりができる人
～昔のこととか　未来のこととか　嬉しかったこととか　悲しかったこととか～

自分の得意なことや興味のあることを役立てたいと思う人
～今までしてきた経験とか　趣味とか　教えてもらいたいこととか～

目標に向かってチャレンジできる人
～励ましあったり　協力しあったり　笑いあったり　泣きあったり～

どんなことができると楽しくなるの ？？？

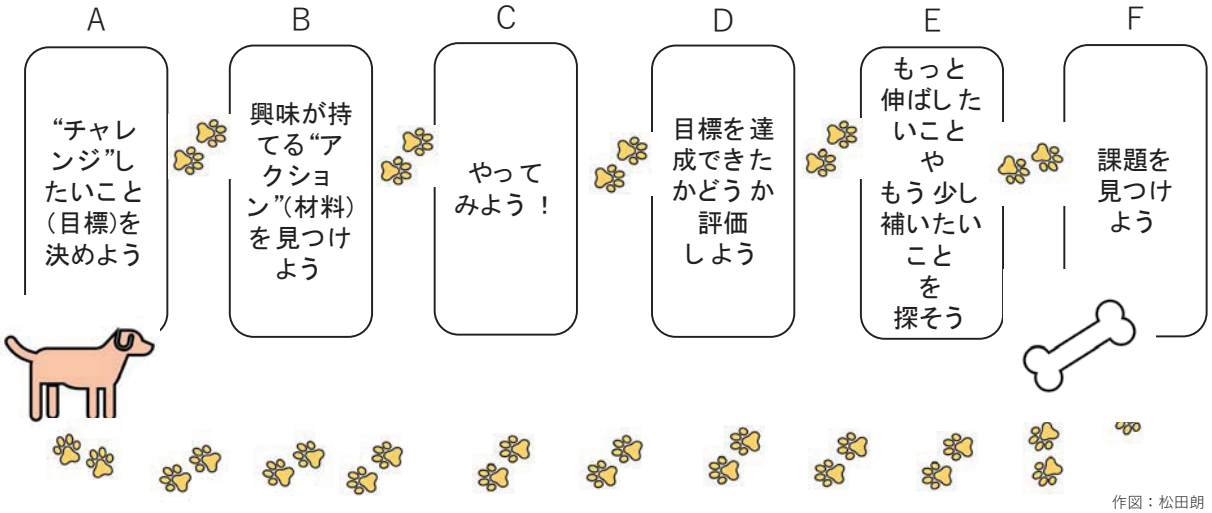
感じたり考えたりしたことを伝えることができると楽しい！

色々な視点で観察ができて意味がわかると楽しい！

とりあえずやってみる（初めて体験する）から楽しい！

どうすればジモトで活躍できるの ？？？

“ジモト ”で活躍できる
プロフェッショ ナルな人になるためのチャレンジサイクル



例えば・・・

1週間に5回遅刻をしてしまうゴン太くんは、遅刻を0にしてご褒美をもらおうと考えました。
そこで、学校でやってみた「チャレンジサイクル」を早速使ってみることにしました。

E：補いたいこと →「1週間に5回、朝遅刻している」（現実と理想のギャップ：問題）
F：課題 →「毎朝始業時間に間に合う」
A：チャレンジ(目標) →「続ける（**改善する**）”家を出る60分前に起きよう！”」
B：アクション(チャレンジの材料)を選ぶ →「快眠体操」「ブルーライトと睡眠」
「これを食べると寝坊する」
C：やってみる → 「毎朝起きた時間を記録して1週間続ける」
D：確かめる（評価）→ 毎朝の起きた時間を確かめる。

家を出る何分前に起きた？

	よくできた	できた	最低限できた	努力が必要
起きた時間	46分～60分前	31分～45分前	16分～30分前	0～15分前

※1週間の様子を振り返って、よくできた（できなかった）理由を考える。

E：補いたいこと → ○○○○○ ・・・・・・

こんなふうに、チャレンジサイクルに当てはめて考えていくと上手くいくよ

“はじめの一歩”（全ての学生に共通の課題）は

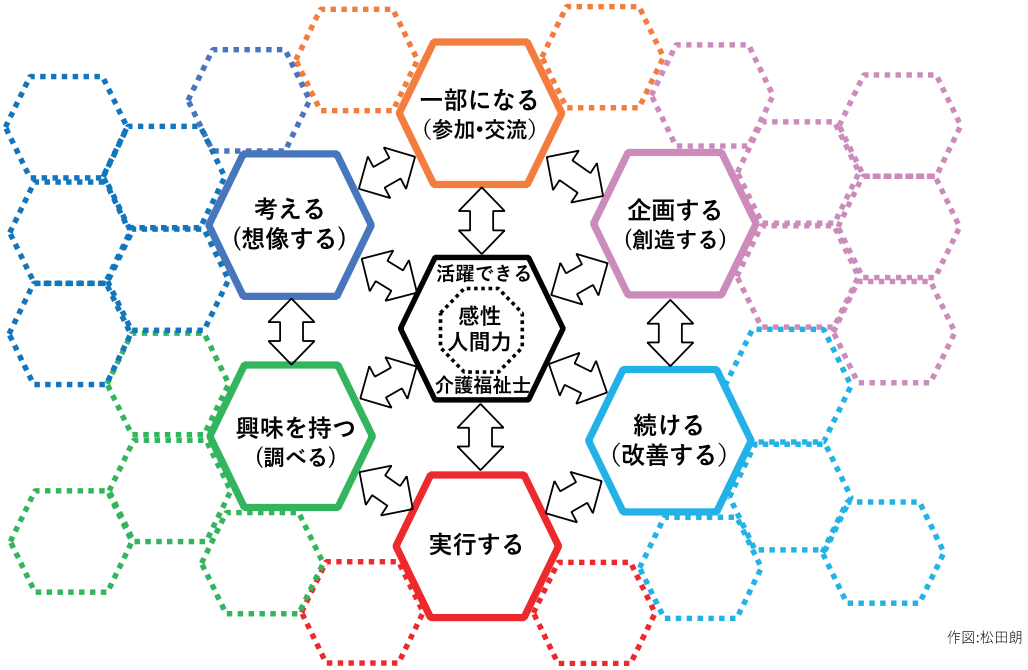
“ジモトの一員になろう！”だよ

さあ、一人ひとりの個性や希望にあった目標を設定するよ
面白そうな“アクション”（チャレンジ材料）を使って
どんなチャレンジをしようか！

Player’s map（チャレンジプログラムの構造図）

皆さん一人ひとりの個性と希望、課題に見合った学習の道筋が、あなた自身の手によって楽しみながら創られていきます。あなたはこの“チャレンジ”に参加するプレイヤーです。下図の“アクション”部分をマーキングしていくことで、どの領域をどのくらい、どのような“アクション”を通して学習してきたかが一目見て分かります。

・・・“アクション”（チャレンジ材料）



Player’s map をつくってみよう！　＝ワークシート①

チャレンジを決めよう

＝ワークシート②

6 つのチャレンジ領域

ジモトで活躍できるプロフェッショナルな人として身につけておきたい能力（課題）を 6 つのチャレンジに整理しました。

チャレンジ	興味を持つ（調べる・見つける）	一部になる（交流する・参加する）	考える（想像する）	企画する（創造する）	実行する	続ける（改善する）
できるようになること	•世代や国籍などを超えて楽しいお喋りができる •感性(美醜.善悪.快不快の判断基準)が磨かれる ・数字が表している意味を考えられるようになる　等	•世代や国籍などを超えて楽しいお喋りができる •感性が磨かれる •状況に応じた適切な判断に基づく行動ができる　等	•感性が磨かれる •考える道筋を立てることができる •視点を動かして新たな意味づけができる　等	•感性が磨かれる •新たな企画を提案できる ・新たな行動を始めることができる •リーダーシップを発揮することができる　等	•感性が磨かれる •状況に応じた適切な判断に基づく行動ができる •リーダーシップを発揮することができる等	•状況に応じた適切な判断に基づく行動ができる •問題から課題を創り、目標を立てて行動できる　等

目標を設定しよう

＝ワークシート③

“はじめの一歩”（全ての学生に共通の目標）

感じたり考えたりしたことを伝えることができる

色々な視点で観察ができて意味がわかる

とりあえずやってみる（初めて体験してみる）

この目標をクリアできたら 次の課題は一人ひとり違う課題を見つけるよ

アクションを選ぼう

＝ワークシート④

アクション（チャレンジ材料）のカテゴリーと例示の一覧表

(1)カテゴリー

８つのカテゴリーに“アクション”（チャレンジ材料）が整理されています。初めから各材料群に目を向けて選んでも良いのですが、興味のあるカテゴリーから具体的な材料へと段階的に目を向けることで“アクション”を選びやすくなります。

カテゴリー

A・・・地域で暮らす人・働く人　　B・・・国際交流・異世代交流

C・・・歴史・伝統・文化・慣習　　D・・・防犯・防災・美化・清掃

E・・・芸能・イベント・情報発信　　F・・・手伝う・支える

G・・・習う・学ぶ　　H・・・健康・予防

(2)一覧表

各チャレンジ材料~例示~が、どのチャレンジ領域に該当するかを◯印で表しています。以下の一覧表に示されていないものでもチャレンジ材料にすることができます。あなたのアイデアを是非活かしてチャレンジを楽しんでください。

チャレンジ	興味を持つ（調べる・見つける）	一部になる（交流する・参加する）	考える（想像する）	企画する（創造する）	実行する	続ける（改善する）
該当する養成カリキュラムの領域	「人間と社会」「介護」「こころとからだのしくみ」「医療的ケア」	「人間と社会」「介護」「医療的ケア」	「人間と社会」「介護」「こころとからだのしくみ」「医療的ケア」	「人間と社会」「介護」「医療的ケア」	「人間と社会」「介護」「医療的ケア」	「人間と社会」「介護」「こころとからだのしくみ」「医療的ケア」
チャレンジ材料						
カテゴリーA：地域で暮らす人・働く人						
祖父母の生活	◯	◯	◯		◯	◯
自治会長の生活	◯	◯	◯		◯	◯

チャレンジ	興味を持つ（調べる・見つける）	一部になる（交流する・参加する）	考える（想像する）	企画する（創造する）	実行する	続ける（改善する）
留学生の生活	○	○	○		○	○
高齢者の生活体験	○	○	○		○	
先輩の仕事	○		○		○	
スマホ普及率(活用率)調査	○	○	○	○	○	
高齢者の社会生活	○	○	○	○	○	○
障害児者の社会生活	○	○	○	○	○	○
個人史本製作	○	○	○	○	○	
就活	○	○	○	○	○	○
終活	○	○	○	○	○	
カテゴリーB：国際交流・異世代交流						
地域住民と外国籍住民	○	○	○	○	○	○
異文化交流	○	○	○	○	○	○
食事会(地域食堂)	○	○	○	○	○	○
カテゴリーC：歴史・伝統・文化・習慣						
昔の遊び（けん玉・石積みなど)	○	○	○	○	○	
地域の伝説・語り草・民話	○	○	○		○	
戦争被害	○	○	○		○	○
70 年前(50 年前・30 年前)の地域	○	○	○	○	○	
木の玩具作り	○	○	○	○	○	○
差別問題	○	○	○	○	○	○
カテゴリーD：防犯・防災・美化・清掃						
避難所マップ作成	○		○	○	○	○
避難所対策	○		○	○	○	○
炊き出し体験		○	○		○	
ハザードマップを読み解く	○		○		○	○
清掃(公園・駅・バス停・トイレ・駐輪場・公民館 等)	○	○	○	○	○	○
カテゴリーE：芸能・イベント・情報発信						
地域の宝物とインスタ映えスポット	○		○	○	○	

チャレンジ	興味を持つ（調べる・見つける）	一部になる（交流する・参加する）	考える（想像する）	企画する（創造する）	実行する	続ける（改善する）
地域の交流人口(観光客)を増やす	○	○	○	○	○	○
祭りを楽しむ	○	○	○	○	○	○
芸術活動	○	○	○	○	○	○
電気(ガス)の無い生活	○	○	○	○	○	
演芸会		○	○	○	○	
運動会		○	○	○	○	
地域 PR 動画製作	○	○	○	○	○	○
地域のドキュメンタリー製作	○	○	○	○	○	○
カテゴリーF：手伝う・支える						
空き家活用	○	○	○	○	○	
地域サロンの実情	○	○	○	○	○	○
社会資源エリアマップ作成	○		○	○	○	
宅配できるお店マップ作成	○	○	○	○	○	
車いすで行けるお店マップ作成	○	○	○	○	○	
託児(乳幼児・病児)	○	○	○	○	○	○
冠婚葬祭、栽培・収穫、押入れ・蔵・倉庫の整理、グランドゴルフなど	○	○	○	○	○	○
カテゴリーG：習う・学ぶ						
スマホ・PC　教室	○	○	○	○	○	○
昆虫採集	○	○	○	○	○	
農作業(市民農園)	○	○	○	○	○	○
調理、飼育、栽培・収穫、祭囃子、お盆・正月のお飾り、　民芸品など)	○	○	○	○	○	○
カテゴリーH：健康・予防						
健康の秘訣	○	○	○	○	○	○

評価をしよう

＝ワークシート⑤

“はじめの一歩”（全ての学生に共通の課題）の評価

自己評価の指標（評価ルーブリック）

課題＼評価	特にできる	できる	最低限できる	努力が必要
感じたり考えたりしたこととその理由を伝えることができる	感じたり考えたりしてわかった(気づいた)ことを図で伝えることができる	感じたり考えたりしてわかった(気づいた)ことを言葉と文字で伝えることができる	感じたり考えたりしたことと理由を言葉と文字で伝えることができる	感じたり考えたりしたことと理由を言葉と文字で伝えることができない
色々な視点で観察ができて意味づけができる	複数の視点と意味づけを統合して全体として一つ意味を創る(見つける)ことができる	複数の視点に対してそれぞれに意味づけができる	視点を動かすことができる	視点を動かすことが出来ない
とりあえずやってみる（初めて体験してみる）	ポジティブな側面に焦点を当てた味づけができる	物事のポジティブな側面とネガティブな側面を指摘できる	どんなことが不安なのかを伝えることができる	どんなことが不安なのかを伝えられない
得点	10 点	7 点	5 点	3 点

成績：３つの課題の得点の合計点により５段階評価をいたします。

“はじめの一歩”は「最低限できる」を目指します。

C 評価を獲得できれば合格です。

S 評価　・・・30～27 点

A 評価　・・・26～21 点

B 評価　・・・20～15 点

C 評価　・・・14～10 点

D 評価　・・・９点

Player’s map にマーキングしよう！！

新しい課題を見つけよう

＝ワークシート

もっと伸ばしたいことや もう少し補いたいことを探してみよう
新しい課題がきっと見つかるよ

達成課題

チャレンジ	興味を持つ（調べる・見つける	一部になる（交流する・参加する）	考える（想像する）	企画する（創造する）	実行する	続ける（改善する）
達成課題	感じたり考えたりしたこととその理由(どこからそう思う)を伝えることができる	自分を活かし(知り)、相手を活かせる(知る)ことができる	違う視点で観察ができ意味づけができる	バラバラになっているモノを繋ぎ合わせ意味あるものを創ることができる	「とりあえずやってみる」ことができる	問題点を見つけ出し課題を創ることができる

次はどんなことにチャレンジしてみたい？

もう一回“チャレンジサイクル”を確かめたい　→P.4

もう一回“アクション”一覧を見てみたい　→P.7

初めの一歩”（全ての学生に共通の課題）が達成できたら

今度は一人一人違う

新しい課題・目標・学習教材にチャレンジしてみよう

達成課題に対する自己評価の指標（評価ルーブリック）

評価 達成課題	特にできる	できる	最低限できる	努力が必要
感じたり考えたりしたこととその理由を伝えることができる	感じたり考えたりしてわかった(気づいた)ことを図で伝えることができる	感じたり考えたりしてわかった(気づいた)ことを言葉と文字で伝えることができる	感じたり考えたりしたことと理由を言葉と文字で伝えることができる	感じたり考えたりしたことと理由を言葉と文字で伝えることができない
自分を活かし(知り)相手を活かせる(知る)ことができる	２人以上から出された意見を踏まえて、相互の合意を図ることができる	相手のこと(価値観・言動の特徴等)を肯定的に表現でき、自分との違いを指摘できる	自分のこと(価値観・言動の特徴等)を肯定的に表現できる	自分のこと(価値観・言動の特徴等)を客観的に表現できない
違う視点で観察ができ、意味づけができる	複数の視点と意味づけを統合して全体として一つの意味を創る(見つける)ことができる	複数の視点に対してそれぞれに意味づけができる	視点を動かすことができる	視点を動かすことが出来ない
バラバラになっているものを繋ぎ合わせ意味あるものを創ることができる	ひと繋がりのものをバラバラに分解して別の意味あるものに創り替えることができる	バラバラになっているものをつなぎ合わせて意味あるものを創ることができる	ひと繋がりのものをバラバラに分解できる	ひと繋がりのものをバラバラに分解できない
「とりあえずやってみる」ことができる	ポジティブな側面に焦点を当てた味づけができる	物事のポジティブな側面とネガティブな側面を指摘できる	どんなことが不安なのかを伝えることができる	どんなことが不安なのかを伝えられない
問題点を見つけ出し課題を創ることができる	現実と理想との差異を無くすためにできることを文字で表せる	現実と〇〇であって欲しいという理想との差異を文字で表せる	今起きている現実を文字で表せる	今起きている現実を文字で表せない
得　点	10 点	7 点	5 点	3 点

成績　S 評価・・・30～27 点　A 評価・・・26～21 点

B 評価・・・20～15 点　C 評価・・・14～10 点

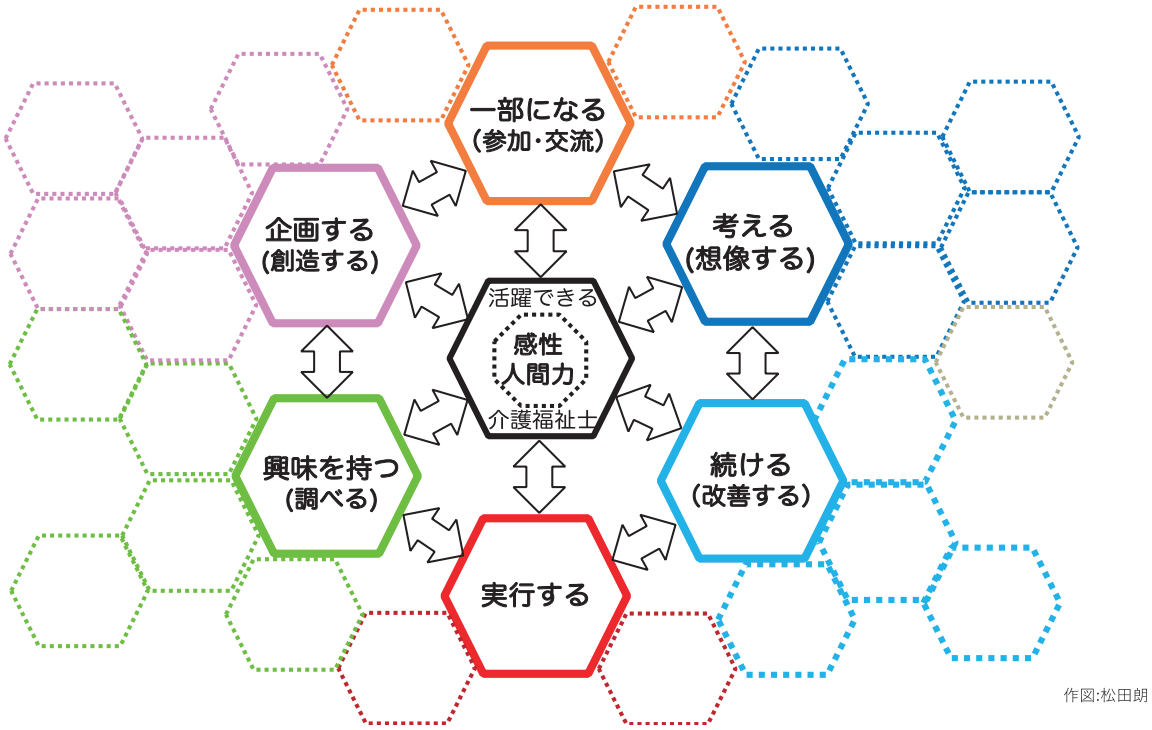
D 評価・・・ 9 点

Player's map をつくろう！

ワークシート①

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　クラス＿＿＿＿　番号＿＿＿　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿

⬡ が足りなくなったら自由に書き足していいよ！



体験済み“アクション”一覧

年　月　日	年　月　日
年　月　日	年　月　日
年　月　日	年　月　日
年　月　日	年　月　日
年　月　日	年　月　日
年　月　日	年　月　日
年　月　日	年　月　日
年　月　日	年　月　日
年　月　日	年　月　日

チャレンジを決めよう！

ワークシート②

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　クラス＿＿＿＿　番号＿＿＿　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿

自分のことを客観的に観たい人　「ジョハリの窓」　＝ワークシート⑧へ

自分の特徴を整理しよう！（「ジョハリの窓」を参考に）

好きなこと・得意なことは？	嫌いなこと・不得意なことは？

今一番気になること・興味が持てるものは？

一番気になったチャレンジ項目の下に◯印をつけよう！

チャレンジ	興味を持つ（調べる・見つける）	一部になる（交流する参加する）	考える（想像する）	企画する（創造する）	実行する	続ける（改善する）

目標を設定しよう！（課題を見つけよう！）

ワークシート③

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　クラス＿＿＿＿　番号＿＿＿　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿

もっと伸ばしたいことや補いたいことを探そう！

理想と現実のギャップをはっきりと整理しよう

伸ばしたいこと・磨きをかけたいこと	補いたいこと・改善したいこと
現実は？	現実は？
理想は？	理想は？

課題を見つけよう！

実現させたい理想像はどんなことができる人？

チャレンジを選ぼう！

目標を設定しよう！

課題を達成するための具体的な行動は？

“アクション”（チャレンジ材料）を選ぼう！

ワークシート ④

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　クラス＿＿＿＿　番号＿＿＿　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿

設定した目標は？

課題を達成するための具体的な行動は？

課題を達成するための具体的な行動を実践できる学習教材は？

①カテゴリーを選ぶ（複数可）　P.7 へ移動→

②“アクション”を選ぶ（複数可）　P.7〜P.9 へ移動→

“アクション”を実践する

①事前にそろえるものは？

②注意することは？

評価をしよう！“はじめの一歩”編

ワークシート ⑤

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　クラス＿＿＿＿　番号＿＿＿　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿

自己評価の指標（評価ルーブリック）

課題＼評価	特にできる	できる	最低限できる	努力が必要
A:感じたり考えたりしたこととその理由を伝えることができる	感じたり考えたりしてわかった(気づいた)ことを図で伝えることができる	感じたり考えたりしてわかった(気づいた)ことを言葉と文字で伝えることができる	感じたり考えたりしたことと理由を言葉と文字で伝えることができる	感じたり考えたりしたことと理由を言葉と文字で伝えることができない
B:色々な視点で観察ができて意味づけができる	複数の視点と意味づけを統合して全体として一つ意味を創る(見つける)ことができる	複数の視点に対してそれぞれに意味づけができる	視点を動かすことができる	視点を動かすことが出来ない
C:とりあえずやってみる（初めて体験してみる）	ポジティブな側面に焦点を当てた味づけができる	物事のポジティブな側面とネガティブな側面を指摘できる	どんなことが不安なのかを伝えることができる	どんなことが不安なのかを伝えられない
得点	10 点	7 点	5 点	3 点

“はじめの一歩”が目指すのは「最低限できる」です！

C 評価がもらえれば Good！！

得点の合計は？　下の計算式に数字を入れてみよう！

課題 A：＿＿＿＿点　＋　課題 B＿＿＿＿点　＋　課題 C＿＿＿＿点　＝　合計＿＿＿＿＿点

成績は？　合計得点が該当する評価に〇印をつけよう！

S 評価・・・30～27 点　　A 評価・・・26～21 点　　B 評価・・・20～15 点

C 評価・・・14～10 点　　D 評価・・・ 9 点

もっと伸ばしたいことやもっと磨きをかけたいことは？

もう少し補いたいことや改善したいことは？

評価をしよう！

ワークシート ⑥

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　クラス＿＿＿＿　番号＿＿＿　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿

達成課題に対する自己評価の指標（評価ルーブリック）

評価 ＼ 達成課題	特にできる	できる	最低限できる	努力が必要
A:感じたり考えたりしたこととその理由を伝えることができる	感じたり考えたりしてわかった(気づいた)ことを図で伝えることができる	感じたり考えたりしてわかった(気づいた)ことを言葉と文字で伝えることができる	感じたり考えたりしたことと理由を言葉と文字で伝えることができる	感じたり考えたりしたことと理由を言葉と文字で伝えることができない
B:自分を活かし(知り)相手を活かせる(知る)ことができる	２人以上から出された意見を踏まえて、相互の合意を図ることができる	相手のこと(価値観・言動の特徴等)を肯定的に表現でき自分との違いを指摘できる	自分のこと(価値観・言動の特徴等)を肯定的に表現できる	自分のこと(価値観・言動の特徴等)を客観的に表現できない
C:違う視点で観察ができ、意味づけができる	複数の視点と意味づけを統合して全体として一つ意味を創る(見つける)ことができる	複数の視点に対してそれぞれに意味づけができる	視点を動かすことができる	視点を動かすことが出来ない
D:バラバラになっているものを繋ぎ合わせ意味あるものを創ることができる	ひと繋がりのものをバラバラに分解して別の意味あるものに創り替えることができる	バラバラになっているものをつなぎ合わせて意味あるものを創ることができる	ひと繋がりのものをバラバラに分解できる	ひと繋がりのものをバラバラに分解できない
E:「とりあえずやってみる」ことができる	ポジティブな側面に焦点を当てた味づけができる	物事のポジティブな側面とネガティブな側面を指摘できる	どんなことが不安なのかを伝えることができる	どんなことが不安なのかを伝えられない
F:問題点を見つけ出し課題を創ることができる	現実と理想との差異を無くすためにできることを文字で表せる	現実と〇〇であって欲しいという理想との差異を文字で表せる	今起きている現実を文字で表せる	今起きている現実を文字で表せない
得　点	10 点	7 点	5 点	3 点

課題 A~F までの得点の合計は？　＝＿＿＿＿＿＿点

成績　合計得点が該当する評価に〇印をつけよう！

S 評価・・・30〜27 点　　A 評価・・・26〜21 点　　B 評価・・・20〜15 点
C 評価・・・14〜10 点　　D 評価・・・ 9 点

もっと伸ばしたいことやもっと磨きをかけたいことは？

もう少し補いたいことや改善したいことは？

チャレンジの記録

ワークシート⑦

Play date　　年　　月　　日　～　　月　　日

Player's name

学習教材のカテゴリー：

学習教材名：

日　時	活 動 内 容	考えたこと・感じたこと・気づいたこと

ジョハリの窓　自分自身を客観的に観てみよう！　　ワークシート⑧

Play date　　年　　月　　日　　Player's name

自分が知っている「自分の特徴」、他人が知っている「自分の特徴」を４つの窓に分類し、主観的に見た“わたし”と客観的に見た“わたし”を知ることで、効果的な自己分析ができます。自分がどんなことにチャレンジをしていくかを決める助けにしましょう。

	自分が気づいている	自分が気づいていない
他人が気づいている	「開放の窓」 自分も他人も気づいている	「盲点の窓」 自分は気付いていない　　他人は気づいている
他人が気づいていない	「秘密の窓」 自分は気づいている　　他人は気付いていない	「未知の窓」 自分も他人も気付いていない

＜やり方＞

３人～５人程度で一つのグループをつくります。

①自分の特徴（得意・向いている・性格など）だと思う事柄を５個以上別紙に書き出します。

②グループのメンバー一人ひとりの特徴だと思う事柄を１枚の紙に１人ずつ(５個以上)書き出します。

③各メンバーにそのメンバーの特徴を書いた紙を渡します。

④(A)開放の窓には、自分と相手の両方が書いた特徴を記入してください。

(B)盲点の窓には、自分は書かず相手が書いた特徴を記入してください。

(C)秘密の窓には、自分が書いて相手は書いていない特徴を記入してください。

(D)未知の窓には、自分も相手も書いていない特徴を記入してください。

(A)開放の窓（自分も相手も気づいている）	(B)盲点の窓（相手だけが気づいている）
(C)秘密の窓（自分だけが気づいている）	(D)自分も相手も気づけていない

⑤書き出された結果から自己分析をしてみよう

文部科学省委託事業　2019 年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」
～地域活動による高齢者支援・介護支援の学習プログラムの研究開発事業～

地域課題学習プログラム

教員用学習支援ガイドブック

Ver. 2020. 2 .15

目次

序文

第１章

１．なぜ地域課題学習プログラムを学ぶのか

２．地域課題学習プログラムをどう学ぶのか

３．目指すべき介護福祉士像

第２章

１．学習教材について

（１）学習目標

（２）学習方法

（３）学習支援における留意事項

（４）コースポリシー

２．実践評価

3. 全学生共通の課題

（１）全学生共通の学習目標（初めの一歩）

（２）全学生に共通の課題（初めの一歩）の評価指標

（３）学習の楽しみ方

第３章

１．体験記

（１）北海道福祉教育専門学校

（２）関東福祉専門学校

（３）YMCA 健康福祉専門学校

付録

学生へのアンケート（案）

実践評価（仮案）

ワークシート①～⑧

序文

1．世界共通言語としての SDGs

2015 年、国際社会の共通目標として「持続可能な開発目標(SDGs)」が国連で開かれたサミットの中で決められました。SDGs は 2030 年までに達成すべき「17 のゴール（目標）」と「169 のターゲット(具体目標)」で構成されています。17 のゴール（目標）には「貧困」「健康と福祉」「質の高い教育」「働きがいと経済成長」「産業と技術革新」「生産と消費」「住み続けられるまちづくり」「パートナーシップで目標達成」などが含まれています。「誰一人取り残さないことを目指す」という約束を掲げていることが、SDGs の特徴であると評されています。

国際社会が SDGs を拠り所に新たな価値を展開し始めていることに呼応するように我が国においても民間事業者や団体、自治体等において、SDGs に拠る活動（事業）が盛んになされています。その歩みは一歩一歩ではありますが地域社会に『善い循環』を起こしています。ここでいう『善い循環』とは、SDGs を解説する際にしばしば用いられている近江商人の経営哲学『三方よし』を意味しています。『三方』とは『自分～相手～世間』であり、『社会貢献～経済成長～環境保護』であり、『学生～学校(教員)～地域社会』と置き換えることができます。

https://www.unicef.or.jp/sdgs/より出典

2．持続不可能な地域社会と介護福祉士養成施設

高齢化と少子化の進行に伴う地域産業の衰退や企業の撤退等による過疎化、価値観の多様化と生活様式を一変させた技術革新による日常生活における各種サービスの個別化がもたらした家庭機能の低下と世代間交流の喪失は地域社会が衰退した主な要因であると考えられています。この地域社会における経済活動を含めた住民相互の共生関係の崩壊は、それぞれがバラバラに個々の利害に一喜一憂するという『悪循環』を増長させてしまったのではないでしょうか。

日本介護福祉士養成施設協会がまとめた資料によると、2018 年から 2019 年にかけて新規の学生募集をやめたり養成過程を廃止したりした介護福祉士養成施設が全国で 11 校あったそうです。入学者数については、2019 年度は前年比でわずかに増えてはいますが、その要因は外国籍留学生の増加にあり、その留学生も「技能実習」「特定技能実習」といった在留資格の増設やより条件の良い他国への流入などにより、今後は減少の一途を辿るであろうと考えられています。

皆様が暮らす地域社会には『善い循環』が保たれていますか？

皆様の養成施設は如何でしょうか？
日頃から学生が楽しく学習できる授業を展開できていますか？　（質の高い教育）
教職員が長く勤務し続けたいと思える養成施設経営ができていますか？（働きがいと経済成長）
地域社会と助け合い支え合える共生関係が維持されていますか？　（パートナーシップで目標達成）
高齢・少子・過疎への対策は如何でしょうか？（住み続けられるまちづくり）

３．“YES AND！”（受けいれよう　そして一歩を踏み出そう）

地域課題学習プログラムが掲げている目的は、SDGs が掲げる 17 のゴール（目標）ととても深い関係にあり、対象者が活き活きと暮らし続けられるための生活支援の専門職である介護福祉士が取り組むからこそ成果が見込める課題が多く含まれています。つまり、地域課題学習プログラムに取り組むことは、地域社会において中核的な役割を担える介護福祉士の養成と貴養成施設の益々の発展に加え、地域社会の創生にも貢献できることを意味しているのです。

学生と教員（養成施設）と地域社会との関係性に焦点を絞りながらも、教職員の皆様には２次元から３次元、そして４次元、５次元・・・へと、多角的かつ柔軟な視点を持って学生と共に地域課題学習プログラムを楽しんでいただければ幸いです。

第１章

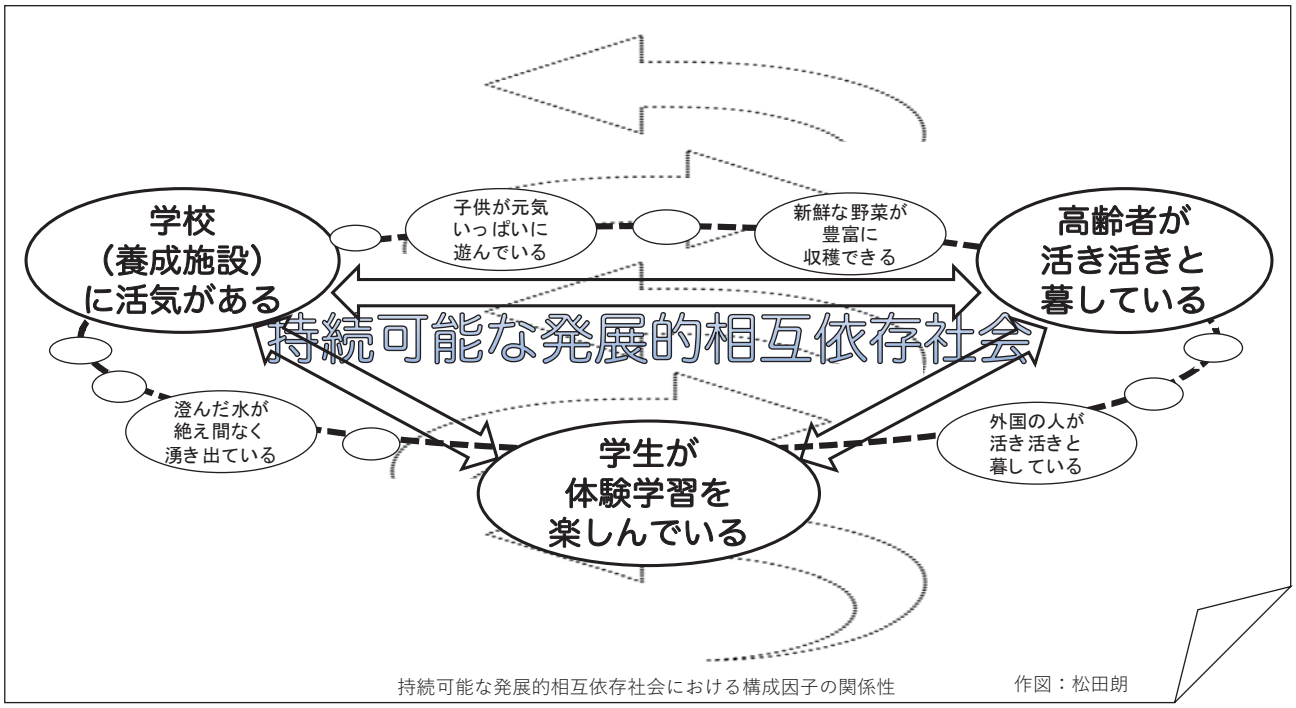
１．なぜ地域課題学習プログラムを学ぶのか

先ずは、学生が自ら進んで地域社会に入っていけるようになるためにこの学習プログラムを学びます。学生が自主的積極的に地域社会に入っていけるようになることで以下に記すような成果が見込め、さらには地域社会において中核的な役割を担う能力の修得へと発展していくものと考えます。

学生が地域社会に入っていけるようになることで、

・高齢者一人ひとりの豊かな個性と出会い個々のニーズに気づくことができるようになります。
・一人ひとりに寄り添った支援サービスを具体的にイメージできるようになります。
・新たな高齢者支援の多様な仕組み創りができるようになります。
・過疎化が進行している地方の市町村においては世代を超えたつながりを促進する支援サービスが提供できるようになります。
・高齢者が住み慣れた地域で生きがいを感じられる自立した日常生活が続けられるようになります。
・学生が楽気持ちで過ごせる居場所ができます。

地域社会に暮らす（地域社会を構成する）各々が、お互いに興味を持ち合い、認め合い、学び合い、助け合えることで「持続可能な発展的相互依存社会」を創り維持するための『善い循環』が生まれ、地域社会の暮しやすさが高まり希望が持てるようになります。



持続可能な発展的相互依存社会における構成因子の関係性　　作図：松田朗

2. 地域課題学習プログラムをどう学ぶのか

一人ひとりの学生の個性や希望に適うように学習教材を組み合わせ、自主的積極的に学びが進められるよう教員の支援のもとに学習活動（体験学習）が展開されます。

まず初めに学生は、全学生共通の課題『自ら進んで地域社会に入っていける』にチャレンジします。地域社会の現状と向き合い課題を解決する能力を修得するための第一歩は学生が自ら進んで地域社会に入っていけるようになることであり、この学習プログラムはその過程が一人ひとりの学生に寄り添い適うように構成されています。またこの学習プログラムは、他者との協働を基盤に実践される課題解決のサイクルを動かす実践力の修得に向けた布石でもあります。

3. 目指すべき介護福祉士像

2018 年度に改正された介護福祉士養成カリキュラムにおける「求められる介護福祉士像」を基盤に以下の能力の修得を目指します。

(1)地域社会に暮らす人たちと楽しくおしゃべりができ、地域社会の未来像を描ける人。

(2)自分の特性（得意なこと・できることなど）を地域社会のために役立てることができる人。

(3)同じ地域社会に暮らす生活者として地域住民と協働関係をつくり、共に生きることができる人。

第２章

１．学習教材について

(1)学習目標

感じたり考えたりしたこととその理由（どこからそう思う？）を伝えることができる

自分を活かし（知り)、相手を活かせる（知る）ことができる

幾つかの視点で観察ができ、意味づけができる

バラバラなものを繋ぎ合わせ、ひとつの意味（価値）あるものを創ることができる

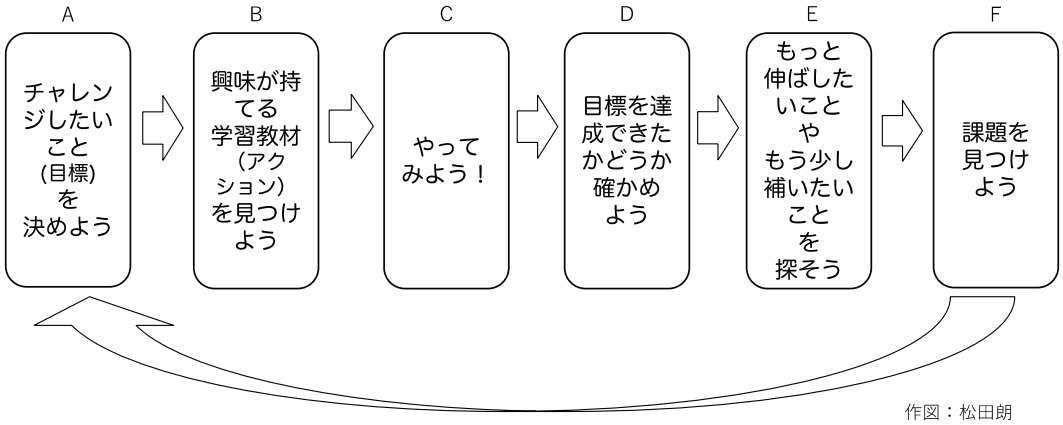
不安に負けずにとりあえずやってみることができる

問題点を見つけ出し、そこから課題を創ることができる

(２)学習方法

一人ひとりの学生の個性や希望に応じて目標を設定し、アクション（学習教材：体験学習）を用いて望む結果を目指します。チャレンジサイクルの項目ごとにワークシートが用意されています。

“ジモト”で活躍できる
プロフェッショナルな人になるためのチャレンジサイクル



作図：松田朗

＝例＝

１週間に５回遅刻をしてしまうゴン太くんは、遅刻を０にしてご褒美をもらおうと考えました。そこで、学校でやってみた「チャレンジサイクル」を早速使ってみることにしました。

E：補いたいこと →　「１週間に５回、朝遅刻している」（現実と理想のギャップ：問題）
F：課題　→　「毎朝始業時間に間に合う」
A：チャレンジ(目標)　→　「続ける**（改善する）**”家を出る 60 分前に起きよう！”」
B：アクション(学習教材)を選ぶ →　「快眠体操」「ブルーライトと睡眠」
「これを食べると寝坊する」

C：やってみる　→「毎朝起きた時間を記録して１週間続ける」

D：確かめる（評価）→　毎朝の起きた時間を確かめる。

家を出る何分前に起きた？

	よくできた	できた	最低限できた	努力が必要
起きた時間	46 分～60 分前	31 分～45 分前	16 分～30 分前	0～15 分前

※１週間の様子を振り返って、よくできた理由を考える。

E：補いたいこと　→ ○○○○○　・・・・・・

このように、チャレンジのサイクルに当てはめて考えていきます。

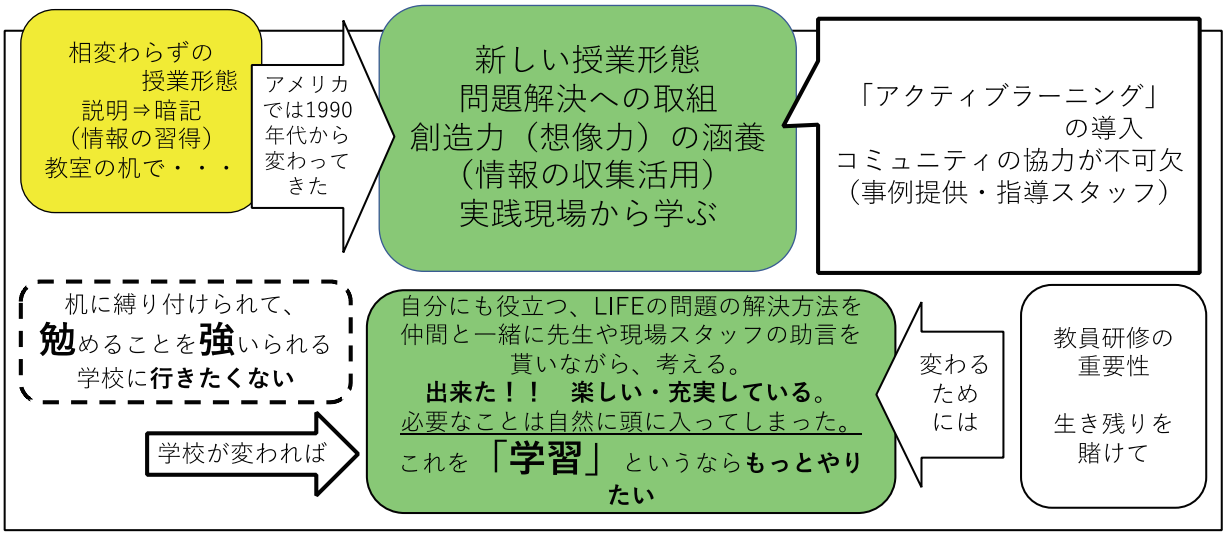
(3)学習支援における留意事項

1)教員と学生との関係は、教育者(指導者)から支援者・ファシリテーター（誘導者）へ

・学習の主導権は学生に委ね、教員は協働学習のパートナー兼サポーターに徹しましょう。
・個々の学生の目標を共有した上で、学習習慣を創り維持していくことを心がけましょう。
・学生が表出する様々な言動を、肯定的に価値あるものとして受けとめましょう。
・何があっても最後まで学生の学習活動を支える、信頼できるサポーターであり続けましょう。
・信頼できる介護福祉士のモデルであり続けましょう。
・現代的教育システムの導入をお勧めいたします。（下図参照）

伝統的教育システムから現代的教育システムへ

・・・遅れすぎている学習支援方法の展開・・・授業も「努力対成果」の見える化を



川廷宗之2018

2)学生に対する教員の支援活動

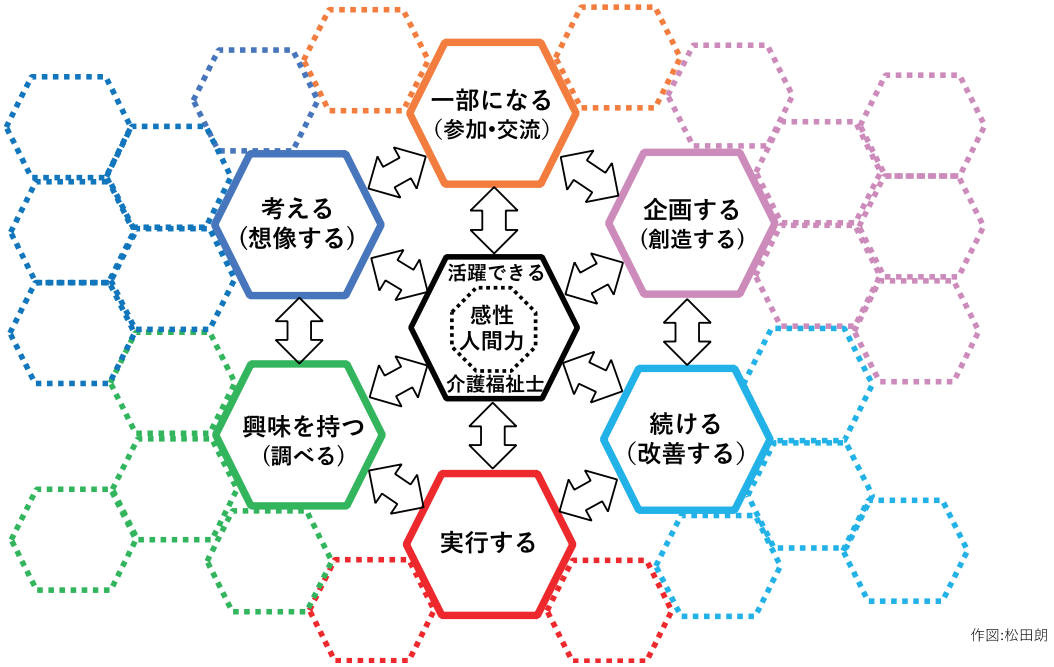
地域社会と学校（教員）をつなぐ地域コーディネーターとの連携（連絡調整など）を前提として、学習支援上の留意点を列挙しました。

・人間観察結果における「何故」を収集し共有する機会と、「何故」に気付いたことを褒める機会を設けましょう。
・地域社会固有の文化や人間関係をできるだけ事前に確認し、活動に携わる地域住民に異国籍の学生を含め学生の発言や態度を受容的に受け止め接してもらえるよう働きかけを行っておきましょう。
・フィードバックや意識の変化について測定・評価しましょう。
・各地の学習事例を学生に情報提供しましょう。
・地域社会の課題を自分の事としてとらえることができるように、学生自身の体験などを参照しながら理解を促しましょう。
・課題解決に当たっては学生が「したいこと」中心ではなく、住民のニーズに合ったものとなるよう示唆しましょう。
・できるだけ多角的な視点（次元の違う視点）で捉えられるよう助言しましょう。
・学生の学習活動が地域社会の人々への刺激となり双方向へ継続的なつながりが作れるように支援しましょう。
・実行可能な計画作成をフォローしましょう。
・関係者からの声などを積極的に聴収し、学生の学習活動へ反映させましょう。
・高齢者の困りごとは、個人の生活に起因するものと地域社会の環境要因によるものに分けられることを示唆し、その複雑性にも理解を促しましょう。
・学生が、対象者の個々人が抱えているニーズは地域へ展開しないと解決できないということに気づくよう示唆しましょう。
・解決策は一様ではないことを示唆しましょう。
・個人情報に対する守秘義務を説明しましょう。
・学生が持ち寄った内容により、参加型の授業へと発展させましょう。
・地域社会の特徴を見つけ出すことを示唆しましょう。
・体験学習をした学生が感じたことや気づき、楽しさなどのポジティブな面を積極的にフィードバックしましょう。
・学生の主体的活動を通じて地域福祉活動の素晴らしさや活動を広げるヒントと工夫を、学生が自ら考え、考察を深められるよう側面的な支援を行いましょう。
・学生が具体的で明確な「自発的活動のイメージ」を持つことができるようにフィードバックしましょう。

(4)コースポリシー

1) チャレンジプログラムの構造図（Player's map）

・・・学習教材（アクション）



「感性と人間力」を８角形で、「介護福祉士の専門性」を６角形で表現し、八面六臂の活躍ができるよう願いを込めて中心に据えました。その周囲を囲むように、地域社会に入って活躍できる介護福祉士として修得したい６つの具体的な能力と、その領域ごとにそれぞれの能力を養成する学習教材を配置することで、各学習教材と習得を目指す能力とを自由に関連づけて（繋げて）学習体験を進めていくことができ、学生一人ひとりの特性に適った学習過程が形成されます。また体験した学習教材をマーキングしていくことで学習過程が可視化でき、学習マップが出来上がるよう構成されています。

☞Player's map の作成を支援しましょう!

2) ６つのチャレンジ領域

目指すべき介護福祉士像で掲げた３つの能力を修得するために、「興味を持つ(調べる・見つける)」「一部になる(交流する・参加する)」「考える(想像する)」「企画する(創造する)」「行動する」「続ける(改善する)」の６つのチャレンジを設けました。一人ひとりの学生の自主性・積極性が引き出され自分の特性を活かすことができるように構成されています。

チャレンジ	興味を持つ（調べる・見つける）	一部になる（交流する参加する）	考える（想像する）	企画する（創造する）	実行する	続ける（改善する）
できるようになること	•世代や国籍などを超えて楽しいお喋りができる •感性(美醜.善悪.快不快の判断基準)が磨かれる ・数字が表している意味を考えられるようになる　等	•世代や国籍などを超えて楽しいお喋りができる •感性が磨かれる •状況に応じた適切な判断に基づく行動ができる　　等	•感性が磨かれる •考える道筋を立てることができる •視点を動かして新たな意味づけができる　等	•感性が磨かれる •新たな企画を提案できる ・新たな行動を始めることができる •リーダーシップを発揮することができる等	•感性が磨かれる •状況に応じた適切な判断に基づく行動ができる •リーダーシップを発揮することができる　　等	•状況に応じた適切な判断に基づく行動ができる •問題から課題を創り、目標を立てて行動できる 等

3）達成課題（学習目標）

チャレンジ	興味を持つ（調べる・見つける	一部になる（交流する・参加する）	考える（想像する）	企画する（創造する）	実行する	続ける（改善する）
達成課題	感じたり考えたりしたこととその理由(どこからそう思う)を伝えることができる	自分を活かし(知り)、相手を活かせる(知る)ことができる	違う視点で観察ができ意味づけができる	バラバラになっているものを繋ぎ合わせ意味あるものを創ることができる	「とりあえずやってみる」ことができる	問題点を見つけ出し課題を創ることができる

4）学習教材~例示~（アクション）

８つのカテゴリーに整理されています。初めから各学習教材群に目を向けて選んでも良いのですが、興味のあるカテゴリーから具体的な教材へと段階的に目を向けることで学習教材を選択しやすくなり、より学習教材を楽しめるようになるものと考えます。

※以下の教材群に含まれていないものでも学習教材として用いることができます。学生と一緒に教材創りから行うこともオススメです。

☞学習教材選びを支援しましょう!

① カテゴリー　A・・・地域で暮らす人・働く人　B・・・国際交流・異世代交流

C・・・歴史・伝統・文化・慣習　D・・・防犯・防災・美化・清掃

E・・・芸能・イベント・情報発信　F・・・手伝う・支える

G・・・習う・学ぶ　H・・・健康・予防

② チャレンジ材料（“アクション”~例示~ 一覧表

チャレンジ	興味を持つ（調べる・見つける）	一部になる（交流する・参加する）	考える（想像する）	企画する（創造する）	実行する	続ける（改善する）
該当する養成カリキュラムの領域	「人間と社会」「介護」「こころとからだのしくみ」「医療的ケア」	「人間と社会」「介護」「医療的ケア」	「人間と社会」「介護」「こころとからだのしくみ」「医療的ケア」	「人間と社会」「介護」「医療的ケア」	「人間と社会」「介護」「医療的ケア」	「人間と社会」「介護」「こころとからだのしくみ」「医療的ケア」
チャレンジ材料						
カテゴリーA：地域で暮らす人・働く人						
祖父母の生活	○	○	○		○	○
自治会長の　生活	○	○	○		○	○
留学生の生活	○	○	○		○	○
高齢者の生活体験	○	○	○		○	
先輩の仕事	○		○		○	
スマホ普及率(活用率)調査	○	○	○	○	○	
高齢者の社会生活	○	○	○	○	○	○
障害児者の社会生活	○	○	○	○	○	○
個人史本製作	○	○	○	○	○	
就活	○	○	○	○	○	○
終活	○	○	○	○	○	
カテゴリーB：国際交流・異世代交流						
地域住民と　外国籍住民	○	○	○	○	○	○
異文化交流	○	○	○	○	○	○
食事会(地域食堂)	○	○	○	○	○	○
カテゴリーC：歴史・伝統・文化・習慣						
昔の遊び(けん玉・　石積みなど)	○	○	○	○	○	

チャレンジ	興味を持つ（調べる・見つける）	一部になる（交流する・参加する）	考える（想像する）	企画する（創造する）	実行する	続ける（改善する）
地域の伝説・語り草・民話	○	○	○		○	
戦争被害	○	○	○		○	○
70年前(50年前・30年前)の地域	○	○	○	○	○	
木の玩具作り	○	○	○	○	○	○
差別問題	○	○	○	○	○	○
カテゴリーD：防犯・防災・美化・清掃						
避難所マップ作成	○		○	○	○	○
避難所対策	○		○	○	○	○
炊き出し体験		○	○		○	
ハザードマップを読み解く	○		○		○	○
清掃(公園・駅・バス停・トイレ・駐輪場・公民館等)	○	○	○	○	○	○
カテゴリーE：芸能・イベント・情報発信						
地域の宝物とインスタ映えスポット	○		○	○	○	
地域の交流人口(観光客)を増やす	○	○	○	○	○	○
祭りを楽しむ	○	○	○	○	○	○
芸術活動	○	○	○	○	○	○
電気(ガス)の無い生活	○	○	○	○	○	
旬の食材料理コンテスト	○	○	○	○	○	
演芸会		○	○	○	○	
運動会		○	○	○	○	

チャレンジ	興味を持つ（調べる・見つける）	一部になる（交流する・参加する）	考える（想像する）	企画する（創造する）	実行する	続ける（改善する）
地域 PR 動画製作	○	○	○	○	○	○
地域のドキュメンタリー製作	○	○	○	○	○	○
カテゴリーF：手伝う・支える						
空き家活用	○	○	○	○	○	
地域サロンの実情	○	○	○	○	○	○
社会資源エリアマップ作成	○		○	○	○	
宅配できるお店マップ作成	○	○	○	○	○	
車いすで行けるお店マップ作成	○	○	○	○	○	
託児(乳幼児・病児)	○	○	○	○	○	○
冠婚葬祭、栽培・収穫、押入れ・蔵・倉庫の整理、グランドゴルフ、など	○	○	○	○	○	○
カテゴリーG：習う・学ぶ						
スマホ・PC 教室	○	○	○	○	○	○
昆虫採集	○	○	○	○	○	
農作業(市民農園)	○	○	○	○	○	○
調理、飼育、栽培収穫、祭囃子、お盆・正月のお飾り、民芸品等)	○	○	○	○	○	○
カテゴリーH：健康・予防						
健康の秘訣	○	○	○	○	○	○

5）達成課題に対する自己評価の指標（評価ルーブリック）

評価 達成課題	特にできる	できる	最低限できる	努力が必要
感じたり考えたりしたこととその理由を伝えることができる	感じたり考えたりしてわかった(気づいた)ことを図で伝えることができる	感じたり考えたりしてわかった(気づいた)ことを言葉と文字で伝えることができる	感じたり考えたりしたことと理由を言葉と文字で伝えることができる	感じたり考えたりしたことと理由を言葉と文字で伝えることができない
自分を活かし(知り)相手を活かせる(知る)ことができる	２人以上から出された意見を踏まえて、相互の合意を図ることができる	相手のこと(価値観・言動の特徴等)を肯定的に表現でき、自分との違いを指摘できる	自分のこと(価値観・言動の特徴等)を肯定的に表現できる	自分のこと(価値観・言動の特徴等)を客観的に表現できない
違う視点で観察ができ、意味づけができる	複数の視点と意味づけを統合して全体として一つの意味を創る(見つける)ことができる	複数の視点に対してそれぞれに意味づけができる	視点を動かすことができる	視点を動かすことが出来ない
バラバラになっているものを繋ぎ合わせ意味あるものを創ることができる	ひと繋がりのものをバラバラに分解して別の意味あるものに創り替えることができる	バラバラになっているものをつなぎ合わせて意味あるものを創ることができる	ひと繋がりのものをバラバラに分解できる	ひと繋がりのものをバラバラに分解できない
「とりあえずやってみる」ことができる	ポジティブな側面に焦点を当てた味づけができる	物事のポジティブな側面とネガティブな側面を指摘できる	どんなことが不安なのかを伝えることができる	どんなことが不安なのかを伝えられない
問題点を見つけ出し課題を創ることができる	現実と理想との差異を無くすためにできることを文字で表せる	現実と〇〇であって欲しいという理想との差異を文字で表せる	今起きている現実を文字で表せる	今起きている現実を文字で表せない
得点	10 点	7 点	5 点	3 点

成績　S 評価・・・30～27 点

A 評価・・・26～21 点

B 評価・・・20～15 点

C 評価・・・14～10 点

D 評価・・・ 9 点

2. 実践評価

以下の２つの視点で実践評価を行います。

（１）「地域課題学習プログラム」を導入したことにより生じた学生への影響を測定いたします。測定方法は、プログラム導入前と導入後に同じアンケートに回答していただき、その内容を比較することで評価いたします。（付録：アンケート参照）

（２）「地域課題学習プログラム」の課題達成率を算出することでプログラムの効果を評価いたします。学生の自己評価に基づいた成績優秀者（S ランク＋A ランクの合計）数が、学習プログラム受講者全体の何%を占めたかを算出いたします。（付録：実践評価参照）

3. 全学生共通の課題

『自ら進んで地域社会に入っていける』

（１）全学生共通の学習目標（初めの一歩）

1)感じたり考えたりしたこととその理由を伝えることができる

2)色々な視点で観察ができて意味づけができる

3)とりあえずやってみる（初めて体験してみる）

（２）全学生に共通の課題“初めの一歩”の評価指標

“はじめの一歩”自己評価の指標（評価ルーブリック）

課題　評価	特にできる	できる	最低限できる	努力が必要
感じたり考えたりしたこととその理由を伝えることができる	感じたり考えたりしてわかった(気づいた)ことを図で伝えることができる	感じたり考えたりしてわかった(気づいた)ことを言葉と文字で伝えることができる	感じたり考えたりしたことと理由を言葉と文字で伝えることができる	感じたり考えたりしたことと理由を言葉と文字で伝えることができない
色々な視点で観察ができて意味づけができる	複数の視点と意味づけを統合して全体として一つ意味を創る(見つける)ことができる	複数の視点に対してそれぞれに意味づけができる	視点を動かすことができる	視点を動かすことが出来ない
とりあえずやってみる（初めて体験してみる）	ポジティブな側面に焦点を当てた味づけができる	物事のポジティブな側面とネガティブな側面を指摘できる	どんなことが不安なのかを伝えることができる	どんなことが不安なのかを伝えられない
得点	10 点	7 点	5 点	3 点

成績：３つの課題の得点の合計点により５段階評価をいたします。

“はじめの一歩”は「最低限できる」を目指します。
C 評価を獲得できれば合格です。

S 評価　・・・30～27 点

A 評価　・・・26～21 点

B 評価　・・・20～15 点

C 評価　・・・14～10 点

D 評価　・・・９点

（３）学習の楽しみ方(学習支援例)

いつも学校でかかわる友だちや先生たちとは違う大人やこどもたちとの交流が始まります。

少しドキドキしますが、地域の人たちは皆さんが来てくれることを楽しみにしています。

学生の皆さんも少しの緊張感とたくさんの好奇心をもって地域に入ってみてください。

好奇心をもつために…

・知らないことがあったら取りあえず聞いて（調べて）みましょう。
・知っていることだと思っても、もう一歩「どうして」「なんで」など深く掘り下げてみましょう。新たな一面に気づくかもしれません。
・「誰かがやってくれる」ではなく、自分でやってみましょう。躊躇しないでチャレンジしてみましょう。
・活動について周囲の人に話してみましょう。伝えることで自分の取り組みを振り返ることにもなります。
・活動の記録を残しましょう。
・写真撮影などの個人情報やプライバシーの扱いに関係する事柄は、必ず許可をいただきましょう。

少しの緊張感を持ちましょう…

地域活動では学校外の場所や、関係者とかかわることになります。

外に出れば一人の学生も学校を代表する人になります。

地域の人に見られているという緊張感をもって取り組みましょう。

・自分から挨拶をしましょう。
・笑顔を心掛けましょう。
・言葉遣いに気をつけましょう。
・室内に入るときには帽子をとり、上着を脱ぎましょう。
・活動に合わせた服装を心がけましょう。
・約束（時間）を守りましょう。約束を守ることは人間関係の基本です。
・活動中は対象者の様子観察を必ずしましょう。
・対象者に心身面で無理な負担がかからないように気をつけましょう。
・貴重な体験の機会を逃さぬよう、学生同士でかたまらないように心掛けましょう。
・積極的に（気軽に）質問しましょう。知らないことは恥ずかしいことではありません。
・率先して活動に入りましょう。
・声かけや対応を丁寧に行いましょう。必ず一声かけてから動きましょう。
・健康管理を心がけましょう。

第３章

１．体験記

（1）北海道福祉教育専門学校

０．実施場所の現状と取り組み前の状況

１．周辺地域（室蘭市）について

人口　　8 万 4991 人　（H30.3）

高齢化率　36.7％　　（H30.3）

※学校が所在する母恋地区について

人口　4,928 人　　高齢化率　44.9％

２．実施校について

学園創立 79 年、介護福祉士養成課程は創設 28 年目（2020 年 1 月現在）。

介護福祉士養成課程である自立支援介護福祉学科の他に、保育士養成課程「こども未来学科」の 2 学科で運営している。市内には、同法人運営のもう一つのる専門学校（調理師養成課程）もある。同法人運営の 2 つの専門学校ではこれまで短期中期の留学生を数多く受け入れてきたが、2019 年 4 月より介護福祉士養成課程（2 年制課程）へ留学生（ベトナム人 12 名）の受け入れが開始した。

３．学校と地域とのつながり

母恋地区に学校を開設し 75 年以上になる。母恋地区の住民だけでなく室蘭市民の一定数には、学校の認知があると考えられる。反面、高校生などの若年層からは「母恋ってどこ？」「聞いたことはあるけど行ったことはない。」「専門学校の名前は知っているけど、どこにあるかわからない」などの声が聞かれることもある。

近年、本校や土地に縁のない教員が着任したこともあってか、地域とのつながりが希薄になったとも言える（介護福祉学科は、2019 年 4 月より「自立支援介護福祉学科」へと名称変更を行った。その際、教員の再編を実施している）。

※記録上では、過去に地域サロンを実施していた。しかし、参加者が極少数であったため継続した実施とはならなかったようである。（当時の記録がなく詳細不明）

Ⅰ．学校として取り組んできたこと

１．すでに行っている地域交流

まず、本校のある母恋地区で毎年行われている母恋神社祭典（夏祭り）への参加である。露店が 100 店以上、来場者が数千人という地域最大の祭りであるが、この祭りに約 20 年本校 2 学科、姉妹校 1 学科の 3 学科合同で学生神輿を出している。今や、地域住民からは、この祭りになくてはならないものと認識されている。

また、毎年 11 月に行われる学校祭には地域住民を招待している。約 300 名程度の来場者がある。他には、姉妹校・調理師学科で定期的に実施しているチャレンジショップ（学生運営レストラン）がある。

2．地域サロンの運営①「まずは、やってみよう！」

本校では「まずは、やってみよう！」をキーワードに初回の地域交流サロンを実施した。ベトナム人留学生がいることから「シンチャオサロン母恋」と命名。シンチャオは、こんにちはの意味。

しかしこれまで、地域との関わりが乏しかったため第１回開催まで２ヶ月超の準備期間を要した。この期間に、地域コーディネーターと教員は、市内で行われている地域サロンの視察やボランティア団体やこども食堂の運営者などから情報収集をおこなった。学生には、地域サロンの見学に行かせた。その雰囲気や学校祭のミニバージョンなどのイメージを持って準備を進めた。

また、学校単独での実施ではなく、社会福祉協議会の協力も得ることとした。これにより、周辺地域への認知および運営ノウハウ、消耗品などの協力を得ることができた。

3．地域サロンの運営②「楽しんで帰ってもらう！」

地域の方々がただ単に「来て、帰る」ではなく、心から楽しんで帰ってもらえるように計画した。当初、学生は地域住民におもてなしする感覚で計画を立てていたが、「やっている自分達が楽しくなければ･･･」というイメージで計画を変更させた。

留学生より「ベトナムの紹介」を取り入れたいとのことで、第 1 回目にはベトナム民族衣装を着て民族舞踊とスライドにてベトナムの紹介を行った（日本人は、スライドにて学校紹介を行った）。準備、練習等に積極的に取り組んでいた。

4．地域サロンの運営③「継続的に来てもらう！」

１回切りではなく、何度も来てもらえるよう毎月１回の定期開催とした（本来は、年間計画を提示できれば良かったのだが、上記記載の通り「まずは、やってみよう！」で取り組んだため、年間計画を立てずにその都度、計画した）。

過去に本校で実施したサロンは、単発だった経緯があり、定期的に通ってもらえるよう最低限月１回は開催するようにした。

さらに、１度来場していただいたつながりを大切にすべく、来場された方には定期的に自宅へ訪問し開催の案内を手渡すなどした。

5．地域サロンの周知について

町内会の回覧板、掲示板を活用させていただいた。

市の広報誌も活用したかったが、開催日を決める過程が広報誌の原稿締切と合わず、断念した。ただ、開催日が確定すると胆振総合振興局、室蘭市高齢福祉課、室蘭市社会福祉協議会へ参加案内の依頼をし、可能な範囲で協力していただいた。また、振興局、市よりほぼ毎回、担当者の出席をいただいた。

Ⅱ．実施までの指導計画

1．開催日、開催時間の決定方法

本学では、地域コーディネーターを含めた教職員により日程を確定させた。本来、年間スケジュールを作成し開催すべきであるが、初年度ということもあり１開催ごとの反省会後にその結果を踏まえ、次開催を決めるという方式とした。

時間設定では、昼食後の活動しやすいと思われる時間をスタート時間にし、参加者と学生共に負担感・苦痛感を感じないであろう 90 分とした。（授業時間の 1 単位を意識したというわけではない。）

2．学生サポート

学生が主体的に取り組むべきであるが、初年度であるため、教員が全面的にサポートした。特に、毎開催の出し物については教員が介入しテーマ決めをしなければ、学生自身では決められなかった。また、出し物によっては、教員も学生同様演者となり出演した。自立支援介護福祉学科教員が中心ではあったが、地域コーディネーターにも加わってもらい、学生へのサポートを行った。

Ⅲ．反省点、苦労した点

1．　学生主体で取り組めなかったことが大きな反省点である。

地域サロン、地域と交流する初年度ということもあり、教員が先導・誘導する形で展開した。学生主導に移行したい反面、手探りでの運営だったため移行しづらい側面もあった。留学生が入学した初年度でもあり、彼らの母国の状況から探り、縁もゆかりもない地を理解するために市内散策、歴史の理解も行った。結果、日本の地域コミュニティーの理解、コミュニティーの重要性の教授にも時間を要した（私を含め、担当教員が室蘭に着任間もないこと要因の一つである）。

2．近年、学校と地域との交流が希薄であった

学園創立後 80 年近く現在の場所にあるわけだが、近年は住民との交流が少なく、夏のお祭り以外での関わりがなかった。そのため、信頼関係の構築に力を入れた。

地域コーディネーターや教員が町内会への挨拶周りや地域での町内会の活動に参加した。また、ボランティア派遣依頼、教室貸出の依頼、教員の講演依頼があれば積極的に受けるようにした。町内会の会合や地域住民との顔を合わせる機会が増えたことで、地域サロンへの参加・協力依頼もしやすくなった。

留学生寮開設時は、地域との関係が希薄だったため、入居者である留学生の騒音問題やゴミの出し方間違いでの苦情など、学校にクレームが入ることがあった。しかし最近は、（留学生が生活に慣れたということもあるが）学校へのクレームは殆どなく、むしろ、地域の方が直接留学生へ指導してくださるようになった。（ここに記載すべき内容ではないかもしれないが）これまではクレームが代表電話であったが、最近は、教員や地域コーディネーターの名を指し、思いやりを込めたクレームを伝えてくれるようになった。この点は、信頼関係が構築できてきたことを意味しているのではないか。

3．学生・学校側の出したいものと参加者が期待しているものが違った

参加者が期待しているものは「学生との交流」であった。これは、開催毎に実施しているアンケートによってわかった。学生、学校側は、楽しんでもらうために計画立てたものであったが、住民は出しもの（ダンス、歌、劇）ではなく単に交流を望んでいた。詳しくインタビューを行うと、「学生と話す時間が長い方が良い」「たくさんの学生と話をしたい」などである。開催当初しばらくは、この求めている差があっと。アンケート実施以降は、学生との交流を３０分以上とるようスケジュール立てている。参加者は、出しものを見る目より、学生と交流している時間の方がやはり目が輝いているように感じられた。

Ⅳ．学生が地域に入り変わったこと

1．地域交流に対して積極性が出てきた

学生が地域と関わり変わった点の一つが、地域交流への積極性の向上である。地域サロン運営前や

運営間もないころは、地域活動への参加（ボランティア等）を促しても、どこか他人行儀で前向きな学生は少なかった。しかし、地域に出て、顔馴染みの住民が増えるにつれ、積極的に地域活動へ参加する学生が増えてきた。中には「地域住民の◯◯さんから声をかけてもらったので･･･」など住民から学生へ直接声をかけ、町内会のイベントに誘うケースもあった。学生自身が地域に必要とされていると実感しているようである。

2．地域サロンへの参加者が増えた、また常連参加者ができた。

上記Ⅰ-4にも記載したが、「継続的に来てもらう！」を目的の一つに進めていたが、結果、常連の参加者ができた。常連参加者の中にはすでに、顔なじみの学生がいたり、ある意味、お気に入りの学生がいたり･･･と、主目的が学生になっているが継続的に参加していただいている点には変わらない。学生を地域に出したことで地域が学生を求めるようになってきたと感じている。実際、これまでお誘いのなかった地域の町内会イベントへのボランティア依頼や、町内会の食事会での講話などこれまで以上にお誘いがかかるようになった。

Ⅴ．その他

本校、強いては室蘭市母恋地区にとって、地域と学生・学校の交流は大きな意味をなしていると感じている。人口減少が想定以上のペースで進んでいる中、この地域を盛り上げる、活性化させるのはやはり若い力ではないだろうか。「これまで関わりづらかった学校が、この地域交流サロンにより興味のある存在に変わった。」町内会役員の言葉が物語っているように、地域交流サロンをやる意義が見えてきた気がする。

今後は、地元の母恋地区だけでなく室蘭市全体をさらには、隣接市へ広げていきたいと考える。介護福祉士養成課程のカリキュラムは、2年制課程では非常にタイトであるが、サロンという地域住民と関われる実践教育は、今後の介護福祉士だけでなく、人としても成長を促すことができるのではないだろうか。

ご協力をいただいた胆振総合振興局、室蘭市、町内会の皆様にこの場を借り、御礼申し上げます。

【地域サロン推進の為の本校運営メンバー】　※番号の黒抜きがスタート時点のメンバー

❶	澤田　乃基	北海道福祉教育専門学校　学校長
❷	阿嘉　優	自立支援介護福祉学科　教務主任
③	久保　明人	自立支援介護福祉学科　専任教員
④	髙山　晃作	こども未来学科　教務主査
⑤	田村　めぐみ	こども未来学科　専任教員
⑥	小玉　忠顕	学校法人北斗文化学園　室蘭事務所長
❼	岸田　京子	地域コーディネーター

（北海道福祉教育専門学校　自立支援介護福祉学科　阿嘉　優）

（2）関東福祉専門学校

1．関東福祉専門学校による「地域貢献活動・芸能福祉講座」の取り組み

（1）平成 21 年のカリキュラム改正と社会福祉法人立の特色を生かして

平成 21 年に施行された介護福祉士養成教育カリキュラム見直しによって、現行の新カリキュラムがはじまった。この改正では、教育時間数や教育内容、教育に含むべき事項の基本的な枠組みは示されていたが、それ以外については各養成校の自由裁量とされ、各校の教育理念や教育目的を達成するために必要な内容を設定することができた。そこで本校も社会福祉法人立の学校の特徴を最大限に活用し「地域貢献活動・芸能福祉講座」を創設した。本年度のカリキュラムは図 1 の通りである。

授業の目的・ねらいは、「地域に必要とされる学校づくりの一環として、ボランティア活動をする」、「障害者スポーツ、サマースクール、100 キロウォーキング、献血、施設の納涼祭のボランティアをする」、「将来の介護福祉士として、利用者への喜びを提供する技能について学び、更に自分の技能を磨く」、「学年を超えてのグループ活動の体験をする」の 4 点である。

（2）地域とのつながりの強化

本校は社会福祉法人立の学校という特色から、創立以来、施設との連携体制があり、そういう意味で地域と密接な関係にあったといえる。しかし、少子高齢化と地域福祉推進という状況の中で、単に施設福祉と学校というつながりだけでなく地域福祉と学校という、さらなる地域とのつながりの強化が本校の役割であると考え、障害者スポーツ大会、１００キロ徒歩の旅、鴻巣市障害者ふれあい祭り等にボランティアとして参加する地域貢献活動を開始した。なお、障害者スポーツ大会については、すでに平成 16 年第 59 回彩の国まごころ国体と同年に開催された第 4 回全国障害者スポーツ大会（彩の国まごころ大会）における障害者フライングディスク競技へのボランティア参加からはじまっている。

（3）利用者へのよりよい生活、人生、喜びを提供できる介護福祉士

平成 21 年度の新カリキュラムでは、介護福祉士は生活を支援するという観点から利用者が望む「よりよい生活」「よりよい人生」を実現することが求められるようになった。そこで将来の介護福祉士として、利用者への喜びを提供する技能について学び、更に自分の技能をみがくことを目的とし、前期の「地域貢献活動」に加えて、一人一芸を目標に後期に「芸能福祉講座」を設定した。施設でボランティアを実践するプロ或いはアマチュアを招き、一芸を披露して頂き、学生たちもまた自分の芸能をみがく機会となることをねらっている。

（4）本講座の一年間の流れ

この講座は、学年を超えてのグループ学習・グループ活動でもあるので、最初に 1 年生、2 年生間のバリアーを取り除くための「交流会」を行う。その後、まずは鴻巣市にある社会福祉施設、障害者施設、その他ボランティア活動をしている人の話を聴く。こうした座学に加え、フィールドに出てボランティア活動に参加する。地域で活動する方々の話を聞く場合は、通常の時間割の中に組み込まれた授業として実施するが、ボランティア活動は、それが実施される日時（土曜日、日曜日、夏休み等）に学外で行う活動となる。（図 1 参照）

本講座の最終回は、学生たち自身が思い思いに考えたパフォーマンスを披露する「パフォーマンス大会」となっている。パフォーマンス大会は、学生も教員もパフォーマンスを披露して、楽しむという場でもある。年末に実施されるイベントとして学生は楽しみにしている。

図２の通り、本講座は、これまで様々な内容を実施してきている。ただし中には、諸事情により、単発のもの、毎年続けられる内容もあれば、難しい内容もある。たとえばプロのマジシャンはネタを公開することを好まず、講師料も高額となる。趣味として高齢者施設でマジックを行っているボランティア団体も、高齢の方のサークルで、お呼びするのが難しい場合などがあり、また国家試験対策講座も多くなり、毎年、少しずつ内容・時間が変わっている。（図２参照）

図１

授　業　概　要			
授業のタイトル（科目名）	授業の種類	授業担当者	
地域貢献活動・芸能福祉講座	演習	全教員	
授業の回数	時間数（単位数）	配当学年・時期	必修・選択
28回	ボランティア活動認定	１・２年・全期	必修

［授業の目的・ねらい］

１．地域に必要とされる学校づくりをの一環として、ボランティア活動をする。
２．障害者スポーツ、サマースクール、100キロウオーキング、献血、施設の納涼祭のボランティアをする。
３．将来の介護福祉士として、利用者への喜びを提供する技能について、学び更に自分の技能をみがく。
４．学年を超えてのグループ活動の体験をする。　（１年・２年混合クラス）

［授業全体の内容の概要］

１．最初に１年生、２年生間のバリアーを取り除くための授業をする。
２．鴻巣市にある社会福祉施設、障害児施設、その他ボランティア活動をしている人の話を聴く。
３．後期は、プロ或いはアマを招き、一芸を披露して頂き、自分たちの芸能をみがき、最後に発表する。

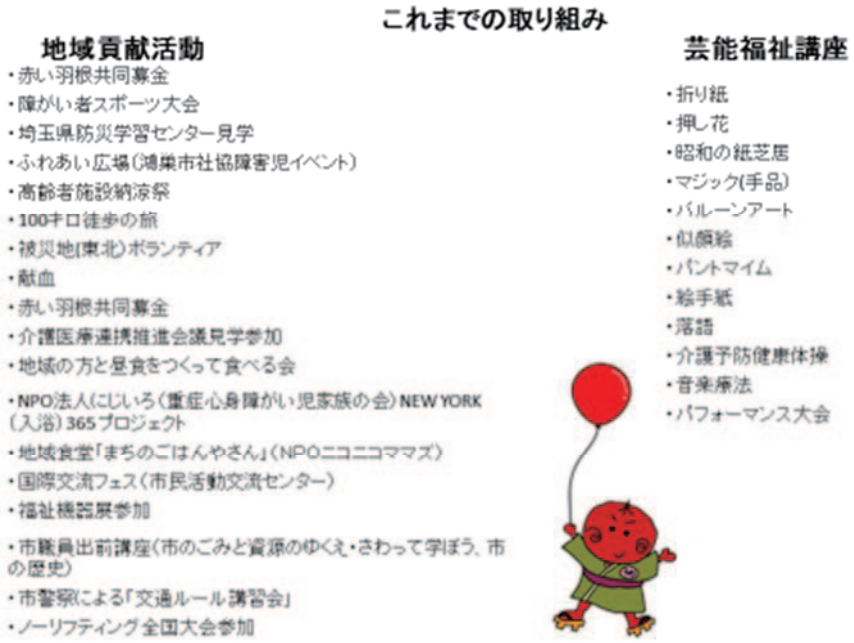
［授業修了時の達成課題（到達目標）］

これは、必修科目ではないが、本校の特色として、地域に役に立つ学校づくりを目指す重要なカリキュラムであるので、学生は必ず参加する授業として位置づける。前期７日間、後期７日間の通常授業に加え、フィールドに出てボランティア活動をする。数回のボランティア活動とパフォーマンス大会の出場を義務づける。（日程は変更される事があるので、掲示板によって確かめること。）

回	テーマ・内容・授業方法
1	授業のオリエンテーション（目的、内容、進め方、評価など）、グループ分け、講義：地域貢献活動について
2	１年生・２年生間の交流を深めるプログラム実施
3	具体的な地域貢献活動を学ぶ（地域活動実施者を招き講義を受ける）1回目
4	具体的な地域貢献活動を学ぶ（地域活動実施者を招き講義を受ける）２回目
5	具体的な地域貢献活動を学ぶ（地域活動実施者を招き講義を受ける）３回目
6	特別授業「理想的介護とは、ユニットケアでの挑戦」　法人施設から施設長を招き講義を受ける。
7	夏休み行われる施設ボランティア活動について一施設長講話
8	芸能福祉講座　1
9	芸能福祉講座　2
１０	芸能福祉講座　3
１１	芸能福祉講座　4
１２	芸能福祉講座　5
１３	パフォーマンス大会準備
１４	パフォーマンス大会
１５	

［使用テキスト・参考文献］	［単位認定の方法及び基準］（試験やﾚﾎﾟｰﾄの評価基準）
その都度配布する。	出席のみ。

図 2



（5）多様化する学生と地域貢献活動・芸能福祉講座の新たな位置づけ

①ゆとり教育と離職者訓練

新カリキュラムがはじまった平成 21 年頃は、学生指導について、基礎学力低下が問題となり各方面で取り上げられるようになっていた。平成 14 年に、「完全学校週五日制」と「総合的な学習の時間」の新設が行われ、いわゆる「ゆとり教育」が本格的にはじまり、また、平成 17 年には、発達障害者支援法が施行され、学習や対人能力に障害を持つ学生の支援も要請されるようになった。介護福祉士カリキュラム改正の頃には、そうした教育を受けた学生や支援の必要な学生が入学して数年が過ぎるようになっていた。「ゆとり教育」のねらいは、「新しい学力観」に基づいて子どもたちの「生きる力」をはぐくむことであったが、教育関係者の一部からは、生徒たちの学力低下が深刻であるという声がでるようになり、育児・教育に関する親世代の価値観の多様化等から、一般に若者全体の社会的技能の低さ、ボキャブラリーの乏しさなどが指摘されて、その原因は、基礎学力をつけるべき時期にそれをしないためだともいわれるようになった。同時に、発達障害の概念も広く知られるようになり対応が求められるようになった。

介護福祉士養成教育も例外ではない状況となっていた。介護福祉士養成施設協会の教員研修会でも、介護福祉士を目指す入学生には、対人関係形成能力の未熟な学生や精神疾患をもつ学生などの対応が課題とされるようになった。さたに離職者訓練等の国の施策により多くの社会人入学生を迎え、学生の年齢構成幅が広がるようになり学生の多様化が新たな課題となっていた。そのため一層多様な指導を求められるようになってきていた。このような状況の中で地域貢献活動・芸能福祉講座、中でもパフォーマンス大会は、楽しく有意義な学生生活を送るためのイベントとしても位置づけられている。

②外国人介護福祉士

本講座は、平成 29 年から国家試験義務化に向けて受験が任意となった時期に、縮小の方向で見直しを検討したが、現在も積極的に実施されている。２０３５年に７９万人もの介護人材が不足すると言われる中で、外国人人材を活用が対策の一つとされて、介護福祉士養成校の状況も変わってきたからである。平成 29 年 9 月から新たな在留資格「介護」が創設され、養成校を卒業して介護福祉士になれば、外国人も日本で長く働いていける環境が整った。平成 31 年度、全国の介護福祉士養成校における留学生の入学者総数は、前年（1142 人）のほぼ倍にあたる 2037 人となり、日本人も含めた全体の約 3 割にのぼった。養成校では、現役高校生、社会人職業訓練生、留学生と、さらなる学生の多様化が進んでいる。本校では、平成 21 年度からすでに少数の留学生を受け入れていたが、現在では 7 割が留学生となっている。

日本の総人口は平成２３年頃より減り始め人口減少社会となり、外国人労働者を受け入れはじめている。日本は外国人を受け入れた共生社会へと進もうとしている。養成校でも、地域で活躍する外国人介護福祉士が日本で共生していけるように、今後ますます地域との関係をつくっていかなければならない。このような状況の中で、「地域貢献活動・芸能福祉講座」は、共生社会の構築と地域の中核的人材の育成という新たな目的を持つ講座として位置づけを持つようになっている。

２．実証講座（パフォーマンス大会）

（１）目的と位置づけ

本講座の最終回は「パフォーマンス大会」である（図１）。地域貢献活動では、ボランティア活動として、赤い羽根共同募金、障害者スポーツ大会ボランティア活動等への参加、芸能福祉講座では、折り紙、音楽療法などの授業を展開し、授業で得た「地域の一員であることの自覚」、「楽しい」という気持ちや「楽しむことの大切さ」を、今度は自分たちの持つタレントを活かしたパフォーマンスを企画し、発表することを本授業の目的の一つとしている。また、学生たちが卒業後、介護の実践の場においてアクティビティ活動に貢献できる介護福祉士として活躍できるようになるためにも、この授業での学びは重要である。さらに、地域の方々にも幅広く観覧・参加いただき、地域貢献活動の一環としても位置付けられる。

パフォーマンス大会は、本事業「地域の中核的人材育成事業」における学習プログラムの「興味を持つ」、「交流する・参加する（一部になる）」、「考える」、「企画する」、「実行する」等ほぼすべての部分にあたると考えられる。他者のパフォーマンスを見ることで、他の領域に興味を持ったり考えたりするようになる。1 年生の多く出し物は、ダンスや歌が中心となるが、2 年生になると介護のあり方をテーマとして劇などの出し物が披露される。このような出し物は他の学生によい影響を及ぼす。出し物は、ホームルームの時間で、学生自身が考え企画し、練習し、実行する。このように本授業は学習プログラムのすべてをカバーする内容としてとらえることができる。また、本授業は、1 年・2 年の合同企画であり、地域の方の観覧・参加も可能であるので地域交流の一環としても位置づけられる。

（２）学習方法

①事前準備

事前準備として、約 1 ヶ月から半月前より、自分たちでパフォーマンスを考え企画し、練習等を行うようにする。1 年生は、芸能福祉講座等を経験し、パフォーマンス大会について 4 月の時点で説明されているが、イメージがわきにくい。2 年生は 2 回目の参加となるので、自分たちが 1 年生の時に、2 年生のパフォーマンスをすでに見ており、早い学生は前年度、つまり 1 年前から準備を始めることもある。練習はホームルーム等の時間等を活用する。

パフォーマンスは、グループ発表でも個人発表でも良いが、全員参加を原則とする。パフォーマンスの内容は、エントリーシート（図３）に記入して、１週間前に担当教員に提出させる。時間に関しては、学生人数にもよるが、本校の場合は、２コマ分を使い１グループ、発表の準備も含め７～８分としている。また、日程は年末最後のイベントとしている。（図３参照）

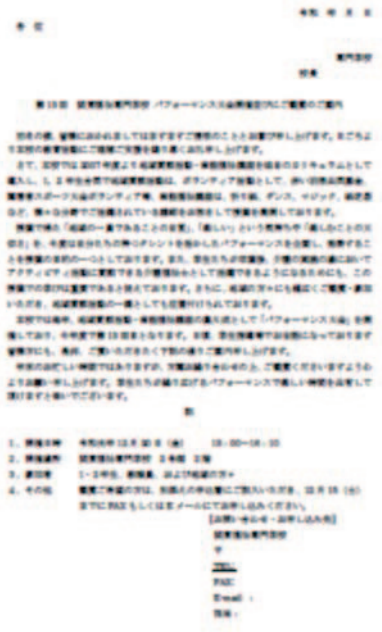
図３

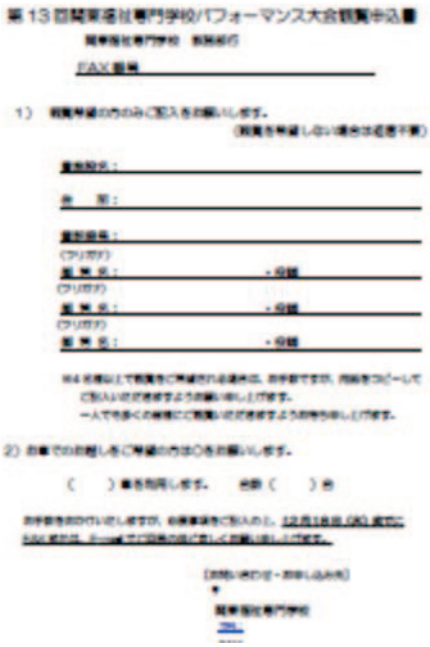
第13回パフォーマンス大会								
グループ名								
グループメンバー								
タイトル								
具体的な流れと演出 ※タイムスケジュールをわかる範囲で書いてください。 ※何か要望があれば書いてください								
自己紹介文 ※司会者が紹介する時の文章を考えてください。 ※何か要望があれば書いてください。								
使用物品 ※学校から借りるものを書いてください。								
提出期限：12月13日（金）までに提出してください。								

地域の方には、開催案内（図４）等を作成して、実習施設等も含め幅広く告知し、参加を募っている。教員パフォーマンスの他、地域の方のパフォーマンスを一部入れても良いだろう。

審査をして賞品等を出す場合は、審査委員の選定・打診を行い賞状・賞品等を準備しておく。また、多くの場合、ダンスや歌になることが多いので、音響機材を準備する必要がある。可能であれば楽器や譜面台等も用意することができると良い。本校では、地域のコミュニティーラジオ局・企画会社に協力してもらっている。（図４参照）

図４





②開催

当日の会場準備、発表プログラム配布を行い、順次パフォーマンスを行う。全パフォーマンスが終了したら、審査発表、コメント等を行う。

（2）地域とのつながりも意識する

本校のパフォーマンス大会の取り組みは、これまで、どちらかというと「学生が楽しむ」という点に傾いていた。学生もどうしても内輪の盛り上がりになりがちであった。地域の方には、観覧して頂いたり、飲み物やお茶菓子を提供して頂いたりすることもあるが、受け身的な参加の仕方になりがちであった。もっと地域の方との交流を意識するためには、審査員に地域の方に加わって頂いたり、地域の方の出し物を積極的に取り入れ参加して頂いたりする必要がある。

また、パフォーマンス大会で培ってきなものを地域の高齢者施設等での披露などにつなげることも今後の課題であると考える。

３．学生が地域に入ることで、どのように育ったか

これまでの「地域貢献活動・芸能福祉講座」の取り組みによって、学生に多かれ少なかれ良い影響を与えてきたが、非常に大きなインパクトを与える結果になることもあれば、学校のプログラムとして受け身的にやらされているだけの場合もある。

（1）100 キロ徒歩の旅

大きな影響を与えた例としては、在学時から卒業後もボランティア団体に参加続けるようになった事例が複数ある。100 キロ徒歩の旅（図２）では、図１のカリキュラム「地域に入った事例具体的な地域貢献活動を学ぶ（地域活動実施者を招き講義を受ける）」の内容の一つである。内容によって、その後、全員参加でボランティア活動を行う場合と、自由参加で学生に任せてボランティアに参加するパターンがある。100 キロ徒歩の旅は自由参加とする内容であるが、その後も引き続き、自主的にボランティアに参加する学生もいる。100 キロ徒歩の旅は、学生ボランティアと社会人ボランティアがあるが、ある学生は夏休みに学生ボランティアとして参加し、卒業後、施設に就職後も社会人ボランティアとして参加するようになった。その後、継続的にボランティアを続けて、企画側として参加するようになり、「地域貢献活動」の授業に社会人スタッフとして 100 キロ徒歩の旅の講義の一部を行っている。

（2）就職

就職に影響を与えたケースもある。本校のように２年間の養成課程では、実習の多くは高齢者施設においてであり、また、障害者施設の実習もあるが、学生の多くの興味は高齢者福祉が圧倒的に多くなっている。その中で、本講座の障害者関係のボランティアに参加し、当初は高齢者福祉就職希望の学生が、障害者福祉に興味を持つようになり、障害者施設に就職して、現在も続けている。

（3）パフォーマンス大会

パフォーマンス大会をきっかけに、本格的に楽器をはじめる学生もいる。マジックや紙芝居に興味を持ち、卒業後も技を磨き、施設でのレクリエーションに役立てている学生もいる。

（4）地域食堂

地域の交流は、学校から地域へという方向だけでない。学校が地域へと積極的に働きかけていると、地域から学校にも多くのアプローチがある。その中の一つに地域食堂がある（図２）。「まちの栄養士さん」として食育活動をする栄養士のあつまりであるＮＰＯ法人より、本校で 17 時から 20 時くらいまで、月

１回程度、地域食堂を開催したいとのオファーがあり、現在、実施・継続中である。主に貧困家庭の子どものために月に数回などの頻度で、無償か廉価で食事を提供する活動として「子ども食堂」が全国に広がりつつあるが、「地域食堂」は対象を子どもだけでなく地域に住む高齢者等、すべての人を対象とする取り組みである。

本校の学生も数名がボランティアとして活動している。活動内容は食事をつくったり、配膳するだけではなく、来ている子供の相手・見守りなどがある。調理室の隣が食堂であり、さらにその隣の教室は待合室あるいはサロンとして使用される。こうした活動にボランティアとして参加する学生にグループインタビューを行ったところ。「自発的にできること」として「つくる手伝いもよいが、子供が喜ぶようなレクリエーションをしてみたい。」「生活支援技術の授業で習ったレクなんかいいと思う。高齢者向けだけど、子供も喜ぶと思う。」（留学生）など自分が自発的にできることがあり、今後、工夫をいかしていきたいという積極的な意見もあった。また、参加して「子供に苦手意識があったが、最後は仲良くなれた。また子供たちと遊んでみたい。」（日本人現役生）という自分への気づき(自己覚知)もあった。

（４）重症心身障害児の入浴ボランティア

本校には、家族に障害者がいる学生も多く入学する。社会人学生として入学したある学生から、卒業後、高齢者施設で障害児の入浴の体制の土台を築いていくというプロジェクトへの協力のオファーがあった（図２）。この方は、重症心身障害児者とその家族の支援を行い、住み慣れた地域で将来に渡り安心安全に暮らせる環境を創ることを目的とするＮＰＯ法人の代表として活躍されている。本校は、社会福祉法人立であるため、近隣の多くの高齢者施設と連携している。このプロジェクトは①入浴サービス、②入浴支援研修、③交流会からなっており、ＮＰＯ法人の関係者（障害児とその家族）と活動に賛同した高齢者施設で働く本法人の介護職員、本校教員が主な参加者であったが、学生の参加もあった。

その学生（社会人入学）によると、「毎回毎回、障害児の入浴介助の方法について、みんなで話し合うことがたくさんあり、細かいところで入浴の手順について意見を述べて、採用されるなど自分が言った意見が役に立ち、自分ができることもあると理解できた」とのことであった。「自分で企画を立てる側になれているか？」との問に対しては、「今のところ学校の企画にのっているが、少しずつ取り組んでいきたい」とのことであった。

「そうだ銭湯に行こう（私たちの銭湯は、特別養護老人ホーム）」という発想から生まれたこの活動は、社会福祉助成金事業の支援を受けたものであるが、支援終了後も NPO 法人と学校とで、さらに地域の事業として行政に働きかけ、支援制度などが創設されるようはたらきかけて取り組んでいくことになっている。

（５）地域の中核的人材育成に向けて

多くの学生にとっては、やはり学校の行事、授業としてやらされているという消極的な場合もあるが、上記のように、学生によっては非常に大きな影響を与えることもある。最後に述べた障害児の入浴プロジェクトで中心的な役割を持っているのは本校の卒業生である。家族に障害児や施設を利用する高齢者がいる学生は、入学前から非常に動機づけが高い。資質や動機づけに個人差はあるかもしれないが、決められたカリキュラムだけでなく、本講座のような取り組みが今後、多くの学生の育成に資するよう創意工夫を重ねていきたい。

（関東福祉専門学校　教務主任　生方　薫）

（3）YMCA 健康福祉専門学校

1、学校としての取り組み

＜今回の「吾妻団地における地域活動」が開始されるまでの経緯＞

専門学校を含む厚木 YMCA として、神奈川県央地域において福祉人材養成(介護福祉士、社会福祉士、社会福祉主事、保育士、幼稚園教諭)、健康づくり支援、保育園や児童発達支援事業、学童保育など子育ち子育て支援を含めて地域福祉の実現に向けて事業の展開を行ってきている。

その中の一環として 4 年前よりこども食堂を開催してきた。当初は保育士を養成するこども総合学科の学生が中心となり、開催したが、3 年前より厚木市の市民協働事業の 1 つとして認定され、補助金を元に、専門学校・健康教育・保育園それぞれの専門性を発揮したプログラムを提供する回と厚木 YMCA 全体の行事としてのお祭りやもちつき大会などのイベントを組みあわせて、年 8 回行ってきている。

こども食堂は厚木市との共催であり、厚木地域でも初めての取り組みをした組織の一つとなったため、毎回のように地域の関係者の見学があった。この時の関係の中で地域包括支援センターから地域会議、協議体へのお誘いがあり、学校職員が継続的に参加する中で、今回対象地域となった吾妻団地の現状を知ることとなった。

少子化の一方、高齢化の進む市街地の大型団地であり、住民に外国人が増えてくる中、自治会が団地の持つ課題に向き合い、様々な取り組みを行っているということ、学校からは徒歩圏内であること、などから吾妻団地と学生のかかわりを通じて地域の活性化の取り組みを検討していくこととなった。

＜対象地域確定後の学校としての動き＞

厚木市高齢福祉課に訪問し担当者へ学校として地域活動に取り組む意向があることを伝え、改めて協力を依頼し、団地の民生委員や自治会役員を紹介してもらった。地域コーディネーターを通じて調整を図り住民との直接的なかかわりを開始した。自治会役員や民生委員からは学生との協働を前向きに考えてもらえた。

地域コーディネーターは自治会の各種プログラム（ミニデイサービスなど）や協議体や地域ケア会議などにも参加して団地を含む厚木北地域の現状を情報収集している。

先行事例として、新宿戸山団地での学生による実地調査などを行ってきた東京 YMCA の教職員から地域活動を学生とともに考える取り組みなどの学びをいただき、どのように学生の目を地域活動へ向かわせるか、今後の活動の方向性を検討していった。そうした中、これまで自治会で準備してきた「ふれあいサロン」の準備ができ開催が決まったところであったこともあり、学生にはこのサロンや自治会イベントへの参加を通じ団地住民との触れ合いの中で、地域課題を把握していき協働できる活動に向けていけるような取り組みを計画した。

「ふれ愛・サロン吾妻」は団地の中で孤立化を防ぎ、仲間づくりを目的とし、対象とする世代を限定しない様々な活動を行う組織として 2018 年に NPO 法人として設立された。メンバーは自治会の役員や住民ボランティアなどで実際の活動は 2019 年 6 月より団地の空き部屋を利用した（県との交渉に 2 年余り費やしたということである）月 2 回のサロンであるが、今後は見守りや子育て相談など様々な活動に広げていきたいということである。

＜役割＞

この活動に関わる学校関係者としては、責任者として学校長が自治体や地域の各種団体とのコンタクトを図り、地域コーディネーターが具体的な活動に際しての地域関係者との連絡調整や地域で行われている活動への参加して、いわゆる「顔つなぎ」の役割を積極的に果たしている。介護科専任教員は対象とする学年を選定し、授業の一環として授業計画を作成し実施していった。グループワークや講演、見学などの授業においては介護科専任教員（2～3 名）、地域コーディネーターが協力して学生のサポートや引率などを行っている。

学校長、地域コーディネーター、専任教員は随時経過について報告、連絡を行い、ＰＣでの共有ドライブに各自の情報を入力しそれぞれの行動がわかるようにしている。

各担当の運営委員会の参加が難しい場合には代わりに参加するなどの協力体制を持った。

２、実証講座実施にあたっての指導計画

＜ここまでの取り組み＞

1　回　目 （10/8）2 限	講義　　地域活動開始にあたって コーディネーター（府川）よりこれまで地域での活動経験を通じて実践に向けたレクチャー	興味を持つ （交流する）
2　回　目 （10/15） 1 限	対象地域を知る 厚木北地域包括（平出さん）職員より 対象地域の吾妻団地の現状と現在の厚木北地域の状況をうかがう。 地域での活動にあたり注意すること、コミュニケーションの取り方の指導。	
3　回　目 （11/12） 2 限	交流　対象地域の人たちとの交流 自治会役員 4 名（サロンの主催者）においでいただき、概要の説明を受けた後、小グループに分かれて直接話を聞く	
4　回　目 （12/3）2 限	グループワーク　対象地域を調べる 前回までの体験を踏まえ、次回予定している団地訪問に向け、グループごとの課題を提示し、質問事項などをまとめる。 ①　団地内外の地図作り②団地の歴史③団地の現状	
5　回　目 （12/17） 1、2 限	対象地域の見学＜実証講座＞ 自治会役員、民生委員　　実際に団地へ訪問し団地やサロンを見学し、民生委員からも話を聞く。前回のグループでより詳しく地域の状況を把握する。	交流する
6　回　目 （12/17） 3 限	見学振り返り 午前の見学内容をグループごとに振り返りシェアし、報告方法の確認	
1/5（日）	自治会餅つきに参加（学生 5 名、引率 2 名）	
1/20 締め切り 1 月中	これまでの活動を各グループごとに模造紙 1 枚にまとめる まとめの中から見えてきた団地の課題を整理して後期の活動を終了とする （２～３月は実習期間のため活動は休止）	考える 企画する

2020 年度前期	2020 年度前期　各種イベントやサロンへの協力を継続して団地住民との直接的な交わりを通じ学生の主体的な活動を実践していく。後期へ向けて新 1 年生へのバトンタッチができるよう地域活動事前学習や報告会を実施する。	実施する 評価する

２０１８年度　　対象とする地域の選定と自治体への協力依頼
２０１９年前期　担当職員による地域との関係作り
２０１９年後期　介護の基本Ⅱ（地域活動）開始

＜活動の経過＞

前期までの職員側と地域との関係つくりを経て、後期はいよいよ学生が直接地域と関わる段階へ入った。

地域コーディネーターや地域包括職員からの地域活動に向けたレクチャーや体験談を聞く（1, 2 回目）ことで、学校内や介護実習とは異なる「地域」での活動のイメージつくりを行ったうえで、今回対象とする団地の自治会役員（サロン主催）を学校へ招いて交流する場を持った。（3 回目）

ここまでの振り返りシートの記載から学生はその都度それなりに興味を持って話を聞いているが、受け身であり、実際に自分たちがそこへ入っていくという実感を持つことができていない様子がうかがえたこと、もともとのクラスの様子として自発的に参加する学生が固定されておりほかの学生はなんとなくついていくという傾向があったこともあり、学生それぞれに課題を持ってもらい活動できる方向にしていくこととした（これはもっと先に情報収集ができた後にグループ化していくつもりであった）。①団地内外の地図作り②団地の歴史③団地の現状　の 3 つのグループを分けそれぞれ興味ある分野に参加することとした。その後実際に団地へ訪問してサロンの会場や団地内の様子を直接確認する準備として、グループ別に下調べと確認すべき点を整理しておくことを行った。（4 回目）

この団地見学とその後の振り返りを実証講座として実施した。

日程は準備過程の中で地域コーディネーターを通じ自治会と調整し決定。半日は必要と考えられるため専任講師の担当する時間枠をいくつか提案した中でちょうど地域活動に充てている時間（火曜日午前）での調整ができた。

当日は 30 名を超す人数となるため広い自治会館を利用する予定であったが、体操教室で使用している都合上、サロンの室内（団地の 1 室 2 ＤＫの広さ）での交流となった。各グループごとに用意してきた質問を確認したり、役員や民生委員より話を伺い、団地内を案内してもらい見学は終了した。学生のほとんどは準備した質問が終わるとそこからさらに疑問や興味を広げることができず、主に役員がサロンや団地の話を主導している状態であった。サロンで作成されている手芸作品を見て写真を撮ったりしているときが一番生き生きしていた。質問を用意してきているにもかかわらず筆記用具（特にノート）を準備していない学生が多くその場で教員がルーズリーフを渡しており、自分たちの目的を十分把握していない状況であった。（5 回目）

その後学校へ戻り、グループごとの振り返りと簡単な全体シェアを行い、発表の方法を確認した。（6 回目）これまでの活動と同様、地域コーディネーターと専任教員 2 名が対応して学生サポートを行った。

見学の際、自治会役員より年明けの餅つきイベントのお誘いを受けており、学生へ投げかけたところ 7 名の参加希望者がおり、引率のスタッフ 2 名とともに参加することとなった。

＜交流　餅つきイベントへのボランティア参加＞

1/5（日）集会所前のスペースで餅つきが行われ、準備された 100 食ほどの餅セットや豚汁などがふるまわれた。実際には学生 5 名、引率 2 名の参加となったが、これまでは自治会役員とのかかわりのみであったところ今回は役員以外の多くの団地住民と直接かかわることとなり、情報では聞いていたもののほとんどの参加者が「高齢世帯」「外国人家族」であったことを目の当たりにした。一方で自治会子供会の役員、民生委員がやってきた住民に親しく声をかけたり、出てきていない住民には部屋まで行って声をかけ参加を勧めている様子から現在の団地内の関係性の一端を知ることもできた。学生も慣れない手つきで餅つきを行い、ベテランのつき手の住民からレクチャーを受けるなど世代間の交流も生まれていた。終了後の打ち上げでは「昨年はつき手が少なく大変だったが、今回は若い人たちが来てくれて助かった」と言う声を聞くことができた。

３、ワークブックにおける位置づけ

ここまでの活動はワークブックにおいて「興味を持つ」→「参加する（交流する）」の部分に当たると考える。「興味を持つ」でわかったことなどを再確認しつつ、地域の方々との交流を図った。今後の「考える」「企画する」に向けて、今回の交流で理解できたことを整理し、さらに交流の機会を持つことが必要である。またここまでの「興味を持つ」の中でも自治会役員に学校で話を聞くという一部「交流する」の部分も含まれている。活動全体で「興味を持つ」→「交流する」→「考える」…という流れの中で各チャレンジ項目の中にも小さなサイクルがあったり、繰り返される部分があったりということがわかる。

４、ここまでの反省点、課題

この地域活動は初めての試みで一応全体の計画はあるものの、先方との関係性を構築しつつ進めているとうこともあり計画を修正しながら進めているのが現状である。

毎回の授業後の振り返りシートや授業での反応から修正をしつつ進めている。導入に関しては事前学習として各地の地域活動についての学習をしていきたいと考えてもいたが都合によりいきなり厚木での事例に入ってしまったことで学生が活動全体像のイメージをまだ持てずにいるという状況である。ただし今後の展開の中で入れ込むことができるのではないか（「考える」「企画する」の段階でも可能）と考えている。学生の取り組みは後期になってからであったが、前期から地域活動に関する事前学習を行っておく方がスムーズであったと反省している。また、現在の対象学年の構成を見ると留学生が半数弱あり、日本の「地域」そのものについての理解が不十分であるということも事前学習の重要性としてあげられる。ただし今のクラスの状況として施設でのアルバイトを経験があることや物事への気づきの視点は留学生の方が優れており、日本人学生の持つ基礎的な知識や常識とうまくミックスさせてクラス全体の主体的な取り組みに向けた力を向上させていけるような仕掛けを作っていきたい。

見学については、予定ではテーマ別の 3 グループに分かれ、それぞれ民生委員、サロン運営、自治会役員などに担当してもらいテーマに沿った交流を持ってもらおうとしていたが、会場がサロンであったことで（午前は集会場が健康体操で使用中であった）うまく分散して話をすることができず、ざわざわとした形になってしまった。グループが 3 つあったので、初めから会場を 3 分割して地域の方々、運営委員、事務局などの見学者の方々にもそこに入ってもらった方がよかったかも知れない。また、当日でよかっ

たので学生の集合前に自治会役員、民生委員と当日の流れを確認する時間を持つことが必要であった。見学後の振り返りについては、学校への移動時間や休憩時間がずれてしまったことで実質の時間があまりとれず、簡単なものになってしまった。今後これまでの報告をまとめる中で整理していきたい。

1 月 5 日の餅つきイベントに参加することで今後の活動の方向性を改めて考えさせられた。一部の学生の参加であったが、授業の場面でなく自然な形で地域の人々と関わる中で、実際に学生が地域の様子を知ることができるものではあり、また逆に自治会役員から餅つきに来た住民に「ＹＭＣＡの学生さんが手伝ってくれている」というように紹介してもらったり、餅つきの合間の「どんな勉強しているの？」などの何気ない会話から住民に学校や学生の存在を認知してもらうことができることも目の当たりにした。このようなイベントやサロンなどへの継続的な参加を通じて少しづつ住民に学校や学生の存在を知ってもらうことで今後住民とともに。ちょうどこのイベントに外国人住民と地域の関係について研究している大学院生も参加していたが、これまで彼女が聞き取りをした住民をはじめ多くの住民ともとても自然に関係性を作っていた。今の学生にこのような目的を持ったコミュニケーション能力を求めるのは非常に難しく（結局は言われたことを手伝うだけになる可能性が高い）、当初の授業計画で考えていたような半期の授業の中ですぐに地域の課題を考えて企画を立てるというのは教員側の自己満足で終わってしまうのではないか、学生にとっても、地域にとっても本来の意味での活動にはならないのではないかと感じた。次年度に向けて継続性のある計画を改めて検討していきたい。

① 学生の変化（加えて変化を期待する点）

まだ学生が「地域に入る」と言う段階にはないのでこれまでの授業の中からでは、学生の反応からは少なくとも「興味をもった」（またはもたされた）ようである。学生によってその度合いは様々であるが、団地の近所住む学生からは「近くにあっても団地の状況を知らなかったということがわかった」や、留学生は自国の生活と比較してみるなど自分自身とのかかわりの中から具体的な「引っ掛かり」を感じているようである。少数であるが、実際にイベントに参加した学生からは引き続き関わっていきたい、と言う声が聴かれている。初めての参加で住民や自治会役員に受け入れられたという体験が彼らを積極的にしていると思われる。まずはこのようなプラスの体験を積み重ね、そこからなぜ？という疑問を持ったり、わからないことを調べてみるという自ら学ぶ姿勢を生み出す授業を展開していきたい。

その一つの方向性として、その学年だけで学びを終わらせるのではなく、学生が次の学年への引継ぎを行い、この学生の活動そのものも継続性のあるものとしていくことが考えられる。受け身の学習だけでなく、学んだことを整理し自分たちの言葉で伝えられるような報告会の場を持つこと、オフィシャルな場だけでなく次の学年と一緒にイベントに参加しつつ雰囲気を知っていくことなどをしていきたい。実際に初回実習の前に 2 年生から 1 年生へ個別に実習体験について伝える場を持ったところ、教員からの指導以上に 1 年生には実感を持って受け入れられ、2 年生からは「改めて実習の準備の必要性を感じた」という声が聴かれたということもあった。地域活動を行うことを通じて学生それぞれの学ぶ姿勢の変化につながることを期待したい。

YMCA 健康福祉専門学校　学校長　奥薗　一紀
専任教員　石島　美紀
地域コーディネーター　府川　充博

付録：アンケート（案）

学生の皆さんへ　　アンケート（案）調査へのご協力のお願い

「地域課題学習プログラム」を円滑にご活用いただくためのアンケート調査です。
ご協力をお願いいたします。以下の質問にお答えください。

1）あなたの年齢に相当するものに〇をつけてください。

a. 20 歳以下　b. 21 歳～25 歳　c. 26 歳～30 歳　d. 31 歳～35 歳
e. 36 歳～40 歳　f. 41 歳～45 歳　g. 46 歳～50 歳　h. 51 歳以上

2）あなたの性別は？

a. 女性　b.どちらでもない　c.男性

3）あなたは、今までに介護（介助含む）を行った経験をお持ちですか？

a. はい　b. いいえ

4）3）で「はい」と答えた方に質問です。どのような経験をお持ちですか？

a. 家族介護　b. 施設（病院）介護　c. 訪問介護　d. ボランティア
e. その他（　　）

5）あなたは、初めてお会いした人と楽しくお喋りできますか？

a. 挨拶して 5 分以上できる　b. 挨拶して 3 分位はできる　c. 挨拶して 1 分位はできる
d. 挨拶はできる　e. できない

6）あなたは、自分の得意なことや興味のあることを、社会に役立てることができると思いますか？

a. できると思う　b. できたらいいと思うが役立て方がわからない　c. できないと思う
d. 得意なことや興味のあることがない

7）あなたは、目標に向かってチャレンジすることが好きですか？

a. 好き　b. どちらかといえば好き　c. どちらかといえば嫌い　d. 嫌い
e. チャレンジしてみたいが目標がない

8）あなたは、どんな介護福祉士になりたいですか？（自由回答です）

以上となります。ご協力、ありがとうございました。

付録：実践評価表（仮案）

教職員の皆様へ　　実践評価（仮案）作成のお願い

「地域課題学習プログラム」の効果を測定いたします。ご協力をお願いいたします。

実践評価（仮案）　　作成日：＿＿＿年＿＿月＿＿日

作成者名：＿＿＿＿＿＿＿＿

学生の姓名：＿＿＿＿＿＿＿　クラス名＿＿＿＿＿＿＿　学籍番号＿＿＿＿

（1）学生に対するアンケートの結果

※アンケートの質問　5）・6）・7）のプログラム活用前後の回答内容の変化を記録いたします。

5）について

活用前：

活用後：

所見：

6）について

活用前：

活用後：

所見：

7）について

活用前：

活用後：

所見：

（2）学生の自己評価の指標に基づくプログラムの有効性

地域課題学習プログラム受講者総数　・・・　＿＿①＿＿名

S 評価取得者数　・・・　＿＿②＿＿名

A 評価取得者数　・・・　＿＿③＿＿名

（②　＋　③）÷ ①　＝　＿④＿　×　１００＝　＿⑤＿％

目標達成度　・・・　＿⑤＿％

プログラムの有効性　90％以上　AAA

89~75％　AA

74~60%.　A

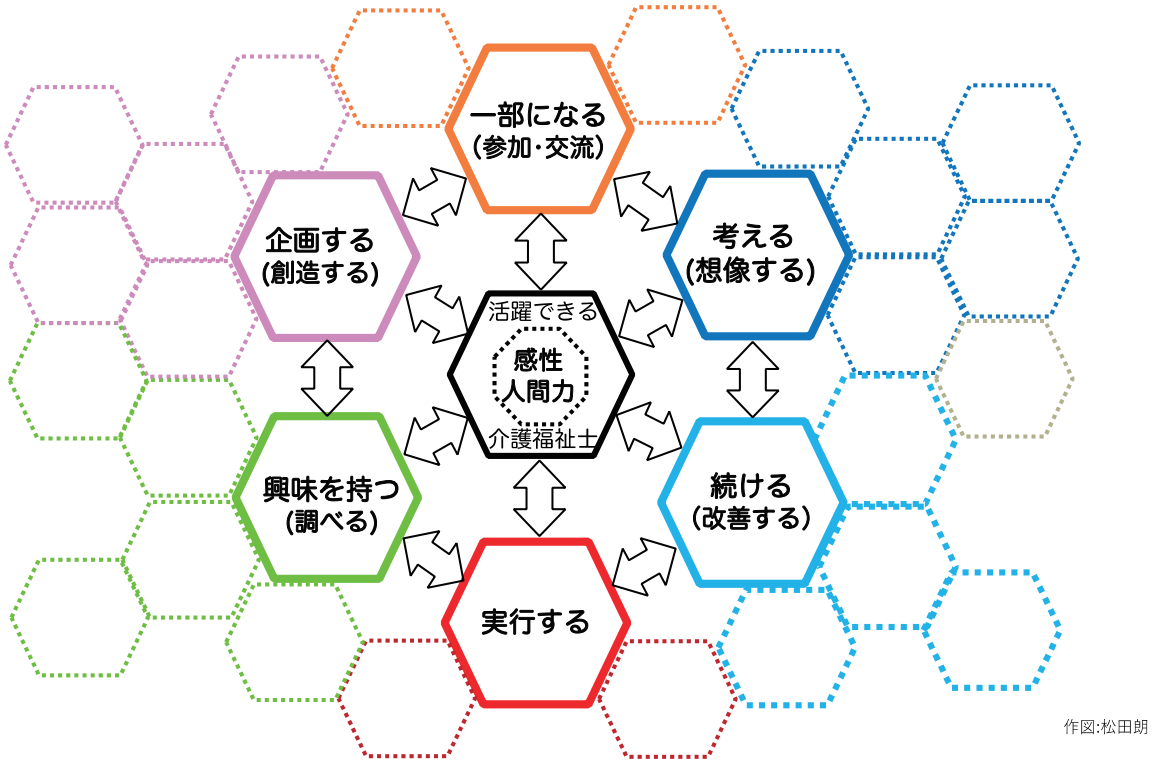
59%以下　B

ご協力、ありがとうございました。

Player's map をつくろう！　　ワークシート①

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　クラス＿＿＿＿　番号＿＿＿　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿

が足りなくなったら自由に書き足していいよ！



体験済み“アクション”一覧

年　月　日	年　月　日
年　月　日	年　月　日
年　月　日	年　月　日
年　月　日	年　月　日
年　月　日	年　月　日
年　月　日	年　月　日
年　月　日	年　月　日
年　月　日	年　月　日
年　月　日	年　月　日

チャレンジを決めよう！

ワークシート②

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　クラス＿＿＿＿　番号＿＿＿　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿

自分のことを客観的に観たい人　「ジョハリの窓」　＝ワークシート⑧へ

自分の特徴を整理しよう！（「ジョハリの窓」を参考に）

好きなこと・得意なことは？	嫌いなこと・不得意なことは？

今一番気になること・興味が持てるものは？

一番気になったチャレンジ項目の下に◯印をつけよう！

チャレンジ	興味を持つ（調べる・見つける）	一部になる（交流する参加する）	考える（想像する）	企画する（創造する）	実行する	続ける（改善する）

目標を設定しよう！（課題を見つけよう！）

ワークシート③

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　クラス＿＿＿＿　番号＿＿＿　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿

もっと伸ばしたいことや補いたいことを探そう！

理想と現実の差異（ギャップ）をはっきりと整理しよう

伸ばしたいこと・磨きをかけたいこと

現実は？

理想は？

補いたいこと・改善したいこと

現実は？

理想は？

課題を見つけよう！

実現させたい理想像はどんなことができる人？

チャレンジを選ぼう！

目標を設定しよう！

課題を達成するための具体的な行動は？

“アクション”（学習教材）を選ぼう！

ワークシート ④

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　クラス＿＿＿＿　番号＿＿＿　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿

設定した目標は？

課題を達成するための具体的な行動は？

課題を達成するための具体的な行動を実践できるアクション（学習教材）は？

①カテゴリーを選ぶ（複数可）　P.7 へ移動→

②“アクション”を選ぶ（複数可）　P.7〜P.9 へ移動→

“アクション”（学習教材）を実践する

①事前にそろえるものは？

②注意することは？

評価をしよう！　“はじめの一歩”編

ワークシート ⑤

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　クラス＿＿＿＿　番号＿＿＿　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿

自己評価の指標（評価ルーブリック）

課題＼評価	特にできる	できる	最低限できる	努力が必要
A:感じたり考えたりしたこととその理由を伝えることができる	感じたり考えたりしてわかった(気づいた)ことを図で伝えることができる	感じたり考えたりしてわかった(気づいた)ことを言葉と文字で伝えることができる	感じたり考えたりしたことと理由を言葉と文字で伝えることができる	感じたり考えたりしたことと理由を言葉と文字で伝えることができない
B:色々な視点で観察ができて意味づけができる	複数の視点と意味づけを統合して全体として一つ意味を創る(見つける)ことができる	複数の視点に対してそれぞれに意味づけができる	視点を動かすことができる	視点を動かすことが出来ない
C:とりあえずやってみる（初めて体験してみる）	ポジティブな側面に焦点を当てた味づけができる	物事のポジティブな側面とネガティブな側面を指摘できる	どんなことが不安なのかを伝えることができる	どんなことが不安なのかを伝えられない
得点	10 点	7 点	5 点	3 点

“はじめの一歩”が目指すのは「最低限できる」です！

C 評価がもらえれば Good！！

得点の合計は？　下の計算式に数字を入れてみよう！

課題 A：＿＿＿＿点　＋　課題 B＿＿＿＿点　＋　課題 C＿＿＿＿点　＝　合計＿＿＿＿＿点

成績は？　合計得点が該当する評価に〇印をつけよう！

S 評価・・・30～27 点　　A 評価・・・26～21 点　　B 評価・・・20～15 点

C 評価・・・14～10 点　　D 評価・・・9 点

もっと伸ばしたいことやもっと磨きをかけたいことは？

もう少し補いたいことや改善したいことは？

評価をしよう！

ワークシート ⑥

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　クラス＿＿＿＿　番号＿＿＿　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿

達成課題に対する自己評価の指標（評価ルーブリック）

評価 / 達成課題	特にできる	できる	最低限できる	努力が必要
A:感じたり考えたりしたこととその理由を伝えることができる	感じたり考えたりしてわかった(気づいた)ことを図で伝えることができる	感じたり考えたりしてわかった(気づいた)ことを言葉と文字で伝えることができる	感じたり考えたりしたことと理由を言葉と文字で伝えることができる	感じたり考えたりしたことと理由を言葉と文字で伝えることができない
B:自分を活かし(知り)相手を活かせる(知る)ことができる	２人以上から出された意見を踏まえて、相互の合意を図ることができる	相手のこと(価値観・言動の特徴等)を肯定的に表現でき自分との違いを指摘できる	自分のこと(価値観・言動の特徴等)を肯定的に表現できる	自分のこと(価値観・言動の特徴等)を客観的に表現できない
C:違う視点で観察ができ、意味づけができる	複数の視点と意味づけを統合して全体として一つ意味を創る(見つける)ことができる	複数の視点に対してそれぞれに意味づけができる	視点を動かすことができる	視点を動かすことが出来ない
D:バラバラになっているものを繋ぎ合わせ意味あるものを創ることができる	ひと繋がりのものをバラバラに分解して別の意味あるものに創り替えることができる	バラバラになっているものをつなぎ合わせて意味あるものを創ることができる	ひと繋がりのものをバラバラに分解できる	ひと繋がりのものをバラバラに分解できない
E:「とりあえずやってみる」ことができる	ポジティブな側面に焦点を当てた味づけができる	物事のポジティブな側面とネガティブな側面を指摘できる	どんなことが不安なのかを伝えることができる	どんなことが不安なのかを伝えられない
F:問題点を見つけ出し課題を創ることができる	現実と理想との差異を無くすためにできることを文字で表せる	現実と〇〇であって欲しいという理想との差異を文字で表せる	今起きている現実を文字で表せる	今起きている現実を文字で表せない
得　点	10 点	7 点	5 点	3 点

課題 A~F までの得点の合計は？　＝＿＿＿＿＿＿点

成績　合計得点が該当する評価に〇印をつけよう！

S 評価・・・30〜27 点　　A 評価・・・26〜21 点　　B 評価・・・20〜15 点

C 評価・・・14〜10 点　　D 評価・・・ 9 点

もっと伸ばしたいことやもっと磨きをかけたいことは？

もう少し補いたいことや改善したいことは？

チャレンジの記録

ワークシート⑦

Play date　　年　　月　　日　～　　月　　日

Player's name

アクションのカテゴリー：

アクション名：

日　時	活 動 内 容	考えたこと・感じたこと・気づいたこと

ジョハリの窓　自分自身を客観的に観てみよう！　　ワークシート⑧

Play date　　年　　月　　日　　Player's name

自分が知っている「自分の特徴」、他人が知っている「自分の特徴」を４つの窓に分類し、主観的に見た“わたし”と客観的に見た“わたし”を知ることで、効果的な自己分析ができます。自分がどんなことにチャレンジをしていくかを決める助けにしましょう。

	自分が気づいている	自分が気づいていない
他人が気づいている	「開放の窓」 自分も他人も気づいている	「盲点の窓」 自分は気付いていない　　他人は気づいている
他人が気づいていない	「秘密の窓」 自分は気づいている　　他人は気付いていない	「未知の窓」 自分も他人も気付いていない

＜やり方＞

３人～５人程度で一つのグループをつくります。

①自分の特徴（得意・向いている・性格など）だと思う事柄を５個以上別紙に書き出します。

②グループのメンバー一人ひとりの特徴だと思う事柄を１枚の紙に１人ずつ(５個以上)書き出します。

③各メンバーにそのメンバーの特徴を書いた紙を渡します。

④(A)開放の窓には、自分と相手の両方が書いた特徴を記入してください。

(B)盲点の窓には、自分は書かず相手が書いた特徴を記入してください。

(C)秘密の窓には、自分が書いて相手は書いていない特徴を記入してください。

(D)未知の窓には、自分も相手も書いていない特徴を記入してください。

(A)開放の窓（自分も相手も気づいている）	(B)盲点の窓（相手だけが気づいている）
(C)秘密の窓（自分だけが気づいている）	(D)自分も相手も気づけていない

⑤書き出された結果から自己分析をしてみよう

③ 実証講座報告

ア. 北海道福祉教育専門学校

1. 目的

地域課題解決実践として、「学生用ワークブック」「教員用ワークブック」を介護福祉士養成校における授業内で使用する教材として適しているか否か、学生が主体的に地域に参加し、溶け込み、地域課題学習を通じての学習目標（自らが感じたこと、考えたことを伝えることができる、行動することができるなど）をふまえ、目指すべき人間像に近づくことができるのか否か、を実証する。

2. 概要

(1) 日時

2019年12月9日（月）13時30分から15時まで

(2) 場所

北海道福祉教育専門学校3階ホール

(3) 実施カリキュラム名

地域交流サロン「シンチャオサロン母恋」

(4) 学生数及び参加者数

学生数：36名、参加者数：30名

(5) その他

川廷宗之（委員長）、清崎昭紀（委員）、島谷綾郁（事務局）

【地域サロン「シンチャオサロン母恋」】

3.「学生用ワークブック」に該当するチャレンジーモデル項目

(1) チャレンジ項目

一部になる（交流する・参加する）、考える（想像する）、企画する（想像する）、実行する、続ける（改善する）

(2) モデル項目

地域サロンの実情

4. 実施内容

時間	スケジュール内容
13:30	開会 ・学校長挨拶 ・学生代表挨拶
13:45	介護学科1年　ダンス 終了後、参加者との交流（談笑時間）
14:10	介護学科2年　認知症劇 終了後、参加者との交流（談笑時間）

【教員・学生　振り返り①】

5. 振り返り

実証講座終了後、学生・教員にて振り返り（委員も参加）を行った。

【学生意見】

・出演者として楽しめた。参加者の方にも楽しんでいただけたと思う。

・1年生の発表、見ていて楽しかった。一緒に踊りたいと思った。2年生の発表、メモを取っている人もいた。見入っていた。

・参加者の方々と交流の時間が少なかったので、もう少しコミュニケーションを取りに行く必要がある。

・1、2年生、それぞれの役割を確認した上でサロンを進め、行動に移す必要がある。

【教員意見】

・「①楽しんで帰る」「②学んで帰る」これもよいが、「一緒に〇〇する」「（例）一緒に作る」など参加者を巻き込む活動についても、もう少し視野に入れながら作っていく必要があるのではないだろうか。

【委員意見】

・参加者の名前と顔を覚える。1人の学生が2名の参加者の名前を覚える。このようなことをきっかけにしながら、個人的な関係を築けると地域の方が言いにくい（本当に言いたいこと（地域での生活や困っていること））ことが聞ける。

その他、参加者の方に学生側から招待状などの手紙を送ってみてはどうか。

・「地域サロンの目的」から考え、交流の場を作っていくと、違った見方や考え方ができるのはないだろうか。

【教員・学生 振り返り②】

6. 今後の課題（「学生用ワークブック」「教員用ガイドブック」を踏まえた上）

「学生用ワークブック」を用いながら進めていくことにより、学生が修得しなければならないところや現在持っている能力などについて教員の立場として把握できる一助となる。そのため、教員の立場として、学生自身にどのような力を身に着けさせる必要があるのかについて踏まえた指導を行うことができる。

「教員用ガイドブック」については、学生に対する教員の支援のあり方が記載されているため、指導の参考となる。しかし、このガイドブックを渡されただけでは、この通りにやらなければならないのかと思うため、ガイドブックの使用の仕方などといったガイダンス的なことがあった方がよいのではないだろうか。

今回の実証講座は、教員側で地域サロンの準備の行動予定を作成したこともあり、結果として、学生主体の場が少なくなってしまった。そのため、地域サロンの当日は、学生の役割の認識に差が生じてしまった。

今後は、教員として具体的なフィードバックなどを丁寧に行いながら進めていきたい。

（北海道福祉教育専門学校　自立介護支援福祉学科　専任教員　阿嘉　優）

イ．関東福祉専門学校

１．目的

地域課題解決実践として、「学生用ワークブック」「教員用ワークブック」を介護福祉士養成校における授業内で使用する教材として適しているか否か、学生が主体的に地域に参加し、溶け込み、地域課題学習を通じての学習目標（自らが感じたこと、考えたことを伝えることができる、行動することができるなど）をふまえ、目指すべき人間像に近づくことができるのか否か、を実証する。

２．概要

（１）日時

２０１９年１２月２０日（金）１３時００分から１６時１０分まで

（２）場所

関東福祉専門学校２号館２階

（３）実施カリキュラム名

地域貢献活動・芸能福祉講座（独自カリキュラム）

（４）学生数及び参加者数

学生数：７３名、参加者数：３４名

（５）その他

・委員：頓所澄江、野村義、東康祐

・学習プログラムコーディネーター：松田朗

・事務局：島谷綾郁、石投知佳

【パフォーマンス大会①】

３．「学生用ワークブック」に該当するチャレンジーモデル項目

（１）チャレンジ項目

興味を持つ（調べる・見つける）、一部になる（交流する・参加する）、考える（想像する）、企画する（創造する）、実行する

（２）モデル項目

異文化交流

４．実施内容

時間	スケジュール内容
１３：００	開会 ・学校長挨拶 ・審査員紹介
１３：１０	パフォーマンス大会　第１部
１４：４０	パフォーマンス大会　第２部
１５：５０	・審査発表 ・評価講評
１６：１０	閉会

【パフォーマンス大会②】

５．振り返り

実証講座終了後、教員・委員にて振り返りを行った。なお、学生との振り返りは、ホームルーム内にて行った。

【学生意見】

・2 年生の介護をテーマにした劇が、レベルが高くて感動した。来年はもっと頑張りたい（1 年生）

・今回は昨年の 2 年生の出し物を超えようと頑張りました。最優秀賞をもらえてよかったです。（2 年生）

【教員意見】

・学生が自分たちでパフォーマンスを考え、企画し、練習等を自主的に行いながら当日を向かえることができた。次回は、地域に対する宣伝力をつけてもらうことも考えながら行っていきたい。

【委員意見】

・地域住民に対する発信力をつけることも大切ではないだろうか

・学生の実習先や特別授業で来ていただいている先生方以外にも、普段、地域でお世話になっている人に対して、学生の方からお声がけを行っていただけたらよいではないだろうか。

６．今後の課題（「学生用ワークブック」「教員用ガイドブック」を踏まえて）

「学生用ワークブック」内のチャレンジ項目をもとに授業を実施することで、学生が何を高めなければならないのかについて、学生・教員が各々に把握することができる。

多くの学生は、授業と聞くと一方通行であり、「やらされている。」「学ばされている。」というように楽しみながら学んでいるわけではない。しかし、今回、実証講座で行ったことを通じて、「楽しむ」ことを学び、他人と「協力する」ことを学ぶことができたのではないかと思う。

学生自身の資質や動機付けに個人差はあるが、「学生用ワークブック」を使用することで多くの学生の育成の一助となるように創意工夫を行っていきたい。

【パフォーマンス大会③】

また、今後は、「教員用ガイドブック」を使用しながら、知識や技術のみならず、人とコミュニケーションを取るうえで大切となることについても指導をしていきたい。

（関東福祉専門学校　教務主任　生方　薫）

ウ．ＹＭＣＡ健康福祉専門学校

１．目的

地域課題解決実践として、「学生用ワークブック」「教員用ワークブック」を介護福祉士養成校における授業内で使用する教材として適しているか否か、学生が主体的に地域に参加し、溶け込み、地域課題学習を通じての学習目標（自らが感じたこと、考えたことを伝えることができる、行動することができるなど）をふまえ、目指すべき人間像に近づくことができるのか否か、を実証する。

２．概要

（１）日時

２０１９年１２月１７日（火）１０時００分から１２時００分まで

（２）場所

吾妻町団地３号棟３０１号室

（３）実施カリキュラム名

介護の基本Ⅱ地域活動

（４）学生数及び参加者数（自治会側）

学生数：２１名、参加者数：５名

（５）その他

・委員：齊藤貞夫、鈴木恭智、白井幸久、野村義

・事務局：島谷綾郁、石投知佳

【吾妻団地】

３．「学生用ワークブック」に該当するチャレンジーモデル項目

（１）チャレンジ項目

興味を持つ（調べる・見つける）、一部になる（交流する・参加する）

（２）モデル項目

地域交流

４．実施内容

時間	スケジュール内容
１０：００	ふれ愛・サロン見学
１０：４５	２グループに分かれて活動 ①団地内外の地図作り（２グループ共通事項） ②団地の歴史を学ぶ ③団地の現状を学ぶ
１１：４５	集合し、それぞれのグループ情報の共有
１２：００	現地解散

※１３：３０より本校教室にてふりかえり

【吾妻団地内の見学】

【ふれ愛・サロンの様子】

５．振り返り

実証講座終了後、教員・委員にて振り返りを行った。その後、学生・教員にて振り返りを行った。

【学生意見】

・地域の人と話をする機会がなかったので、話をすることができてよかった。

・皆で話をしながら民生委員の人に対する質問を準備してきたが、すべて話をされてしまったので、何も聞けなかった。

・地域の人と何の話をしたらよいのかわからなかったが、地域の人から話かけてきてくれたので、嬉しかった。

【教員意見】

・気づきの視点は、留学生の方が優れていたため、日本人学生の持つ基礎的な知識や常識と合わせながら、クラス全体の主体的なとりくみになるような「しかけ」を作っていく必要がある。

・「ふれ愛・サロン」運営や自治会役員とは事前の電話連絡のみで当日に打ち合わせする形となったため、事前訪問などを行い先方にも当日の流れや学生グループの課題について共有ができるとよかった。

【委員意見】

・説明者（自治体役員など）の説明について、共感するかたちで聞けたかどうかの学生の振り返りが大切になる。

・地域活動が初めてということもあり、学生も緊張をしていたと思うが、挨拶や服装などは基本となる。地域の方と話をするうえで、とても重要な要素の１つである。

６．今後の課題

今回の実証講座では、「興味を持つ（調べる・見つける）」→「一部になる（交流する・参加する）」の部分が含まれる。これらの項目の中においても、小さなサイクル（例：今回の地域活動内における「興味を持つ」であれば、「地域の実情を教えてもらう→様子を聞かせてもらう→歴史を調べる→教えてもらう→・・・」など）があり、繰り返されるということがわかる。

このことを踏まえながら、学生自身が持っている能力を生かし、学生の「気づき」を大切にしながらポジティブな面をフィードバックし、学生の活動へとつなげていきたい。今後、「教員用ガイドブック」内に記載されていることを参考にしながらも、ガイドブックに縛られることのない指導を実施していきたい。

【振り返り①】

（ＹＭＣＡ健康福祉専門学校　介護福祉学科専任教員　石島　美紀）

(4) 地域活性化推進委員会における協議

① 今年度の取り組み内容と実施報告

ア. 北海道福祉教育専門学校

1) 今年度の取り組み内容

① 学校が地域に溶け込むための取り組み

この取り組みを地域の方に理解していただくために、前年度地域委員会を開催したことを踏まえ、さらに関係団体や、地域の住民の皆さんへ、地域サロン「シンチャオサロン母恋」の広報活動を、きめ細かく実施。

○ 自治会へ、毎月「シンチャオサロン母恋」の回覧やチラシの配布、町内会へのポスター掲示等

○ シンチャオサロン母恋通信の作成し配布。

② 地域と共に育てる活動

今年度から、初めて受け入れたベトナムからの留学生は、学校の近くに住み地域の皆さんに見守られながら生活している。自治会の行事などにも参加し、日本の文化や習慣を地域の皆さんから学び、学校、地域が一体となって学びやすい環境づくりができるよう取り組んでいる。

③ 学生が地域に溶け込むための取り組み

地域サロン「シンチャオサロン母恋」の運営は、学校や教員が主体となっているが、徐々に学生が地域に溶け込む意義を理解し、主体的に行動できるよう指導し、活発な意見交換ができる機会の設定に取り組んでいる。

2) 実施報告(現在までの開催状況)

【シンチャオサロン母恋】

回数	開催日	開催場所	利用者数	内 容	備 考
1	令和元年 7 月 10 日 13 時 30 分～15 時	本校 2 階 実習室	39 人	学校と学科の紹介 ベトナムの紹介	
2	令和元年 9 月 2 日 13 時～14 時 30 分	本校 3 階 ホール	20 人	ファッションショー 地域住民との交流会	

3	令和元年10月9日 13時30分～15時	本校3階 ホール	13人	ビンゴ大会 ダンス	
4	令和元年 11 月 17 日 13時30分～15時	本校3階 ホール	82人	介護劇	学校祭と同時開催
5	令和元年12月9日 13時30分～15時	本校3階 ホール	30人	クリスマス会	
6	令和2年1月27日 13時30分～15時	本校2階 実習室	21人	講演「認知症は水で治る」 交流会	
7	令和2年2月25日 13時30分～15時	本校3階 ホール	予定 40人	運動の実践 地域へ広めよう健康増進	地域福祉委員の研修会を兼ねて実施

【その他の地域交流】

回数	開催日	開催場所	利用者数	内　容	備　考
1	令和元年9月25日 11:30～12:30	母恋南町会館	50人	ふれあい昼食会で「シンチャオサロン母恋」の紹介	
2	令和元年10月4日 13:00～16:30	白老町	120人	ボランティアばんざい in 胆振で、「シンチャオサロン母恋」の事例発表	
3	令和元年 10 月 26 日 10:00～15:00	アークス中央3階	10人	ボランティアの集いにて「シンチャオサロン母恋」を紹介	
4	令和元年11月6日 10:00～11:30	シニアマンションすずらん	10人	室蘭市介護予防事業「えみなメイト」で交流会	
5	令和元年 12 月 20 日	家庭訪問	20軒	感謝を込めて、クリスマスカードを配布	
6	令和2年2月5日 10:00～11:30	シニアマンションすずらん	12人	室蘭市介護予防事業「えみなメイト」で交流会	
7	令和2年3月4日 10:00～11:30	同上	12人(予定)	同上	

（学校法人北斗文化学園　北海道福祉教育専門学校　岸田　京子）

イ．関東福祉専門学校

①今年度の取り組み内容と実施報告

新カリキュラムに移行した平成21年度より本校独自のカリキュラム（基本的には全学年（1・2年生）を対象に、前期「地域貢献活動」、後期「芸能福祉講座」）を導入した。地域における専門学校の役割は何かを常に考え、地域に根ざした学校づくりを目指し、小さなことからコツコツと始めた活動であり、学生全員の参加を基本としている。

開始当初は、学生たちが学校から地域に出て活動することが殆どであり一方通行の感が否めなかった。実施を重ねていく中で、新たな思いを抱くようになった。地域の方々にもっと学校の事を知っていただきたい、学校をより身近に感じていただきたい、そのような思いから、「学校から地域へ、地域から学校へ」地域の皆さんと双方向の良好な関係性を構築するため、どのような方法があるのか考えるようになった。試行錯誤の連続ではあったが、「Let's do it！」とにかくやってみようという思いを企画・実施に繋げた。

地域貢献活動におけるイノベーションの背景には、留学生の増加が大きい。現在、本校は全学生数の約7割が留学生であることから、彼らが生活の基盤となる地域で受け入れられ、地域の中で一人の住民として、安心かつ健全な生活が送れるよう環境を整えることが、留学生を受け入れる学校側の責務であると考える。

本校では、これまでに実施してきた講座に加え、より地域に密着した講座を複数追加し実施した。追加した講座の中には、地域の皆さんから学校に対し、是非これを学校で開催して欲しいとの声を頂いて実施に繋がったものもある。これは、これまでの本校の地道な取り組みにより地域の皆さんに本校の存在が認知されてきたものと評価できるのではないかと捉えている。地域の皆さんの期待に副うべく、また、より本校が地域の皆さんのために貢献できるよう、地域の皆さんと共に取り組んでいける講座でありたいと思う。

今年度、本校が取り組み実践した「地域貢献活動」及び「芸能福祉講座」は以下となる。地域貢献活動は全員参加型・個人参加型と 2 パターンに分けて実施した。全員参加型の活動は、年度の第1回目となる4月12日（金）1・2年生交流会にて、本校の学生として、学年や国籍の壁を超え、これから展開する様々な学校生活を皆で協力し、支え合い、有意義に過ごすための動機づけ・意識づけの機会とした。

以降、年間約 20 回に渡り多角的な視点で地域貢献活動を展開した。学生たちが「地域」との関わりを意識しながら、地域にはどのような人が・どのような生活を送っているのか、また、どのような生活障害を抱え、それをどのように解決に繋げているのか、地域の皆さんと「共に生きる」ことの意義・必要性を理解し、自分たちがどのような活動を通しそれを実現していくのかを主体的に考え、実施に繋げることを目標とした。

本校では、その目標を達成するための方法の一環として、後期に【芸能福祉講座】を設定している。具体的な内容を盛り込み、学生たちが一人の介護福祉士として「生きる喜び」を利用者に提供し、また引き出し、その喜びを「共有」する（共に喜ぶ）ことで、介護福祉士という仕事に生きがいを感じ、天職に繋げるための基礎づくりとして位置づけた。

【地域貢献活動（全員参加型）】

日時	概要
4月12日（金） 3限・4限	1・2年生交流会
4月19日（金）	鴻巣市職員出前講座受講「鴻巣市のごみと資源のゆくえ」
4月26日（金）	鴻巣市職員出前講座受講「さわって学ぼう　鴻巣の歴史」
5月 1日（水）	新元号「令和」を祝う会：1年A組及び2年2201～2227
5月 2日（木）	新元号「令和」を祝う会：1年B組及び2年2229～2241、2122～213
5月10日（金）	障害者スポーツ演習
5月19日（日）	障害者スポーツ大会ボランティア（熊谷ドーム）
5月24日（金）	埼玉県障害者交流センター見学（さいたま新都心）
6月 7日（金）	地域の人と昼食をつくって食べよう（1年A組）
6月14日（金）	地域の人と昼食をつくって食べよう（1年B組）
6月21日（金）	血液・献血研修（埼玉県赤十字血液センター）
6月28日（金）	地域の人と昼食をつくって食べよう（2年生）
7月24日（水）	献血（埼玉県赤十字血液センター）
9月　6日（金）	地域の人と昼食をつくって食べよう（スリランカ・ネパール）
9月13日（金）	地域の人と昼食をつくって食べよう（ベトナム・中国・ハラル）
10月1日（火）	赤い羽根共同募金（1年生）JR鴻巣駅
10月2日（水）	赤い羽根共同募金（2年生）JR鴻巣駅
10月25日（金）	被災地ボランティア（川越キングスガーデン）
11月17日（日）	国際交流フェスティバル（鴻巣市市民活動センター）
2月10日（月）	地域医療介護連携会議（2年生）

※　8月～9月　　納涼祭・秋祭りボランティア（実習でお世話になった施設で1日間）

【芸能福祉講座】

日時	概要
12月6日（金）	折り紙講座
12月13日（金）	音楽療法
12月20日（金）	パフォーマンス大会（実証講座）

【地域貢献活動（個人参加型）】

個人参加型については、学生個々が高い関心と意欲を持って参加していることが活動状況から評価できる。学生からの建設的な意見・提案により、改善が図れた事例もある。代表的な活動については、地域食堂（まちのごはんやさん：NPO法人にこにこmama’s）や重症心身障害児入浴プロジェクト：NPOにじいろ（重症心身障害児家族の会）が挙げられる。

特にこの2つの活動については、学校での学びとリンクする機会が多いことを学生自身が体感できたことが大きなメリットであると評価する。

例えば、地域食堂（まちのごはんやさん）では食事が提供されるまでの時間帯において、

学生たちは子供たちの遊び相手となる。子供に接することに対し当初は苦手意識を抱いていた学生も、子供たちと時間を共有する中で、コミュニケーションを図り、自然と打ち解けていく、そして、いつの間にか共に笑顔で楽しいという気持ちが芽生えていることに気づく。更には、コミュニケーション技術、アクティビティ・サービス、生活支援技術等の授業での学びを活用・応用できないかと想像力・創造力を発揮させることに繋がることを意識し、授業と実践を統合することを体感する。

また、重症心身障害児入浴プロジェクトでは、障害をもつ子供たちに対し、それぞれの疾患や障害特性について学び、アセスメントを重ね、その子供に適した入浴介助の方法を現役の介護職員と共に考え、改善を重ねながら実践に繋げることを体験する。障害の理解、発達と老化の理解、生活支援技術等での学びを活用しながら、安全かつ安心した入浴介助の実践に繋げている。地域の社会資源の活用、アイディアを出し合うことで、障害をもつ子供たちが少しずつではあるも当たり前の生活が送れるようになることを実体験を通し体感する。

【地域食堂（まちのごはんやさん：NPO 法人にこにこ mama's）】

開催日は以下の通りである。

開催概要			
第１回	４月２６日（金）	第２回	５月１７日（金）
第３回	６月２１日（金）	第４回	７月１９日（金）
第５回	８月２３日（金）	第６回	９月２０日（金）
第７回	１０月１８日（金）	第８回	１１月２２日（金）
第９回	１２月２０日（金）	第１０回	１月１７日（金）
第１１回	２月２１日（金）	第１２回	３月１３日（金）

【重症心身障害児入浴プロジェクト:NPO にじいろ（重症心身障害児家族の会）】

開催日は以下の通りである。

開催概要			
第１回	４月１４日（日）	第２回	４月２８日（日）
第３回	５月１２日（日）	第４回	５月２６日（日）
第５回	７月７日（日）	第６回	７月２１日（日）
第７回（入浴講義①）	８月１８日（日）	第８回（入浴講義②）	８月２５日（日）
第９回	９月８日（日）	第１０回（反省会）	９月１５日（日）

以上の取り組みを今年度実施したが、これらの取り組みは学校に大きな変化を齎した。子供、高齢者、障害者等々、学生以外の来校者が増えたということ、学校に明るい笑い声が響き賑やかになったこと、学生と地域の皆さんのコミュニケーションの機会が多くなったことから、地域との関係性において良好な関係構築の萌芽となったことを挙げたい。今後は学生たちの企画したパフォーマンスを地域の高齢者施設等に出向いて披露する機会を設け、「学校と地域」との相互理解・交流を深める活動としてブラッシュアップを図っていきたい。

（関東福祉専門学校　学校長　尾島　朱美）

ウ．YMCA 健康福祉専門学校

（１）活動に向けた準備（学校と地域がかかわる）

2016 年～子ども食堂の実施

専門学校を含む厚木 YMCA として厚木市と共催して実施。

これまでかかわりの薄かった地域の組織とのつながりができる。

2017 年　　地域の各団体との関係構築

地域会議や協議体への参加などを通じて吾妻団地の現状を知ることとなる。

2018 年　　モデル事業への参加　吾妻団地での活動が決定する

厚木市高齢福祉課への協力依頼。自治会民生委員につなげてもらう。

地域コーディネーターが活動に加わり地域機関とのかかわりが積極的に行われる。

包括を通じ吾妻団地地区民生委員より団地の実情についての聞き取り。

（２）今年度の取り組み（学生と地域がかかわる）

2019 年度前期　　学校：活動準備　　団地：ふれ愛サロン吾妻スタート

授業の一環としての地域活動に向けてシラバスの作成、授業調整などを行う。

地域コーディネーターが調整役となり団地の関係機関への協力依頼情報収集。

6 月サロン開設パーティにコーディネーターと専任教員が出席

7 月サロンスタート　コーディネーターが定期的に訪問

「ふれ愛・サロン吾妻」とは 団地の中で孤立化を防ぎ、仲間づくりを目的とし、対象とする世代を限定しない様々な活動を行う組織として 2018 年に NPO 法人として設立された。メンバーは自治会の役員や住民ボランティアなどで実際の活動は 2019 年 6 月より団地の空き部屋を利用した月 2 回のサロンの開催であり、今後は見守りや子育て相談、フードバンクへの協力など活動を広げる予定である。

8 月先行事例の研究のため 10 年前より新宿戸山団地での学生による実地調査などの地域活動を授業に取り入れている東京 YMCA 医療福祉専門学校へ訪問。

2019 年度後期　　学生が活動を開始（地域を知る、交流する、考える）

10 月　介護の基本Ⅱの授業の一環として地域活動を開始

①地域コーディネーターによる地域活動の実践事例と基礎理解講義

②地域包括支援センター職員による厚木地域の状況説明、地域活動にあたって

11 月③団地自治会役員を招いて学生との交流　団地の実情やサロン開設の様子など

12 月④団地見学に向けた事前学習（テーマごとにグループに分かれる）

⑤団地見学　グループごとに民生委員自治会役員などと交流、情報収集

⑥見学の振り返り

学生の状況 準備をして見学に臨んだものの、学生のほとんどは用意した質問が終わるとそこからさらに疑問や興味を広げることができず、住民側がサロンや団地の話を主導している状態であった。質問があるにもわらず筆記用具（特にノート）を準備していない学生が多くその場で教員がルーズリーフを渡す場面もあった。まだ学生が活動を主体的に行える段階ではないと判断。団地の住民と直接かかわれるよう団地のイベントに積極的に参加してもらう方向へ。

1 月（希望者 5 名）自治会主催のもちつき大会へ参加

⑦テーマごとに調べたことを模造紙 1 枚でまとめる

⑧よこはま福祉フォーラムに参加　横浜市内の地域活動の事例報告を聞く

4月以降　団地の各種イベントに学生が参加していく（交流する、考える）

グループごとのテーマを深め報告会を実施（新1年生、団地関係者へ向けて）

新1年生が活動を引きつぐ

学生が今後参加したい吾妻団地のイベント　　複数回答 花見（10名）、夏祭り（7名）、運動会（8名）、もちつき（6名）、ふれあいサロン（4名）

（3）学校として得られた成果（地域を知る　地域に知られる）

これまではYMCAとしてのイベントや委託事業などでかかわることはあっても今回のように一つの地域に入り込んでつながる機会はなかった。現在は吾妻団地の地域活性化という目的に向けて協力し合う関係性を構築中である。特に地域コーディネーターはできる限りサロンを訪問し、サロン参加者や運営スタッフとの交流を深め、顔の見える関係を築き、YMCA 健康福祉専門学校の名前を覚えていただくことで、学生たちが吾妻団地にスムーズに入っていけるような土台作りを行った。その成果もあり自治会役員は学生を快く受け入れてくれており、協働していくことへの期待も持ってくれている。

学生とのかかわりも始まり、1月のもちつき大会では参加した住民の皆さんとの交流を通じて厚木に YMCA 健康福祉専門学校ということころがあり、そこでは介護を学ぶ学生がいるということを認識してもらえる機会となった。

1月　もちつきに参加

今年度の活動を通じかかわった関係機関（順不同）　　吾妻団地担当民生委員、吾妻団地自治会、ふれ愛サロン吾妻、厚木市福祉総務課、厚木地域包括支援センター、社会福祉協議会、地域ケア会議、2層協議体、厚木各地区の自治会役員、吾妻団地の住民の皆さん　　など

（4）今後生かしたい点（あたりまえにそこにいる関係に向けて）

吾妻団地での活動はまだ始まったばかりである。当初の計画は半年で団地の課題に対して学生が何かイベントなどを実施する…と考えていた。しかし実際地域に入っていく中すでに住民は地域の課題に対し取り組みを始めていること、活動をするのは学生だが主体は地域であることを改めて気づかされた。一方学生はまだ活動の目的が見えずぼんやりしている。そこで今では無理に計画を進めるのではなく、学校や学生がもっと地域と交流を深め「あたりまえにそこにいる」関係を作れるように変更した。その中で地域との絆が強くなり地域に求められる人材とそれを育てる学校の存在意義も増してくることも期待できる。次年度以降どう進めていくか考えるとワクワクしてくる。2年間の活動の成果は教員自身が活動を楽しみにできるようなったことかもしれない。この感覚を学生にも味わってもらえるような活動にしていきたい。

12月　サロンで団地役員と交流

（ＹＭＣＡ健康福祉専門学校　介護福祉科専任教員　石島美紀）

「つながる」が
介護専門学校の未来を拓く

参考資料

目次

1.日本の介護教育に迫る厳しい環境 2
1.1.介護福祉士という専門職がおかれた厳しい状況 2
1.2.介護教育の質の低下がもたらす厳しい状況 3
1.3.地域コミュニティの課題 5
1.3.1. 地域コミュニティの衰退 5
1.3.2. 介護の質向上の必要 6
1.3.3. 不足する介護職員数（介護の量） 6
1.3.4. 介護福祉士養成校（専門学校）の学生充足度減 6
1.3.5. 多様化が進む介護現場 6
1.4 介護福祉士養成校が地域コミュニティとつながる必要性 7

2.「地域課題解決プロジェクト（CCP）」でひらく介護の学校と学生、教員、地域のみらい 10
2.1.CCP 活動で扱うテーマ 14
2.2.CCP のビジョン 15
2.2.1.CCP で育てたい学生像 15
2.2.2.CCP で学ぶこと 16
2.2.3.CCP で教員はどのように成長するのか 17
2.2.4.CCP で学校はどのように成長するのか 18
2.3.CCP による成長モデル 19

3.地域に溶け込む学校づくり 24
3.1.学校に地域コミュニティと「つながる窓口（TM）」をつくろう 25
3.2.TM の役割①　CCP 活動の支援 27
3.3.TM の役割②　地域コミュニティとの持続的関係づくり（溶け込む活動） 29
3.4. 地域のキーパーソンと TM の関係 30

4.CCP 運営の実際：支援マネジメント 34
4.1.溶け込みマネジメント 35
4.1.1.ステップ①「互いを知る」 36
4.1.2.ステップ②「互いの思いを理解する」 42
4.1.3.ステップ③「互いの思いを尊重して行動する」 51
4.2.CCP 実践マネジメント 59
4.2.1.とりあえずスタートしてみる 60
4.2.2.CCP の事前評価 62
4.2.3.CCP 実践中のアーカイブ・調整 64
4.2.4.CCP の事後評価 65
4.2.5.CCP の改善・ビジョン策定 66

4.3.リスクマネジメント 68
4.3.1.危険とリスク 69
4.3.2.危険との向き合い方 71
4.3.3.安全対策の手順(1) 危険を予知する 72
4.3.4.安全対策の手順(2) 危険に対する対応を想定する 73
4.3.5.安全対策の手順(3) 対策を確実に実施する 74
4.3.6.安全対策の手順(4) 対策実施結果について評価する 75
4.3.7 安全対策の手順(5) 評価を次に活かす 76
4.4.専有可能性マネジメント 77
4.4.1.いろいろな活動成果 77
4.4.2.専有可能性とは何か 78
4.4.3.専有可能性マネジメントの対象 79
4.4.4.専有可能性マネジメントを助ける資源 80

5.事例集 82
5.1.事例① 北海道福祉教育専門学校 83
5.1.1.本校が所在する地域の現状 83
5.1.2.地域サロン「シンチャオサロン母恋」開催に至った経緯 85
5.1.3.「シンチャオサロン母恋」開設までの準備 87
5.1.4.地域サロン「シンチャオサロン母恋」の実施状況 89
5.1.5.「シンチャオサロン母恋」が地域に及ぼした影響 94
5.1.6.課題 96
5.2.事例② 関東福祉専門学校 97
5.2.1. 地域の方と昼食をつくって食べる会(地域から学校へ) 97
5.2.2. 国際交流フェス(学校から地域へ1) 100
5.2.3. 地域でボランティア活動(学校から地域へ2) 102
5.2.4. NPO 法人等からの積極的な働きかけ 103
5.3.事例③ YMCA 健康福祉専門学校 108
5.3.1.法人理念と地域活動:学校長の立場から 108
5.3.2.地域活動の実践にむけて:地域コーディネーターの立場から 110
5.3.3.授業における「地域活動」:教員の立場から 116
5.3.4.まとめ 121

chapter

1

日本の介護教育に迫る厳しい環境

1.日本の介護教育に迫る厳しい環境

今日の日本社会は、「介護福祉士」を本当に必要としているのでしょうか。現在進行しているさまざまな社会の動向を見るにつけ、日本社会は単に、介護職員（人材）を必要としているのであって、必ずしも「専門職としての介護職（介護福祉士）」を欲しているわけではないといえるのではないでしょうか。その証左が二つあります。

1.1.介護福祉士という専門職がおかれた厳しい状況

一つは、介護職員のうち介護福祉士資格を有している割合は増加することなく、実務者研修修了者や初任者研修修了者、さらには無資格者が増加する一方だということです。初任者研修や実務者研修といった法定研修を受けた介護職員であれば、一定の介護技術レベルを期待することができるかもしれませんが、無資格者は、研修を一切受けることなく介護現場を担っているのです。政策担当者や業界、国民が本当に介護の質を大切に考えているのであれば、また、介護職員の専門性について尊重しているのであれば、介護技術（介護の質）を脅かすような職員スキルを放置することはないでしょう。そもそも介護福祉士が業務独占ではないこと自体が、介護職員の専門性について認識が低いことを表しているのです。

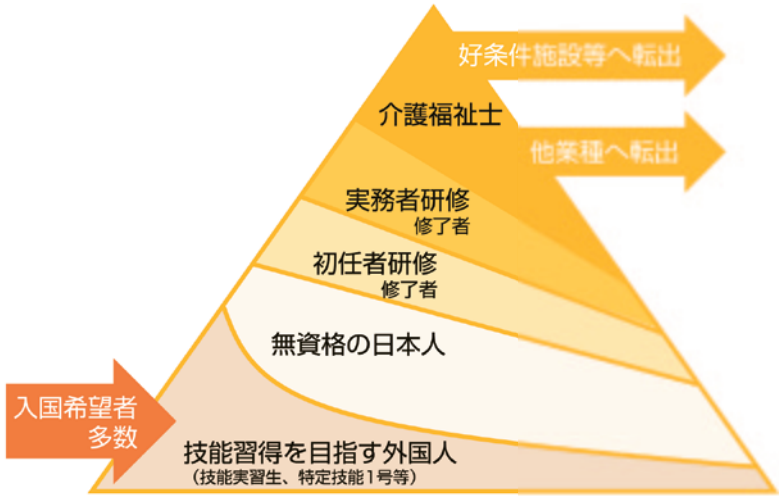


図 1　追い詰められている介護福祉士（川廷宗之作図）

1.2.介護教育の質の低下がもたらす厳しい状況

もう一つは、介護職員が全国的に不足する深刻な事態になってから、不足した介護職員を補填するため、外国人を受け入れるという方針に舵を切ったことです。技能実習生や特定技能 1 号で入国する外国人は、一定の研修を受けていることから、介護技術のレベルは保障済とされていますが、その検証は十分であるとはいえないでしょう。

図 2 の中央の循環のような展開が続けば、近いうちに、学校閉鎖に追い込まれる介護福祉士養成教育校も出てくるでしょう。その打開策にはどのようなものがあるのでしょうか。制度的に考えるならば、業務独占化が最も有効な方策といえるでしょう。しかし、業務独占化したからといって、介護福祉士のニーズが高まり、志願者が増えるというストーリは必ずしも約束されるわけではありません。看護師等の例を見ると、単純に当該職種へのニーズが高まったからといって、それが直接的に志願者増加につながるとはいえないでしょう。

図 2　介護福祉士養成教育を取り巻く循環（川廷宗之作図）

社会のさまざまな相互作用を勘案して、より実現可能な選択肢を検討すると、地道ですが、介護福祉士が実践を通じて多くの人々に「介護福祉士は信頼できる」と感じてもらうことで、介護福祉士の専門性を社会的に認めてもらうという王道に行き当たることでしょう。そのために必要なことは、「介護教員の質の向上」です。

介護福祉士の資格は、国家試験に合格することで取得できます。養成校の合格率や卒業生の力量が低ければ、実務経験で国家試験を受けるルートの方が合理的だと認識されることでしょう。そのような流れが大きくなれば、養成校の必要性は低くなります。介護教育が直面する厳しい環境の中で、学校関係者や教員等は、現状を危機であるとはあまり認識していないことがうかがわれます。

介護教育の質の低下によって、日本社会は危機に陥りつつあります。介護教育、そしてそれを担う介護教員の質の向上をはかることは喫緊の課題です。

1.3.地域コミュニティの課題

地域コミュニティが抱える課題には、どのようなものがあるでしょうか。おかれた地域によって多種多様な課題が想定されますが、日本国内の地域の多くが共通して抱える課題を五つに絞って考えてみましょう。

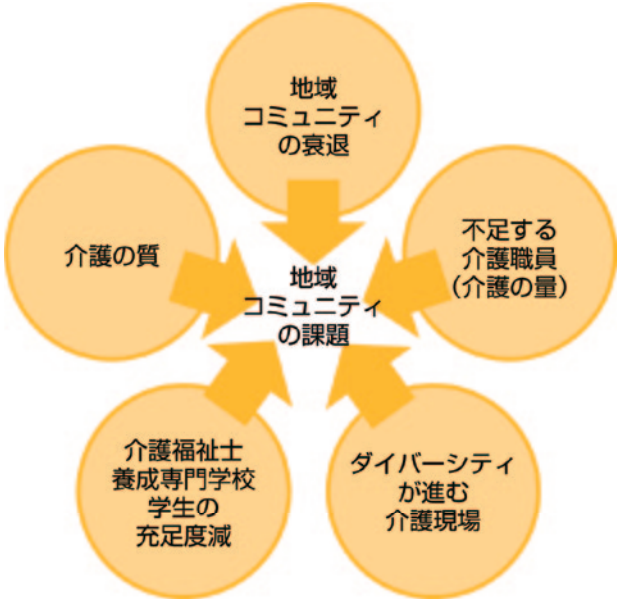


図 3　介護の学校が貢献できるだろう地域コミュニティの課題（神山資将作図）

1.3.1. 地域コミュニティの衰退

①少子化、高齢化に伴い、高齢者、子ども、障がい者等に対する支援の手が必ずしも十分ではありません。

②中核となる産業の撤退や衰退が著しく、過疎化が進行している地域が多くあります。

③元気な高齢者が地域活動を担う機運が高まりつつありますが、きっかけがうまくつかめないなどの理由で、そのエネルギーを生かし切れていません。

④一般的に家庭に存在すべき機能（地域との関わり、子育てなど）が薄れており、それにより多世代交流が途絶える原因ともなっており、地域の衰退につながっています。

上記のような環境の下、行政等に過度に依存せず、住民一人ひとりが豊かな生活を送るための努力（自助）やお互いに協力・協働（互助）できる地域コミュニティが衰退しています。

1.3.2. 介護の質向上の必要

①新規の介護就労希望者の減少により、十分な教育を受けていない介護職員を採用せざるを得ず、施設によってはその介護水準が低下するなど、介護施設が提供するサービス水準の二極分化が進んでいます。

②高齢者のニーズは高度化、多様化しています。生活自立が求められる一方、就労希望の高齢者が増加するなど、個々の状況に応じた適切な支援が課題となっています。

③地域包括ケアシステムに対応して、多様な介護施設や企業や、多様な介護スタッフとの連携・協働のマネジメントができる専門スタッフの確保が必要となっています。

1.3.3. 不足する介護職員数（介護の量）

①一般的な人口 10 万の市を想定すると、当該地域にある養成校は 2025 年までに、約 300 人（毎年 50～60 人）の介護職員を養成する必要があることになります。

②コミュニティにおける協働システムの構築により、介護職員の負担を減らす対策が必要です。

1.3.4. 介護福祉士養成校（専門学校）の学生充足度減

①介護福祉士養成校の多くは、少子化問題や介護職に対するネガティブなイメージにより深刻な定員未充足問題に直面しています。

②介護人材の養成は、単に養成校の学生募集の問題というだけでなく、地域社会の課題です。このままでは地域介護人材の供給が困難です。

1.3.5. 多様化が進む介護現場

①介護の現場では急激に多様化が進んでいます。特に外国人介護職員が急増しています。日本人介護職員が不足していることもあり、その速度は速まっています。また、介護福祉士養成校でも留学生の割合が増え続けています。その他、技能実習生、特定技能 1 号を通じた外国人の受入も制度的に推進される方向にあり、今後、さらに増加することが予測される中、外国籍の介護職員の受け入れ体制の構築やマネジメント手法など対策を講じる必要があります。また同時に、日本の介護の未来を見据えた介護・福祉サービス内容と介護職員の役割の見直しも必要となります。

②介護の利用者も、多様化が進んでいます。「高齢者」と一括りにするのではなく、個々のニーズに寄り添った適切な支援が必要とされます。

1.4 介護福祉士養成校が地域コミュニティとつながる必要性

① 高齢者のニーズ、時代の変化、地域の特性に対応した介護サービス開発の力量を高めるべく、施設介護を中心に取り組んできた従来の介護実習同様に、訪問介護・在宅介護実習の質的向上、学内での授業科目と連携させた教育課程の開発を進めることで、より実践的な教育を行うことができるようにしていきます。

② 地域との協力関係構築をきっかけに、地域の高齢者コミュニティの中に学生たちの「居場所」をつくると共に、介護の在り方を体験を通じて考えることができます。

③ 前記①②を踏まえて、訪問介護、在宅介護を重視し「住み慣れた地域で長く安心して暮らす」ための、多職種との連携・協働の仕組み作り、実践方法等を含む多様なサービスの展開方法を学びます。

④ 特に、高齢化率が高く、少子化が進む地方都市に於いては、地域住民とのコミュニケーションの場、学びの場として、高齢者の生きがいづくり、健康支援、お祭りや地域のイベント等といった協働作業

⑤ を通じ、地域活性化、まちづくりの担い手として、学生を地域に送り出していく学校運営のシステムが必要です。

⑥ 学校の施設設備を活用するなどして学生自身が企画運営する活動を通じて、高齢者自身が地域における自立した日常生活を送れるよう支援する介護予防に関する学びを充実させます。高齢者が生き生きと活躍する場を提供します。

⑦ 学校は、地域のつながりの中で高齢者の生活を支える（自己実現を図る）拠点として地域における総合的なケアシステム（支援）の一翼を担うことが重要です。学校は、地域における高齢者の生活支援、介護予防や多職種の協働を促進するために、介護福祉士養成校を含む地方行政機関や社会福祉協議会、介護施設、企業等との連携システムを構築することが不可欠です。

⑧ 介護福祉士という仕事は、高齢者との会話や笑顔を通して学ぶ事が多くあります。また、チームワークにより成し遂げる事で介護職としてのやりがいを感じる事ができます。就労前に、地域活動を通じて多くの高齢者との交流することは、学生の「やる気」を醸成することにつながります。地域活動や地域との連携が、介護福祉士人材の総合的な募集と定着化の仕組みづくりと人材確保対策の推進につながっていきます。

以上のことを踏まえ、本書で提案が必要となる現状認識を以下のようにまとめることができます。

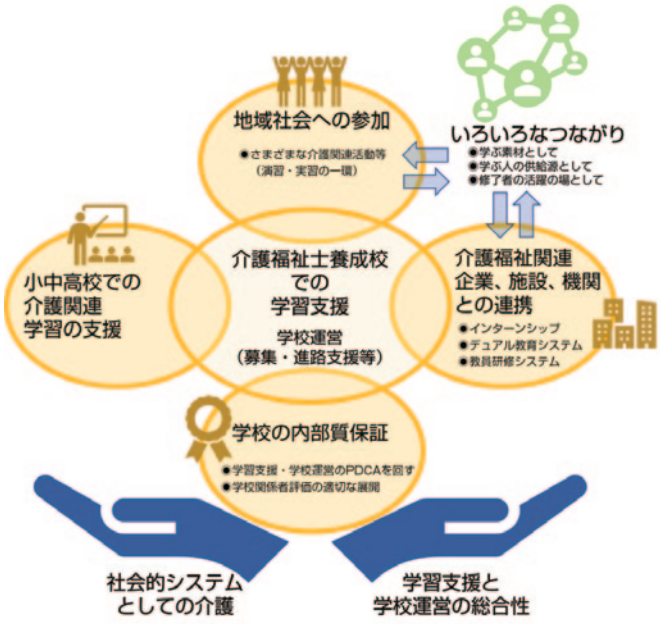


図 4　地域コミュニティに支えられた学校運営システム（川廷宗之作図）

表 1　なぜ地域コミュニティとつながるべきなのか

① 専修学校は地域との密着度が高い
② 専修学校の学生は地元出身者が多く、卒業後も地元の企業・介護施設等への就職率が80%以上と高く、地域活性化の担い手となる可能性があります
③ 介護スタッフが不足の中で、介護を学ぶ学生は高齢者支援の貴重な担い手です
④ 学生が地域体験活動に参加して、多くの高齢者と交流することで、学びが促進されます
⑤ 若者が地域活動に積極的に参加することで地域コミュニティが活性化されます
⑥ 高齢者に若者支援という新たな役割を創るなど、高齢者が生き生き活躍できる場を提供することで、要介護の予防が促進され、介護状態の進行が抑制されます
⑦ 学生は、コミュニティ活動に参加することで、組織の運営・経営等のマネジメントを実習・経験できます
⑧ 学生は、地域の住民や高齢者、子供等と交流することで、コミュニケーション能力を向上・習得できます
⑨ 一定の共通性のある地域を選び、「学習プログラム」を実施・検証することで、地域の中核となりえる専修学校の学生の多様な活躍・活動の展開が可能となることを立証します

chapter 2

「地域課題解決プロジェクト（CCP）」でひらく学校・学生・教員と地域のみらい

2.「地域課題解決プロジェクト（CCP）」でひらく介護の学校と学生、教員、地域のみらい

第1章では日本の介護現場と介護福祉士養成校に迫るさまざまな環境変化と課題とについてみてきました。これらの環境変化とそこから生まれた課題は、偶然や何か外的なきっかけによって解決されるような性質のものではありません。介護という、ある程度日本国内に閉じた環境の必然的な変化であり、そこから生じた課題であることから、それを解決できるのは、そのコミュニティ（日本国内）に属する者だけなのです。

社会から私たち介護福祉士養成校に負託されている役割を果たすため、本書では「地域課題解決プロジェクト（Community Challenge Project: CCP）」という、生きた介護を学ぶ教育活動モデルを提案します。この教育活動は生きた地域コミュニティとのつながりの中で、介護を志す学生が生きた介護スキルを身につける素地となる「介護の感性」を磨くための教育機会です。

CCP 活動を通して、過疎化が進行している地域コミュニティの高齢者は、住み慣れた環境で、世代を超えたつながりを持つことにより自立した日常生活を送れるようになることでしょう。また、専修学校の学生が主体的に地域福祉の担い手として地域活動に参加することで、新たな高齢者支援の仕組みのシーズとなるでしょう。

また、学生にとっては CCP 活動に参加し、高齢者や地域の実態に触れ地域コミュニティの課題に取り組むことで、「課題抽出力」「解決策の策定力」を養うと共に、卒業後も地域コミュニティで活躍する基盤が得られることも期待できます。●実践することで、専修学校は実習先施設以外の、地域企業をはじめ、「産学官」と連携して地域の活性化を図る一翼を担うことができるでしょう。

本書では、私たちの社会が抱える課題を解決する活動を促進すると同時に、その活動の中で、学生が自らの感性と知識、スキルを成長させる機会を創造していくことを提案します。そして、地域コミュニティが抱える課題を解決しようとする活動に学生が参画するという学習活動を「地域課題解決プロジェクト（Community Challenge Project: CCP）」と名付けています。CCP は、地域コミュニティの課題を解決する活動の中に学生が参画することのみをいうのではありません。学生は地域コミュニティの課題を解決するという活動の過程で、それぞれの感性と知識、スキルを磨く必要があります。活動への参画は、単に地域コミュニティの人々や団体等とともに活動するのみではなく、大切な学習活動になるわけです。さらに、CCP は、学生がそれらの活動に参画することを通じて、学生の感性、知識、スキルを磨き、みらいの日本の介護を先導するひとに成長してもらう機会とするための、学校と教員にとっての教育的活動でもあります。

このように CCP は三つの側面（図 5）から成り立つ活動であるといえるでしょう。

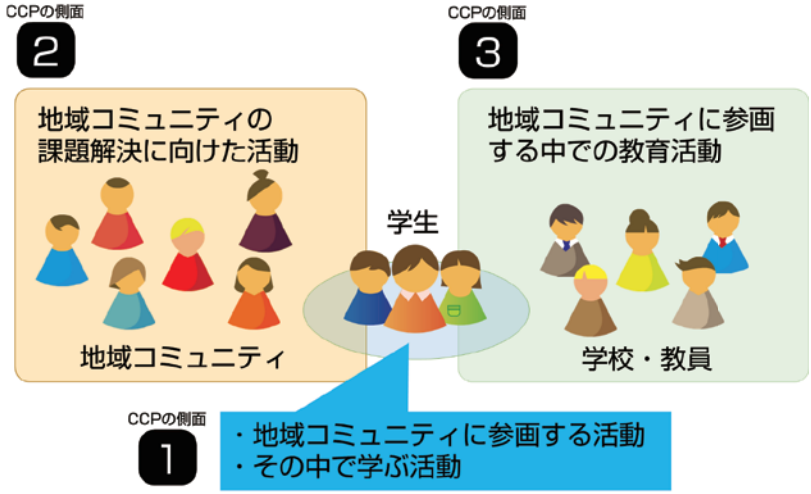


図 5　地域課題解決プロジェクトの構成（神山資将作図）

次に、CCP 活動を通じて地域コミュニティと学校、教員、学生の成長したモデルについて説明し、このプロジェクトが何を目的として活動していくべきか、殊に、教員をどのように支援するべきか説明します。

学校が継続的に成長してくためには、常にイノベーションが必要です。地域コミュニティとつながる教育現場を持つことは、学校のイノベーションの場を持つことです。地域コミュニティとつながる現場は、学生にとっての成長の場ですが、同様に、学校にとっても新たな成長の種や芽なのです。イノベーションは「要素の新しい組合せ」ですが、地域コミュニティの様々な人・団体とつながることで、学校に「新しい組合せ」の可能性を見せてくれるでしょう。

地域コミュニティとうまく共生できれば、学生のみならず、教員や学校にとっても大きな成長のチャンスとなります。地域コミュニティの可能性や成長と、学校と学生の成長がどのように関連するか考えてみましょう。

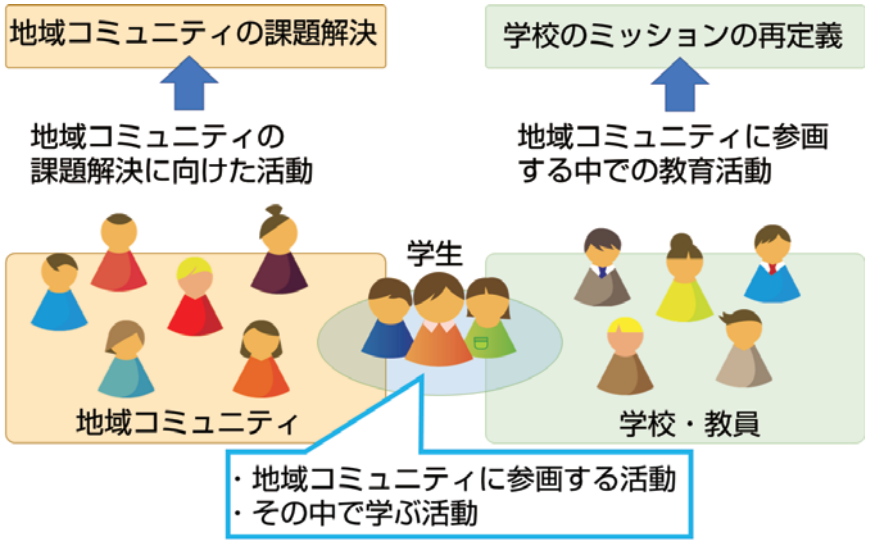


図 6　学生が軸となり、地域コミュニティ、学校の課題を解決（神山資将作図）

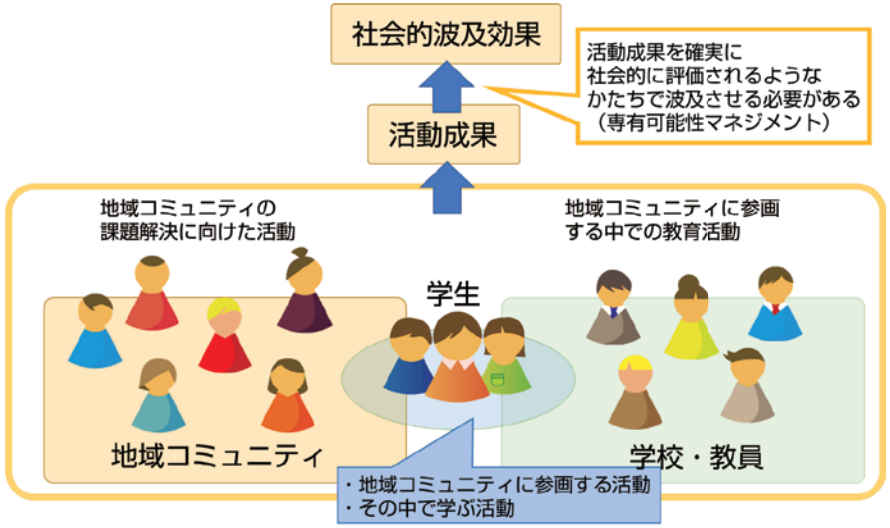


図 7　活動成果から波及効果を確実に得る仕組みづくりの必要性（神山資将作図）

地域コミュニティの喫緊の課題は高齢者と関連したものが多く、地域コミュニティの介護リソースである学校と相補の関係にあることがわかります。そこで、介護福祉士養成校が地域コミュニティとのつながりを強め、「地域コミュニティの課題解決」と「学校づくり（介護の学校の再定義）」を循環させていくことで、相乗効果を上げることが重要であることがわかります。

2.1.CCP 活動で扱うテーマ

CCP で扱うテーマにはどのようなものが考えられるでしょうか。基本的には、「介護」がテーマを探索する出発点となるでしょう。また、介護と密接な関連はないとしても、隣接のテーマとして位置づけられるものを扱うこともできるでしょう。

しかし、これらのテーマはあくまで学校や教員、学生のリソースから考えたテーマであり、地域コミュニティにとってどのようなニーズがあるのかをよく考慮したものではありません。

CCP の計画立案の際には、「地域コミュニティが持っているニーズ」と「学校、教員、学生が持っているリソース」のマッチングをよく考慮しなければいけないでしょう。

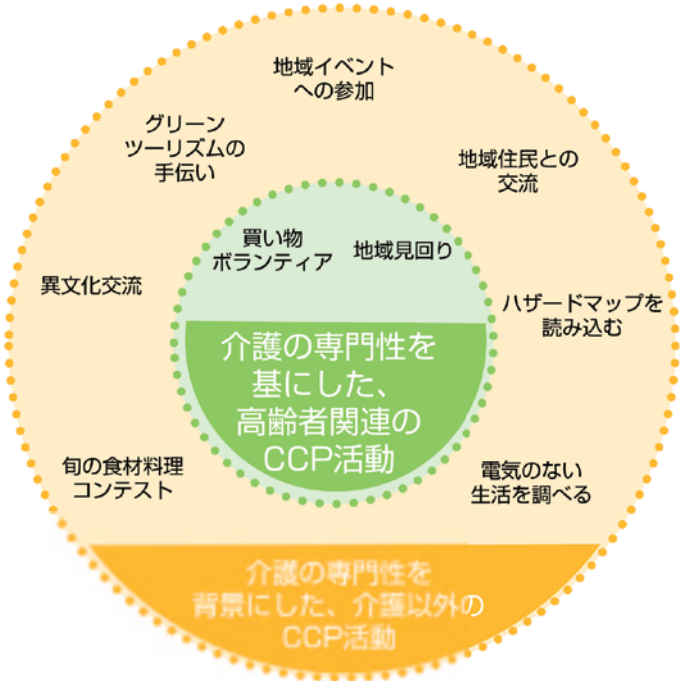


図 8　CCP のテーマは何か（神山資将作図）

2.2.CCP のビジョン

次に CCP がめざすビジョンを説明します。

2.2.1.CCP で育てたい学生像

CCP が主たる対象とする学生は、「介護福祉士養成校（専修学校）の在校生」と「その卒業生」です。活力溢れる地域社会を創るためには、様々な背景を持つ多彩多様な人たちが暮らしやすい（個々の特性を発揮しやすい）環境を創る必要があります。

図 9　CCP で育てたい学生像（神山資将作図）

2.2.2.CCP で学ぶこと

CCP で学生が学ぶ内容は学生一人一人で異なります。CCP が学生に提供するのは、実践体験を通じた学びの機会です。具体的にいえば、「PBL（Problem-Based Learning）による問題発見解決型学習プログラム」と「介護福祉士を目指す学生と地域の方々との交流する場」なのです。

○体験・・実際のさまざまな地域活動への参加や実施体験の体験を通じての学び

○フォローアッププログラム・・自分自身の行動や意識の変化を共有し、自身のアクションプランを策定
※参加高齢者の意識や行動の変化・成長を共有し、活動の成果が実証・検証できる

○情報機器、介護機器を活用した学習・・高齢者の IT 機器のサポート方法の学習

表 2　CCP で学生が身につけてもらいたいスキル

◎地域の課題を具体的に把握する能力
地域の問題・ニーズを把握し課題を解決する能力（ミクロ～マクロソーシャルワークの視点）
◎高齢者の特性を把握する能力
多職種と協働し、訪問介護、在宅介護についての知識と能力
◎他者との調整スキル：高齢者や住民とのコミュニケーション能力など
コミュニケーション能力の向上（地域の様々な方々と親しい関係を作る。）
◎目標から達成へのマネジメントスキル：
住民と協力関係を構築するマネジメント能力の向上
目標設定の行いかた、目標達成に向けての PDCA サイクルの実施のしかた
多様な地域課題の解決策を、地域の力量を生かして組み立てる能力
PDCA サイクルを実施する能力
多職種の連携や企業との連携等のマネジメントスキル
住民と協力関係を構築するマネジメント能力の向上
◎ソーシャルベンチャー化するマインドを養う

2.2.3.CCP で教員はどのように成長するのか

CCP 活動を通じて、教員はどのような成長を遂げる可能性があるのでしょうか。地域コミュニティの中で生きた介護を体験し、介護の感性を体得するという、学生にとっての成長モデルはすでに説明しましたが、教員はどのような成長モデルが想定できるのでしょうか。現場での実践に携わることにより、教育者としての成長はもちろん、マネジャーとして、あるいはリーダーとしての成長が期待されます。教員の成長を促すことを視野に入れたプログラムの開発が重要だといえます。

表 3　マネジャー像とリーダー像

マネジャー(Managers)	リーダー（Leaders）
管理する（Administrate）	革新する（Innovate）
維持する（Maintain）	開発する（Develop）
組織に焦点（Focus on structure）	人間に焦点（Focus on people）
統制に依拠する（Relay on control）	信頼を抱かせる（Inspire trust）
短期の展望をもつ	長期の展望をもつ
「いかに」「いつまでに」を問う	「何を」「なぜか」を問う
模倣する（Imitate）	創始する（Originate）
物事を正しくする（Do things right）	正しい物事をする（Do the right thing）
現状を受け入れる（Accept the status quo）	現状に挑戦する（Challenge the status quo）

2.2.4.CCP で学校はどのように成長するのか

CCP 活動を通じて、学校はどのように成長できるのでしょうか。学校が得られるメリットを最大化するために、何をするべきでしょうか。しくみづくりをしましょう。学校の持続可能な成長を時間軸に幅を持たせて考えましょう。一般的に学校という組織形態では目的（ビジョン）が不鮮明で、共有されることも少ないといわれています。さらに、学校内の業務分担も明瞭でなく、緩やかな組織だといわれています。構成員のめざす活動の方向性は必ずしも一致しないことが多く、組織としてのリソースを結集することが難しい傾向にあります。

しかし、学校が乗り越えるべき課題を前にした際には、たとえ、緩やかな性質を持つ組織であっても、もてるリソースを結集し、課題に立ち向かわなければいけません。まずは、学校の構成員、関連するアクターが共感・共鳴できる「共有ビジョン(shared vision)」を構築することが求められます。単に地域コミュニティとつながりを持てばよいというわけではなく、その共有ビジョンに、CCP 活動を連動させていくことが必要なのです。

学校と地域コミュニティがつながること（地域連携）は、学校にとっても一時的な人的・組織的なつながりではありません。地域コミュニティと学校のつながりは、二つの軸で考えることができます。一つは、「つづく」ことでつながるということです。もう一つは、「広がる」ことでつながっていくということです。学校が地域コミュニティとつながるときには、図 10 で示すように、この二つの軸で活動をとらえるとよいでしょう。

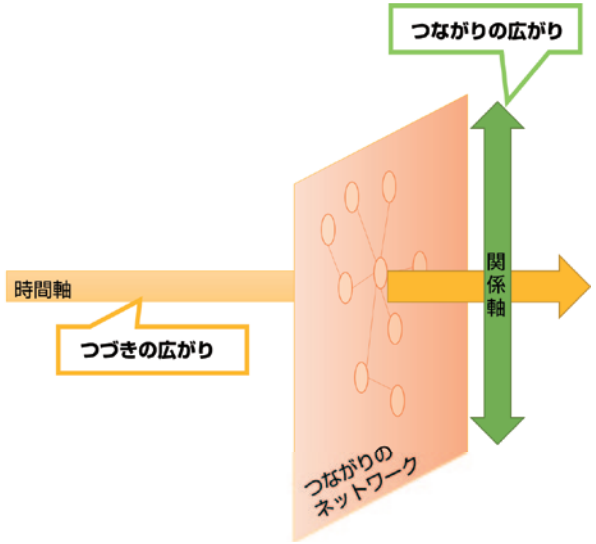


図 10　学校と地域コミュニティがつながるときの 2 軸の視点（神山資将作図）

2.3.CCP による成長モデル

CCP は学生と教員、学校が地域コミュニティとつながり、活動を展開します。人口減少や少子高齢社会の到来、市町村合併等の変化を受け、従来型の地縁型組織の中にも、活動地域の広域化や活動内容の深化を図る組織が出現してきています。それは従来型の地縁等に基づくコミュニティから共通の価値観に基づくコミュニティへの展開と考えることもできるでしょう。そこには、NPO や民間企業等の多様な主体が地域を支える人づくり、共助社会を担う組織が新たに出現していることも大きな影響を与えています。さらに、技術環境の変化も地域コミュニティのあり方に影響を与えています。

このような地域コミュニティの変化の中で、介護福祉士養成校は、図 11 に示すように地域コミュニティに溶け込みながら、そこでの価値共創の重要なアクターとなり得る存在なのです。

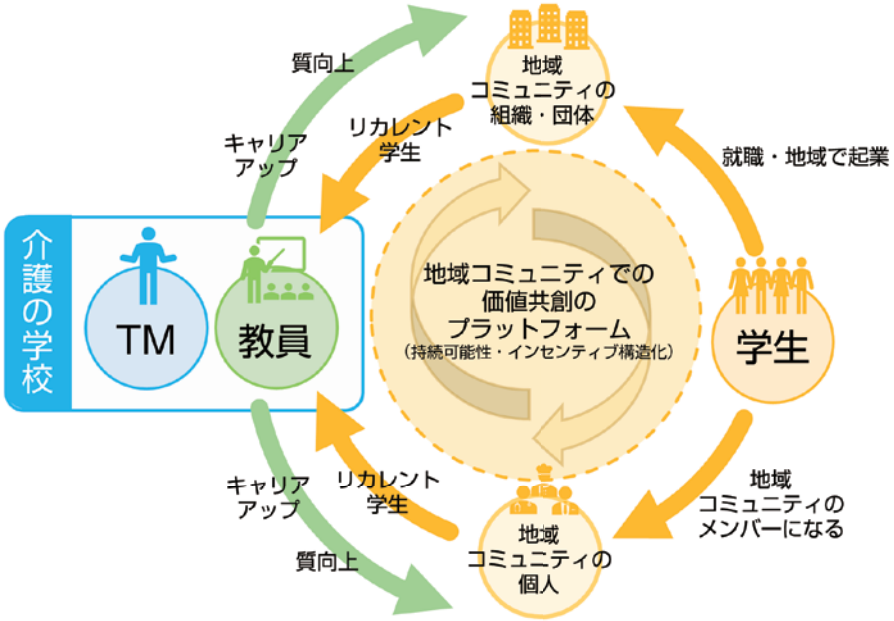
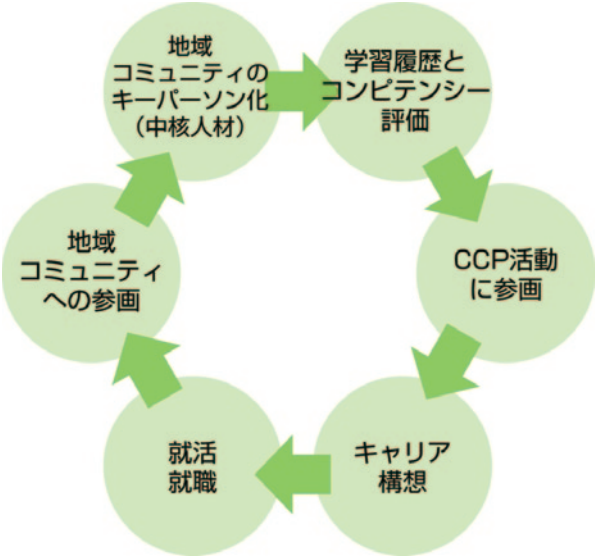


図 11　地域コミュニティでの価値共創（神山資将作図）

学生の指導においては、図 12 に示すようなサイクルを絶えず実施していくことが大切です。



※別にレジェンドの学年間継承の仕組みづくり

図 12 学生の指導サイクル（神山資将作図）

一方、学校（介護福祉士養成校）が地域活動に参画する上で意識すべきサイクルを図 13 に示しました。なかでも、効果測定は学校の果たす重要な役割です。評価基準を設けた上で定期的に効果測定を実施するなどして、常に活動に対する振り返りと改善を図っていかなければなりません。

また、表２のように、地域には制度としてシステム化された各種の組織が存在します。学校は、各組織の特性を理解し、キーパーソンをみつけ、適切なつながりを築いていく必要があります。さらに、昨今、旧来の組織の枠を超えた、SNS 等の電子ネットワークシステムによる組織も次々と生まれています。時代の変化に合わせた多様なつながり方も含めて、実践の中で学びながら検討していく必要があるでしょう。

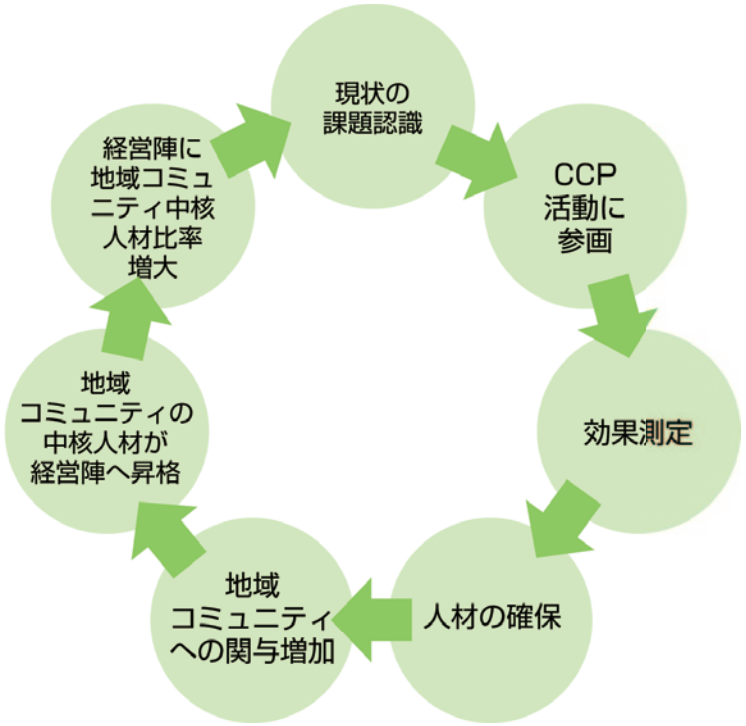


図 13　学校の参画サイクル（神山資将作図）

表 4　地域における組織の例

制度化されたシステム	地縁型住民組織	町内会、自治会、消防団など
	階層型住民組織	婦人会、老人会、青年団、子供会など
	協同組織	商工会、農業協同組合、生活協同組合など
	目的別組織	社会福祉協議会、体育振興会など
SNS 等の電子ネットワークシステム		

chapter

3

地域に溶け込む学校づくり

3.地域に溶け込む学校づくり

地域課題解決プロジェクト（CCP）を運営するために学校が準備するべき体制づくりについて説明します。

ある組織が自組織以外の外部の資源を活用して新しい価値を創出することを「オープンイノベーション（open innovation）」といいます。このオープンイノベーションは、産学連携（産学官連携）といった活動の基盤的な概念として理解されています。オープンイノベーションは本書で提案しているCCPやTMにおいても重要な概念です。地域コミュニティの資源を媒介にして、学生の成長を図り、教員の教育活動をより豊かなものとするイノベーションにつなげることが期待できます。地域コミュニティの視点からいえば、地域コミュニティが抱えるさまざまな課題を解決するために、介護の専門性を持った学生や教員との協働によってイノベーションにつなげることが期待できるわけです。

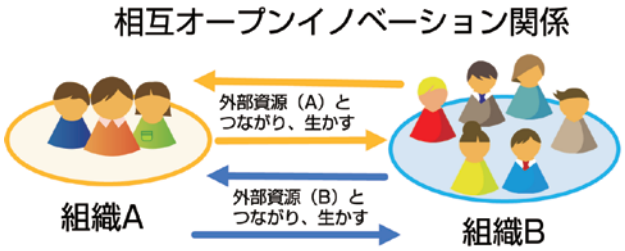


図 14　相互オープンイノベーション関係（神山資将作図）

米国では、国有地付与大学（Land-grant universities）に併設された農業試験場等が地域コミュニティの農業の発展に大きく寄与した歴史があります。国有地付与大学とは、連邦政府が州政府に対して国有地を付与し、その土地を利用して「州立大学（State University）」を設立するように促した施策でできた大学です。この国有地付与大学附属の農業試験場は、地域コミュニティの農業で役立つ新種の農作物開発を行いました。地域の農家はその成果を利用することができました。この農業試験場は地域コミュニティの農業の技術発展に大きな貢献を果たしました。このように、日本に限らず、各国で教育機関は地域コミュニティとの相互補完関係を築き、地域社会に貢献してきました。

オープンイノベーションによって、学校と地域コミュニティは密接につながり、互いの資源を生かしながら、成長を図ってきました。本書で提案するCCPは、介護福祉のフィールドにおけるオープンイノベーションの場をつくることを目指しています。

3.1.学校に地域コミュニティと「つながる窓口（TM）」をつくろう

地域コミュニティと学校がつながることで、地域コミュニティや学生、教員、そして学校にどのような可能性をもたらすのでしょうか。地域コミュニティ、学生、教員、学校が抱えるさまざまな課題をひとくくりにまとめることはできませんが、少なくとも、介護の学校、学生、教員が地域コミュニティとつながることで、それぞれが持つ資源を活用するチャンスが手に入るとともに、新しい価値を創造することができるのは確かです。

介護の学校、教員、学生が地域コミュニティとつながり、共生する介護の学校としていくためには、学校内に「（地域コミュニティと）つながる窓口（Tsunagaru Madoguchi）」をつくるといいでしょう。以降、つながる窓口をTMと略します。

図 15　TMの三つの機能（神山資将作図）

TMは、CCP（地域課題解決プロジェクト）の活動を支援するチームです。あなたの学校の教育活動の一つであるCCP活動を支援するとともに、地域コミュニティとの持続的な関係性づくりを担当する機能を果たします。さらに、TMは地域コミュニティのさまざまな人や団体・組織が、持つ課題解決への協力依頼や、学校や学生と連携したい等の相談を気軽に持ち込める窓口としての機能も果たします。いわば、TMは地域コミュニティとつながる介護の学校として、強靭な足場、キーストーン（Key Stone）であり、「地域と共生する介護の学校」の中心的な存在です。

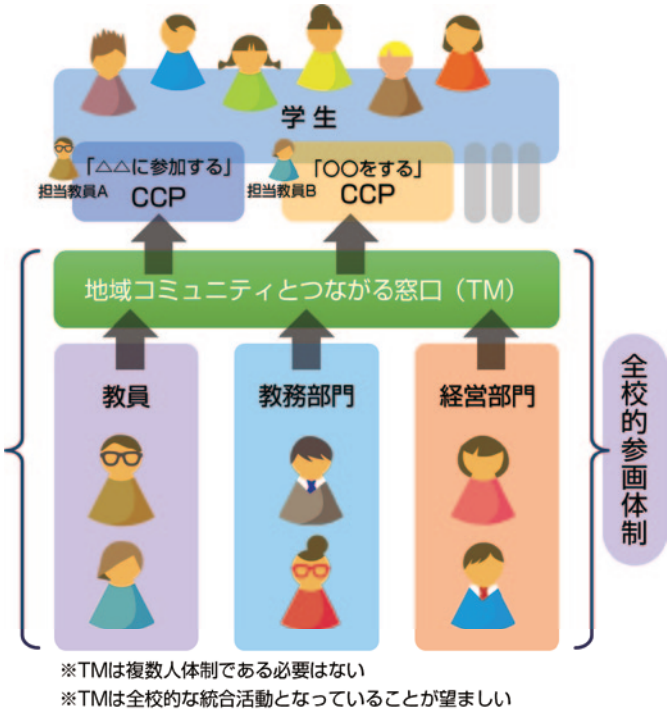


図 16　地域コミュニティとつながる窓口によるCCPの運営管理（神山資将作図）

上図に示したように、TMは「教員」「教務部門」「経営部門」といった校内の各部門、担当者が統合的に参画したチームで、全校体制で地域コミュニティとつながるためのセンターです。ただし、ここでは「チーム」と表現していますが、必ずしも複数人で組成される必要はありません。TMは一人でも結構です。しかし、全校あげて取り組むテーマとして、「地域コミュニティとつながる」ことを全校統合的に推進できる権限を持った存在である必要があります。

3.2.TM の役割①　CCP 活動の支援

TM の役割の一つは、CCP を実施する教員を支援することです。後述する CCP 運営プロセスに基づいて、教員の活動を支援するチームです。CCP 活動は年度や学期といった時限性の活動体ですが、TM には活動の時限性はありません。常設の全校的なチームとして位置づけられます。

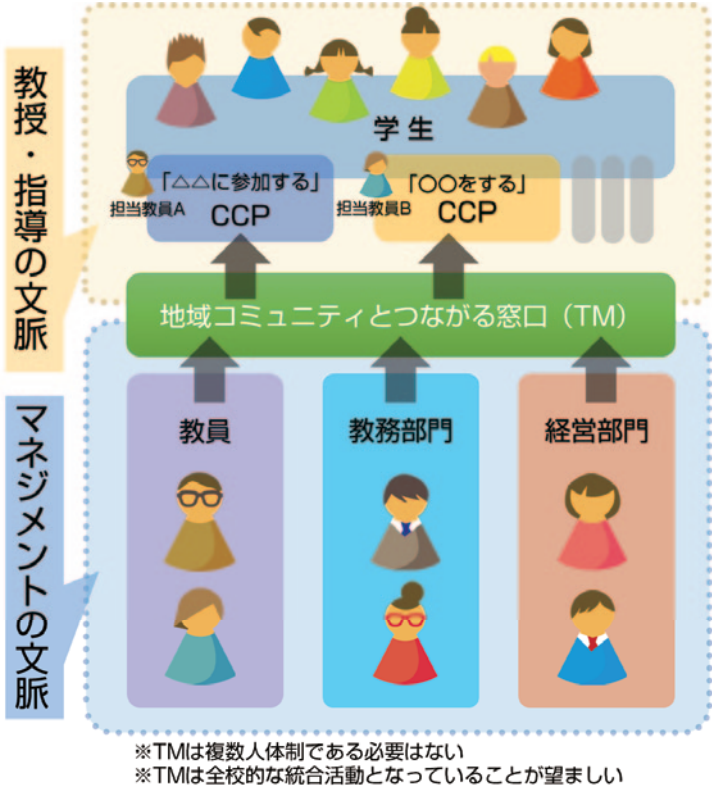


図 17　地域コミュニティとつながる窓口の二つの文脈（神山資将作図）

教員は CCP の中に取り込まれている存在であり、教員は TM の上側にも位置づけ、下側にも位置づけられる両義的な役割を持っています。わかりやすく注釈した下図では、TM の下側を「マネジメントの文脈」とし、上側を「教授・指導の文脈」と説明しています。教員はマネジメントの役割を担うとともに、教授・指導の文脈も担う存在だといえます。

学生の多様化（diversity）

今日の日本の介護教育の現場では多様性が前提になっているでしょう。多様性は単に国籍、民族、宗教のみならず、ジェンダー等の多様性も含まれます。これらのテーマは介護教育にとってチャレンジの一つとして位置づけられています。これらは刺激が強く、扱い方によっては誤解やコンフリクトを引き起こすものでしょう。しかし、多様性を無視したり、軽視することの方が危険性を高めることになります。

CCP に参加する学生が CCP 独特の開かれた環境で、それぞれが持つ多様性を発揮してもらい、互いに尊重する中で、日常の学校生活では表現できなかった意見や思いをやり取りする機会としたらよいでしょう。

多様な背景を持つ学生は、地域コミュニティのひとびととの関わり合いの中で、貴重な「資源」となることでしょう。少なくとも、教員、支援する職員（TM）は、学生の多様性が地域コミュニティとの関わり合いや溶け込みの中でポジティブなものとして生かされるよう、配慮しなければいけません。

まず、教員が学生の多様な背景を地域コミュニティにしっかり説明し、理解を促すようにしなければいけません。地域コミュニティが多様性を受け入れる環境づくりを教員ができるように、TM は支援する必要があります。

また、多様性を持った学生に対して、地域コミュニティを理解するための準備教育を徹底する必要もあります。地域コミュニティと学生双方が互いを尊重する関係を構築することが大切です。地域コミュニティの理解について教員がどのようなカリキュラムを編纂するのか、内容等について TM は確認しましょう。

3.3.TM の役割②　地域コミュニティとの持続的関係づくり（溶け込む活動）

TM の二つ目の役割は、地域コミュニティとの持続的関係づくり（溶け込む活動）です。TM は常設の校内組織（チーム）ですから、持続的に地域コミュニティとの関係性構築にあたることができます。

CCP 運営プロセス中の「溶け込むステップ」は CCP 活動とは関係なく、全校レベルの地域コミュニティとつながる事業として常に推進される活動です。よって、CCP 活動の支援という役割と次に説明する「地域コミュニティとの持続的関係づくり（溶け込む活動）」は一体性の高い活動です。

地域コミュニティとの緊密な関係性は、最終的に「地域における価値共創のプラットフォーム」として発展させることが目標といえるでしょう。地域コミュニティのひとびとと価値を共有し、課題解決に向けた新しい価値の創造をめざす「場」をつくりだすことが TMの役割です。地域にとっても、学校にとっても、そして学生にとっても最良の展開ではないでしょうか。

このようなプラットフォームが CCP を運営するための環境となり、CCP という教育活動への地域コミュニティの理解と協力を得やすくなるわけです。

3.4.地域のキーパーソンと TM の関係

TM の機能である地域コミュニティとの持続的な関係づくりを進めていく中で、地域のキーパーソンとどのような関係性を構築するかが重要な意味を持っています。TM は基本的に校内人材が担当しますが、もし地域コミュニティとのつながりがまったくなく、ゼロからつながりを構築するという場合、地域コーディネーター等、地域コミュニティのキーパーソンと関係を構築することでつながりをつくることが効果的です。

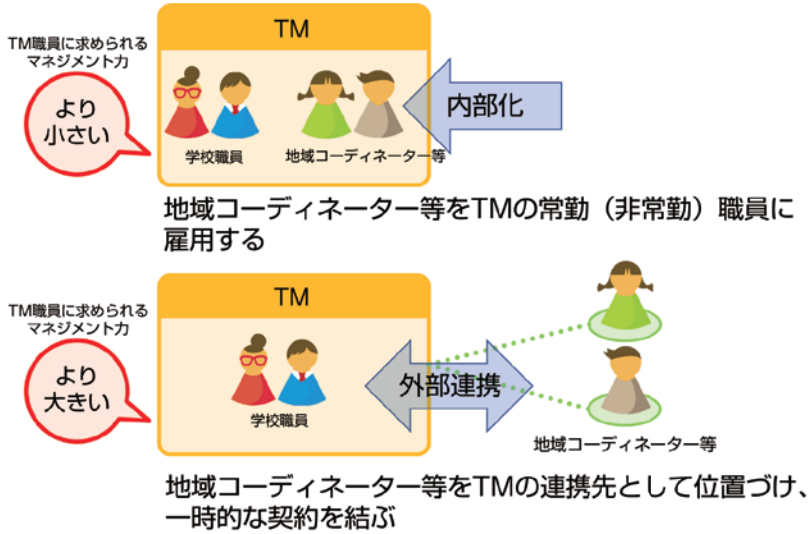


図 18　地域のキーパーソンを TM にどう取り込むか（神山資将作図）

構築の方法としては大きく二つの方策があります。一つは地域のキーパーソンを TM に内部化するという方法です。この場合、キーパーソンを内部化する方法（例えば勤務形態等）を考慮する必要がありますが、内部化することで、校内人材が連携機能を持たない場合でも、TM の機能を強化できます。もう一つは、キーパーソンを外部の連携相手として位置づけ、TM に連携機能を持たせるという方法です。この場合、校内人材にある程度の連携機能が期待されます。

地域コーディネーター等の位置づけ

各府省をはじめ各分野で、地域をつなげ、地域に活力を持たせるための地域づくり人材の育成が行われています。また、これらの制度的な流れとは別に、地域コミュニティにおいてつながりの中心的な人材は存在すると思います。これらの人材は CCP にとって重要な存在です。地域コーディネーター等の人材とつながることで、CCP が促進されることはいうまでもありませんが、何よりも教員が学生のサポートにより多くの配慮ができるようになり、教育的効果の向上が図られるでしょう。

Tips：「地域コミュニティで役立つ価値創造の場はどうやってできるのか」

地域コミュニティで価値を創造できる場（プラットフォーム）が生まれる過程には大きく三つのかたちがあります。

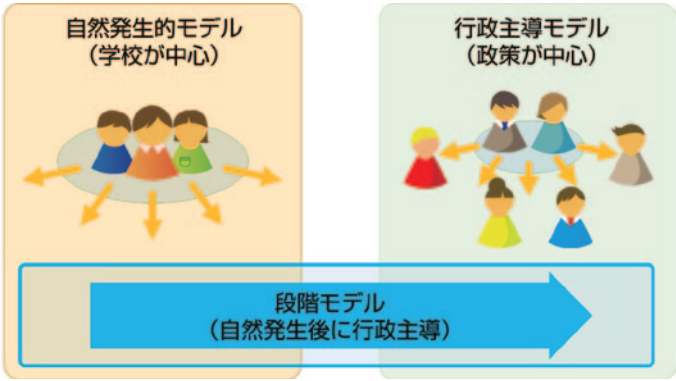


図 19　地域コミュニティで価値創造できるプラットフォームの成り立ち（神山資将作図）

一つは「自然発生的」にプラットフォームが形成されるというモデルです。自然発生的にプラットフォームができた代表例は、シリコンバレー（Silicon Valley）でしょう。シリコンバレーには、スタンフォード大学からスピンアウト（spin out）した教員や学生等が、大学で得た成果を基にして起業したベンチャー企業が集積したことで産業基盤が形成されました。Silicon Valley のように、自然発生的なモデルは教育機関の周辺に形成されることが多いです。

二つ目は、「行政主導」でプラットフォームが形成されるというモデルです。代表例は、米国テキサス州のオースチン（Austin）です。他にも、多くの国で地域づくり政策としてプラットフォーム形成が推進されています。たとえば、英国の Innovative Clusters Fund やフィンランドの Center of Expertise プログラムなど行政によるプラットフォームづくりは有名です。

三つ目は、プラットフォームが自然発生的に形成された後、行政などによって政策的に整備されるという、自然発生的モデルと行政主導モデルを段階的に適用する「混合」モデルです。自然発生的にプラットフォームが形成され始めた地域に、その取り組みを評価し、行政が支援をすることで、優秀なプラットフォームを効率的に創出することができるという利点があります。

世界各国のプラットフォームづくりの多くで教育機関が中核的な役割を果していることから、地域のイノベーションシステムにおける教育機関の貢献は重要です。地域コミュニティとの協働、専門性を持った卒業生（教員）の輩出、ベンチャー企業の輩出・集積など、教育機関は地域のイノベーション創出を促す多面的な機能を果たしています。

介護福祉士養成校を中核としたプラットフォームも、地域コミュニティの価値創造において重要な役割を果たすことが期待されます。

chapter

4

CCP 運営の実際：支援マネジメント

4.CCP 運営の実際：支援マネジメント

CCP 活動を支援するためのマネジメントをどのように進めればよいのでしょうか。CCP 活動を支援するためのマネジメントは大きく、四つの側面から実施します。TM はこれら四つのマネジメントを実施する必要があります。

一つ目の側面は、「溶け込みマネジメント」で、地域コミュニティとの持続的なつながり関係を構築・維持するするマネジメント活動です。二つ目の側面は、CCP 活動を直接的に支援するための「実践マネジメント」があります。これら二つのマネジメントは、地域コミュニティとの密接なつながりを前提としたものです。三つ目の側面は CCP 活動を安全に実施するための「リスクマネジメント」です。四つ目の側面は、CCP の活動成果を社会的波及効果に結びつけるための「専有可能性マネジメント」です。

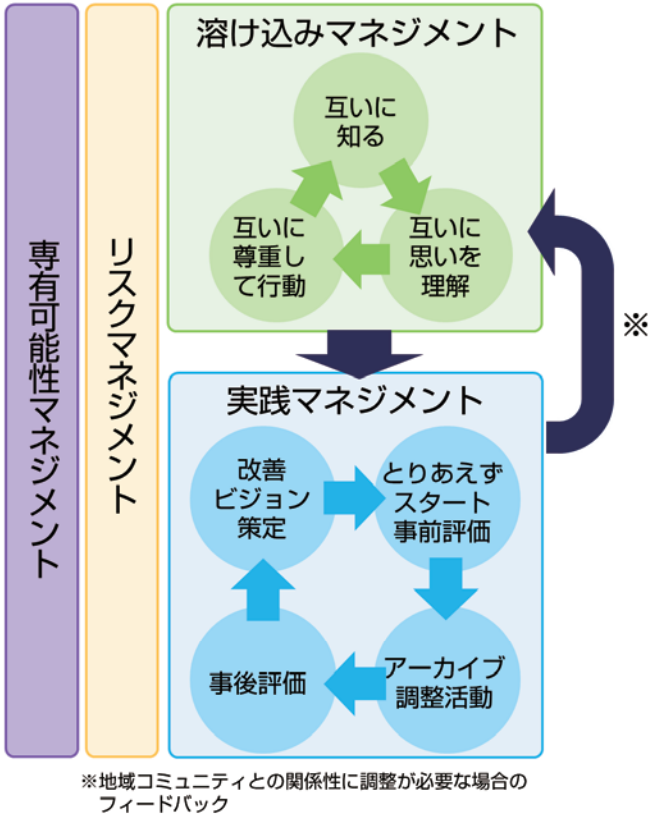


図 20　CCP の運営プロセス（神山資将作図）

4.1.溶け込みマネジメント

地域コミュニティと学校がつながり、ともに課題を解決していくためには、「溶け込む」という素地を用意しなければなりしません。学校が地域に溶け込むことはどのようなことでしょうか。事例とともに考えましょう。

学校が地域で活動するときには、何よりも地域コミュニティが学校や学生の活動を理解し、共感してくれる必要があるでしょう。学校が地域に溶け込むことが、地域課題解決プロジェクトの準備となります。学校が地域に溶け込むためのステップを踏んでいきましょう。

地域と学校（学生）がつながり、価値をつくりだしていく前に、学校（学生）は地域に溶け込んでいる必要があります。「互いに相手を認識し」「互いの思い（考え）を理解しようという態度」になること、そして「互いが相手の思い（考え）を尊重した行動を採る」という流れで学校、教員、学生、地域コミュニティの間の雰囲気を醸成しましょう。

信頼としてのつながりを醸成するためには、他者理解や対人関係形成の能力や具体的方法を、活動参加者が保持・向上しておくとよい。人々と信頼関係を築くためには、様々な知識がすでに存在します。そうした知識を獲得し、実践することで、信頼関係は高まり深まります。

互酬性規範としてのつながりを醸成するためには、人々が力をあわせて行動するための準備活動が必要となります。人々がぜひとも、関わりたい、参加したいと思える魅力ある活動の設定が重要です。つながり醸成の中では、お互い様の規範を高めることが有効です。

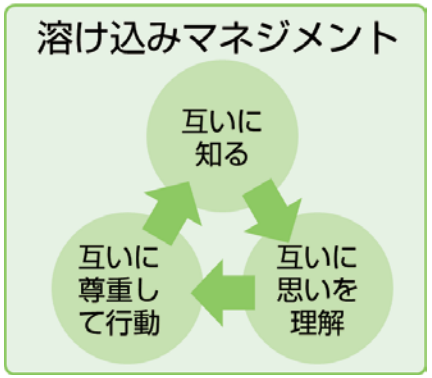


図 21　溶け込みマネジメント（神山資将作図）

4.1.1.ステップ①「互いを知る」

溶け込むための具体的なステップとして「互いに相手を認識」しましょう。学校（学生）は地域に自分たちが「どのようなひとで、何をしたいのか」伝えられる機会をつくりだします。同時に、地域が「どのような課題を抱えていて、何を欲しているか」知ることができる機会を学校としてつくりだしましょう。

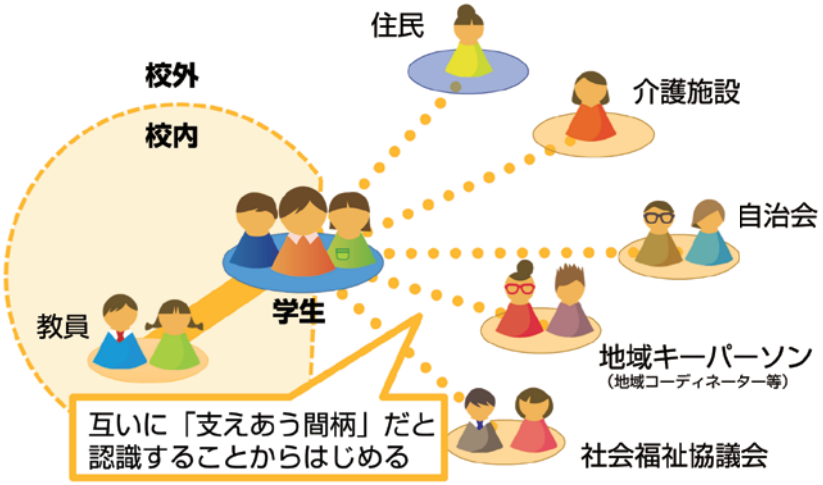


図 22　溶け込むためのステップ①の目標（神山資将作図）

生きる力と触れ合うことで、モチベーションが生まれる

地域コミュニティの住民の生活の場面に触れ合うことで、学生は何を感じるでしょうか。地域コミュニティの住民といっても、それは一様なとらえ方ができるものではありません。一人一人、全く異なる個性とのかかわりになるはずです。「地域住民はこういう人です」という類型論的な世界観は実際には存在しないことを学生は知るでしょう。

地域コミュニティでリアルに人間が生きる力を間近で見ることで、学生の単調な世界観は変化するでしょう。複雑な、一人一人異なる生き様が学生に介護を志すモチベーションを高めることになるでしょう。

つながることで学ぶことができる

地域コミュニティの住民とつながることで、学生は自分と切り離された介護の生の姿を垣間見ることができます。住民とのたわいもないやりとりの中で、学生が気づくこともあるでしょう。

実際に高齢者とかかわることで、様々な感情を学生は持つことになるでしょう。最初は話すこともできないかもしれません。地域コミュニティとつながることは、学生が地域コミュニティの住民に何かをするだけの活動ではなく、地域コミュニティとの関わり合いの中で何かを学び取る大切な機会なのです。

つながることで求められる介護の姿を学ぶ

地域コミュニティの住人の中でも最も多くかかわることになるのは高齢者です。高齢者は介護を志す学生にとって、将来の利用者と二重写しになる人々なわけです。

高齢者とかかわる中で、介護に対する高齢者のニーズを明確に認識することもあるでしょう。かかわりの中で「こういう手助けをしたい」という感情が沸き起こることもあるかしれません。

地域コミュニティのニーズを探る

地域コミュニティは、基本的に閉じているシステムとして存在しています。この閉じている状態こそが、コミュニティ内にいるひとびとに安心感と帰属意識、相互扶助といった連帯感をもたらしてきました。しかし、古代の社会であればいざ知らず、現代において地域コミュニティの境界は極めて薄く、あいまいなものとなっています。地域コミュニティは境界の内と外を完全には切り分けることはできず、その境界はますます薄く、あいまいになっているのです。地域コミュニティの境界が薄く、あいまいになればなるほど、帰属意識や連帯感は薄れ、地域コミュニティの弱体化につながっていきます。介護や育児といった地域コミュニティが一定の役割を果たしてきた機能を大きく低下させることになっているわけです。

地域コミュニティと介護

地域コミュニティは、「人間がそれに対して何らかの帰属意識をもち、かつその構成メンバーの間に一定の連帯ないし相互扶助（支え合い）の意識が働いているような集団」と定義されています。

・ 稲作等を中心とする農村の地域コミュニティは、生産コミュニティと生活コミュニティがほぼ一致。
・ 高度成長期を中心とする急速な都市化・産業化の時代において、両者は急速に分離。
・「農村型コミュニティ」は、共同体に一体化（ないし吸収される）する個人。（情緒的ないし非言語的なつながりがベースに、一定の同質性が前提）
・「都市型コミュニティ」は、独立した個人と個人のつながり。（共通の規範やルールに基づくもので、言語による部分の比重が大きく、個人間の一定の異質性が前提）
・ 共通の価値観に基づくテーマコミュニティと伝統的な地縁型等の地域コミュニティは、今後、あらゆる場面で交差していくことが考えられる。

学校が位置する地域コミュニティが抱える課題を知ることから始めましょう。地域の課題には、負の側面ばかりではなく、可能性につながるものもあります。

地域コミュニティが抱える課題を知るという試みは多様な分野で行われてきました。しかし、あなたの学校は行政でも社会福祉協議会でもないわけです。本務はひとを育てることです。

よって、地域コミュニティの課題といっても網羅的・包括的・論理的に完全なプランニングを実現することは難しいでしょう。常に学生を育てるという視点から、展開可能なものに限られます。しかし、それは不完全さを意味するものではなく、介護の学校だからこその発想にこそ、大切な意義があるのです。

教育機関からとらえる課題とは何でしょうか。それは学校が育てたひと「学生」が見つけ出す課題とそこに見出すことができるみらいなのです。地域課題解決プロジェクトでは、一般的な地域調査ではない、今生きる学生が、今の感覚で見出した新しいイノベーションを大切にしていきましょう。

学校を核とした地域コミュニティの活性化は、CCP の質に依存します。CCP は、地域コミュニティにおける人々のつながり（ソーシャル・キャピタル、社会関係資本）を前提としますが、同時に CCP がつながりを生み出し、強くするものです。ソーシャル・キャピタルとは、「調整された諸活動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴」です。

教員の悩みを解消 Tips:「ニーズ思考〜地域コミュニティのニーズを考える道具」

「地域コミュニティのニーズを読み取れない」と教員が悩んでいるのであれば、ニーズ思考という視点から考え方のツールを提案してみましょう。ニーズ思考とは、「対象者のニーズを理解し、そのニーズを起点として発想する思考法」をいいます。

ニーズ思考は「観察すること」からスタートします。対象となる人や集団(この場合であれば、地域コミュニティのひとびと、組織、団体等)をよく観察することから始めます。何を観察するかというと、物理的な側面から観察をはじめます。物理的な事象から観察をはじめて、次に、その物理的な事象の背後にある意識や経緯、ひとびとの思考についての仮説を立てます。物理的な側面から順にひとびとの意識や考え方の傾向を理解して、地域コミュニティのニーズを紐解いていくわけです。

ただし、綿密に観察し、周到に思考してニーズを紡ぎ出したとしても、それはあくまで、「仮説」を積み重ねたうえでの「アイデア」に過ぎず、常に現実の地域コミュニティの状況との照合を行いながら、現実との乖離がないかを確認しながら思考を進めなければいけません。そして、紡ぎ出した「地域コミュニティが持っているニーズ」について、このニーズにどのような提案が可能なのかを考えることになります。

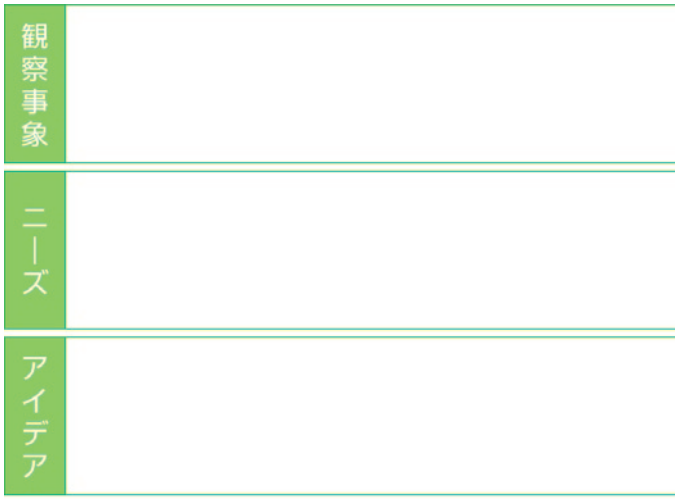


図 23　ニーズ思考の枠組み(神山資将作図)

一般的には、「図 23　ニーズ思考の枠組み」のようなシートを用意して、観察事象からニーズを発想し、そのニーズに応じたアイデア(解決提案)を案出するという流れです。

教員の悩みを解消 Tips:「地域コミュニティにとって学生との協働はどんな利益があるか」

「時間もないので、学校や学生さんと協働する余裕はないよ」といった地域コミュニティのひとびとの言葉に教員がくじけそうになることもあるでしょう。そのようなときに TM はどのように対応するべきでしょうか。そもそも、そのような地域コミュニティのひとびとの意見は正しいのでしょうか。

学生と地域コミュニティの協働による数々のまちづくりプロジェクト(「参画型デザイニング」)を推進した蓮見孝は、10 年以上にわたる参与観察研究の結果、「実践的プロジェクトをとおして、共通に観察された参画型デザイニングのもっとも特徴的な効果は、交流活動から生まれる『コンビビアル性』である」と述べています。

イヴァン・イリイチが提唱したコンビビアル(convivial)という概念は、日本語では「共愉」とも訳されます。愉快な、自立共生的な、楽しい、宴会の、懇親的な、といった意味を表します。

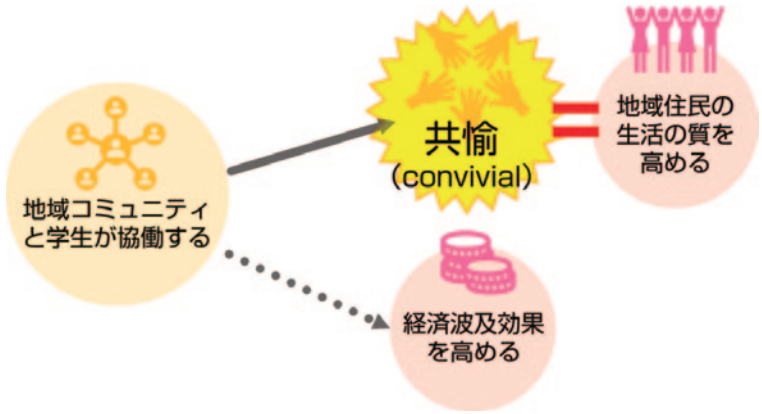


図 24　学生と地域コミュニティの協働の効果(神山資将作図)

「現代社会では、あらゆる活動の成果を経済波及効果という一元的な尺度で計ろうとしがちだが、プロジェクトの実践をとおして、参画型デザイニングには生活の質を高める効果があることが観察できた」と蓮見はいいます。

参画型デザイニングが、プロジェクトに参画した人の心的環境の形成にどのように作用しているかを評価・検証するために、蓮見らは専用のアンケートツールを作成してアンケート調査を実施し、その結果を分析しました。アンケート調査ではプロジェクトにかかわる前の状態と後の状態とを比較しながら答えてもらい、プロジェクトを通じてQOLにどのような変化があったのかを調べられるようにしました。プロジェクトに参画していない人については、プロジェクトに相当する期間を考慮し、3〜4年前と比べた今のレベルを問いました。

調査の結果、プロジェクト非参画者については、各質問とも、3～4 年前のレベルと比較してほとんど変化がみられませんでした。しかし、プロジェクト参画者の場合には、プロジェクトの前後で顕著にポジティブな変化がみられました。

「プロジェクトの経過をとおして、一般生活者に潜在するさまざまな能力が発掘できた。人は、生まれながらに備わった個性や長い人生をとおして培われた多様な特技や固有の価値観を持っており、それらを活かしあえる適切なプラットフォームが形成されれば、そこで発揮される能力の総体は大きな地域資産となりえるはずである。とくに、そのような生涯学習的性格を有する活動は、少子高齢化が進む地域を支え魅力化するための大きな力となる可能性を秘めている。」（蓮見、2009）

引用文献

蓮見孝『地域再生プロデュース：参画型デザイニングの実践と効果』、文眞堂、2009 年、pp252-267

4.1.2.ステップ②「互いの思いを理解する」

「互いの思い（考え）を理解」しましょう。学校（学生）は地域コミュニティのみなさんの思い（考え）を理解するために交流の中から整理していきましょう。同時に、地域コミュニティのみなさんに学生や教員の思い（考え）を理解してもらえるような発信をするように努力しましょう。

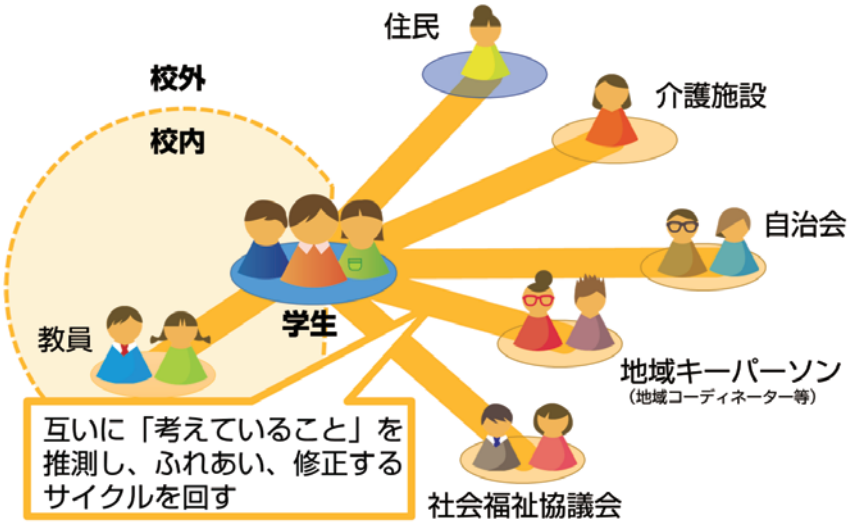


図 25　溶け込むためのステップ②の目標（神山資将作図）

学生の気持ちと地域コミュニティの気持ち

地域コミュニティの中に学生が出ていき、活動するということはさまざまなリスクにさらされることになります。学生が何か事件や事故を起こす加害者となることがある反面、事件や事故の被害者となることもあります。あなたの学校がその際にどのようなスタンスで行動するべきかの視点は、今後の地域コミュニティとのかかわりに大きな影響を及ぼします。基本姿勢を整え、学生の権利を守りつつ、地域コミュニティとの共生をどのように保持していくべきか方針を立てましょう。

教員の悩みを解消 Tips:「デザイン思考～同じ課題事象でも、課題定義が変われば、解決策も変わる」

教員が考える地域コミュニティとの協働プランがうまくいかないと悩んでいるとしましょう。確かに、考えたアイデアがスマッシュヒットする(地域コミュニティで受け入れられる提案になる)ということは難しいことです。そもそも、地域コミュニティは相互に水平な関係で構成されており、その上、背景とする考え方が千差万別のひとびとや組織から成り立っています。そもそも地域コミュニティとしての連帯感も失われているかもしれません。地域コミュニティの活動に参画することにも消極的なことも考えられます。そのような環境で、スマートにCCP活動を進めるなどということは望むべくもないでしょう。拒絶や異論は当たり前のことだと教員を励ます必要があります。

そもそも正解もないことですから、地域コミュニティから拒絶されても、異論が出たとしても逐次改善を重ねてCCP活動を推進することが教員には求められます。

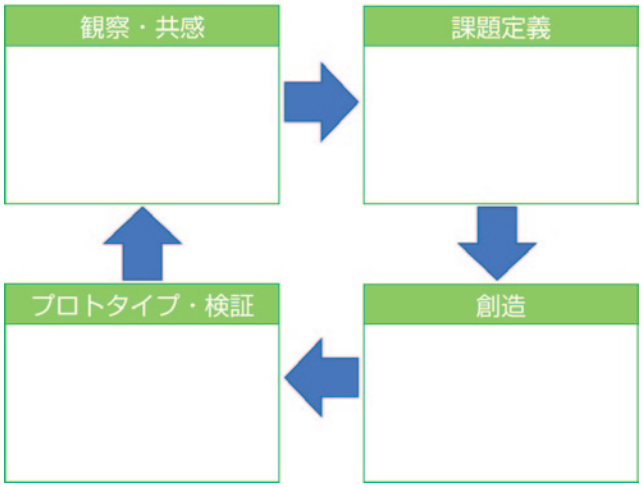


図 26　デザイン思考の枠組み

その際に、役立つ道具が「デザイン思考」です。デザイン思考とは、デザイナー(設計者)の考えの進め方やアセスメント方法を使って対象のニーズを探る思考法です。デザインするときに、ユーザの経験を最適にするために課題を解決するべきかを考えます。デザイン思考では、プロトタイプを作成して実際にユーザに検証してもらうところを観察することが重要なポイントです。

課題を解決するという大きな枠組みではなく、小さなプロトタイプを小刻みに繰り返すので、地域コミュニティと学生が連携に最適な思考法といえます。

教員の悩みを解消 Tips:「地域のキーパーソンを発掘・育成する」

地域コミュニティの住民の多くは、それぞれの地域の内外で、何かしらの職業や社会的役割を担っている状況にあると想定されます。そもそも地域コーディネーター等のように、キーパーソンとして活動してくれる人材、地域の支え合い人材を発掘する必要があります。「図 27　地域コミュニティの支え合い人材の構成」に示すような、地域にすでに存在する支え合い人材を積極的に活用することがTMには求められます。

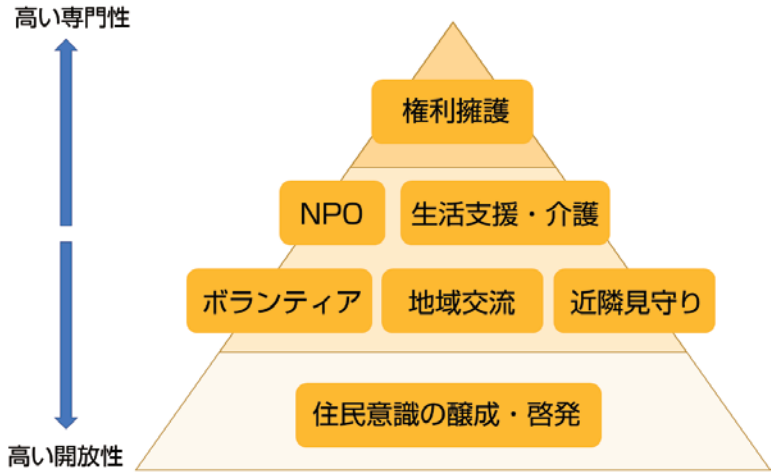


図 27　地域コミュニティの支え合い人材の構成(神山資将作図)

TM の努力に反して、このような地域のキーパーソンが協力してくれないことも想定されます。その場合には、学校の活動と連携してくれる人材を新たに確保する必要があります。しかし、前述したとおり、まったく新しい人材を発掘するのは困難でしょう。ただし、すでに地域支え合いの開放的な位置づけで活動している人材、例えば、ボランティア活動に参加しているひとや、近隣見守りに協力してくれているひと等は、新たに専門性を高めて地域のキーパーソンとして育ってもらう可能性があるかもしれません。

地域コミュニティの中心的人材(中核的人材)となって活動できるような人材の発掘・育成を介護の学校が担うという選択肢も考慮しておく必要があるでしょう。本来は、育成している学生が卒業し、そのような地域のキーパーソンになってくれることが望ましいですが、長期的視点に立つ必要があります。短期的に地域のキーパーソン担ってもらう人材の確保を行うことも視野に入れることは不可欠でしょう。さらに、このような人材を育成することは、介護の学校が地域コミュニティへ貢献することにもなると考えられます。

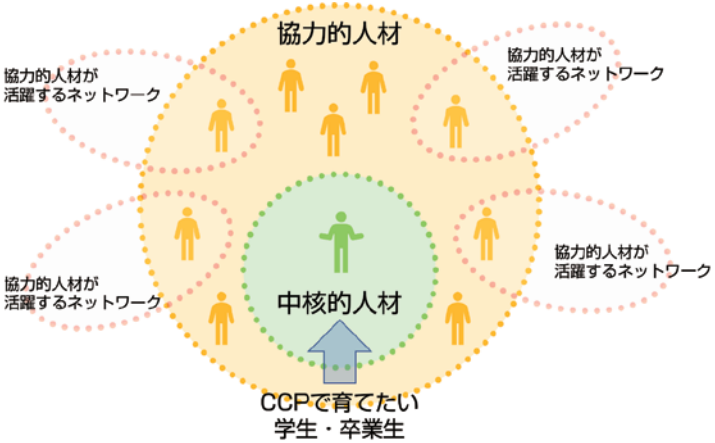


図 28　地域の中核的人材と協力的人材（神山資将作図）

また、地域のキーパーソンといった、活動の中心的な人材のみならず、各分野でそれを支え、協力してくれる「理解的人材」の発掘・育成も重要でしょう。このような人材の育成を介護の学校が率先して進めることで、CCP活動への理解者・協力者を増加させると思われます。

地域のキーパーソンの候補は、必ずしも当該地域コミュニティ内の人に限る必要はないでしょう。地域コミュニティの外部から適切なひとが見出せるのであれば、地域のキーパーソンとして活動してもらうためのエンパワメントを可能にする方策を企画するとよいでしょう。

長寿命化によって、人々は「教育・仕事・老後」という三つのライフステージが順次進む、単線モデルではなく、複線モデルで進むマルチステージの人生を送るようになると考えられています。これは、人生が 100 年にも及ぶという時間的な余裕が生まれたことで、与えられた時間を効率的に有意義にする方策であるといえるでしょう。このようなライフステージ観を基に考えれば、地域コミュニティにおけるさまざまな活動に参画する住民、地域コミュニティ外のひとが増えることが期待できるでしょう。

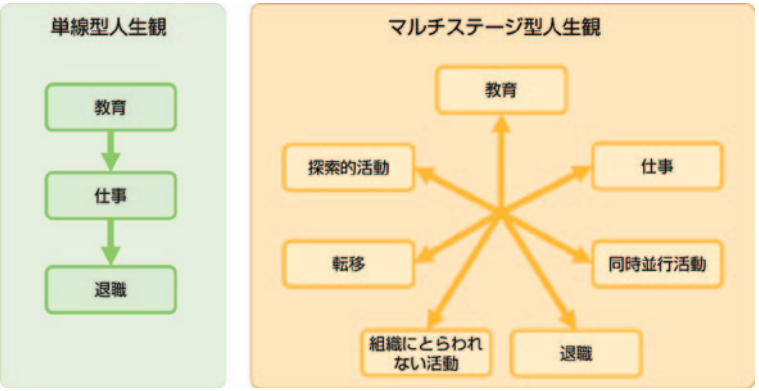


図 29　マルチステージ型人生観（Lynda Gratton& Andrew Scott.2017 を基に神山資将作図）

参考文献

HOT SPOTS MOVEMENT 2017 ® SLIDE 9 Source: Lynda Gratton& Andrew Scott. (2017). The Corporate Implications of Longer Lives. MIT Sloan Management Review

学校と学生、教員が持つリソースから展開するアイデア

CCP 活動に集うさまざまなアクターは、それぞれが持つリソースを持ち寄ってきます。学校や学生、教員が持つリソースは地域コミュニティにどのようなメリットをもたらすことができるのでしょうか。地域コミュニティに貢献できる学校や学生、教員の可能性を考えてみましょう。

そもそも学校や教員、学生が持つリソースのうち、地域コミュニティの課題解決に役立つリソースの割合は小さいです。さらに、学校、教員、学生の協働の中で整合性のあるかたちで共存できるリソースはさらに限定されます。このように、リソースのうち、地域コミュニティに役立つようなものは小さく、収斂されます。

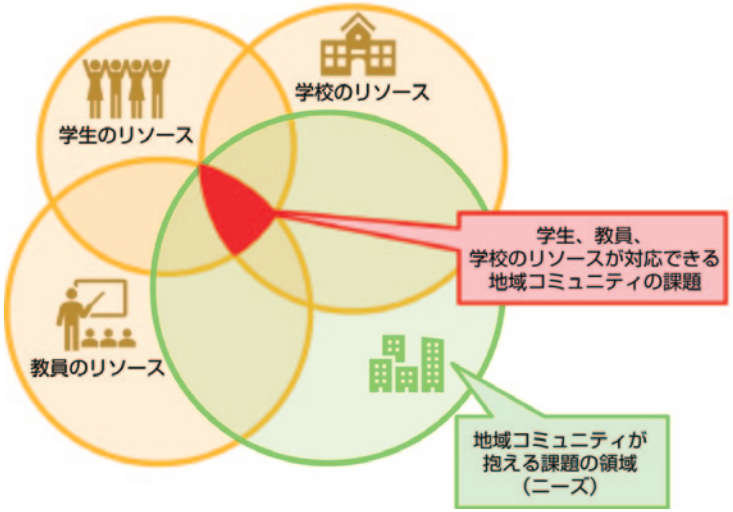


図 30　各アクターのリソースと地域コミュニティの課題（ニーズ）の対応（神山資将作図）

だからといって、「活用できるリソースが少ないから･･･」「地域コミュニティに役立つようなリソースがそもそもないから･･･」といって、何もできることがないわけではありません。

ニーズとリソースのマッチングを行い、そこから有望なリソースを探し出したとしましょう。それがどのように小さい、たわいのないようなリソースに見えたとしても、それは大切な「ニーズに合致したリソース」です。ましてや、ニーズに合致したリソースがなかったとしても、それに準じることができるリソースを探し出すことでスタートするべきでしょう。

なぜならば、どんなに理想的な「ニーズに合致したリソース」だといっても、それ自体で地域コミュニティの課題を解決できるようなものではないからです。そもそも、そんなに簡単にマッチングができ、地域コミュニティのためにに展開できるのであれば、すでに実施されているはずだからです。現状、課題があり、それが解決されていないのは、そこに障壁や容易な解決方策が見出せないからにほかありません。

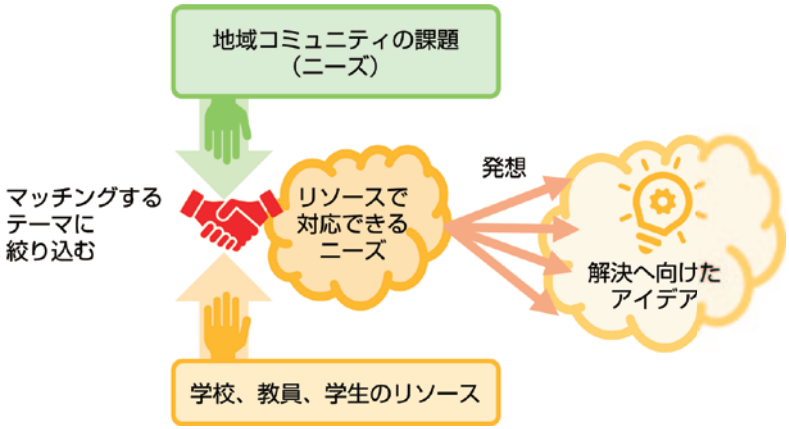


図 31　地域コミュニティの課題解決の絞り込み（神山資将作図）

有望なリソースがあっても、それをそのまま地域コミュニティに投入すれば、改題が解決することはありません。必ず「解決に向けたアイデア」という媒介がなければ、課題解決には至りません。だからこそ、「小さなリソース」でも、「ぴったりでないリソース」でも、それをきっかけにして「解決に向けたアイデア」を考えなければいけません。

このアイデアを考案するのは、教員でも、TM でも、地域コミュニティの誰かでもよいわけです。これら全員が集まって考えてもいいでしょう。どちらにしても、リソースそのもので活動の成功不成功が決まるものではなく、多くの CCP 活動では、アイデアを考え出すプロセスとして CCP の活動が位置づけられるといったものが多くなるでしょう。

CCP の活動を通じて、地域コミュニティの課題を共有し、互いに何かできないかと、活動を通じて考えることで、その蓄積から、課題解決のアイデアが案出されるのです。

教員の悩みを解消 Tips:「リソース思考～学校や学生のリソースを起点にして考える道具」

「学生や私たちが，地域コミュニティに貢献できるリソースを持っているのだろうか」と教員が不安に思うこともあるでしょう。学校は一般社会とは切り離された空間であるという意識が長らく広まっていました。そのため、実社会で学校や学生、さらに教員が通用するのだろうか?という自己効力感が低い精神状態に陥ることも多いです。

そのような教員に対しては、TM は客観的に分析することを勧めましょう。その際に役立つのが「リソース思考」という道具です。リソース思考とは、自分が持っているリソース（資源）や強みを起点として、そのリソースで解決できることは何か（課題）を探すというものです。さらに、その課題をどのように解決したらいいのかというアイデアを発想します。

リソース思考の起点は「保有するリソースや強み」です。リソースには、「人」「スキル」「設備」「資金」「ノウハウ」「マネジメント」「連携関係」などがあります。学校、教員、学生のリソースを棚卸し、そこから対応できる課題を見つけ出し、その課題解決に向けたアイデアをたくさん考えてみるというシミュレーションを行うことで、自己効力感が向上するでしょう。

図 32　リソース思考の枠組み

教員の悩みを解消 Tips:「共感図～地域コミュニティのひとと学生が互いを理解するための道具」

教員が CCP 活動の中で、地域コミュニティのさまざまな背景を持ったひとびとと、学生たちが互いに理解しあうためにはどうしたらよいかという悩みを持つことも多いでしょう。TM は、これらの教員の悩みをサポートしていく必要があります。その時に提案できるツールとして「共感図」というものがあります。この共感図とは、対象者や対象物が置かれている環境や心理的状態を理解するための思考の枠組みです。共感図は、「共感図法」や「共感マップ」「エンパシーマップ」等の名称でも呼ばれます。

この共感図を作成することで、理解しようとする対象（人、モノ）の置かれている状況や心理状況をより正確に分析・把握し、協働の設計を効果的に進めることができます。この共感図の作成方法やツール類を教員に提案することで、立場の異なる CCP 参加者の相互理解を促進することができるでしょう。

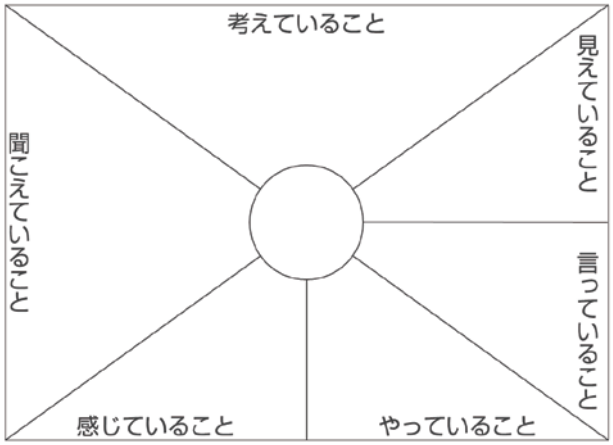


図 33　共感図の枠組み

4.1.3.ステップ③「互いの思いを尊重して行動する」

「互いの思い（考え）を理解」した上で、「相手の思い（考え）を尊重しながら、自分の行動を調整する」段階です。学校（学生）は地域コミュニティのみなさんの思いを理解した上で、自分たちの行動を調整することができる意識を育てます。同時に地域コミュニティのみなさんにも学生や教員の思い（考え）を尊重して行動してもらえるような機会を提供していきましょう。

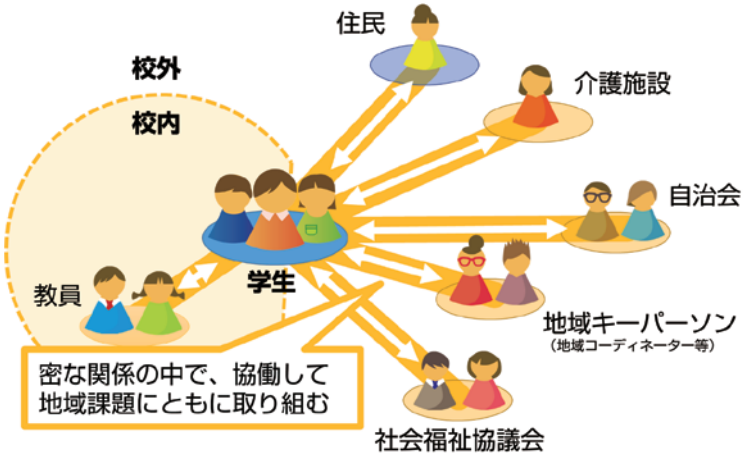


図 34　溶け込むためのステップ③の目標（神山資将作図）

CCP を通して、地域コミュニティ、学生、教員、そして学校も「お互い様だから･･･」と納得できる関係が築けたとき、相互のつながりは広がり、深まったといえるでしょう。

CCP をきっかけとした地域コミュニティと学校のつながりを醸成する過程では、各アクターに負担感が発生することも想定できます。通常、このような負担感は、目的性、自律性、関係性が欠如する状況で発生すると考えられます。

何のために CCP に参画参加しなければならないのかわからないといった、目的が明確でない場合には、負担感が生じることでしょう。参加したくない CCP をやらされていると感じているならば、負担感はかなり大きなものとなるでしょう。さらに、CCP に参加している人々との関係が良好に形成されていないのであれば、一緒に活動したくないと感じて負担感は大きくなります。

共創するということ

地域コミュニティと介護の学校がつながり、活動する中で互いが理解し、新しい価値をつくりだすという現象は、互いの思いから新しい価値を共に創造すること（共創）です。共創とは、互いの思いや考えを理解した上で、それを踏まえた行動を互いが採ることで、生じるコミュニケーションを前提にしています。そのうえで、「共に」何かを「創造する」ことが共創です。シュンペーターによれば、創造（イノベーション）とは「新しい組合せ」です。「ある価値観に合致するもの」を「共に」「新しい組合せ」として

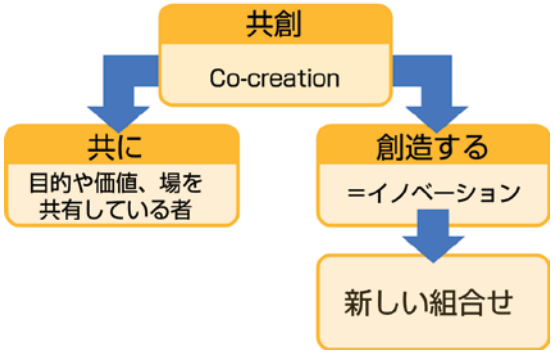


図 35　共創とは何か（神山資将作図）

共創が行われることを目的につくられた環境では、さまざまな価値が生まれるでしょう。価値とは、そもそも人間がつくりだした概念で、普遍的な価値は存在しません。常に価値を判断する主体がいなければいけません。共創した価値は、共創した主体たちが必要と感じたものですから、地域コミュニティにおける大切な資産として蓄積されていくでしょう。

図 36　共創のカオス状態（神山資将作図）

共創という現象は勝手には生じない

共創という現象は、勝手に生じたりすることはありません。適切に設計された環境がなければ生じないものです。三人寄れば文殊の知恵といいますが、共創という視点からいえば、カオスが生じるだけだといえます。バラバラな背景を持ったひとびとが集まり、勝手に創造活動が結実するという期待は楽天的すぎるでしょう。

ひとびとが集まって何か活動するとすれば、そこはカオスになることが前提だと、TMの担当者も教員も理解しておきましょう。

学生のみらいを描く

学生は、介護という地域コミュニティの大切な資源を担うみらいの可能性であるといえるでしょう。その学生の成長モデルをどのように学校が捉えているかが、これからのあなたの学校の可能性を左右するかもしれません。学生は卒業後、介護施設・介護事業所に入職し、その中で専門職として成長していくという単線的なものでとらえるばかりではなく、多様なルートを考える必要があるでしょう。

介護は確かに人間的な業務ですが、それは人間性を基礎にしたサービス（ケア）に終始するということではなく、介護をどのように地域コミュニティで維持していくべきかを考えたときに、様々な可能性が生まれてきています。

そのような新しいソーシャルイノベーションのルートも含め、学生のみらいを考え、常に新しい技術や制度を活用する必要が学校には求められるでしょう。

地域コミュニティの介護のみらいを描く

学生が地域コミュニティで活動することの意味は、学生は地域コミュニティの介護のみらいであるからです。日本の多くの地域コミュニティは人口減少、特に若年人口減少といった課題を抱えています。そのような課題を抱えつつ、介護サービスは維持されなければいけないわけです。

地域コミュニティにとって、介護の学校は大切な資源であり、その学生は大切なみらいです。地域コミュニティの介護を支えるのは、基本的にあなたの学校の学生であるということから、地域コミュニティと学校・学生という枠組みのみではなく、学生を学校と地域コミュニティが育てるという枠組みでもあることを理解しましょう。

教員の悩みを解消 Tips：「経験学習モデル～経験を学習に変換する道具」

経験学習モデルは、経験を振り返り、他の場面でも活用できるような知識として理論化する思考法です。一般的に、「経験」「省察」「概念化」「実践（能動的実験）」という流れで過程展開されます。この過程展開を通じて、経験したことから、自分なりの理論や仮説を導き出すことができます。

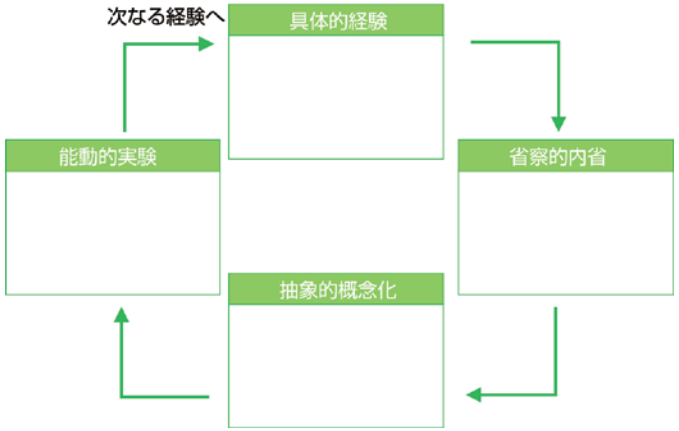


図 37　経験学習モデルの枠組み

省察のプロセスでは、経験をさまざまな視点から振り返ります。省察では、「質問」「振り返り」が繰り返し行われます。経験を整理する上で、質問がきっかけを作ります。その質問に自分なりの回答を作り出すために、自分の経験を客観化して、いろいろな面から捉えなおしていきます。この客観化して捉えなおすことが「振り返り」です。

振り返りの際には、「いつもと同じ視点、価値観で考える」ことを避けなければいけません。「今まで通りでした」「いつもと変わりませんでした」という振り返りは、とりもなおさず、「いつもと同じ視点から物事を見ているから」起きる結果だからです。経験から新しい「気づき」や「展望」を生み出したいのであれば、視点や価値観の切り替えをすることが必要です。

概念化のプロセスでは、経験した場面以外の場面でも応用できるような知識として概念化することが目的です。そのような概念化ができれば、一時の経験は、未知・未経験の場面で応用でき、さらに、他者が使えるものとして伝達可能になります。概念化は省察のプロセスを受けて行われるプロセスですから、振り返った内容を基にして概念化をするわけです。振り返り内容を枝葉の部分を切り落とし、物事の本質的な要素だけを抽出することで概念化が進みます。

教員の悩みを解消 Tips:「ビジョナリー思考〜みらいの展望を描いて、学校・学生・地域コミュニティの方向性をあわせる道具」

学生、地域コミュニティのひとびとの間で、意見や考え方の違いが際立ってしまい、一緒に何かを成し遂げようという雰囲気が生まれないと教員が悩んでいた時、TM はどのように対処したらよいでしょうか。このような事例は程度の軽重はあれ、グループで活動する際には生じる現象でしょう。そもそも、それぞれ別の世界観で生きてきたひとびとが CCP に集い、目的を共有して何かを成し遂げようというのですから、簡単に意見や考え方が一致するわけもないでしょう。

しかし、教員は CCP の限られた期間中に一定の成果を出そうと努力するでしょう。その際に役立つ道具として、「ビジョナリー思考」を教員に提案してみたらいいでしょう。ビジョナリー思考は、みらいの理想像(ビジョン)を展望し、そのビジョンに向かって、現状からどのように行動したらよいかを考え、その方針をみんなで共有する思考法です。

ビジョナリー思考では、「図 38　ビジョナリー思考の枠組み」に現状の自分、グループの「行動」、そしてその「目的」を記入し、そこからみらいの自分やグループが持っていたい「目的」を描き出し、その目的に向かって頑張っている自分やグループの行動状態を記入します。

これによって、自分やグループがみらいにどのような姿でありたいのかを描き出せるということです。地域コミュニティや学校、学生が一つの方向性を共有してつながっていくために役立つ道具だといえるでしょう。ビジョナリー思考は長期的な視点からいまとみらいをつなげて考えることを通じて、多様なアクターが協働することを促します。

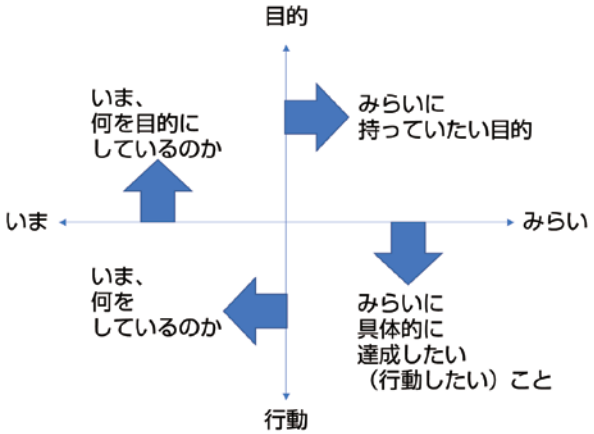


図 38　ビジョナリー思考の枠組み

教員の悩みを解消 Tips:「学校の職員や教員を地域のキーパーソンにする」

地域コミュニティとの溶け込みを進める中で、地域のキーパーソンを学校(TM)のネットワークに取り込めなかったり、そもそも地域のキーパーソンが見当たらなかったりする場合には、地域のキーパーソンを育成することになります。しかし、そのような育成するべき人が集まらない場合、もしくは学校内の教員や職員を地域のキーパーソンとして育成する(内製する)ことも有望な方法です。

組織の構成員を二つのモデルに分けて説明することができます。一つはコスモポリタン(cosmopolitan)型で、コスモポリタンは雇用されている組織に対しての忠誠心(loyalty)が比較的低く、特定の組織に留まることに執着しない傾向があります。専門的な知識を持ち、その知識の自己充足に対して強い関心を持つ、いわば職人志向のモデルです。もう一つはローカル(local)型です。組織への忠誠心が高く、特定の組織内の階層(hierarchy)での上昇を志向する、いわば組織人のモデルです。

医療や介護・福祉といった専門職の多い分野は一般的にコスモポリタンの要素が強いとされていますが、大多数の医療職、介護・福祉職は組織に所属しており、組織内の昇進等の機会を持っています。介護の専修学校の教員の多くは専門職であることが多いですが、同時に組織人でもあります。

コスモポリタン的な教員は地域コミュニティにおける同職間の連携が取りやすいといえます。校内の教員や職員を地域の中のキーパーソンに育成することも有望ですが、その際には、むやみにキーパーソンになってくださいというのではなく、各教員、職員のコンピテンシーを展開することで比較的容易にインセンティブが設計できるような候補者を探索することが必要でしょう。

コミュニケーションネットワークについて調査した Allen(1977)は、専門家集団の中には集団内の誰とでもアクセスを持ち、その上で集団外部とのアクセスも活発であるという、活動における鍵となる人材を見出しました。Allen はこの人材をゲートキーパー(gate keeper)と呼びました。本書では、ゲートキーパーを「キーパーソン」と呼びたいと思います。

人的ネットワークを弱い連結と強い連結という概念を使って説明した理論を踏まえれば、強い連結とは人間関係が密接なことをいい、弱い連結とは人間関係が緩やかなものをいいます。外部と強い連結を持つよりも、弱い連結を持つ方が新規の情報にアクセスしやすいといわれています。学校や地域コミュニティにとって有意義な外部資源にアクセスするネットワークを構築するときには、ネットワークの「密度」よりも、「幅広さ」を基準として、考えたほうが良いといわれています。特定の分野に深くコミットしているよりも、幅広い分野の人や組織と関係を持っている職員や教員の方が有意義な外部資源にアクセスできるということです。

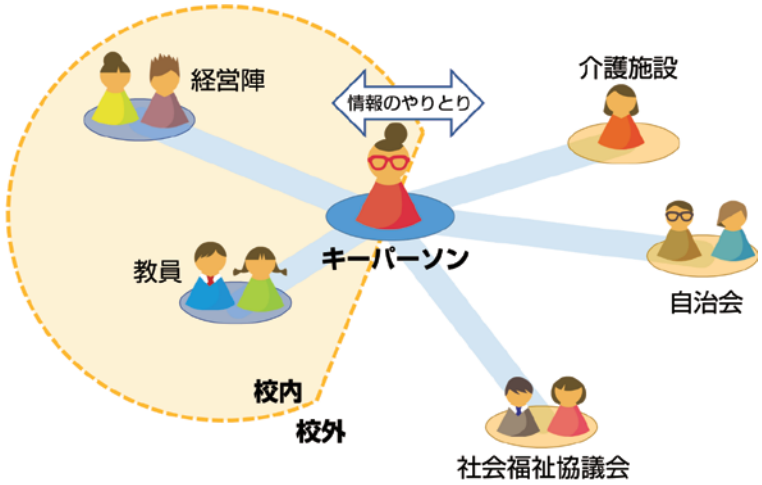


図 39　キーパーソン（Key Person）（神山資将作図）

しかし、この考え方とは反対の理論もあります。「緩やかかつオープンな」ネットワークよりも、「密接かつクローズドな」ネットワークの方が外部の有用な資源にアクセスできるというものです。この論拠は、密接かつクローズドなネットワークではアクター間の信頼度が増し、各アクターが持つ「より深い」「大量の」情報が共有されるという考えに立っています。

この二つの異なった考え方は、それぞれ適用できるケースが異なると考えられています。何よりも「新しく、異分野」の情報を入手したい場合には、緩やかかつオープンなネットワークにアクセスするべきですが、「暗黙知的な情報、機密性の高い」情報を入手したい場合には、密接かつクローズドなネットワークに絞り込んでアクセスすることが有効であるということです。

地域コミュニティへの溶け込みやつながりを担当するキーパーソンとして教員職員を育成する場合、この二つのネットワークを使いこなせるスキルが必要であるといえます。

学んだことは実践することで理解が深まる

学生たちは自分たちが理論で学んできた介護が目の前に展開する場面に立つことになります。地域コミュニティと連携することは必ずしも介護を直接提供するわけではありませんが、地域コミュニティの高齢者とかかわることは、介護の利用者がどのような生活を営んでいるかを肌身で感じることです。

教科書で学んだバラバラな知識は、高齢者とのかかわりの中で統合され、「そういうことだったのか！」と納得することがあるでしょう。

反対に、「どうしてなのか？」と新たな疑問を持つことになるかもしれません。教科書で学んだことは、地域コミュニティでの活動の中で、学生の理解の世界をさらに深め、さらなる学習の芽を育てることになるでしょう。

4.2.CCP 実践マネジメント

CCP活動が成功し、学生が生きた介護を体験し、その中から介護の感性を学び取るためには、どのような支援が必要なのでしょうか?学生が育つ CCP 活動を支援するために、TM はどのような役割を果たすべきでしょうか?

TM が CCP を支援するといった場合、支援する対象者は「教員」です。最終的にメリットを受けるべき存在は学生ですが、TM は教員の教育活動と地域コミュニティとのつながりを支援することになります。

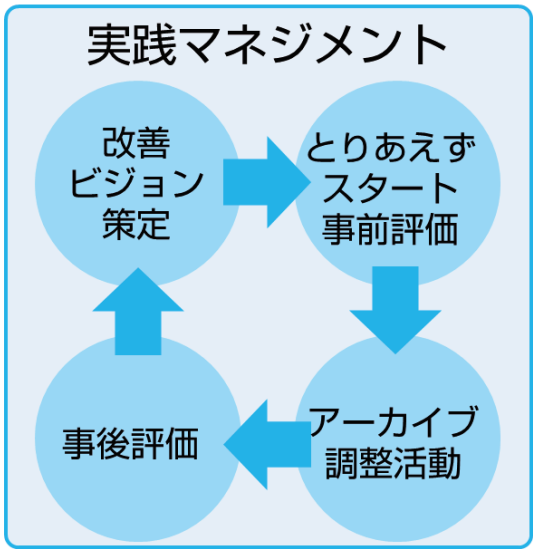


図 40　実践マネジメント(神山資将作図)

いったん、CCP 活動がスタートした後は TM の支援活動は「図 40　実践マネジメント」に示すようなプロセスで運営を行います。この実践ステップはサイクル概念で、CCP 活動が継続する期間を 1 サイクルとして循環します。例えば、CCP 活動が 3 か月で完結するように設計されているのであれば、実践ステップは 3 か月で循環します。

4.2.1.とりあえずスタートしてみる

イノベーションのアプローチに、「とりあえずやってみる」というアプローチがあります。社会科学の多くでは過程展開によって物事を科学的にとらえていこうという考え方が普遍的になっています。しかし、実際に何かを実行するという局面では、過程展開のためのさまざまな構想をしているうちに実行がおざなりになってしまうということがよくあります。

CCP のサポート担当者であれば、当然、CCP が成功するように、過程展開の考え方で、確実なサポートを提供していきたいと考えるでしょう、しかし、その過程展開もスタートが滑り出さなければ、展開することはありません。まずは、CCP が滑り出すことを優先して考える必要があるでしょう。

そこで参考となる考え方が、イノベーションの類型の一つにある「リーン・スタートアップ(lean　startups)」という考え方です。リーン・スタートアップとは、試行錯誤の考え方で、はじめてみようというアプローチです。本来は、何か新しいことをはじめるときに、需要(ニーズ)と供給が合致するかどうかをしっかり調査(マーケティング)して、失敗しないようなしっかりした計画を練るのが普通です。しかし、どんなに綿密に調査・計画しても、不確実性は常にあるものです。どんなに入念に調査(マーケティング)をしても不確実性がなくならないのであるならば、いっそのこと、「やってみよう」ということです。入念に調査計画するアプローチよりも最低限のコストに済むというメリットがありますし、たとえ失敗したとしても、すぐに別の案をスタートさせればいいわけで、短いサイクルで新しい試みをたくさん実施できるため、経験が急速に蓄積できるというメリットまであります。

しかし、このリーン・スタートアップは過程展開をしないというわけではなく、スタートしたことが成功しようと、失敗しようと、その結果を踏まえて、計画の仮説構築・検証のサイクルを繰り返していくことになります。過程展開を踏まえて順次最適化していくことになります。リーン・スタートアップのサイクル(過程展開)は次のようなプロセスからできています。

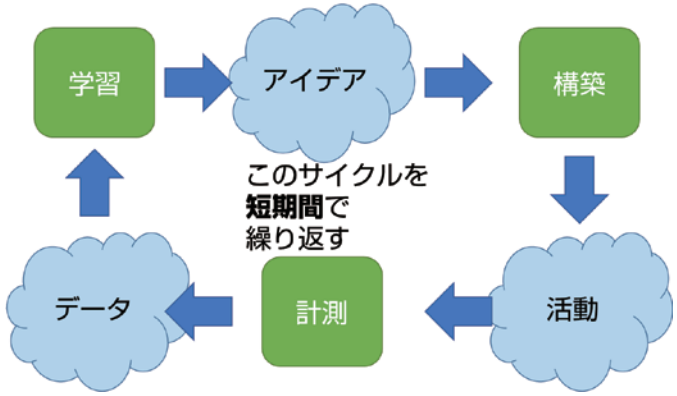


図 41　リーン・スタートアップのサイクル(神山資将作図)

構築（build）

顧客の受容を検討し、仮説を立て、事業やサービスのアイデアをかたちにする。実用最小限の製品サービス「MVP（minimum viable product）」をスピーディに開発・提供する。

計測（measure）

MVP を実際の顧客（新たな製品サービスを早い段階で受け入れ、他の消費者へ影響を与えるアーリーアダプター層へ提供、顧客の感想や問題を解決できたか、仮説が妥当であったのか、提供すべき機能が実現できたかなどを明らかにする。

学習（learn）

得られたデータや顧客の反応を確かめ、改良点を明確にする。このまま開発を続けるべきか、方向転換するかを見極める。

参考文献

エリック・リース（著）、伊藤穣一（解説）、井口耕二（訳）（2012）「リーン・スタートアップ」日経 BP 社

4.2.2.CCP の事前評価

CCP では、地域コミュニティとの溶け込み関係が素地としてあることが前提となっています。そのため、実践される CCP 活動は綿密な計画を練り上げて、準備万端になってから実施するというよりは、溶け込みの関係の中で、「とりあえずはじめてみる」「やってみよう」という精神でスタートすることになります。詳細な調査や計画は省略し、地域コミュニティとの溶け込み関係を基にして、活動を開始することに重きを置いています。

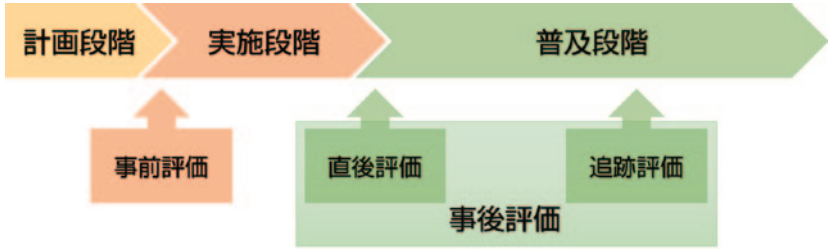


図 42　評価フェーズ（神山資将作図）

そのため、評価のあり方も対応したものとなります。評価フェーズは、評価対象の時間的経過のどの時点で評価するかを区分する概念です。評価のフェーズは通常、「事前評価」、「中間評価もしくは途上評価」、「事後評価」の三つに区分されます。「事後評価」はさらに「直後評価」と「追跡評価」に分けることがあります。

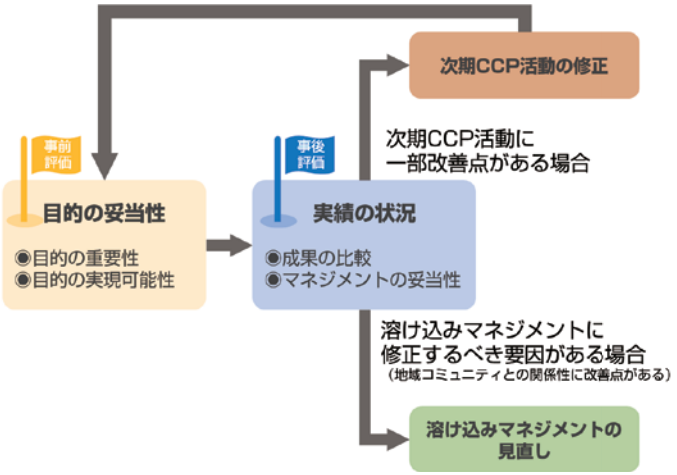


図 43　CCP の評価の枠組み（神山資将作図）

CCP 活動では、事前評価は簡易に行い、中間・途上評価は行わず、事後評価を行うことになります。事後評価は次期 CCP 活動へのフィードバックとなりますし、必要であれば、溶け込みマネジメントへフィードバックし、溶け

込み関係の再構築を図ることになります。

表 5　事前評価の項目

評価項目	評価基準
1. 目的の妥当性 (a)プログラムの目的に対する適合性 (b)プログラムの状況変化に対する適合性	◉プログラムの目的や計画に包摂されているか （予想される大状況の枠内に目的が股定されているか） ◉プログラムの状況が変化している（変化が予想される）場合、それに対応した目的の設定になっているか
2. 目的の重要性（内容の妥当性）	◉期待される成果の意義やメリットは十分か ◎学生の立場からの意義やメリット ◎教員の立場からの意義やメリット ◎教務的な意義やメリット ◎学校の戦略的意義やメリット
3. 目的の実現可能性 (a)計画の妥当性 (b)手法の妥当性 (c)実施者の編成 (d)実施者の能力 (e)実施環境の適否	◉成果を挙げるための手順は適切か ◉成果の実現時期は適切か ◉用いられている方法やアプローチは適切か ◉メンバーの構成は適切か ◉リーダーの指導力は十分か ◉メンバーの能力は十分か ◉実施環境は十分支援的か
4. 実施の可否	◉実施に移すべきか

CCP 活動は「まず実践」という精神で運営するとしても、学生の教育環境を手探りに運営するわけにはいきません。現場生成型の教育環境であるとしても、CCP 活動のスタート前には、活動の目的・内容・効果などについて簡易な事前の評価を行いましょう。

4.2.3.CCP 実践中のアーカイブ・調整

CCP 実践プロセスでは、TM が関与できる余地は小さいです。実践プロセスにおける主役は「教員」と「学生」（校外においては地域コミュニティのひとびと）がとなります。TM の担当者がこの段階で関わる部分は、教員のサポートに限られます。教員との綿密な情報共有、さらに、CCP 実践中の記録を適切に取得し、保存することが主な役割となります。

この記録活動（アーカイブ）は CCP の教育評価において最も重要な客観データとなります。すでに説明したように、CCP は現場精製型の教育（学習）活動であり、学生たちがどのようなパフォーマンスを発揮したのか、教員とのやり取りはどのようなものだったか、地域コミュニティのひとびととのやり取りはどのように行われたか等の評価を行うためにも、客観的なデータを収集する必要があり、TM がCCP実践プロセスにおいて記録活動を綿密に行う必要があるのです。

一言に記録といっても、記録にはさまざまな形態があります。映像や画像、音声で記録できるものについては、比較的リッチな情報を記録することができます。一方、電子メールや SNS での発信内容等のテキスト（文字）、さらに各種様式（レポートや報告書を含む）に記載された内容は実際のパフォーマンスの一部を切り取った断片情報にすぎません。

記録したデータファイルを教員から取得し、個人情報保護に配慮した形で専用の保存メディアに格納する必要があります。音声や動画といったものがない場合は、テキストデータ等の報告書を記録として保管してください。

また、CCP が終結した場合には、TM が保管している記録データが CCP 実施内容をすべて網羅できているかを確認して、ください。保存された記録はアーカイブされ、事後評価や専有可能性マネジメントの際に利用されます。

このような記録アーカイブの役割以外に、教員のサポート（調整）もTMの担当者の役割となります。CCPの実践の運営は教員が第一義的に展開することになりますが、教員では対応することが難しい事項については TM が調整する形で関与してください。

4.2.4.CCP の事後評価

CCP 活動が終結した時点で、事後評価を行います。学生たちがどのように活動し、学習のあり様はどのようなものであったかを評価しましょう。事後評価は、TM が保管している記録を基にして、評価しますが、教員のみならず TM も事後評価には参加する必要があります。

また、必要に応じて、地域コミュニティの代表者（志願者）も事後評価活動に参画してもらうことも有効です。

表 6　事後評価の項目

評価項目	評価基準
1. 実績の状況 （a）成果の内容 （b）成果に対する寄与 （c）コストの内容	◉個別課題毎に、どのような成果が挙がったか。量的側面と質的側面について成果を挙げる （アウトプット成果、アウトカム成果、インパクト成果） ◉個別成果毎の当該案件による寄与率はどの程度か ◉個別成果毎に要した費用はどの程度か
2. 成果の比較 （a）対計画（目標）比実績 （b）対基準年比実績 （c）対類似他者比	◉成果の達成度は計画（ないし目標）と比較した場合どの程度か ◉基準年の成果に対する成果の成長率はどの程度か（対前年比等） ◉類似した他の案件と比較し、成果はどの程度か （ベンチマーク、ランキング）
3.マネジメントの妥当性 （a）マネジメントの枠組みの妥当性 （b）マネジメント手法の妥当性 （c）リーダー等の指導力 （d）メンバーの構成 （e）メンバーの能力	◉マネジメントの枠組みやシステムは適切であったか ◉取り組み方は適切であったか ◉リーダー等の指導性は十分発揮されたか ◉メンバーの構成は適切であったか ◉メンバーの能力は十分発揮されたか
4. 次期活動の継続の可否	◉次期活動として継続すべきか
5. 次期活動の計画の修正 （a）目標の修正 （b）計画の修正	◉修正すべき目標は何か ◉目標をどのように修正すべきか ◉修正すべき計画は何か ◉計画をどのように修正すべきか
6. 目的の見直し	◉当初の目的を見直すべきか ◉目的をどのように見直すべきか

4.2.5.CCP の改善・ビジョン策定

事後評価の内容を踏まえて、次期 CCP 活動の支援における改善点を集約しましょう。

多様な参加者が集い、ともに活動するという環境で学生が責任を引き受けてはたらき、ともに理念を共有し、確認しつつ、自分たちで「現場」を生成していく教育（学習）を、現場生成型教育といいます。現場生成型教育は、学生の立場でみれば、現場生成型学習となります。現場生成型学習は、フィールドワークやアクションリサーチのように、既存の「現場」があり、その現場に第三者として入り込み、調査したり、課題解決をしたりするものではありません。

学生は言うに及ばず、教員も職員も、地域コミュニティ住民や地域コミュニティの組織・団体も高齢者も幼児も現場においては平等で、対等な関係性の中で、当事者として位置付けられています。このような対等な関係性の中で、学生は自らが持つ得意技（専門性）を披露しながら、現場を作り上げていくことになります。

現場生成型学習は、「全体の中に取り込まれる経験」です。教室で行われている一般的な学習では、知識として体系的に整備された内容が、できるだけわかりやすい形で伝達されます。介護の実際は多種多様な状況が想定されますが、教室では「一般化された状況設定」を基にして様々な知識やスキルが伝達されます。

しかし、現場生成型学習では、学生は実際に変化し続ける地域コミュニティの課題の中に取り込まれて、その課題環境の中で、現場を作り出していくメンバーとして、経験を積み重ねることになります。教室で学んでいた「切り出された」「ショーケースの中のこと」だった課題ではなく、今まさに生きている課題の中に飛び込んで、様々な人々とのふれあいの中で現場を作り出す、自分や他者、過去や未来、利益と損害、固定と変化が渾然一体となった経験をすることで、介護がどのような環境の中で働くものなのかを感性として内在化されます。

また、教室では大きく見れば、学生は類似した文化的・社会的な背景を持つといっていいです。確かに、留学生であったり、社会人学生であったり、多様な学生がともに学んでいるとしても、教室におけるロールは「学生」で、その振る舞いにはある程度の枠があります。しかし、現場では、学生は「学生」のロールで振舞うだけでは不十分な場合があります。学生であれば、教員がいて、その指導に従っていればいいということになりますが、現場では必ずしも教員が常に指導できる場所にいるとは限りません。また、ともにはたらく地域コミュニティの人々は、学生が期待するようなサポートをしてくれるわけではありません。教育的配慮もありません。

それと関連して、現場では学生に「モラトリアム（執行猶予）」は許されていません。一般的に学生は社会人とは異なり、様々な社会的な責任から一時的に解放された存在です。学生は教育課程の中にいることを理由に、社会的な責任も減免され、自由な振る舞いが許されています。しかし、現場では学生は学生として特別扱いを受けることはないですし、社会的な責任も果たすことが求められています。

参考文献
林大樹、横田雅弘、菱沼勇介、田中えり子、KF 書籍化プロジェクト（2012）「学生まちづくらーの奇跡」学文社

4.3.リスクマネジメント

学生たちが地域コミュニティで活動するということは、学校による管理下から離れることを意味します。校内であれば、一定の管理が行われた環境（closed environment）で学生は一定の安全を享受できます。しかし、いったん学生が校外で活動するということになると、学校の管理が及ばない開放環境（open environment）にさらされ、危険と接触する機会が増えることになります。

地域コミュニティとのつながりの中で教育を進める場合には、管理者は「十分に管理が及ばない環境におけるリスク」を想定して、安全管理を行わなければなりません。学生たちの活動を支援するうえで、最も重要なポイントの一つはリスク（事故、事件）への対応です。学生の権利を守るとともに、地域コミュニティとの継続的な関係性を踏まえた対処を想定しましょう。

本書で CCP は三つの側面を持った活動であると説明しました。そして、かかわるアクターには、大きく分けて六つの種類があります。これらのアクターの中で事件や事故が起きた場合、それぞれの利害が対立することがあります。そのような場面は起きないに越したことはありませんが、もしそのような場面が生じた時には、学校としての姿勢をリスクマネジメントの側面から想定しておくことが望ましいでしょう。

表 7　CCP 活動にかかわる危険の例

交通事故	死傷事故、等
不審者	声かけ、わいせつ行為、等
犯罪行為	窃盗、暴力、器物破損、性犯罪、薬物乱用、等
いじめ	いじめによる傷害、自殺、誹謗中傷、等
設備・機材の未整備	未整備による事故、等
金銭問題	金銭の紛失、横領、不正支出、不適切執行、等
情報漏洩	活動にともない収集した個人情報の紛失、企業等の機密情報の漏洩、等
情報通信技術上の事故	ウイルス感染、情報漏洩、ハッキング、等
クレーム	不当要求、クレーム、等

4.3.1.危険とリスク

何かをしようと考えて、その結果として損害が生じた場合、その損害はリスクといいます。危険は、自分の意思決定とはまったく関係なく、外部のきっかけで起きる損害をいいます。たとえば、自分が自動車を運転するという決定をして損害、事故が起きる場合、この損害はリスクです。反対に、強風が吹いて、街路樹の大木が倒れて、家が壊れたとします。これは特に自分の意思決定とは関係なく、起きた損害なので、危険とみなします。

このように、リスクは、危険の中で、特に損害が生じる仕組みを理解しているものをいいます。よって、あまたある危険の中で、どれだけ多くの危険の仕組みを理解しているかによって、リスク化することができるかが左右されます。

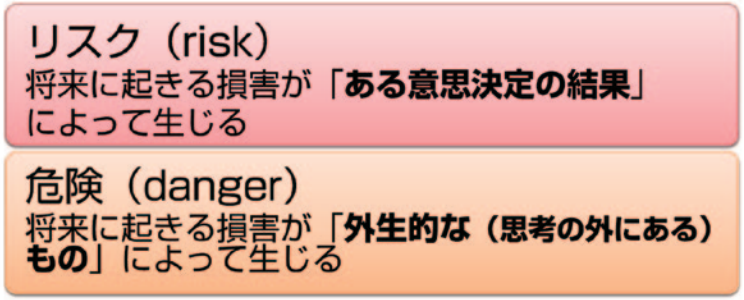


図 44　リスクと危険（神山資将作図）

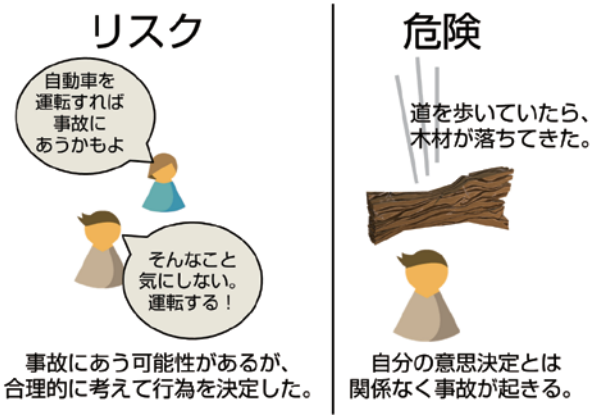


図 45　リスクと危険の例（神山資将作図）

CCP 活動にともなう危険の中で、危険が生じるメカニズムを調査し、知識として理解すれば、それはリスクとなり、管理（安全対策）が可能となります。これが危険予知活動です。しかし、常に危険は存在し、危険が消滅することはありませんので、危険予知活動は継続して行う必要があります。危険予知活動によって広げられた「リスクの小海」はコントロール可能な世界ですから、データを収集し、さらにリスクを小さくする活動が展開できます。

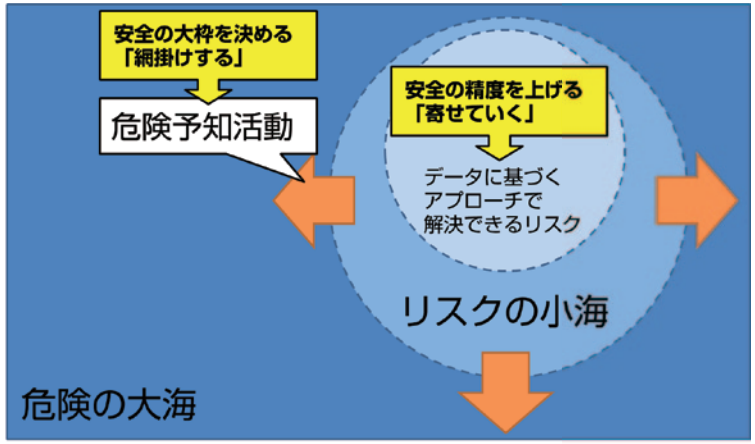


図 46　あまたある危険の中で、リスクをどれだけ増やせるか（神山資将作図）

4.3.2.危険との向き合い方

危険に対してどのように考えるかという基本的な姿勢は五つにまとめることができます。

危険との向き合い方①「関わりを持たない」

危険の源が含まれることには、かかわらないという考え方です。触らぬ神にたたりなしということで、危険な要素に触れないことが第一だという思考です。事故や事件になりやすい場所に近づかなければ、事故や事件に合うことはないでしょう。その意味では、最も保守的で、安全対策としては長けている思考だといえます。しかし、安全対策としての効果が高い反面、活動の範囲は限られるというデメリットがあります。危険な場所や危険が伴う経験であるが、その分、学習することもたくさんあるという場面もあるでしょう。その時に、「関りを持たない」という思考で対応すればよいのか、リスクマネジメントを踏まえた、より高次な教育的判断が求められます。

危険との向き合い方②「上手に関わる」

CCP 活動の実務上、危険をかかわることを排除できない場合、危険を知り、対策を実施するのであれば、損害にあうことは最小限に抑えることができます。

危険との向き合い方③「被害（損害）を出さない」

対策をしたとしても、事故的事象が生じたとしましょう。しかし、事故が起きたとしても被害（損害）が出なければ、それを事故とは認識されず、「ヒヤリ」として認識されます。ただし、事故的事象にかかわった場合には、関係者に精神的なショック等が生じる可能性があり、その場合には精神的なケアを十分に行う必要があります。TM は教員と連携しながら、精神的ケアの必要性を判断して、被害を出さないためのマネジメントを行いましょう。

危険との向き合い方④「被害（損害）をより小さくする」

何らかの被害（損害）が出ると、それは「事故」として認識されます。ただし、ここでの迅速な対応や手当により、それ以上の被害を食い止め、「小さな事故」で終わらせることもできますから、リスクマネジメントの準備状況が大きな効果をもたらすことになります。

危険との向き合い方⑤「損害システムの遮断」

事故が起き、被害（損害）が出たときには、適切な対応や救助、応急手当、救命処置等を迅速に行うとともに、想定外の被害の広がりを引き起こさないために、すぐに事故が生じたシステムを他のシステムから切り離し、被害（損害）が広がらないようにします。

危険は複雑な様相をもっており、偏った不適切な対応が事態を一層悪化させる事例はたくさんあります。一つの危険は新たな局面を生み、そこからまた新しい危険が発生していきます。できる限り損害が広がらないように、損害が生じたシステムは、他のシステムに伝播しないように、他のシステムから切り離します。

4.3.3.安全対策の手順(1) 危険を予知する

危険を予知することから安全対策ははじまります。危険が存在することを認識しない限り、安全対策は立案できません。危険を予知するためには、下記のことを活用します。

一般常識

マナーやルールの順守も含めて、常識的な事項をきちんと守ることが大切です。ただし、科学的根拠が明確なものを選定して順守する必要があります。

自己の経験、体験

危険を動物的感覚で敏感に感じ取る能力は、経験が基盤となっているところが大きいです。体験したことを振り返り、同様の危険に対しては、損害が生じないようにします。。

学習

経験に頼るだけでなく、常に新しい知識や情報を収集し、対策を行います。TM は、従来から行われている学習機会だけではなく、CCP 活動に特化した学習の機会も提供するようにしましょう。

現地の情報収集

CCP 活動を実施する環境（現地）の状況を把握することが重要です。下見（現地確認）は必ず実施しなければいけません。さらに、現地の情報収集を行い、多面的に危険についての理解を進めます。

シミュレーション

CCP 活動を行う中で、危険にかかわる場面を脳内あるいは実際に行動することでシミュレーションを実施します。

4.3.4.安全対策の手順(2) 危険に対する対応を想定する

CCP 活動に伴う危険を想定したうえで、その危険に対する基本的なアプローチを策定しましょう。基本的に「適応」「排除」「回避」という三つのアプローチを理解しておきましょう。

適応

危険に対して、行動等でその危険性を無効化することを「適応」といいます。技術の習得、用具や装備での対応、危険の源の近くに人員を配置し、危険を知らせる等、危険の源自体は存在していますが、その危険性を低くすることで、安全対策になります。

排除

危険に対して、それを物理的に存在しなくさせることです。危険の源自体が存在しないのであれば、危険性は完全に除去されます。

回避

危険に対して、それをCCP活動の環境下に存在させないようにすることを回避といいます。排除に近い対応アプローチですが、完全に排除するのではなく、あくまで「CCP 活動にかかわりを持たせないようにする」という対応になります。例えば、危険の源が日によって現れるのであれば、危険の源が現れる日を避けて CCP 活動を予定する。危険の源が存在する場所を CCP 活動の活動範囲から外す等も回避になります。

適応や排除ができない危険については、この方法が最も確実な対応となります。

4.3.5.安全対策の手順(3) 対策を確実に実施する

CCP に関連する危険について十分に認識し、危険に対する対策が綿密に計画されたとしても、その計画が実践されなければ、意味はありません。計画は実践されるものであり、実践されないものは計画に含めてはならないという共通認識が必要です。

CCP に関係するアクター全員に対して、危険についての周知とそれに対する対策を共有することが実践の第一歩です。

共有された計画立案

実行する予定の CCP に関する危険への対処方法（安全対策）を体系化し、組織（教員および TM、必要がある場合は学生も）で有効に機能させるために共有を進めます。危険性が低いと思われるような CCP であっても、低いなりの危険をしっかり予測し、その安全対策を想定する必要があります。

共有することが決定された内容は、文書として記録し、「安全対策計画書」にします。作成された安全対策計画書は今後の評価等の基本となります。

対策の実行

(1) TM（職員）と教員が行うべき安全対策

職員と教員は、自分が担当する安全対策の項目を確認し、確実に実施する必要があります。また、特に、教員は参加者である学生にしっかりと安全対策を理解させ、実行させることが重要な役割です。

(2) 学生が行うべき安全対策

参加者が行うべき安全対策については、教員や職員が説明し、必要があれば後見人にも指導を依頼するなどの、確実な理解を促しましょう。さらに、CCP 実施の直前にも確認する（可能であれば事前研修）などして、安全対策を実施します。

4.3.6.安全対策の手順(4) 対策実施結果について評価する

事故が起きなければよいという、結果オーライのスタンスではなく、安全対策を立案した後に効果や実施内容についてチェックし、フィードバックを行いましょう。

実施する前の評価

安全対策はCCPの実践に前だって行うことが必要です。これはCCPのみならず、CCPを実施運営する「つながる窓口」事業の実施前にも、安全対策に向けた上位計画は定めておく必要があります。事前の評価では安全対策として十分か、抜け落ちがないかをチェックすることが求められます。

実施した後の評価

事業の実施結果を踏まえて、事前に計画した安全対策は効果があったのか、抜けているところはなかったかを、事故の有無にかかわらずチェックします。

4.3.7 安全対策の手順(5) 評価を次に活かす

安全対策の結果や実施内容の評価を終え、フィードバックを行った後に、そのフィードバックをしっかりと次期安全対策のカイゼンに生かします。毎年同じ対策では馴れ合いやマンネリ化をもたらすことが考えられます。常に新しい危険の予知を行い、安全対策の刷新を継続していきます。

安全対策の評価とフィードバックは明確に記録文書として保管し、過去に遡って検証できるようにしましょう。これらの安全文化の継承は、安全対策意識の喚起につながります。安全対策で一番大切な要素は、安全・危険の管理についての「知識」よりも、むしろ安全・危険に関する「意識」であるといわれています。

例えば、自動車の運転ならば、スピード違反や信号無視、酒気帯び運転等の交通違反が、危険であることを誰もが知っています。どうして危険なのかも知識として理解しているはずです。罰則についても比較的よく知られているでしょう。しかし、これらの違反が根絶されない背景には、「意識」があるからです。

「このくらいの違反は問題ないだろう」という安全や危険に対する低い意識が、違反行為を助長させているのです。この意識を高める活動こそが、安全対策の記録を保管し、安全対策の文化化を進めることなのです。

4.4.専有可能性マネジメント

CCP の活動が終結した場合、その結果が活動成果として得られます。その活動成果をどのように次に展開することができるかを考える必要があります。その前に、成果について整理しておく必要があるでしょう。

4.4.1.いろいろな活動成果

簡単に成果といっても、いろいろな分類ができます。活動から得られた成果が、実践前から意図して設計されたもの（意図的成果）であるか、それとも意図していないものであるか（非意図的成果）に分けて考えられます。さらに、その成果は直接的な成果と間接的な成果に分類できます。CCP に携わった人物（学生のみならず、教員、地域コミュニティの人物）が直接関わって挙げた成果で、直接的な成果以外の成果を間接的成果です。

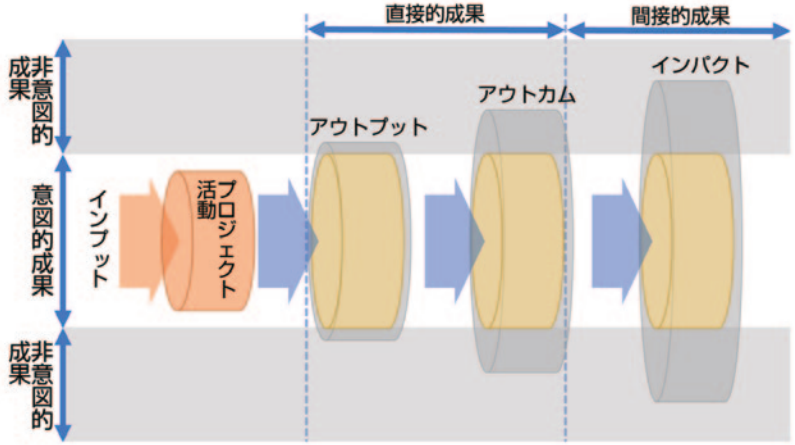


図 47　成果系の整理（神山資将作図）

Intended　（意図的成果）	目的として設定した範囲内で得られた成果
Unintended　（非意図的成果）	目的外であり、計画段階で意図しなかった成果

直接的成果	協働に携わった人物（学生のみならず、教員、地域産業側の人物）が直接関わって挙げた成果
間接的成果	直接的な成果以外の成果

以上のように、成果には、多面的な理解ができます。これらの成果を効率的に効果に結びつけることができるかが重要になります。

4.4.2.専有可能性とは何か

専有可能性（appropriability）とは、CCP の活動成果から得られる利益（社会的波及効果）を専有的に確保できる可能性をいいます。CCP 活動の成果から、効果的に社会的波及効果を高めて、その利益をアクター（地域コミュニティ、学校、学生、教員）に分配、確保するためのマネジメントを「専有可能性マネジメント」といいます。

いいかえると、専有可能性マネジメントは「果実を、芽が出やすいところに運び、発芽させ、大樹に育て上げる」ことです。果実は CCP 活動の成果であり、芽は社会的な波及効果で、大樹は各アクターの利益」です。

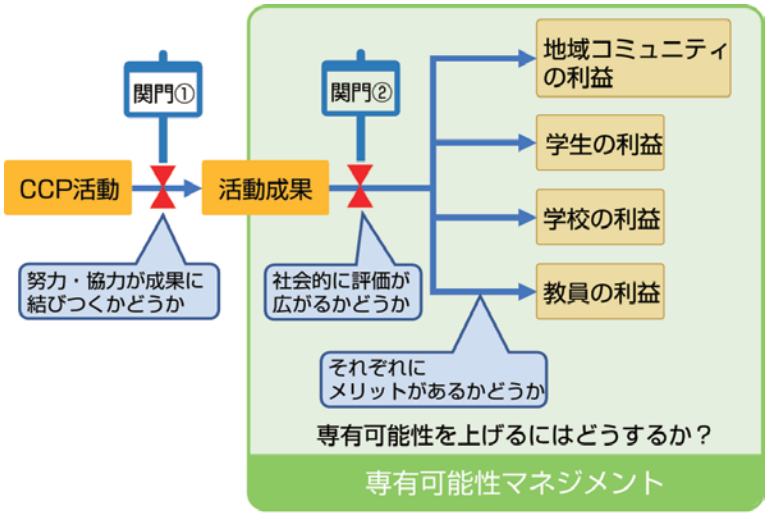


図 48　果実（CCP 活動成果）から芽（それぞれの利益）を確実に出させるための「専有可能性マネジメント」（神山資将作図）

CCP を通じて、協働してきた地域コミュニティと学校、学生、教員がその成果からの利益を確保するのは、当然のことですが、必ずしも何もしなくとも、その効果を享受できるとは限りません。活動成果を着実に効果として受け取るためには、意図的な努力をしなければいけません。

4.4.3.専有可能性マネジメントの対象

専有可能性マネジメントの対象は、「表 8　専有可能性マネジメントの対象」にあるような、活動成果を実際の社会的波及効果につなげてくれるようなネットワークや活動、展開の方向性です。

表 8　専有可能性マネジメントの対象

教育的 専有可能性	学生の経験学習（省察学習）	CCP で経験したことを省察等経験学習サイクルで振り返り、その成果を今後の学習や就職等の活動に有機的につなげていく
	教員の経験学習（省察学習）	CCP で経験したことを省察等経験学習サイクルで振り返り、その成果を今後の教育活動や地域コミュニティとのつながり活動等に有機的につなげていく
	卒業生のネットワーク化	卒業生をネットワーク化し、地域コミュニティにいる卒業生を CCP に参画してもらえるよう、卒業生の活動を有機的に学校の地域コミュニティとつながる活動と連動させる
	学生の就職支援	CCP で経験したことを基にして、就活に展開する。経験によって発見された学生のコンピテンシーを生かした就職先を選択する
	卒業生のキャリアアップ支援	地域コミュニティ内にいる卒業生がキャリアアップする際の支援につなげる
社会的評価の 専有可能性	学校の広報・宣伝	学校の地域コミュニティとつながる活動をしていることを広報や宣伝のかたちで社会的評価に効果がでるようにする
	地域コミュニティの広報・宣伝	地域コミュニティが学校とつながる活動をしていることを広報や宣伝のかたちで社会的評価に効果がでるようにする
	個人の広報・宣伝	地域コミュニティが学校とつながる活動をしている中で、
展開の 専有可能性	学校への志願者数増加	CCP の活動成果が広められることで、その効果として学校への志願者が増加することにつなげる
	地域コミュニティの活性化	地域コミュニティの課題が解決する傾向に着実につながっていることを検証する
	行政へのアドボカシー	CCPの活動成果を基にして、行政と連携することでより活動の展開を広げる

4.4.4.専有可能性マネジメントを助ける資源

専有可能性マネジメントを行う中で、その目的達成を容易にするための資源をあらかじめ保有しておくことが必要です。CCP の活動成果から効果を確保するための専有可能性マネジメントをより効果的に行うための補完的資源（complementary assets）が不可欠で、補完的な資源の有無が専有可能性の成否に大きな影響を与えます。具体的にみると、補完的資源には「表 9　補完的資源の例」のようなものがあります。

表 9　補完的資源の例

地域コミュニティとのつながり（溶け込み度）	地域コミュニティの中に溶け込めているかどうか さらには、地域のプラットフォーム化ができているか
参加学生へのフォローアップ教材・教育パッケージ	経験学習に基づいたフォローアップ教材や教育パッケージがあるかどうか
教員へのフォローアップパッケージ	経験学習に基づいたフォローアップパッケージがあるかどうか
行政とのネットワーク	行政担当者、行政部局とのネットワーク化ができており、情報共有や行政との連絡役が配置しているかどうか
卒業生ネットワーク	卒業生（同窓会）ネットワークを構築できているかどうか
介護施設・介護事業者とのネットワーク	実習指導等を通じた介護施設、介護事業者との情報共有等が常時行われ、緊密なつながりを保てているか
情報メディアとのネットワーク	CCP の成果のみならず、地域コミュニティとのつながり活動を新聞社、テレビ局、専門誌、専門記者、有識者等に常に配信し、可能であれば情報共有し、情報メディアとの連絡役を配置しているかどうか
インターネット通じた配信、ネットワーク	CCP の成果のみならず、地域コミュニティとのつながり活動をインターネットのチャネルを通じて常に配信し、興味を持つユーザと共有できているかどうか インターネットを通じた情報共有の担当者を配置しているかどうか
就職担当者との協働	参加した学生が経験を就活等の活動に生かせるように、校内の就職担当者と協働して

chapter

5

事例集

5.事例集

ここまでみてきたように、日本の介護は介護技術のレベル低下と地域コミュニティの衰退という両面から影響を受け、危機的状況にあります。日本の介護が崩壊を回避できるかどうかは、介護分野の専門学校の在り方にかかっているといえるでしょう。

以上の認識を共有した上で、北海道福祉教育専門学校、関東福祉専門学校、YMCA 健康福祉専門学校の三校が各地域で取り組んでいる事例を次に紹介します。

5.1.事例①　北海道福祉教育専門学校

北海道福祉教育専門学校
（地域コーディネーター）　岸田　京子

5.1.1.本校が所在する地域の現状

北海道福祉教育専門学校は、北海道の胆振･日高地域で唯一の介護福祉士養成校です。

図 49　北海道地図

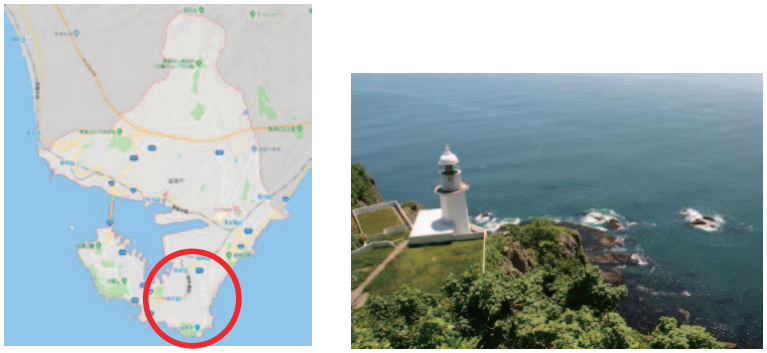


図 50　北海道室蘭市地図（左）　地球岬（右）
母恋の町の太平洋側は地球岬をはじめ、断崖絶壁の景勝地が連なっています。

（1）室蘭市の概要

室蘭市は、北海道南西部の太平洋側に位置し、港湾と重工業を中心に、ものづくりの町として工業を支えてきました。周囲を海に囲まれ馬蹄形に広がった天然の良港を持つ町です。現在室蘭市は、どこの地方都市にもある、少子高齢化や人口減少の厳しい変化の時代を迎えています。室蘭市の52町の内、30町が高齢化率40%を超えています。

表 10　室蘭市の高齢化率

室蘭市の人口	84,991人
高齢者の人口	31,218人
高齢化率	36.7%

（平成 30 年 3 月 31 日時点）

（2）母恋地域の概要

表 11　母恋の高齢化率

母恋地域の人口	4,928人
高齢者の人口	2,213人
高齢化率	44.9%

（平成 30 年 3 月 31 日時点）

母恋の町は、太平洋側に国の名勝に指定された地球岬を含む断崖絶壁が連続する絶景の宝庫を持ち、沢が多く、そこの急斜面に張り付くように住宅が立ち並んでいる状態です。地球岬に近い住民はバス停や駅まで出てくるのに、急な坂道が多く、冬季間は買い物難民が増える状況にあります。

5.1.2.地域サロン「シンチャオサロン母恋」開催に至った経緯

（1）本校と母恋地域の関係

本校は、その前身校が1941年に開校して以来、常に地域社会に貢献できる専門職業人材育成に努めて参りました。1992年4月に「介護福祉学科」を開設し、2019年からは「自立支援介護福祉学科」として学びの内容を進化させております。

本校が長年に渡り母恋地域に存在し続け、これからも、地域住民や企業と共存することの意義を考えますと、今まで取り組んできた母恋神社祭での神輿の渡御を継続しつつ、本校の専門性を生かして母恋地域の活性化、さらには室蘭市や広く胆振地区に発信してまいりたいと考えます。

図 51　母恋神社祭の様子（2019 年 7 月）

学生は、御神輿、笛や太鼓で全員、母恋祭りに参加します。

（2）学校が地域へ溶け込むために

当該事業を実施するにあたり、地域の課題に関するアセスメントが必要ですが、今回は時間的余裕、人的余裕がないこと等考慮し、行政機関等の協力を得て課題を想定しました。

表 12　調査協力を依頼した行政機関や団体が想定する課題

室蘭市の調査	課題：健康づくりや趣味等のグループ活動参加への調査では、「参加しても良い」が46%に対して、企画運営の世話役として参加意向を調査すると、「参加したくない」が60.7%と高くなる。 相談相手についての調査では、「家族や知人・友人の外に相談相手がいない」が38.3%と相談相手が行政、医師、看護師、民生委員を抜いて最も多くなっている。
室蘭市社会福祉協議会	課題：社協が推進する地域交流サロンが、母恋地域にない事。
母恋地域の自治会	課題：母恋地域は、母恋北町と母恋南町の２つの自治会がありますが、高齢化が進み運営する上で人材不足が進んでいる。自治会の行事の参加者は年々減っているのを感じている。

（3）地域委員会の開催

本事業を推進するにあたり、行政や他の団体、地域の住民の理解と協力が欠かせません。関係機関の意見や助言をいただきながら、本校の事業プログラムを展開していきたいと考え、第1回「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」地域委員会を開催しました。

図 52　地域委員会

地域委員会で各委員のご意見を伺い、本校の専門性や若い学生の力に期待されている事が感じ取れました。皆さんの協力を得られた事で、これからの方向性も少し見え、いろいろ得ることが多い委員会でした。

表 13　地域委員会

日時	平成31年2月18日(月)　10時～12時
場所	北海道福祉教育専門学校　会議室
参加者	委員(胆振総合振興局、室蘭市、社協、観光協会、地域包括支援センター、母恋北町町会、母恋南町町会、地域住民等9名） 事務局(7名）
内容	● 各委員、事務局自己紹介。 ● 本事業の説明と北海道福祉教育専門学校がモデル校になった経緯説明。 ● 開発するカリキュラム・プログラムの概要。 ● 介護福祉士を取り巻く現状と課題。
各委員からの意見、助言（抜粋）	● 最近の母恋地域では、外出が困難な高齢者が増えており、催し物をしても会場まで足を運んでくれる人が少なくなっている。 ● 室蘭市が開催している介護予防事業「えみなメイト」へ学生が来て、楽しく交流するのもいいのでは。 ● ・社協が主体となって展開している「サロン」は、市内各地で開催していますが、母恋地区にはまだありません。是非ここで開催していただきたい。

5.1.3.「シンチャオサロン母恋」開設までの準備

地域委員会でいろいろな意見をいただき、学生と地域住民が交流できる場づくりをすることとしました。母恋地域に、初めての地域サロンを学校の中で実施することによって、学校と地域が共同で地域活性化を図ることを目指します。学校で行う初めての地域サロンの準備について、ここでは、地域コーディネーターの役割を中心にまとめます。

（1）各委員への協力依頼

・地域サロンの開催にあたり、各委員様へ出向き説明、協力依頼をしました。

（2）行政機関等への協力依頼

・室蘭市の介護予防事業との共同開催等、企画、運営の協力を得ました。

・室蘭市の介護予防事業「えみなメイト」を見学。

・室蘭市社会福祉協議会の支援があり、各種申請手続き。（若干の助成金、会場費、保険料等）
　地域サロン活動計画書の提出

・民生委員、福祉委員の協力を得るために、説明会を開催。

（3）チラシ、ポスター作成

・地域サロン開催の都度、チラシ、ポスターを作成します。

・前の月の 20 日までに作成し、各町内会へ回覧の依頼をします。（5 町会　340 部）

・ポスター掲示の依頼。

・町内会の掲示板、地域の商店街、特にバス停近くの商店や事業所、近くの室蘭信用金庫、母恋の駅前のスーパー等。

図 53　**チラシ、ポスター**

毎月チラシやポスターを作成して、地域に配布しています。

（4）広報依頼

室蘭市の担当課を通して、学校が地域サロンを開催することをお知らせし、北海道新聞、室蘭民報、NHK 外全 17 か所へ報道依頼。その他、委員会開催や他の学校行事、イベントとの開催の都度依頼します。

（5）その他

地域サロンを開催するためのその他の雑務は、意外に多く開催までの期間は大忙しでした。気が付いたことを、記録します。

・留学生のために、家財道具を提供していただいた方へ、お礼と地域サロンのご案内。

・地域の方へ電話で勧誘。

・開催の打合せ用資料の作成。

・サロンの内容を打ち合わせて、お茶とお菓子の買い物など学生と相談して購入。

・受付用の、記名用紙や当日の負担金の設定と領収書等の準備。（学生と）

・アンケートの内容検討と作成。（学生と）

・サロン終了後、アンケートの集計。

・サロン終了後、社協への実施報告書の作成。

5.1.4.地域サロン「シンチャオサロン母恋」の実施状況

(1)地域サロン「シンチャオサロン母恋」とは

2019 年度は、本校の自立支援介護福祉学科が初めてベトナムから 12 人と留学生を迎えました。シンチャオとはベトナム語で、「こんにちは」の意味です。ベトナム留学生は、本校の近くにある留学生アパートで生活しており、地域の皆さんにその事を知っていただき、受け入れていただきたいという思いもあり、このサロン名にした次第です。

(2)写真で「シンチャオサロン母恋」を紹介します。

図 54　のぼり

図 55　受付

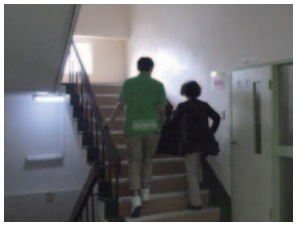


図 56　ご案内の様子

図 57　学生の紹介

図 58　談話の様子

図 59　1 年生の挨拶(ベトナム留学生)

図 60　学校と学科の紹介

図 61　お茶とベトナム菓子で談話中

図 62　ダンス

図 63　談話の様子

図 64　終了後の振り返り

(3)2 回～5 回開催の抜粋

図 65　浴衣のファッションショー

図 66　ご利用者の様子①

図 67　懐メロ歌謡ショー

図 68　西城秀樹の YMCA

図 69　ご利用者の様子②

（4）現在までの開催状況

回数	開催日	開催場所	利用者数	内容	備考
1	令和元年 7 月 10 日 13 時 30 分～15 時	本校 2 階 実習室	39 人	学校と学科の紹介 ベトナムの紹介	
2	令和元年 9 月 2 日 13 時～14 時 30 分	本校 3 階 ホール	20 人	ファッションショー 地域住民との交流会	
3	令和元年 10 月 9 日 13 時 30 分～15 時	本校 3 階 ホール	13 人	ビンゴ大会 ダンス	
4	令和元年 11 月 17 日 13 時 30 分～15 時	本校 3 階 ホール	82 人	介護劇	学校祭と同時開催
5	令和元年 12 月 9 日 13 時 30 分～15 時	本校 3 階 ホール	30 人	クリスマス会	

（5）アンケートの集計

シンチャオサロン母恋では、毎回利用者の方にアンケートを実施しています。一部紹介いたします。

利用者総数	184 人
回答者数	74 人
回答率	40.2%

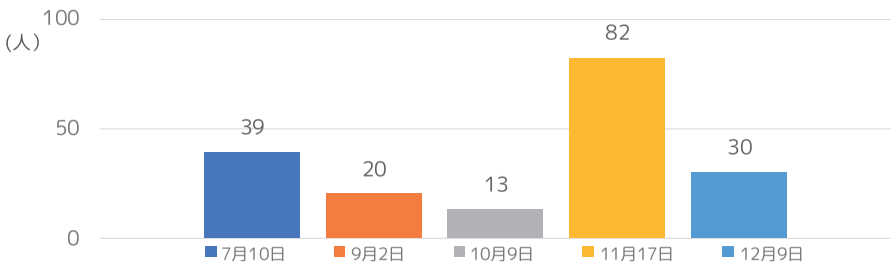


図 70　シンチャオサロン母恋参加者数

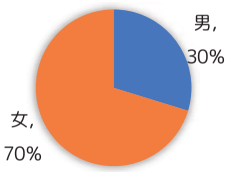


図 71　参加者の男女比

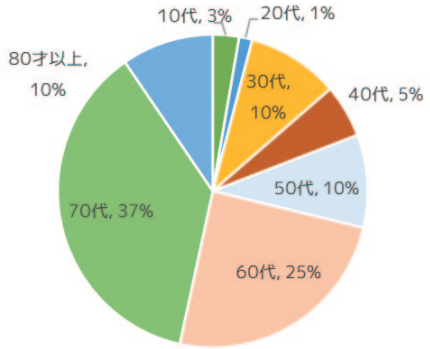


図 72　年齢構成と比率

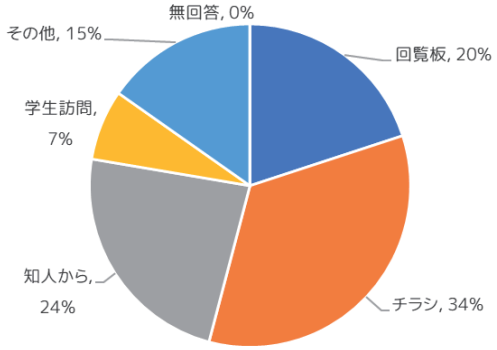


図 73　サロンを何で知りましたか

年齢構成では、20 代、30 代、40 代は、地域委員のメンバーや行政の関係者で構成されており、利用者は 60 代以上で構成されています。

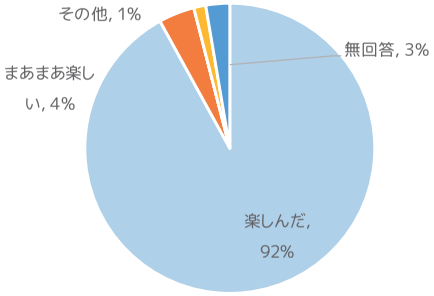


図 74　楽しかったですか?

「サロンを何で知りましたか」を見ると、回覧板やチラシの効果が半分以上を占めていますが、知人からの誘いも多いことから、一度来た人が、口コミで友達を連れて来てくれることが予想できます。

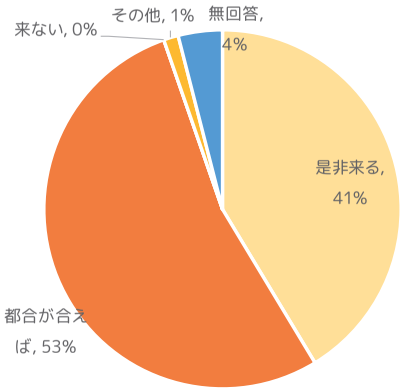


図 75　次回は来ますか?

知域とのつながりを、大切にして!
また、開催してほしい
ゲームに楽しさを感じました。忘れていた思いです。また、考えてください。
ふれあいサロンをするので参考にしたい。
もっとベトナムの生徒さんとお話がしたかったです。
グループに分かれてお話会もよろしいかと思います。
もっと詳しく知りたい。身近に会話を楽しみたい。また、逢える日を待っています。
ベトナムの学生さんは今後日本語(特に専門用語の理解や書くこと)一番ご苦労されると思いますが、私たち地域の人間が協力できることがあれば、いつでも援助したいと思います。(年齢から言って、ほんの少しのお手伝いしかできませんが)

5.1.5.「シンチャオサロン母恋」が地域に及ぼした影響

本事業の目的の一つは、学校と地域が協力し学生を育てていくことにありますが、まずは学校が地域に溶け込みその存在を知っていただくことからはじめました。そして、継続していくために、地域の皆さんと生徒が楽しく、また来たくなるような交流の場にしたいと考えました。学校が地域サロンを運営していることが、管内では珍しく多方面から「学生に来てほしい」「学生と話がしたい」「事例を紹介していただきたい」等の声がかかるようになりました。

(1)出前「シンチャオサロン母恋」

室蘭市の介護予防事業「えみなメイト」を訪問して、利用者の皆さんと交流を深めています。

(2)母恋地域の独居の高齢者が集まった「ふれあい昼食会」

出張して「シンチャオサロン母恋」を実施し、歌謡ショーや交流会で楽しみました。

図 76　ふれあい昼食会
シンチャオサロン母恋の紹介、発表

図 77　ふれあい昼食会
ご利用者との様子

(3)ボランティア活動を紹介する場で事例報告

図 78　ボランティアばんざい in 胆振
学校の専任教員が学校の紹介や「シンチャオサロン母恋」の事例を発表

図 79　室蘭市ボランティアのつどい
学生がシンチャオサロン母恋を紹介

（4）地域の福祉委員や民生委員への影響

福祉委員や民生委員の研修会を本校で実施したいと依頼があり、「シンチャオサロン母恋」で本校の教員が講演を行い、学生は民生委員との交流を通して地域の課題を知ることができます。

5.1.6.課題

本事業のモデル校のお話をいただいて、学校がどのように地域とかかわっていくか、方向性が見え、「シンチャオサロン母恋」を開催することになり、おおむね１年経過しました。その間「シンチャオサロン母恋」は５回開催し、出前サロンも声がかかるようになりました。これまでの開催にあたっては、主導は学校や教師であり、学生はいろいろな疑問を持ちながらついてきたという感じがあります。

今後は、学生が事業の目的を理解し、「シンチャオサロン母恋」の運営を主導し、地域に根差したサロンづくりをする中で、地域住民の一人一人の課題を見つけ、地域住民と共に解決できるよう成長していってほしいと思います。学校や教師の側も、予定の行事やシラバスをこなしながら余裕のない状態で、突貫工事のように進めた事業でした。理想と現実のギャップがあり今後の課題は山のように残しております。

①学生主導できるか（来年度は、学生による実行委員会をつくる）

②学生のコミュニケーション能力を引き出すことが不可欠。（世間話ができない）

③地域の改題解決（地域と共に運営できるのがベスト）

室蘭市の母恋地域は、これからも少子高齢化、過疎化が進んでいくと予想されています。そのような中で、住みやすいとはどういうことなのか、学生と地域の住民が一緒に考えるきっかけづくりをいただいた、この事業に感謝し事例報告といたします。

5.2.事例②　関東福祉専門学校

関東福祉専門学校
（教務主任）　生方　薫

5.2.1.地域の方と昼食をつくって食べる会（地域から学校へ）

介護福祉士養成学校に限らず一般に学校は通常、学生と教員だけが存在する空間である。学校が地域にとけ込んでいくためにはどのような取り組みが必要だろうか。その一つとして、地域の方に学校に足を運んでいただき、学生と一緒に楽しいイベントを学校が企画することも良いであろう。そのひとつとして本校では「地域の方と昼食をつくって食べる会」を実施している。

日程は午後に授業がない日などに設定すると良い。事前に地域住民や地域コーディネーター等に学校からアプローチして理解と協力を得ておく必要がある。

調理実習室の規模、学生数により調整が必要である。学生20名～30名、地域住民10名くらいがひとつの形といえる。学生数が多いい場合は、クラスごと・学年ごとに別の週に日程を設定する必要がある。

本校の留学生も多いが、メニューは、まずは日本人になじみのあるメニューを地域の方や教員が中心となって考えた。たとえば「ハッシュド・ポテトの野菜あんかけ」、「たこ焼き」など、実施してきている。2回目は、クラス別や学年別ではなく（本校のクラス設定は日本人現役高校生、社会人、留学生混合で各年齢層、各国の学生をバランス良くクラス分けしている）、国別にグループを設定し、スリランカ・ネパール料理の日、ベトナム・中国・ハラル料理の日などを設定し、留学生のアイデアを中心に日本人も含めた学生の主導でメニューを考えて企画してもらう試みも行った。本年度は、学年ごと、国ごとで設定して計5回実施した。地域の方はその都度、様々な方に来ていただいた。食事が終わった後、地域の方に、弾き語りを披露していただいた回もあった。

図 80　地域の方と昼食をつくって食べる会　みんなで調理する様子

図 81　地域の方と昼食をつくって食べる会　スリランカ料理カトゥレットとセイロンティ

図 82　地域の方と昼食をつくって食べる会　みんなで「いただきます！」

図 83　地域の方と昼食をつくって食べる会　食事後は地域の方が一芸を披露してくれました

5.2.2. 国際交流フェス（学校から地域へ1）

学校に地域の方に来ていただくだけでなく、地域のイベントに学校が参加することで地域との交流を図ることができる。本校は留学生が多いということで、市民活動センターが主催する「国際交流フェスティバル」に参加のオファーがあった。本年で2回目の参加となる。このフェスは、市内や近郊の国際交流団体や学校法人等が出店し、地域住民に異文化を身近に感じて、同時に日本文化を見つめ直すというイベントである。

図 84　2019 年国際交流フェスティバルのチラシ

本校ではブースのほかに、民族衣装ファッションショー、外国語講座等を行った。地域の方は、高齢者、子供の参加もあり、学生も楽しみながら交流できるイベントとなった。

図 85　国際交流フェスティバルファッションショーの様子（本校学生・地域に住む外国人・地域の子供）

図 86　外国語講座（本校学生が地域の方に外国語講座を開きました）

5.2.3. 地域でボランティア活動（学校から地域へ2）

これまで、本校では、地域貢献活動として赤い羽根共同募金、社協障害児イベント、高齢者施設納涼祭・秋祭り、被災地(東北)ボランティア、献血、障害者スポーツ大会等多くのボランティア活動を行ってきている。

（1）赤い羽根共同募金

「赤い羽根共同募金」は、10月1日から3月31日までの6ヶ月を実施期間としている。本校では、多くのボランティア団体が実施する、10月の初旬に1年生1日、2年生1日、授業前の早朝に毎年行っている。学生たちは、駅などで別の団体が行っているのを目にしたりするかもしれない。自分たちも同じ期間に同じことをすることで、自分たちが社会資源となり、地域社会の活動の一部をになっていることを実感できるよい機会となる。

事前・事後学習として、共同募金のしくみ、共同募金の使いみち、共同募金の運営、社会福祉法等について、社会福祉協議会に出前講座を依頼したり、ボランティア経験の感想、グループ学習によるシェアやレポート学習も可能である。

図 87　赤い羽根共同募金

5.2.4. NPO 法人等からの積極的な働きかけ

「1. 地域の方と昼食をつくって食べる会（地域から学校へ）」では、学校側が主体となって地域の方をおさそいするという形のイベントであった。このようなイベントの他、「2. 国際交流フェス（学校から地域へ1）」のように学校から地域のイベントに参加したり、「3. 地域でボランティア活動（学校から地域へ2）赤い羽根募金」のように積極的に地域に出てボランティア活動等の取り組みは、地域に学校の存在を認知してもらうことにつながる。学校が地域にとって社会資源になりうるという意識が広がるようになるかもしれない。そうすると、今度は地域で活動する NPO 法人からもっと積極的に学校に対してアプローチもある。

たとえば本校の場合 NPO 法人からの働きかけによって、「地域食堂」や「重症心身障害児の入浴プロジェクト」等、授業以外の時間帯や土日に様々な取り組みが行われている。

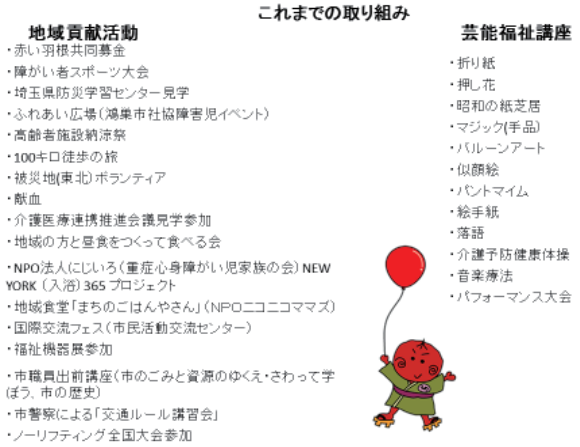


図 88　関東福祉専門学校における「地域貢献活動・芸能福祉講座」の取り組み

（1）地域食堂

「まちの栄養士さん」として食育活動をする栄養士のあつまりであるNPO法人より、本校で 17 時から 20 時くらいまで、月1回程度、地域食堂を開催したいとのオファーがあり、現在、実施・継続中である。

本校の学生も数名がボランティアとして活動している。活動内容は食事をつくったり、配膳するだけではなく、来ている子供の相手・見守りなどがある。調理室の隣が食堂であり、さらにその隣の教室は待合室あるいはサロンとして使用される。生活支援技術等で習ったレクリエーションを活かして高齢者だけでなく、子どもたちとも交流している。

図 89　地域食堂（まちのごはんやさん）　の様子①

図 90　地域食堂（まちのごはんやさん）　の様子②

図 91　地域食堂（まちのごはんやさん）　ごはんが出来るまで子どもたちとレクリエーションをする様子①

図 92　地域食堂（まちのごはんやさん）　ごはんが出来るまで子どもたちとレクリエーションをする様子②

（2）重症心身障害児の入浴プロジェクト

重症心身障害児者とその家族の支援を行いうNPO法人からは、高齢者施設で障害児の入浴の体制の土台を築いていくというプロジェクトへの協力のオファーがあった。

重症心身障害児は、運動発達の遅れが顕著に現れる乳幼児期頃から、少しずつ介助が必要となり、児童期に達する頃には、食事・入浴・排泄・移動等の生活全般が介護となることがある。青年前期～中期(13 歳～18 歳)の頃には、家族の身体的負担と家屋の物理的要因により、特に家族による入浴介助は限界を迎える。本校は社会福祉法人立の専門学校として近隣の福祉施設と連携をはかっている。このプロジェクトは NPO 法人、学校、高齢者施設が連携して、①入浴サービス、②入浴支援研修、③交流会からなっており、NPO 法人の関係者（障害児とその家族）と活動に賛同した高齢者施設で働く本法人の介護職員、本校教員が主に参加している。その中に学生の参加もある。

この NPO 法人の代表者は、社会人入学として学んだ本校の卒業生である。現在、日本の障害者は約936万6千人とされている。家族単位で考えると2～3家族に1人、障害者がいることになる。福祉関係の専門学校等に入学する学生は、現役生も社会人も家族に障害や介護の必要な方がいる場合が多い。すべての学生が意識や動機づけが高いというわけではないが、学生それぞれの現状や視点、価値観等、多様であるので、「食事を作って食べる」というような全員参加の楽しい企画から、自由参加で、もっと専門的な取り組みまで、できるだけ様々なメニューがあると理想的といえる。

図 93　重症心身障害児 NEWYORK365 セミナーチラシ

図 94　重症心身障害児 NEWYORK365 セミナー　交流会の様子

5.3.事例③　YMCA 健康福祉専門学校

YMCA 健康福祉専門学校
（専任教員）　石島　美紀

5.3.1.法人理念と地域活動：学校長の立場から

YMCA は設立当初から、いつの時代にあっても、人が人らしく平和で豊かに生きていこうとするニーズを地域の中でつかみ、活動を展開してきた。地域の人々や社会の求めている声を聞き、受け止め、地域とともに生きる YMCA として、開かれた YMCA として諸活動を 135 年にわたり継続している。

YMCA のもっとも大きな特性は、人々をつなぎ結び、関係を広げ、人々の絆を強めるコミュニティを生み出すことにある。そうした働きは設立当初から変わりなく、現在でもコミュニティ形成の担い手を育てることが私たちの願いである。

YMCA の事業や活動は、個を生かすグループ活動を通して進められ、一人ひとりが「自分のために」から「自分と仲間のために」という価値観へと変化させることを目標としている。そうした価値観の変化が、自分のことのように隣人のためにという成長へつながると信じている。YMCA の提供するプログラムのなかで、小さなコミュニティでの経験を積み、他者のために、地域社会のために、世界の隣人のためにとラージコミュニティへ広がり、それぞれが変容していく。この一人ひとりの変容が、社会を変え、平和を創り出す人材養成へとつなげることが私たちの担うべき使命であり、常に地域社会の課題に取り組み、実践を続けて行く必要があると思う。

地域とつながるために YMCA は地域のさまざまなリソースパーソンの発掘に努めている。YMCA の存在価値はキリスト教会、行政、各種団体とつながり、協働を通して、地域で起きる課題や問題の解決を行うところにある。地域で求められる YMCA でなければ YMCA の存在価値も薄れてしまう。

YMCA の運営については、地域のボランティアを招き入れ、運営委員会を構成し開催している。運営委員会では地域のさまざまな課題に寄り添うことを第一の目標としている。

厚木 YMCA も上記同様の理念や使命を持ち、専門学校、子育て子育ち支援(保育園、学童保育、児童発達支援事業)、健康教育事業を展開している。

YMCA 健康福祉専門学校は 1985 年に県央地域に福祉人材養成施設がなかったため、地域の要請に応えて、設置されている。設立当初より福祉人材、健康教育指導者養成を中心とし、現在に至っている。また、教育課程委員会、学校評価委員会を設け、卒業生、地域施設職員、教育関係者などを集め客観的な現状の評価や地域とのつながりを絶やさないようにしている。

その中の一環として 4 年前よりこども食堂を開催してきた。当初は保育士を養成するこども総合科の学生が

中心となり、開催したが、3 年前より厚木市の市民協働事業の 1 つとして認定され、補助金を元に、専門学校・健康教育・保育園それぞれの専門性を発揮したプログラムを提供する回と厚木 YMCA 全体の行事としてのお祭りやもちつき大会などのイベントを組みあわせて、年 8 回行ってきている。

こども食堂は厚木市との共催であり、厚木地域でも初めての取り組みをした団体の一つとなったため、毎回のように地域の関係者の見学があった。この時の関係の中で地域包括支援センターから地域会議、協議体へのお誘いがあり、学校職員が継続的に参加する中で、今回対象地域となった吾妻団地の現状を知ることとなった。少子化の一方、高齢化の進む市街地の大型団地であり、住民に外国人が増えてくる中、自治会が団地の持つ課題に向き合い、様々な取り組みを行っているということ、学校からは徒歩圏内であること、などから吾妻団地と学生のかかわりを通じて地域の活性化の取り組みを検討していくこととなった。

5.3.2.地域活動の実践にむけて：地域コーディネーターの立場から

（1）厚木市、吾妻団地の状況

厚木市は神奈川県のほぼ中央に位置し（図1）、東京都心まではおよそ 50 分、横浜まではおよそ 40 分で行ける立地にある。交通の要所として流通業、工業団地や研究開発を行う企業や大学、専門学校等もあり、近隣からの通勤、通学者も多い。2019 年 10 月現在、人口 224,500 人、総人口にしめる 65 歳以上の割合（高齢化率）は 25.34%である。

図 95　厚木市の位置関係

吾妻団地は、小田急線本厚木駅から1時間に1、2本の直通バスで 10 分ほどのところにあり、県営団地 21 棟、市営団地 2 棟、計 23 棟を有し、団地だけて吾妻町を形成している。1972 年（昭和 47 年）から入居が開始され、2019 年 10 月現在、世帯数は 700（内 25%ほどが外国籍）、1330 人ほどの方が住んでおり、65 歳以上の高齢者は 601 人（内75歳以上は 337 人、85歳以上は 60 人）、高齢化率は 45%、一人暮らし高齢者登録者数も 140 人以上にのぼっている。2019 年 6 月時点での要介護認定者数は、要支援認定者 34 名、要介護認定者数 87 人、2 割の方が介護認定を受けている。一方小学生数は減っており、以前は 100 人程はいたが、現在 48 名（内 7 割は外国籍の子ども）とのことで、明らかに少子高齢化の波が進んでいる状況である。

図 96　6 か国語で書かれた団地内の掲示板

（2）吾妻団地での活動

本校が吾妻団地を「専修学校による地域産業中核的人材養成事業（以下事業）」のモデル地区と位置づけるにあたり、2019 年度、介護福祉科新1年生とどのように取り組んでいくかについての話し合いで、2 つの点を共有した。

1 つ目は、このプログラムへの参加により、多少なりとも介護福祉士を目指す学生の人間的成長に役立つのではないかという点である。

「社会福祉士及び介護福祉士法」第 2 条では、介護福祉士とは「介護福祉士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、身体上又は精神上の障害があることにより日常生活を営むのに支障がある者につき心身の状況に応じた介護を行い、並びにその者及びその介護者に対して介護に関する指導を行うこと」と定義しているが、近年介護福祉士には身の回りの世話をするだけの介護から、高齢者や障害者等の生き方や生活全体にかかわることで、自立に向け利用者やその家族の暮らしを支える実践が求められている。

図 97　吾妻団地全景

この数年専門学校で介護を学ぶ学生の学力やコミュニケーション力、人間関係形成力などの低下が言われるようになり、加えて外国人留学生の割合も増え、専門学校も専門職としての介護福祉士をどう育てていくかに苦慮している。しかし、一方で1年生から卒業時までの 2 年間に、介護技術介護実習や様々な学校活動、ボランティア活動、地域活動への参加を通して、大きく成長し、卒業後数年で在宅介護分野であれ施設介護分野であれ介護現場を支える人材に育っている先輩卒業生も数多く排出しているのも事実なのであり、2 年間という短い期間でも地域を取り巻く課題に目を向け、福祉に関わるものとして何らかの気付きや社会福祉への問題意識、想像力を彼らが主体的に生み出すような学習プログラムや活動を提示するのも、福祉に関わる専門学校としての役割である。

2 つ目は、専門学校も地域の社会資源であるという視点である。近年地域包括ケアシステムの構築･強化が叫ばれ、2014 年（平成 26 年）及び 2017 年（平成 29 年）の介護保険法改正でも、地域内の福祉事業者、住民組織、ボランティア等のフォーマル、インフォーマルな社会資源を活用し、地域ネットワーク･連携を通して、地域内でお互いに助け合う生活支援体制、共生社会を作り上げようという動きが広がっている。専門学校も、それぞれの強みや特色を活かし、高齢、障害、児童など多様な分野で、例えば地域の居場所作りやサロン活動、講演等啓発活動など、行政や関係機関、団体などと協働してゆくことで、地域福祉の一拠点、地域に開かれた専門学校として地域の福祉ニーズに答えることもできる。

今回のモデル事業では、当面吾妻団地での地域活動に特化することになるが、学生にとっては、今後様々な生活課題を抱える住民との交流、その方々を支える自治会役員、民生委員、地域包括支援センター、社会福祉協議会、ケアマネ事業所、サービス事業所などとの多様な福祉従事者と関わりの中で、多くの学びを得ることができるだろうし、YMCA 健康福祉専門学校総体としても、この活動に継続的に関わっていくことで、近隣地域との

繋がりが広がる契機となるのではないかという思いを共有した。

（3）役割分担と 2019 年度の活動行程

2019 年 4 月時点での新入生は介護福祉科 22 名、内日本人学生 13 名、留学生（ベトナム、フィリピン、韓国）9 名であった。新 1 年生ということもあり、吾妻団地での具体的フィールドワークは、夏休み第 1 段階の介護実習が終わった後期、9 月～10 月以降に開始することとなった。

①2 月～5 月：主に地域コーディネーターが調整役となり、専任講師とともに吾妻団地にかかわる行政や関係機関、民生委員、自治会等に挨拶、協力依頼、情報収集。

吾妻団地に関わる関係機関、厚木市福祉総務課、厚木地域包括支援センター、社会福祉協議会などを訪問、今後の活動に協力を要請するとともに、厚木市や吾妻団地に関する情報収集を行う。特に包括支援センターは、2019 年度は吾妻団地での活動を重点目標としており、4 月以降本校とも情報共有しながら連携していくことを確認した。

また吾妻団地の具体的課題を伺うため、厚木市福祉総務課から紹介していただき 3 名の吾妻団地担当民生委員とお会いし、独居高齢者の増加、買い物、ゴミ出し、通院外出、夜中の電話による緊急訪問、孤独死の発見と対応、閉じこもり、外国籍の方の支援、75 歳以上の方の定期見守りなど様々な苦労や自治会、老人会活動などについて話をうかがった。

図 98　ふれあいサロン開設式典

4 月下旬、包括から吾妻団地内に自治会主催によるサロン開設の情報があったため、5 月連休明けに包括管理者と吾妻団地自治会長を訪問、自治会活動や開設予定の「ふれ愛サロン」についてお話を伺う。2 年ほど前から神奈川県団地担当と交渉を始め、ようやく空き室利用のサロン開設が許可された。現在、自治会役員の方が自力で部屋をリフォーム中で、6 月頃スタート予定とのこと。今後サロン活動について、YMCA 健康福祉専門学校としても学生の学びの場として何らかの形で参加させていただくよう依頼し、快諾を受けた。

なお吾妻団地自治会は全員加入が原則で、他の自治会では加入率が減少傾向にあるが、吾妻団地自治会への加入率は 100%である。

②6 月～9 月：ふれ愛サロン吾妻開催、地域ケア会議、後期授業準備 6 月 9 日、ふれ愛サロン吾妻開設記念式典（図4）が開かれ、理事長はじめ役員スタッフから開催までの経緯や理念などの説明があり、続いて 27 日には開催に向け、厚木地域包括支援センター主催の「地域ケア会議」が行われた。参加者は、サロン理事長、副会長、自治会会長はじめ、民生委員、行政から厚木市福祉総務課、介護保険課、生活福祉課、障がい福祉課、社会福祉協議会、本校からは地域支援コーディネーターが参加した。

サロンの活動内容リーフレットにはサロンの効果として、「サロンは、高齢者や子育て中の親子が抱える孤独感、孤立感の解消を第一の目的に、交流・仲間づくりの場として取り組まれていますが、さらにその集まりをとおして、参加者同士で悩みごとや困りごとの話が出たり、地域包括支援センターなどの関係機関がサロンに協力することで、福祉サービスなどの情報提供がなされ、専門的な相談機関や福祉サービスにつながることもあります。・・・またサロンと福祉関係機関などが連携することで、地域の福祉課題を発見、共有するきっかけづくりとしても高い効果を見いだせると思っています」と述べられており、今後は「お助けバスターズ」といったボランティアグループの組織化も視野に入れながら、吾妻団地の活性化、福祉力向上を目指すとのことである。

そうした理念のもと、吾妻団地でのサロン活動が 7 月よりスタートした。毎月 2 回、第 1 木曜日と第 4 日曜日に開催されている。この時期、新 1 年生及び教員は、授業、学校活動、第 1 段階の実習準備等で忙しくサロンを見学する余裕などはないため、地域コーディネーターができる限りサロンを訪問、サロン参加者や運営スタッフとの交流を深め、顔の見える関係を築き、YMCA 健康福祉専門学校の名前を覚えていただくことで、学生たちが吾妻団地にスムーズに入っていける土台、信頼関係をつくることを目標とした。

一方、夏休み明け後期授業の開始に向け、授業計画立案のヒントとするため、10 年前から学生が戸山団地で実地調査などを行う授業を展開している東京 YMCA 医療福祉専門学校を訪問、担当教員から、実地調査により、例えば孤独死や孤立死、買い物弱者、介護予防や健康づくり、閉じこもり、仲間づくりなど、学生たちが地域を取り巻く課題や住民のニーズについて感じたことを一つ取り上げ、①どのようにその課題に取り組み、地域を活性化していくか目標をたてる、②そのためにはどういう手段なり、イベント、組織なりを使ってみたいか、③それによりど

のような効果が見込まれるか、など学生たちの「想像の翼を広げさせ」何でもありの自由な発想で考察するといった授業内容について大きな示唆を受けることができた。

こうした準備期間を経て、2019 年度後期からの授業計画案が作成され、まずは地域活動について講義や地域包括支援センター、吾妻団地ふれ愛サロン関係者を招いての講演等を開き、活動についての動機づけを行っていくことを確認した。

5.3.3.授業における「地域活動」：教員の立場から

（1）当初の計画　「地域活動シラバス」

目的	介護福祉士として求められる地域支援活動の実地体験を行い、課題に取り組む過程を学びとする。				
対象	介護福祉科1年（2019年度入学生）22 名 うち日本人学生：13 名、留学生：9 名（ベトナム、フィリピン、韓国）				
対象科目	介護の基本「地域活動」枠 15 コマ 必ずしも週 1 回ではなく活動状況に応じ日程を設定する。				
達成目標	地域活動についての基礎的理解と対象地域とのかかわりを通じて課題把握ができる。 実践活動に向けての地域住民との関係性が構築できる。 課題解決に向けた実践的取り組みとその評価ができる。				
回数	形式	項目	担当	内容	
1	講義	地域活動の理解	専任	住みやすい地域とは？ 各地の事例や自分の住む地域の実情を知る 視聴覚資料などを活用して学生が理解しやすいよう工夫する	興味を持つ
2	講演	対象地域を知る	専任 包括 民生委員	活動関係者から地域情報の把握 対象地区の包括職員、民生委員を招き、地域包括ケアの現状と、対象地域や住民の状況について話を聞く	
3	見学	対象地域の見学	専任 自治会	吾妻団地、サロン、および周辺地域の見学 自治会の活動やサロンの成り立ちなどの説明を受ける	交流する
4 随時	活動	対象地域に関わる	専任 自治会	学生 2～3 名ずつサロンまたは自治会主催のイベントに参加し、その様子や住民の状況を把握する。 学生は何かしらの特技や自国紹介などのネタを持っていくまたは役割をもって参加し、単なるお客様にならないようにする また運営スタッフからも実際の様子を聞く	
5	GW	地域課題の把握	専任	これまでの事前学習を経て学生で共有された課題を明確化し、目標を設定する。 また課題解決への方法をディスカッションする	考える
6	GW	活動グループによる計画立案	専任	興味に応じグループ化し活動計画を立案する 具体的な目標設定、実施計画、活動評価の方法	
7	GW/活動	提案された活動へ向けての準備	専任	地域の情報収集や社会資源の調査など各グループでの活動を行う	
8	発表会	活動報告 （中間報告）会	関係者	これまでの活動をスライドでまとめ、地域の関係者を招きプレゼンテーションを行う。学生同士また参加した住民の方々から意見をもらう。	
9	振返り	実践計画に向けて	専任	全体で報告会の振り返り活動の方向性を再確認する。プレゼンの評価をもとに実践に向けての計画修正、実施までのスケジュールや役割分担を行う。評価方法を確定させる。	企画する
10	GW	活動準備	専任 関係者	物品、人集め、設備、ポスターチラシ作り、会場の確定、必要物品の買い出し、配布資料の作成等	
11 随時	活動	地域活動の実施	関係者	計画に基づき実施する 参加者からの評価ももらう	実施する
12	振返り	全体での振り返り	専任	全体としての振り返り、各グループでの振り返り 報告会準備。	評価する
13	発表会	活動報告 （実施報告）会	関係者	運営は学生が行う。（事前準備から） 学校で実施し、下級生、関係者を招待する。 終了後は茶話会を行い、これからの希望などもうかがう。	
14	GW	今後の活動	専任	活動、発表を振り返り、各グループの課題解決状況と新たに見つかった課題などを明らかにしていく。 また、活動全体を通して課題解決に向かう自分自身の変化などについても振り返る。	
15	GW	報告書の作成	専任	学生各自で作成。この科目の成果とする	
使用テキスト	最新介護福祉士養成講座 1 社会の理解 最新介護福祉士養成講座 4 介護の基本Ⅱ				
単位認定の方法及び基準	講義での小テスト　20% 演習シートの記入　20% 発表会（中間発表、活動報告会）でのグループ貢献度　40%（20%×2 回） 最終報告書（レポート）　20%				

（2）実際の活動

図 99　事前学習（包括職員による講義）

図 100　事前学習（グループワーク）

2019 年後期より事前に作成していた計画に沿ってスタートしたが、実際には対象とする地域の方々との日程調整（自治会のみなさんや民生委員の方々もそれぞれお忙しい中で調整をしていただいている）や学生も授業や学校行事などもあり双方の都合に合わせると月に 1 回の活動時間をとることで精いっぱいと言う状況であった。

また学生側も毎回の振り返りシートの記載からはその都度それなりに興味を持って話を聞いているが活動に対しては受け身であり、実際に自分たちがそこへ入っていくという実感を持つことができていない様子がうかがえたこと、もともとのクラスの様子として自発的に参加する学生が固定されておりほかの学生はなんとなくついていくという傾向があったこともあり、学生それぞれに課題を持ってもらい活動できるように活動方法を変更していくこととした（これはもっと先に情報収集ができた後にグループ化していくつもりであった）。①団地内外の地図作り②団地の歴史③団地の現状　の 3 つのグループを分けそれぞれ興味ある分野に参加することとした。その後実際に団地へ訪問してサロンの会場や団地内の様子を直接確認する準備として、グループ別に下調べと確認すべき点を整理しておくことを行った。

準備をして見学に臨んだものの、学生のほとんどは準備した質問が終わるとそこからさらに疑問や興味を広げることができず、主に役員がサロンや団地の話を主導している状態で、サロンで作成されている手芸作品を見て写真を撮ったりしているときが一番生き生きしていた。質問を用意してきているにもかかわらず筆記用具（特にノート）を準備していない学生が多くその場で教員がルーズリーフを渡しており、自分たちの目的を十分把握していない状況であった。見学後はそれぞれのグループごとに学んできたことを整理し模造紙にまとめることでこの段階までの活動の一区切りとした。

図 101　サロンへの訪問

図 102　餅つきへの参加

表 14　活動経過

1回目 （10/8） 2 限	講義　　地域活動開始にあたって コーディネーターよりこれまで地域での活動経験を通じて実践に向けたレクチャー	興味を持つ
2 回目 （10/15） 1 限	対象地域を知る 厚木北地域包括職員より 対象地域の吾妻団地の現状と現在の厚木北地域の状況をうかがう。 地域での活動にあたり注意すること、コミュニケーションの取り方の指導。	（交流する）
3 回目 （11/12） 2 限	交流　対象地域の人たちとの交流 自治会役員 4 名（サロンの主催者）においでいただき、概要の説明を受けた後、小グループに分かれて直接話を聞く	
4 回目 （12/3） 2 限	グループワーク　対象地域を調べる 前回までの体験を踏まえ、次回予定している団地訪問に向け、グループごとの課題を提示し、質問事項などをまとめる。 ①　団地内外の地図作り②団地の歴史③団地の現状	
5 回目 （12/17） 1、2 限	対象地域の見学<実証講座> 自治会役員、民生委員 実際に団地へ訪問し団地やサロンを見学し、民生委員からも話を聞く。前回のグループでより詳しく地域の状況を把握する。	交流する
6 回目 （12/17） 3 限	見学振り返り 午前の見学内容をグループごとに振り返りシェアし、報告方法の確認	
1/5（日）	自治会餅つきに参加（学生 5 名、引率 2 名）	
1/20 締め切り 2020 年度 前期	これまでの活動を各グループごとに模造紙 1 枚にまとめる まとめの中から見えてきた団地の課題を整理して後期の活動を終了とする （2～3月は実習期間のため活動は休止） 2020 年度前期　各種イベントやサロンへの協力を継続して団地住民との直接的な交わりを通じ学生の主体的な活動を実践していく。後期へ向けて新 1 年生へのバトンタッチができるよう地域活動事前学習や報告会を実施する。	考える 企画する 実施する 評価する

2020 年 1 月 5 日集会所前のスペースで餅つきが行われ、準備された 100 食ほどの餅セットや豚汁などがふるまわれた。実際には学生 5 名、引率 2 名の参加となったが、これまでは自治会役員とのかかわりのみであったところ今回は役員以外の多くの団地住民と直接触れ合うこととなり、情報では聞いていたもののほとんどの参加者が「高齢世帯」「外国人家族」であったことを目の当たりにした。一方で自治会子供会の役員、民生委員がやってきた住民に親しく声をかけたり、出てきていない住民には部屋まで行って声をかけ参加を勧めている様子

から現在の団地内の関係性の一端を知ることもできた。学生も慣れない手つきで餅つきを行い、ベテランのつき手の住民からレクチャーを受けるなど世代間の交流も生まれていた。終了後の打ち上げでは「昨年はつき手が少なく大変だったが、今回は若い人たちが来てくれて助かった」と言う声を聞くことができた。以下は実際の活動の経過である。

（3）実践してみて気づいたこと

この地域活動は初めての試みで一応全体の計画はあるものの、先方との関係性を構築しつつ進めているとうこともあり計画を修正しながら進めきた。

学生の取り組みは後期になってからであったが、前期から地域活動に関する事前学習を行っておく方がスムーズであった。また、現在の対象学年の構成を見ると留学生が半数弱あり、日本の「地域」そのものについての理解が不十分であるということも事前学習の必要性としてあげられる。ただし今のクラスの状況として、施設でのアルバイト経験があることや物事への気づきの視点は留学生の方が優れており、日本人学生の持つ基礎的な知識や常識とうまくミックスさせてクラス全体の主体的な取り組みに向けた力を向上させていけるような仕掛けを作っていきたい。

1 月 5 日の餅つきイベントに参加することで今後の活動の方向性を改めて考えさせられた。一部の学生の参加であったが、授業の場面でなく自然な形で地域の人々と関わる中で、実際に学生が地域の様子を知ることができ、また自治会役員から餅つきに来た住民に「YMCAの学生さんが手伝ってくれている」というように紹介してもらったり、餅つきの合間の「どんな勉強しているの？」などの何気ない会話から住民に学校や学生の存在を認知してもらうことができることも目の当たりにした。一方でこのイベントに外国人住民と地域の関係について研究している大学院生も参加していたが、これまで彼女が聞き取りをした住民をはじめ多くの住民ともとても自然に関係性を作っている様子がうかがえた。今の学生にこのような目的を持ったコミュニケーション力を求めるのは非常に難しく（結局は言われたことを手伝うだけになる可能性が高い）、当初の授業計画で考えていたような一度や二度来訪した学生が住民とコミュニケーションを図り課題解決に取り組むというものは、地域や学生のためというより教員の目標達成のためのものになってしまうのではないかと感じた。団地と学校との関係は始まったばかりであり、性急に何か形を作るというよりまずは学生が今回のようなイベントに参加したり既存の行事などへの協力などを通じ相互理解を深めていくことが大切であるという実感を得た。

（4）これから地域の中の学校として

まだ学生が「地域に入る」と言う段階にはないが、学生の反応から少なくとも「興味をもった」（またはもたされた）ようである。学生によってその度合いは様々であるが、団地の近所住む学生からは「近くにあっても団地の状況を知らなかったということがわかった」や、留学生は自国の生活と比較してみるなど自分自身とのかかわりの中から具体的な「引っ掛かり」を感じているようである。少数であるが、実際にイベントに参加した学生からは引き

続き関わっていきたい、と言う声が聴かれている。初めての参加で住民や自治会役員に受け入れられたという体験が彼らを積極的にしていると思われる。まずはこのようなプラスの体験を積み重ね、そこからなぜ？という疑問を持ったり、わからないことを調べてみるという自ら学ぶ姿勢を生み出す授業を展開していきたい。

その一つの方向性として、その学年だけで学びを終わらせるのではなく、学生が次の学年への引継ぎを行い、この活動を継続性のあるものとしていくことが必要である。受け身の学習だけでなく、学んだことを整理し自分たちの言葉で伝えられるような報告会の場を持つこと、オフィシャルな場だけでなく次の学年と一緒にイベントに参加しつつ雰囲気を知っていくことなどをしていき、地域活動を行うことを通じて学生それぞれの学ぶ姿勢の変化につなげられたらと考えている。

そしてこのように活動を学生が受け継いでいく中で地域との絆が強くなり地域に求められる人材とそれを育てる学校の存在意義が増していくのではないかと感じている。

5.3.4.まとめ

本校はディプロマ・ポリシーとして、以下のことを大切にし、学生の学びを支援している。

学生生活を通して、地域の様々なネットワークを活用し、学内外で多くのボランティア活動に参加し、地域や社会にある課題を自分ごととして捉える素養を身につけて欲しいと願っている。さまざまな人とのかかわりから、喜びや悲しみを分かち合うことは豊かな人間関係を育み、他者に対して感謝する気持ちを育む。単なる介護士福祉士養成施設としての役割だけでなく、人や社会とかかわることによって、ともに生きる福祉社会を作り出す人材養成であり、平和を創り出す担い手を育てることが養成施設の役割であると思う。

(5)学校・教員・学生が地域と共生するために

①専門学校が地域に溶け込むために

(1)高齢化の進展

日本の高齢化は世界に類を見ないスピードで進んでおり、2018年9月20日現在、65歳以上の高齢者数は、3538万人を数え、高齢化率も総人口の28%を占める。高齢化率の上昇は、少子化・人口減の中でさらに続き、2042 年以降、高齢者人口は減少に転じるが、高齢化率は上昇を続け、2065 年には 38.4%に達すると予測されているため、高齢者の中でも有病率が高いといわれる 75 歳以上の後期高齢者も現総人口の 14.0%、1774 万を数える。後期高齢層も 2065 年には、総人口の 25.5%に達するといわれている。同時に今後何らかの支援が必要な認知症高齢者も増大を続け、2025 年には 700 万人と予測されている。しかし、すべての高齢者が何らかの支援が必要というわけではなく、地域社会や産業分野で活躍している高齢者も多いことは留意すべきである。

少子高齢化、人口減が続くなか、介護などを考える上で家族の在り方も無視できない。日本の世帯類型を見ると、2017 年現在の総世帯数は 5042 万5千世帯であり、このうち65以上の高齢者のいる世帯は、全世帯の 47.2%、2372 万 7 千帯である。これを世帯構造別にみると、65 歳以上の者がいる世帯の 32.5%が「夫婦のみ世帯」、「単独世帯」26.4%となっている。しかも、OECD の調査でも「友人・同僚・その他の人」との交流が「まったくない」あるいは「ほとんどない」と回答した人が 15.5%であり、他者との交流が少ない現状がある。高齢者世帯の単身化、夫婦世帯の増加も孤立化に拍車をかけているように思われる。

政策的には、いわゆる「団塊の世代」が後期高齢者を迎える 2025 年を目途に、様々な支援や交流も含めた仕組みが求められ、政府は「地域包括ケアシステム」の確立を目指している。このシステムは、重度の要介護状態になっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供されることを目標としている。確かに高齢者には住み慣れた地域生活を望む者も多い。また、介護保険法の改正によって、特別養護老人ホームなどの入所は、「要介護 3 以上」とされたことから、要介護状態になっても在宅での生活を余儀なくされる高齢者は、さらに多くなると見込まれる。

一方、介護を担う人材の側面からみれば、介護従事者の不足は歴然としている。介護施設を建設しても、職員不足により定員未充足が続いたり、在宅介護事業所が職員不足により、閉鎖を余儀なくされている事態が進んでいる。政策的にも介護職員の処遇改善を図ったりしても、焼け石に水の感じがする。その不足を補う意味で、外国人介護職員の受け入れが 2008 年の経済連携協定により始まった。これは、介護福祉士資格の取得が前提の施策であった。こうした動きは介護福祉士養成の専門学校の経営にも大きな影響を与えている。

(2)暮らしを支える仕組みの必要性

我々の生活の主な舞台は、年齢や階層によっても異なるが、高齢者にとって市町村やそれより狭小な小学校区や中学校区などの日常生活圏域(地域社会とここではいう)といってもよい。地域社会には高齢者から赤ちゃんまで、さまざまな世代が暮らしており、しかも自立的に生活している人もいれば、何らかの支援を必要としている人もいる。万が一、生活上の諸障害が発生した場合、自らの力で解決したり、あるいは公的なサービスや住民参加の各種サービスを活用して乗り切らなければならない。つまり、他の力を利用しようとすると、サービスや支援の活動が身近な地域社会に用意されてなくてはならない。このような資源には、各種の法律や条例に基づくサービスから住民のちょっとしたボランタリーな活動までいろいろなものが考えられる。このように考えるならば、住民とり

わけ高齢者にとって、地域社会とは問題が発生する場であり、解決する場といえよう。

しかし、多くの高齢者は自らが要介護状態になることなど想像もしないで生活を送っている。介護サービスが必要になった場合、介護保険という名称は知っていても、どこに相談に行き、どのような手続きをしたらよいかなど、ほとんど知らない現実がある。しかも、介護相談は何らかの「マイナス状態」を開示することであり、相談しづらい側面もある。確かに地域包括支援センターなど整備され、相談から地域の諸資源をつなぐ役割を期待されている。しかし、今求められているのは、さらに身近な地域に気楽に相談できる場で、必要な専門機関につなげてくれるような場である。また相談機能と気軽に予防をも含んだ活動や居場所があれば、自立生活を推進する上でより有効といえる。これらの機能が地域の日常生活の中に組み込まれている仕組を「暮らしの中の介護」と仮に呼ぶが、これらが地域社会につくられるならば、住み慣れた地域社会で生活したいという思いを実現することになる。その時に、重要なのは介護のもつ意味や技術をもち、地域をコーディネートできる職員である。医療職が「生命を守る」専門職ならば、介護や福祉を担う職員は、「人間の尊厳を守る」専門職といえよう。

このように考えれば介護福祉士養成の専門学校は、人間の尊厳を担う人を育てる崇高な教育活動を展開する公益的な組織である。残念ながら社会的には、介護労働の持つ意味が十分に理解されているとはいえない。その意味では地域活動を展開する中で、国民の介護に対する認識を変えていく取り組みが重要である。それには、どのような介護を望むか一人ひとりが自己の問題として考える機運をつくる必要がある。

政策的にも地域志向が進み、高齢者自身も地域生活を希求する昨今、介護福祉士養成の専門学校もその流れの中での質の高い専門職養成が求められている。このことは教職員のみならず、学校経営者が専門学校の社会的意義を再確認しながら、地域にどのようにかかわるかの地域戦略を持つ必要性に迫られているといえよう。

(3) 専門学校の公益性

専門学校の多くは、学校法人であり、学校法人は教育基本法第 6 条第1項に「公の性質をもつ」と規定され、その設立根拠法である私立学校法の定めにより、自主性、公共性を要する法人として位置づけられている。税法上も財団法人等に分類され、教育事業は非課税とされている。

介護福祉士養成の専門学校の多くは、学校法人であり、高等専門教育の一端を担っている。特に 2014 年 4 月から導入された文科省の「職業実践専門課程」の認定を受けると、実践的教育の展開のために、介護事業者などの企業人の体験などが授業の中に組み込まれたり、教育の質保証を目的にした教育課程編成委員会や学校関係者評価委員会が組織され、地域の介護関係者や学生の実習先の指導者が加わり、地域との連携が図られている。地域に開かれた学校運営を推進する不可欠の要因といえよう。とりわけ、介護福祉士養成は、前述のように「人間の尊厳」に関わる職業人の要請であり、まさに公益性の高い事業といえよう。しかし、冒頭に述べたように、地域社会の変容は刻一刻と変化し、地域社会の再生が介護の側面でも求められている。介護の専門学校は、学内での教育だけでなく、さらに一歩すすめて、地域社会の介護に積極的に関わり、地域に出ていくことが期待され、「地域を支え、かつ支えられる関係」づくりに、今以上の努力を傾注する必要があるのではあるまいか。そのためにも学生の学びの場を実習施設にとどまらず、地域に広げるとともに、「介護の専門学校」という特性を活かし地域に飛び込み交流することは、専門学校を介護にかかわる地域づくりの拠点としての地位を築くことにほかならない。そのためにも専門学校の経営者が地域の介護状況を分析し、「暮らしの中の介護」のための戦略を持ち、教職員が一丸と

なって地域に入り交流する必要があるだろう。そのことが今日的な公益性の発露といえる。とりわけ、介護への対応は、その場でも対応が求められ、その意味では介護福祉士の養成は、その地域に定着してもらう必要性があり、いわば「地産地消」の意味合いが大きい。また、通学の学生も一定のエリア内から通ってきていることから、専門学校はそのエリア内介護に何らかの役割を担うことが潜在的に期待されているといえないだろうか。

他の高等教育機関を眺めると、大学においても総務省の「域額連携」地域づくり支援事業や文科省の地域連携・プラットフォーム連携事業など各省庁の施策も地域志向の方向性を読み取れる。大都市、中山間地域を問わず地域を舞台に高等教育機関への期待は、今後とも高まると思われる。

このような公益性の位置づけは、ほぼ同じような法人形態をとる社会福祉法人が参考になると思われる。従来、社会福祉法人は社会福祉法に規定された社会福祉事業を運営することによって、公益性が担保されると解されていたが、今日では「公益性」の解釈が広がりつつある。特に、2016年施行の社会福祉法改正で、地域における公益的な取り組みを実施する責務が社会福祉法人に課せられた。つまり、社会環境の変化により、福祉ニーズが多様化するなかで、制度の狭間の課題や公的サービスでは対応できないニーズなどを積極的に解決することが法人の責務と規定された。この間の議論の中心の一つは公益性であり、地域ニーズに対応しない社会福祉法人には、「課税を」の論議があったと伝えられている。

(4) 地域連携・共生社会づくり向かって

専門学校が地域社会のなかで展開できる可能性を列挙してみよう。もちろん、すでに専門学校として取り組んでいるものも多いし、当然のこととして地域社会のよって異なることはいうまでもない。合わせて忘れてはならない視点は、地域の機関・団体と協働して行うことである。なお、教員や学生の地域活動への参加の意味合いは他の論考があるので割愛する。

○地域の自治会や町内会、商工会などに参加すること。それによって、地域社会の情報を把握できる。

○地域での住民目線の気軽な相談の場を設けること。

○元気な高齢者向けの予防や地域活動のセミナーなどの開催。認知症予防や地域での受け入れの講習会など

○専門学校のもつスペースの活用。例えば、ふれあいサロンや子ども食堂等スペースとして活用してもらうことである。

○社会福祉法人等の職員の研修を合同研修。市町村内の専門機関の力量向上に寄与することである。

○災害時への対応。例えば、福祉避難所なども考慮に入れておくことが必要である。

ここに挙げたのは例示であるが、市町村によって事情は異なるが、さまざまな取り組みを通じて、専門学校が介護や交流の拠点として機能することは、地域社会の大きな財産となる。また、そのことは地域住民からも様々な応援を得られることになろう。

そして、専門学校として取り組んだ事業や活動は、虚偽の宣伝は許されないが、ホームページはもとより、マスコミやコミュニティ放送などと連携し、大いに宣伝する必要がある。そのことが地域での知名度をあげ、学生や教職員が「誇れる専門学校」になるに違いない。

（特定非営利活動法人　福祉と市民活動研究所　理事長　齊藤　貞夫）

② 教員が地域に溶け込むために

地域活動は住民と協働のもと推進するものであり、教員に求められる役割は地域活動に携わる住民を指導するのはなく、地域活動に参加する一人ひとりの学生の個性をきちんと踏まえて、「自分のまわりには、こうやってやさしく接してくれる地域の人がたくさんもいるんだ」といった気づきや発見を通じて、自分を取り巻く地域を具体的に捉え、成長できるような関わりをしていくことこそが、むしろ重要となってくる。

このように、人々が自ら行動を起こすように促し、できる限り長くその行動を続けてもらう仕組みづくりとしてパブリック・リレーションズ[1)]がある。ここでは、パブリック・リレーションズの概念をヒントに教員が地域に溶け込むために求められる役割について考察を深めてみたい。

●パブリック・リレーションズとしての高齢者支援・介護支援の学習プログラム

Public Relations とは、20 世紀の初頭に、多様な人種により異なる価値観によって構成されるアメリカ社会（Public）において、人々が共存し、複数の信頼関係（Relations）を築くために発展した概念や手法である。殿村の説明をもとに、従来の PR と本来の Public Relations の違いを比較すると以下のようになる。

表１　　従来の PR と本来の Public Relations の比較

種類	従来の PR	本来の Public Relations
内容	特定の商品やサービスを企業等からの依頼に基づき、メディアによる広告やイベント等で周知することを通じて売り上げを高めること	まわりの空気を換えることで、人々が自ら行動を起こすように促すもので、できる限り長くその行動を続けてもらい社会的に好ましい信頼へ高めること
手法	トップダウン型で展開	ボトムアップ型で文化に高める
対象	抽象的な集団	具体的な個人

（殿村の記述をもとに、筆者が表現を一部修正し作成した）

ここで注目したいのは、従来の PR が漠然とした抽象的な集団を対象に設定しているに対して、人々が自ら行動を起こすことを促し、できる限り長くその行動を続け社会的に好ましい信頼関係の形成を目指す本来の Public Relations はその対象を具体的な個人と設定していることである。

殿村は「社会を抽象的な集団としてではなく、それぞれの価値観をもった個人の単位で見て具体的なものとして捉えること。」[2)]の重要性を指摘している。この考え方を援用して、地域住民を漠然とした抽象的な集団としではなく、それぞれ価値観をもった個人の集合体として捉えなおすことによって、個別支援のケアワークを主とする介護福祉士の教育においても、地域住民との関係形成を適用しやすくなると考えられる。

次に、地域組織化の評価という視点に結びつけて、従来の PR と本来の Public Relations と新しいパブリック・リレーションズの概念を再整理してみたい。

表２　地域組織化の評価（３つのゴール）

タスク・ゴール	プロセス・ゴール	リレーションシップ・ゴール
目的の達成面から評価するもので、地域の福祉課題や生活問題を具体的にどの程度解決したのか、問題解決に住民はどの程度満足しているかを評価するもの。	課題の解決よりもその過程において、住民がどういう形で参加したのか、参加によりどのような問題解決能力を身につけたかといったことを評価するもの。	組織活動を通じて地域住民の民主化や連帯感がどれだけ強まったのか、当事者の人権は擁護されたのかといった人間関係の質の変化について評価するもの。

（『地域福祉辞典』の記述をもとに、筆者が表現を一部修正の上作成した）

いわゆる地域組織化の評価（３つのゴール）に引きつけて考えると、従来のPRの捉え方は、「特定の商品やサービスの売り上げをいかにして高めるのか」という側面から目的の達成面を評価する「タスク・ゴール」の考え方に近いものとなる。

それに対して、本来のPublic Relations や新しいパブリック・リレーションズの捉え方は、「人々が自ら行動を起こすように促すもので、できる限り長くその行動を続けてもらい社会的に好ましい信頼へ高めること」や、「より深い意味での認知と愛着を根付かせていく」という側面から、どちらかというと住民の主体形成力を強化する「プロセス・ゴール」や地域に対する帰属意識や連帯感を強化する「リレーションシップ・ゴール」の考え方に依拠するものとして解釈することができる。

このような視点から鑑みれば、高齢者支援・介護支援の学習プログラムは単に学生と教員、学校が地域コミュニティとつながるために活動する訳ではない。教員が地域に溶け込むための機会を学生と共に設定し、その過程を通じて「介護福祉士」という存在の認知と愛着をより深い意味で地域住民との間で育みながら、社会的に好ましい信頼関係を構築していくこと。さらに、一過性の活動として終わらせるのではなく、学校という組織として続けていくことにより、地域活動に大きな広がりを持たせ、介護福祉士養成校教育を再定義する大きなムーブメントとして文化へ高めていくことが重要になってる。

（東京家政大学　子ども学部子ども支援学科准教授　岩崎　雅美）

注

１）パブリック・リレーションズの考え方についは、『ブームをつくる　人がみずから動く仕組み』殿村美樹著　集英社新書が詳しい。本項では同書の記述を参考にし、従来の誤った認識を「従来のPR」、本来の認識を「本来のPublic Relations」、殿村の提起する新しい認識を「パブリック・リレーションズ」と区別し表記している。なお同書では、これまで日本で常識とされてきたPRの理念と手法が単に「広報」と訳されたことによる誤解によって、Public Relationsの本質に関する認識が誤って広がっていると指摘している。

２）『ブームをつくる　人がみずから動く仕組み』殿村美樹著　集英社新書　Ｐ５２

参考文献

『地域福祉辞典』　地域福祉学会編　中央法規出版

『コミュニティ・オーガニゼーション　理論と原則』マレー・ロス著　岡村重夫訳　全国社会福祉協議会

③学生が地域に溶け込むために

＜はじめに＞　前提として押さえておきたい3つのこと

ⅰ.まず第1に、地域の方々に「敬意(リスペクト)」を持って接すること。

誰もが皆、その人独自の生活の歴史を持つ、かけがえのない尊厳ある存在であり、そうした方々と関わる中で学ぶのだということを、しっかりと押さえておきたい。

ⅱ.第2に、「信頼関係」が築けなければ、何事も始まらない、ということ。

同じ言葉、同じ行動であっても、信頼関係のないところでは、受け入れられ信頼されることは困難でしょう。それは、地域の方々との信頼関係においても、教師と学生との信頼関係においても同様に言い得ることです。

ⅲ.第3に、学生が地域に溶け込むことを考える前提として、学校と教師の姿勢が問われるということ。

学生が地域に学び、価値ある体験をするためには、学校が地域に向かって開かれ、地域の中で福祉の拠点たらんとし、教師はもちろん、校長自ら地域に関わり多様なネットワークを創り出そうとする姿勢と熱意が、前提として必要なのではないでしょうか。少なくとも、同時進行でそれが進められていることが必要で、そうした基盤があってこそ、学生自身の地域と関わる主体的な学びが、教師の細やかな支援のもとで創造され得るのだと考えます。

この3つのことは、最も重要な基本的な前提として心に留めおきたいことです。

＜学生が地域に溶け込むための　いくつかの手立て＞

ところで「溶け込む」といっても、いきなり　そんなことが出来るわけがありません。「関わる」、「つながる」そのつながりの広がりと深まりの先に「溶け込む（共に生きる）」といった状態に至るということでしょうか。ここでは、まず「関わり、つながりを生み出すにはどうすればよいのか、ということで考えていきます。

ⅰ.まず学生自身が、この学習の目的をしっかりつかむこと。

あくまで教育課程の一環としての学習であり、教師は何故その学習が必要なのか、その目的は何なのかを丁寧に伝え、その興味関心、意欲を掘り起こす手立てと工夫が必要です。少なくとも将来介護の仕事に携わる者として、現実の地域社会の生活者から直接に学ぶ貴重な体験であり、地域課題を考え、少しでも地域が暮らしやすい場になるよう活動する「生きた学び」であること。またこの学びは、現実社会と関わり、自ら考え問い、自らその問題解決を目指す主体的な力を培うものであること等は伝えておきたい。そして、学生自身、何故地域と関わるのかということについて、できる限り「自分自身の課題」として意味づけをしていくよう支援していくことも大事にしたい。これは「受け身の学習」にしないためにも、重要なことです。

ⅱ.事前学習の役割と限界

事前学習は重要です。しかし、それは学習目的をしっかりつかみ、漠然とした「地域」という言葉に具体的な仮のイメージを与え、興味関心を掘り起こし動機付けしていくと共に、この学習活動に対してある程度のイメージを持って考えられるようにすることに主眼があります。基礎学習ということで、知識・情報を与えることが多くなりがちでしょうが、やはり、主体的な学習としての「調べ学習」や、学生自身で考え合うことを重視し、その中から多様な気づきや問い、アイディアを引き出していきたいものです。その地域把握の基礎は、やはり地域と周辺の地図づくり（空間軸）と地域の歴史（時間軸）の調べを基盤に、現実の状況把握をするというのが基本でしょう。しかし、これはあくまで資料や人づてに聞き知った情報のまとめです。大事なことは、実際に地域と出会い、関わり、自分自身で見聞きし確か

め、発見し、実際にこの活動を起動させていくことであり、そのための素描資料として重要なのです。

ⅲ.「関わる」「つながる」ために、どうしたらいいかを考え合う

事前学習を基に、何が必要か、どうしたらいいか、教師の投げかけと支援の基にあらかじめ地域を想定し考えてみることも大事でしょう。たとえば（想定話合）、まず学校や自分達の存在を、地域の方々に知って頂くことが大事ではないか。まず顔見知りになることが先決ではないのか？　等々。

では、そうした地域と関わる機会や場は、どのようなものが考えられ、どうしたら創れるのだろう？そもそも取り組みには2つ方向性があるのではないか。地域の方々に学校に来て頂く場合と、学生が地域に出向いて行く場合の2つが。

＜学校に来て頂く場合＞　これは比較的アイディアが出やすいのではないか。

・今までやってきたこと、或いは少し拡大して、楽しく関わりふれあう、交流の場が創れるではないか。そのお知らせをどうするか？チラシの工夫？等々、いろいろとアイディアは膨らんでいくのではないでしょうか。

・なかには、学校に積極的な姿勢や雰囲気があれば、居場所やふれあいサロンを、という声も出てくるかも知れません。

＜学生が地域に出向いて行く場合＞　問題はこちらの方が難しいでしょう。

・どうしたらいいか？既に地域にある会や活動、サロンや居場所があれば、まずそこに参加させて頂くことから始めるのがいいのではないか。さて、地域にはどんな会や活動があるのだろう？

・従来からボランティア活動としてやっていることや、地域の祭りや行事に参加し手伝わせて頂くということもあるのではないか。お祭りの時、どんなことをやっていたか思いだし、何が出来るか考えてみる、等々。

こうした話し合いの中から、教師（学校）の願いや考え方と、学生達の願いを摺り合わせ、どういう方向でいくか、決めていきます。発展的に両方を取り入れていくという方向が出ても、それはそれで案としてはいいのではないでしょうか。

ⅳ.地域や地域の方々と関わるための具体的な手立て、その1.繰り返し関わる

ここからは以下、具体的・実践的な手立てについて述べていきます。

どちらの方向を取るにしても、地域を知り、地域の方々との相互理解を目指すことは大事なことのはずです。

＜どのように繰り返し関わるのか＞

1）1～2 回地域に入ったからといって地域が分かるなんてことは、まずありえません。まず「見れども見えず」。誰でもそう、教師でもきっと同じです。出来る限りの時間と場を保障すること、それは最大の支援です。

2）どのように関わるのか？自分の目、自分の耳、五感を最大限働かせて関わる。

アレ？何？どうして？何か変！驚きだ！といった小さな「気づき」を大事にする。こだわる。それが自分自身の問題意識につながっていくことが多い。学生の小さな気づきに気付き、支援していく教師の力量が最も問われるところです。

3）毎回、必ずみんなで（小グループの方がいい）「振り返る」。その視点は、その時の目標を基に、地域について、地域の人々や団体・機関について、そして自分自身についてです。自分自身が体験を通して、どう変化し、どう成長してきているのかということは、特に学生にとって大事な視点です。

4）失敗やハプニングを大事にする。物事は想定通りにまず進まない。思いがけないハプニングや失敗こそ、大きな学びや新たな展開へのチャンス！臨機応変に対応すること、失敗に学ぶこと、それ

らは大事な培ってほしい実践的な能力です。

5）時間の制約は厳としてあります。休日や祭日を使って行われる祭りやイベントには、出来る限り参加してほしい。“来てくれて助かったよ、ありがとう”という、人に喜んで頂けたという喜びは、きっとモチベーションを高めてくれます。

6）時間が許せば、出来る限り歩いて通ってほしい。歩くことで、また様々のことに気づきます。地域が遠い場合は、近くから、一部を歩くことでも構いません。

ⅴ.地域や地域の方々と関わるための具体的な手立て その2.「聴く」こと

1）「聴く」こと、そして「聴き合う関係性」は、学びの根幹です。しっかり耳を傾け傾聴し、聴き取る力の重要性。コミュニケーション力の根幹も、まず聴く力から。

2）地域の方々の人生、その生活の喜び、悲しみ、苦しみを分かち合い共感しつつ聴く人生の学び。人は、しっかり聴いてくれる人に、心を開いてくれるものです。

そうですね、と相づちを打ちながら共感的に聴く感受性。介護の仕事に必須です。

3）そうした聴き方ができる為には、自分の生育史、どのような人との関わりの中で今の自分があるのか、自分の育ちの上での喜びや悲しみ、今ここに生きている感謝の気持ち等々、振り返り整理しておくと、きっとより共感的に聴けるのではないでしょうか。この生育史への振り返りは、福祉であれ教育であれ医療であれ、およそ人間の生命（いのち）のケアに携わる者にとって、必須の条件だと思います。

ⅵ.地域や地域の方々と関わるための具体的な手立て その3.作業を共にする

1）一緒に何かをやりながら話す、作業を共にしながら（媒介として）接し、関わることは、非言語的に打ち解けやすく、関係も築きやすい。その意味で、先程ふれたお祭りやイベントで、一緒に手伝い、作業をしながら、楽しみながらの自然な関係づくりは、いい手立てです。

ⅶ. 地域や地域の方々と関わるための具体的な手立て その4.地域を好きになる

1）1 年ないし 2 年にわたる長丁場の活動。自分自身のモティベーションを維持し継続していく上で、「我が街」という意識が持てることや、「地域を好きになる」ということが、案外、大事なように思います。たとえ短い間だったにせよ、青春の日々、学友達と関わり、地域の方々と一緒に生きた忘れられない地域、街になってほしいと願います。

2）そのためには、地域や街のいい所、好きな所、不思議な所など、自分自身の目で、いっぱい再発見することです。場所だけではありせん。地域で出会った方々との忘れがたいエピソードや再発見、犬や猫など生き物についての再発見もあるかもしれません。物事は、肯定的に見ること、関わることで、好きな気持ちが、きっと自然に醸成されてきます。

ⅷ. 地域や地域の方々と関わるための具体的な手立て その5.つなげる・つながる

1）2 年生と 1 年生のつながり

地域に関わる活動は、持続的に継続されることが大切です。そのためには、2 年生が 1 年生に伝え、つなぎ、受け継いでいくことが必要です。しかしそれは一方的な形には終わらないかもしれません。1 年生の新鮮な気づきや考えが逆に伝えられ、教えられるということも、きっとあるでしょう。物事は一方的でない、伝え・伝えられ、教え・教えられ、支え・支えられる双方向のあり方こそ大事にしたいものです。また、1，2年生合同で取り組むことも、きっと大事なことです。各地の専門学校で行われている学年を超えた協力・協働、つながりの姿に、私は希望を感じています。

2）「つながる」という体験を大事にしてほしい。

地域で活動をしていると、様々な人達や団体・機関の人達と出会います。そのつながりの広がりは「連携」といったり「ネットワーク」と言ったりしますが、地域を支える、とても重要な協働の支援

機能です。「よき出会いの連鎖」という言葉があります。いい出会いが、また新たないい出会いにつながり、新たな輪が次々と広がり豊かになっていく人生の喜び。「つなげる・つながる」は、大事にしてほしいキーワードです。

＜おわりに＞

ⅰ.「過程」(プロセス)を大切に！

目的を持ち、優先順位等を考慮して目標を段階的に定め(遠い目標、近い目標)取り組み、その結果を評価することは、もとより重要なことであり、PDCA のサイクルも、実践的に自分のものにしていかなければなりません。

しかし学びの世界では、「結果」(成果、生産性、効率性など)がすべてではないと私は思っています。いかにその課題の追究や解決に懸命に取り組んだのか、そこでどう考え、工夫し、取り組んできたのか、その「過程(プロセス)」そのものが大事なのだと思っています。プロセス全体が学びであり、そうした「学びの履歴」こそ、結果の評価と共に大切に考えてほしいと願っています。その意味で、学びの蓄積(ポートフォリオ)なども、是非大事にしてほしいと考えています。

ⅱ.「生き方追究の場としての地域」

個人的な話で申し訳ありませんが、この項の筆者は学生時代、ドヤ街(山谷等の簡易宿泊街)で、セツルメントに関わっていました。その時の合い言葉が、「生き方追究の場としての地域」でした。地域の人達や子ども達との関わりの中で、「生きる」ということや、いかに生きるのかといったことを考え続けていました。このことは、今も尚、自分自身の生き方や考え方に影響を及ぼしているように思います。

皆さんの、この地域と関わり、つながり、そして「溶け込む」活動が、あなた自身の生き方を考え支える、何らかの糧になってくれればと願ってやみません。

ⅲ.最後に、「一歩踏み出す勇気」と、そして「笑顔」を忘れずに！

(松戸人権擁護委員協議会会長　野村　義)

（６）地域コーディネーターの役割

①地域コーディネーターの役割

コーディネーターを辞書で調べると、「物事が円滑に行われるように、全体の調整や進行を担当する人」とあります。

介護を志す学生に、生きた介護を学ぶ機会や、生きた介護スキルを身につける場を「地域」に求めるとした時、学生や学校と地域をつなぐ「コーディネーター」の存在が必要となります。

ここでは、その調整役となるコーディネーターの役割として求められる機能を、「知る」「つなぐ」「広げる」の三つの段階に分けて説明します。

①　「知る」

一番大事なことは、学校としてどのような目的で地域とつながりたいのかをコーディネーターが把握することです。学校として何がしたいのか、学校や学生の強みは何か、地域に何を求めるのか、を知ることです。

次に、自分たちの学校の周りにはどのような地域資源があるのか。またどのような地域なのか地域特性を知ることです。既に、地域には「地域づくり」を目的とした生活支援コーディネーターや地域福祉コーディネーターがいます。各区市町村によって違いはありますが、地域資源の把握やネットワークの構築、新たな資源の開発など、地域づくりの専門職として活動しています。

また、社会福祉協議会では、住民に身近でなじみのある日常生活圏域（自治会や小学校区などの徒歩エリア）で行われる、住民が主体となった「小地域福祉活動」の推進や、ボランティアコーディネーターによるボランティアの育成や活動の推進など、本来業務として地域と密接な関わりを築いています。

このように、すでに地域で先駆的に活動しているコーディネーターに、その地域の現状を聞くということも「知る」手段の一つと言えます。

また、何から始めて良いか分からない場合は、学校内外の関係者で実行委員会等を立ち上げ、プロジェクトとして進めていくことも効果的と言えます。（例：北海道福祉教育専門学校の地域委員会の開催）

コーディネーターは、「学校が地域に求めること」と、「地域が求めていること」を把握し、合致させた上で何ができるかを考えていかなくては一方的な活動になってしまうと言うことをきちんと踏まえて、まずは学校の内外を知ることが重要と言えます。

【地域包括ケアシステムの構築と生活支援コーディネーターの配置】

国は、介護保険法の改正に伴い、高齢者が住み慣れた地域で生活を継続できるよう、介護・医療・住まい・生活支援が包括的に確保される体制（地域包括ケアシステム）の構築を 2025 年を目途に実現すると示した。また、多様な生活支援・介護予防サービスが利用できるような地域づくりを市町村が支援する。具体的には、生活支援・介護予防サービスの充実に向け、ボランティア等の生活支援の担い手の養成・発掘等の地域資源の開発や、そのネットワーク化などを行う「生活支援コーディネーター（地域支え合い推進員）」の配置などについて、介護保険法の地域支援事業に位置づけた。

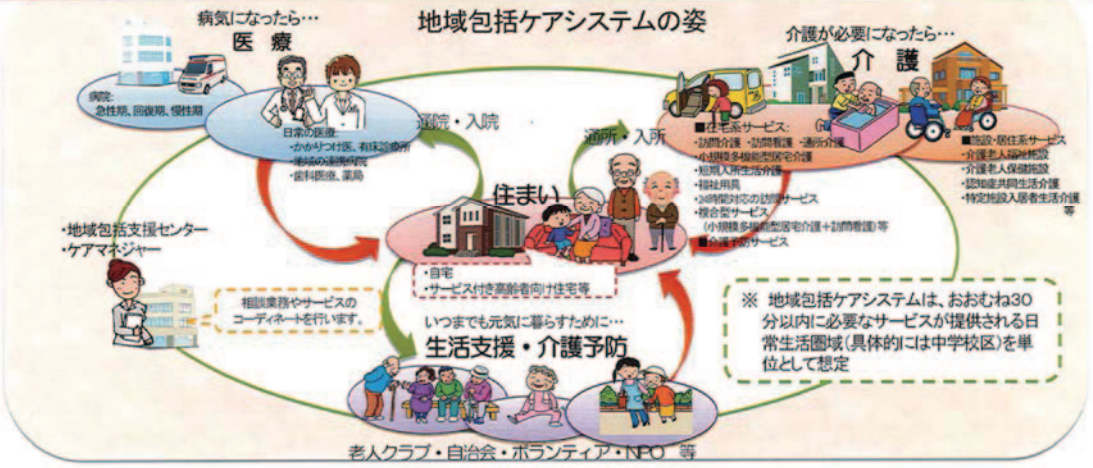
地域包括ケアシステムの構築について

○ 団塊の世代が75歳以上となる2025年を目途に、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、**医療・介護・予防・住まい・生活支援が包括的に確保される体制（地域包括ケアシステム）の構築を実現。**

○ 今後、認知症高齢者の増加が見込まれることから、認知症高齢者の地域での生活を支えるためにも、地域包括ケアシステムの構築が重要。

○ 人口が横ばいで75歳以上人口が急増する大都市部、75歳以上人口の増加は緩やかだが人口は減少する町村部等、**高齢化の進展状況には大きな地域差。**

○ 地域包括ケアシステムは、**保険者である市町村や都道府県が、地域の自主性や主体性に基づき、地域の特性に応じて作り上げていく**ことが必要。



出典：厚生労働省資料

支え合いによる地域包括ケアシステムの構築について

○地域包括ケアシステムの構築に当たっては、「介護」「医療」「予防」といった専門的サービスの前提として、「住まい」と「生活支援・福祉」といった分野が重要である。
○自助・共助・互助・公助をつなぎあわせる（体系化・組織化する）役割が必要。
○とりわけ、都市部では、意識的に「互助」の強化を行わなければ、強い「互助」を期待できない。

自助：・介護保険・医療保険の自己負担部分
・市場サービスの購入
・自身や家族による対応

互助：・費用負担が制度的に保障されていないボランティアなどの支援、地域住民の取組み

共助：・介護保険・医療保険制度による給付

公助：・介護保険・医療保険の公費（税金）部分
・自治体等が提供するサービス

出典：三菱ＵＦＪリサーチ＆コンサルティング「＜地域包括ケア研究会＞地域包括ケアシステムと地域マネジメント」（地域包括ケアシステム構築に向けた制度及びサービスのあり方に関する研究事業）、平成 27 年度厚生労働省老人保健健康増進等事業、2016 年

② 「つなぐ」

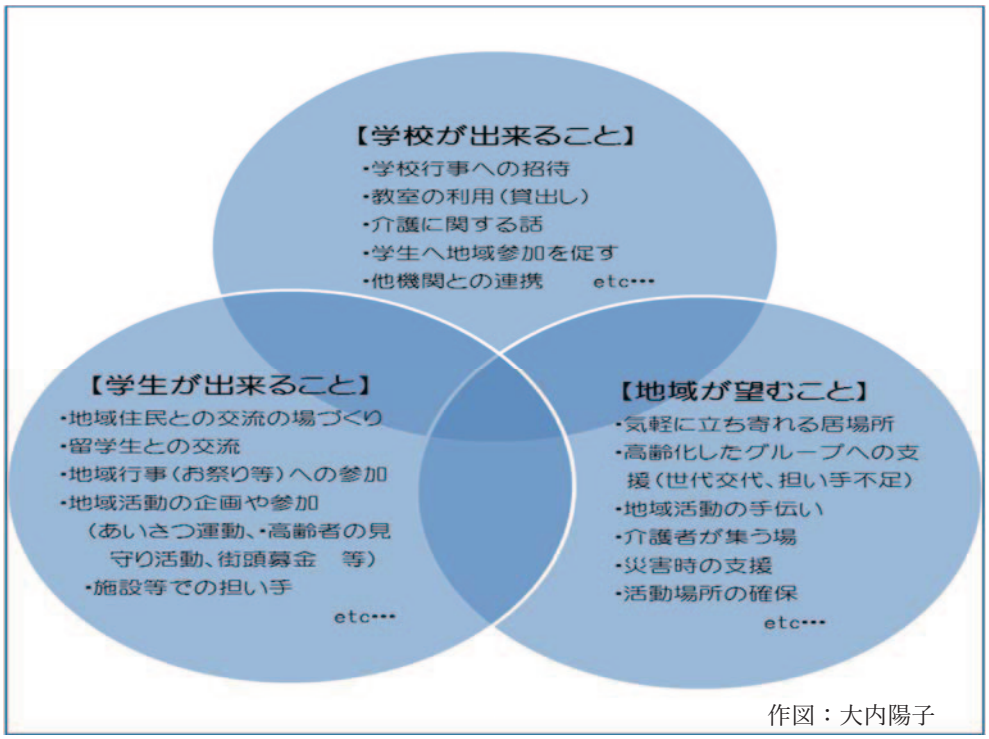
コーディネーターは、学校と地域をつなぐために、知り得た情報をどのように活かすかがポイントになります。

まず、学校が何をしたいのか、学校や学生の強みを把握したことで、学校としてまたは学生として「できること」を確認します。これは、コーディネーターだけで考えるのではなく、教員や学生の意見をなるべく多く聞くことが大事です。

さらに、「できること」に拘らず、「できるかどうかわからないけどやってみたい」という意見でも良いでしょう。なぜなら、「できない」と思っていた意見が、工夫次第で「できること」に変わる場合があるからです。

このように、多くの意見を引き出すための「ファシリテーション力」もコーディネーターの役割として必要となってきます。

次に、地域から求められていることを整理します。この作業も、教員や学生と一緒にすることをお勧めします。求められていること（知ったこと）をすべて書き出すことで、どんな意見があるのか共有することが出来ると共に、自分たちのやりたいことやできることと一致することはあるか、また、先ほどと同じように工夫次第で「できない」が「できる」（自分たちができる）にならないかを、一緒に考えることができます。そうして、最終的に「できること（やりたいこと）」が決まると、コーディネーターは学校からの提案として地域にアプローチする（＝つなぐ）ことが出来るのです。



作図：大内陽子

また、①で記載した各コーディネーターとの情報交換の中から、やれることを決めることも可能です。例えば、地域づくりを進めるうえで、生活支援コーディネーターから「高齢者が気軽に集まれるサロンを作りたいが、場所がなく、担い手がなかなかいない」

という地域課題を聞いた時、学校側の「学生が高齢者とコミュニケーションをとる機会を作りたい」という目的と、「学校の教室を使用することができる」という強みを活用することで、コーディネーター同士が連携し、新たなサロン作りにつながるといったケースがあります。

また、専門学校の強みとして、学生一人一人は１～２年で変わってしまうが、学校がその場所にある限り地域の一員として継続して学生が関わることができます。それは、自治会や町内会などの地域行事や、施設などのイベントボランティアとして、継続的に関わることにつながります。これは、ただ単に人員として必要とされるのではなく、若い人が地域に関わることで、地域住民にも意識を持ってもらうことができ、地域の活性化にもつながっているのです。

何でも、新しい事を始めることが重要なのではなく、既存の地域活動や資源を活用することも大切な手段です。そのためには、地域に学校を入れてもらうこと、つまり地域のネットワークに参加することも、コーディネーターの大切な役割の一つと言えます。

【学校・学生と地域がつながった事例】

写真：北海道福祉教育専門学校「地域委員会の開

写真：北海道福祉教育専門学校
地域サロン「シンチャオサロン母恋」

写真：関東福祉専門学校
「地域の方と昼食を作って食べる会」

写真：YMCA 健康福祉専門学校「餅つき」

③　「広げる」

コーディネーターは、実際に学校・学生と地域をつなぎ、具体的な活動が始まったら、それで終わりではなく、次の展開について考えなくてはいけません。

そこで大切なことは、始まった活動が「目的に合っているか」ということです。学校や学生にとってどうか？地域にとってどうか？きちんと確認する必要があります。なぜならば、良かれと思ってやっていることが、実は求めていることや求められていることと違っている場合があるからです。例えば、「隣の町でお茶飲みサロンをやっていてたくさんの高齢者が参加しているから、自分たちの町の高齢者も必要と思っているに違いな

いと考え、同じようなお茶飲みサロンを開催したところ、初めは物珍しく来てくれたが、２回３回と実施していくうちに全く参加者が来なくなった。」ということがあります。これは、自分たちの町の高齢者が本当にお茶飲みサロンが必要だと思っていたのか、リサーチをきちんとしていないこと、また、参加した高齢者の声をきちんと拾えていないことが原因で起こる現象です。事前に、地域の高齢者の現状を知るためにアウトリーチすることは当たり前のことですが、参加していた高齢者の声を拾うことも怠ってはいけません。ただ単に「サロンを開けば地域の課題が解決する」などと思わず、１回１回アンケートをとったり、学生が交流する中で高齢者の意見を聞いてみるなど、目的に合っているかどうかの確認作業も必要となってきます。

一方で、集まる人数が少ないと「失敗」と捉えてしまうことがありますが、果たしてそうでしょうか？人数が少なくても、学校が求めている「学生と地域との交流」であったり、地域の人が求める「気軽に立ち寄れる場所」と、目的が合致していれば「成功」といえるのです。その場合、学校や学生が地域の人を「お客さん」と捉えるから「人が集まらない＝失敗」と思ってしまうのではないでしょうか？サロンの開催等で押さえておきたいことは、学校も学生も地域の方もみんなが参加者であり担い手でもあるということです。そこを意識すると、人数ではなく一緒に過ごす時間が大事であることがわかると思います。

もし、なかなかうまくいかないことがあれば、「一度やめてみる」ことも選択肢の一つとして持っておきましょう。求められていないことだったり、無理に続けていることは、決してうまくはいきません。一度やめてみることが、新しい活動につながるきっかけになる場合もあります。

【コーディネーターに求められるファシリテーション力】

学生から意見を聞く機会を作ったとき、活発に意見を言える人もいれば、人前で意見を言うのは苦手という人もいます。つい、発言できる人の意見ばかり聞いてしまいがちですが、「発言しない＝意見がない」のでしょうか？「本当はこう思っているけれど批判されたら嫌だな」とか「発言したからあなたがやってと言われたらどうしよう」などといった不安が、発言するというハードルを上げているのかもしれません。そこで、コーディネーターは、参加者が話しやすい演出やオープンな雰囲気づくりをする必要があります。例えば、お茶を飲みながらとか、一人１本づつペンを持って模造紙に自由に書き出すとか、ゲーム要素を取り入れて制限時間内に意見を出し合うなど、工夫次第で参加しやすい環境を作ることができます。「話し合い」はお互いへの関心から始まります。一人一人が意見を出し合う（話し合う）ことで、他の人がどのように考えているのかを知ったり、答えは出なくても自分で「気づけたこと」で、そこに参加したという満足感を得ることができるのです。

②地域コーディネーターの課題

＜各種コーディネーター・地域との連携＞

地域には、既に様々なコーディネーター（例えば、生活支援コーディネーター、地域福祉コーディネーター、ボランティアコーディネーター、学校支援コーディネーター等）

が存在します。冒頭で言ったように、コーディネーターは調整役ですから、地域には調整役がたくさんいることになります。それぞれのコーディネーターには、課せられた役割があると思いますが、対象としている先はどうでしょうか？同じ地域の中で活動していれば、同じ地域住民が対象となっていないでしょうか？それぞれのコーディネーターがそれぞれの思いでそれぞれに地域住民と調整し始めたら、地域住民はどんな思いをするでしょうか？迷惑を被っている場合もあるのではないでしょうか。

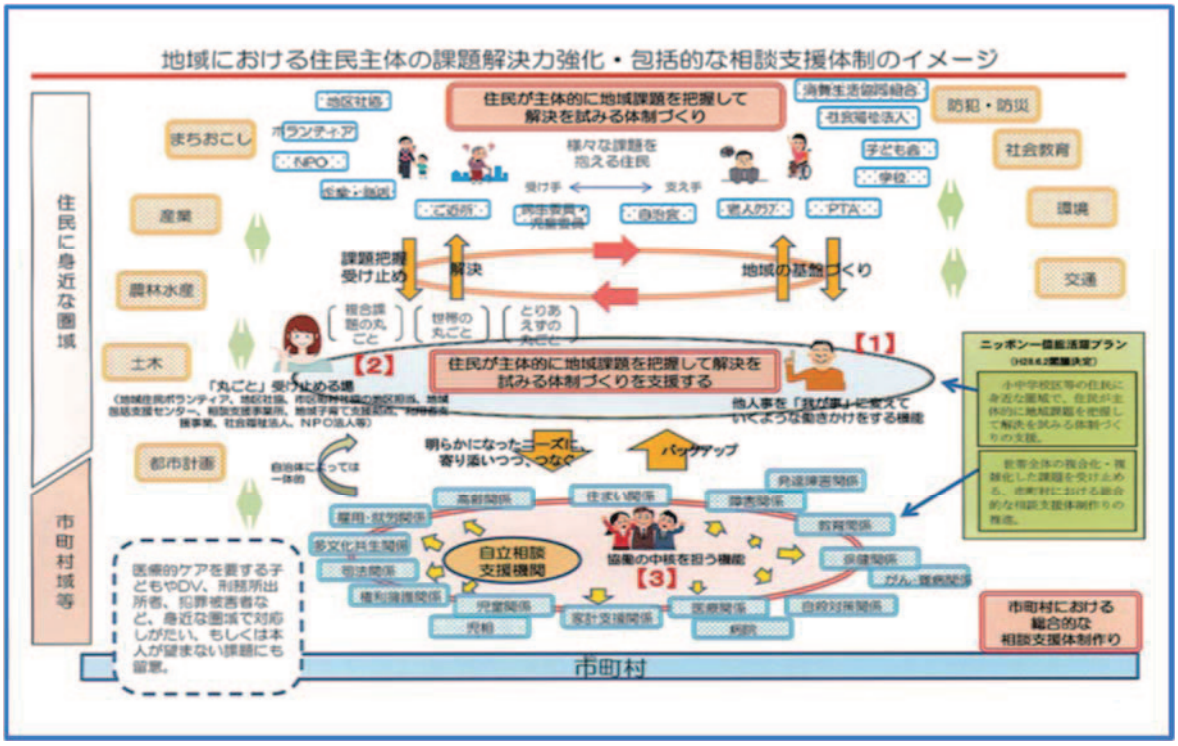
住民と一緒にその地域の課題を解決していくためには、コーディネーター同士が連携することが大事です。

また、これは地域活動にも言えることです。自治会・町内会などの地縁組織や、ボランティアグループ、NPO 法人、公民館の自主グループ活動、サロン活動など、既に各団体が色々な地域活動をしているのです。そんな時、学校の都合で既にある活動と同じ日に同じような内容の行事を開催したらどうでしょう？対象となる市民が重なってしまうことで、参加者を取り合うことになってしまいます。

また、例えば「貧困家庭の子どもたちのために、こども食堂を 1 カ月に 1 回開催する」という活動は、本来の目的を達成できているのでしょうか？貧困家庭の子どもたちへの支援は月に 1 回で良いのでしょうか？よくあることですが、流行りに乗って、良かれと思って行うことが、実は活動する者の自己満足でしかない場合があるのです。

これが、既に行っている地域の子ども食堂の補完になっていたり、目的が貧困ではなく孤食の解消であれば、また、捉え方は変わると思います。

コーディネーターは、コーディネーター同士も地域活動においても、競合しないように調整していくことが大切なのですが、それぞれ自分たちの成果につながることもあり、調整や連携が難しいのが現状かもしれません。



出典：厚労省「地域力強化検討会資料」

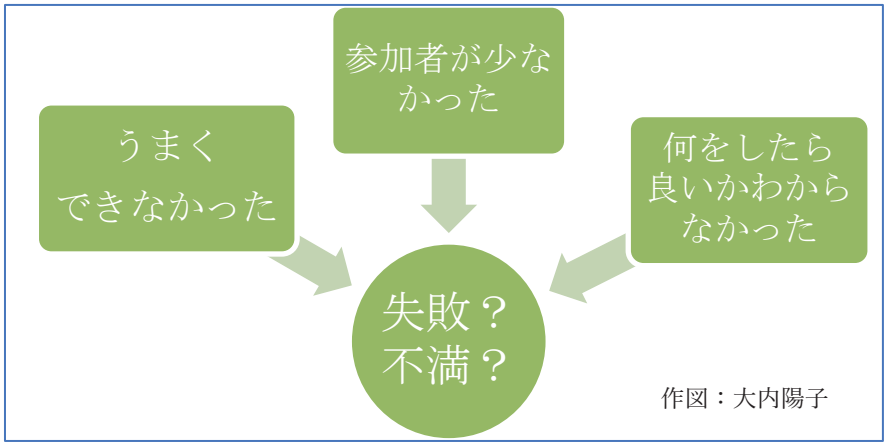
＜地域が学生に期待すること＞

学生が地域に関わることは、マンパワーとしても非常に心強いことです。特に、高齢化してきている自治会・町内会の活動や、老人クラブなど、若い人への期待値が高くなります。ここで、コーディネーターが気をつけなくてはいけないことは、地域の方による過度な期待に対し、きちんとフォローすることです。地域の方は、学生に対し、「動いてくれる人（労力）」「何でもやってくれる人」という意識が強いからです。

一方で、教員は、学生たちが期待されるほどコミュケーションがとれないので、「地域で育ててもらいたい」と思って送り出しています。コーディネーターは、学校と地域をつなぐときには、まず「短期間で成果を得ようとせず、長い目で見てもらいたい」ということを、地域の方々に理解してもらうことが必要です。

＜地域活動に対する考え方・捉え方を変える＞

前項の「広げる」のところでも少し触れましたが、活動を考えたり進めていく上で、なぜか否定的に考えることが多くなります。否定的な考え方は、結果も否定的になるので、自分達の活動が失敗だったのか？とか、こんなことやっても…といった不満につながってしまいます。



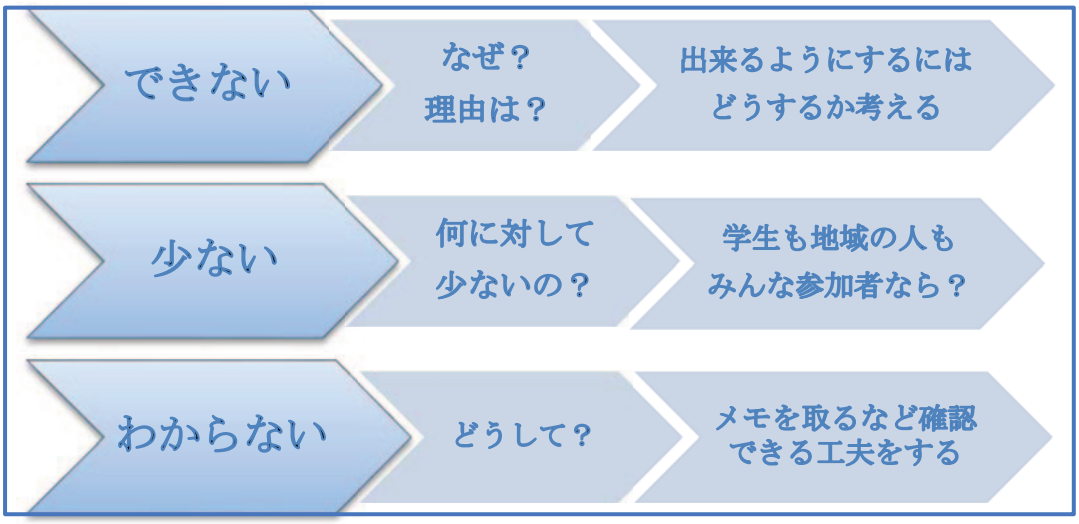
実際に活動する学生は、否定的な考えから躓き、活動に対しての意欲が薄れてしまうので、コーディネーターは肯定的に考えるように持ち掛けていくことが大事です。例えば、下図のように、否定的な考えを「どうしてそういう考えになるのか？」

「なぜそうなったのか？」と問いかけることで、理由を確認し、それはどうしたら肯定になるのかを導き出すことができます。

新しいことを考える時は、「こういうことをやってみたい！」といった前向きな意見から始まると良いのですが、どうしても「こんなことできないよね」とか「お金がかかるんじゃない？」といった否定的な意見になりがちです。そこで、なんでできないのか？という理由を確認し、できるようにするにはどうしたらいいかを考え意見を出し合うと、工夫次第で色々なことができるようになるのです。

ここまで意見を引き出していくことは難しいことですが、コーディネーター自らが肯

定的な考えを持って取り組むことが大切です。



作図：大内陽子

＜学校の強みを生かす＞

学校は地域の中にあります。多くの学生が通ってきます。教室などの場所があります。この 3 つは、非常に大きな強みとなっています。

学校がその場所にある限り、学校は地域の一員になれます。また、そこに通ってくる学生も 2 年間はその地域の人として関わることができます。コーディネーターはぜひ、学生に「学校に通っている 2 年間はその地域の区民や市民である」ことを伝えて欲しいと思います。学校が地域活動に参加するようになると、地域の人と顔の見える関係が作られます。近年では、留学生も多いので、地域の人と交流することで、お互いに見守り見守られる関係ができます。日常的なつながりが出来ていると、災害など非日常的なことが起きた時にも、そのつながりが役に立ちます。例えば、災害が起きて避難所に行ったとき、全く知らない人の中にいるのは不安になりますが、朝の挨拶や地域活動等で顔を合わせていた人と会っただけで、その不安は和らぎます。これは、地域の人もそうですが、留学や上京して家族と離れて暮らしている学生にとっても安心につながることです。

また、学校として継続的に関わることが出来るという強みは、地域活動を活性化させるきっかけづくりにもつながります。例えば、赤い羽根共同募金や歳末助け合い募金等の街頭募金は、毎年同じ時期に行われます。募金は地域に還元されることが多いですから、学生が毎年街頭に立ち声をかけ集めているお金を地域の方が活用することになるので、継続していくことで専門学校の存在や学生に対して感謝の気持ちが生まれ、そのお金を大事に使って地域活動を行うようになります。また、学生自身も関わってみることで募金がどのように活用されているのかがわかり、募金活動の大切さを知ることができます。

近年増加している災害に対する支援も、継続的な支援が必要となります。瓦礫の撤去や各家のゴミ出しなどは、短期間で大人数での支援が必要とされますが、日常生活やメンタル面での支援は長期にわたって必要とされます。コーディネーターは学校や他機関

と連携しながら、少しずつでも継続的に学生が関わることができる活動に結びつけて行って欲しいと思います。

【被災地のサロン活動復活支援】

愛媛県宇和島市吉田町には20近くのサロン活動がありましたが、一昨年の7月豪雨災害の被害により、全てのサロンが休止状態となりました。東京都社会福祉協議会では、この災害でコミュニティでのつながりが薄れてしまったり、壊れてしまわないように、サロンを再び住民自身の手で開催していけるよう、きっかけ作りを行いました。東京より都内社協職員等が吉田町内で移動喫茶活動に取り組みました。ホットケーキと飲み物を提供すると共に、人が集まって会話しやすい空間を作るのが目的です。東京チームは一週間ごとの交代制で現地に行っていたので、各サロンの方とお会いするのは1度きりでした。約3カ月間、支援する人は入れ替わりましたが、吉田町の人にとってはこの継続支援で「東京チームが吉田町に来て元気をくれた」と感じてくれ、少しづつサロンが復活していきました。

写真：関東福祉専門学校の街頭募金の写真

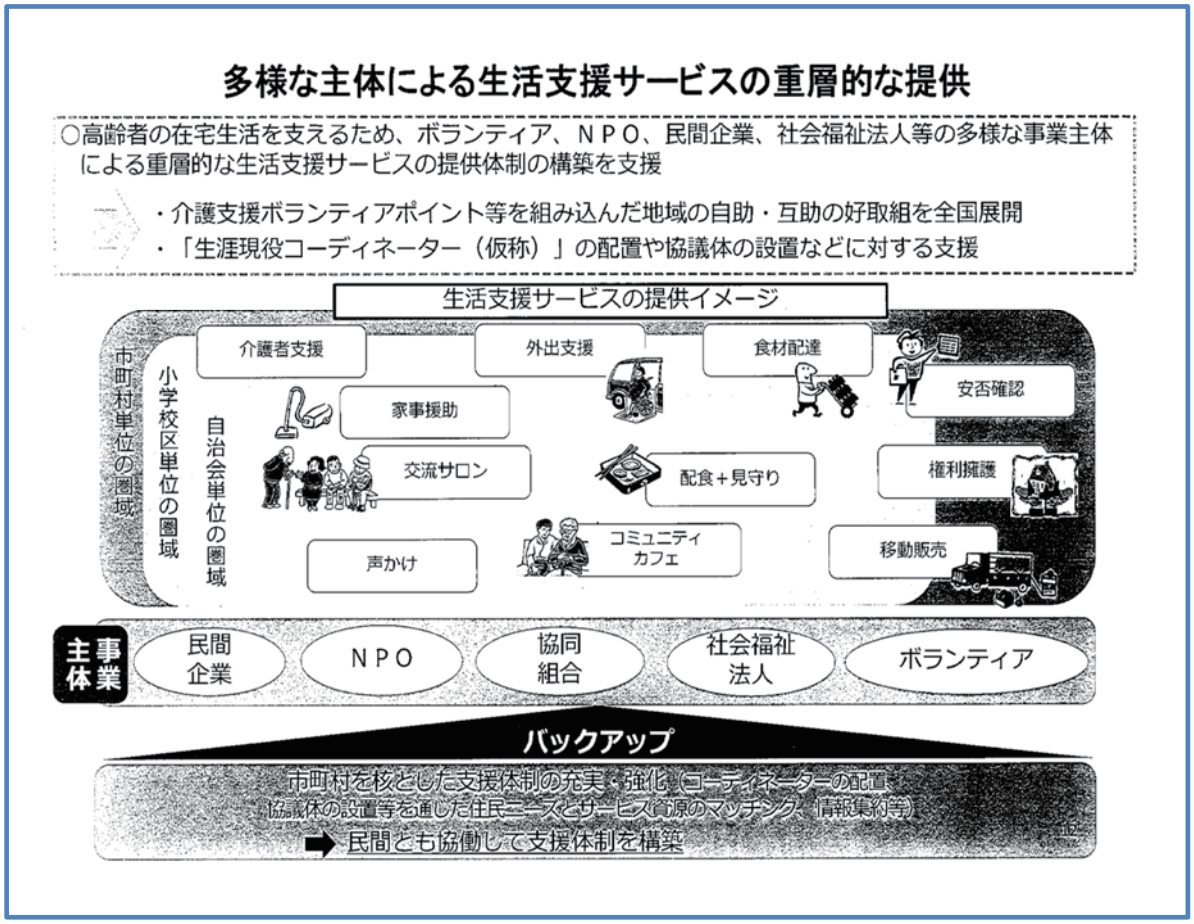
＜これからの課題＞

少子高齢化が進む中で、行政は「地域共生社会」とか「住民主体」といった、住民同士が助け合っていく社会を築こうとしています。さらに、介護保険制度では、多様な主体による生活支援サービスの提供体制の構築を考えています。その多様な主体には専門学校等も含まれていると考えます。そこで、学校がどのように参画していくかということも課題になってくるでしょう。

地域の中で、既存の活動やサロン活動等の居場所つくりといった求められる活動を実行していくことも一つの方法ですが、介護の勉強をしている学生という強みも表に出していっても良いのではないかと思います。例えば、介護予防・生活支援総合事業の実施に当たり、その担い手不足に行政は悩んでいます。一般市民向けに研修を行って養成しようとしていますが、実際に働く人が少ないというのが現状のようです。この事業は無償のボ

ランティア活動ではありませんから、介護の勉強をしている学生の実践の場として、該当する施設と協働することで、お互いに継続的に安定した場をつくることができるのではないでしょうか？

このように、これからの地域社会はますます変化していくと思われるので、コーディネーターは多くの情報をキャッチして、たくさんの引き出しを作り、学校や学生に提供できる人材であって欲しいと思います。



出典：厚生労働省資料

（社会福祉法人 国分寺市社会福祉協議会　大内 陽子）

第３章　今年度事業評価

１．評価委員会における協議

２０１９年度の取組み内容は、本事業を全国へ普及するための評価基準の検討である。

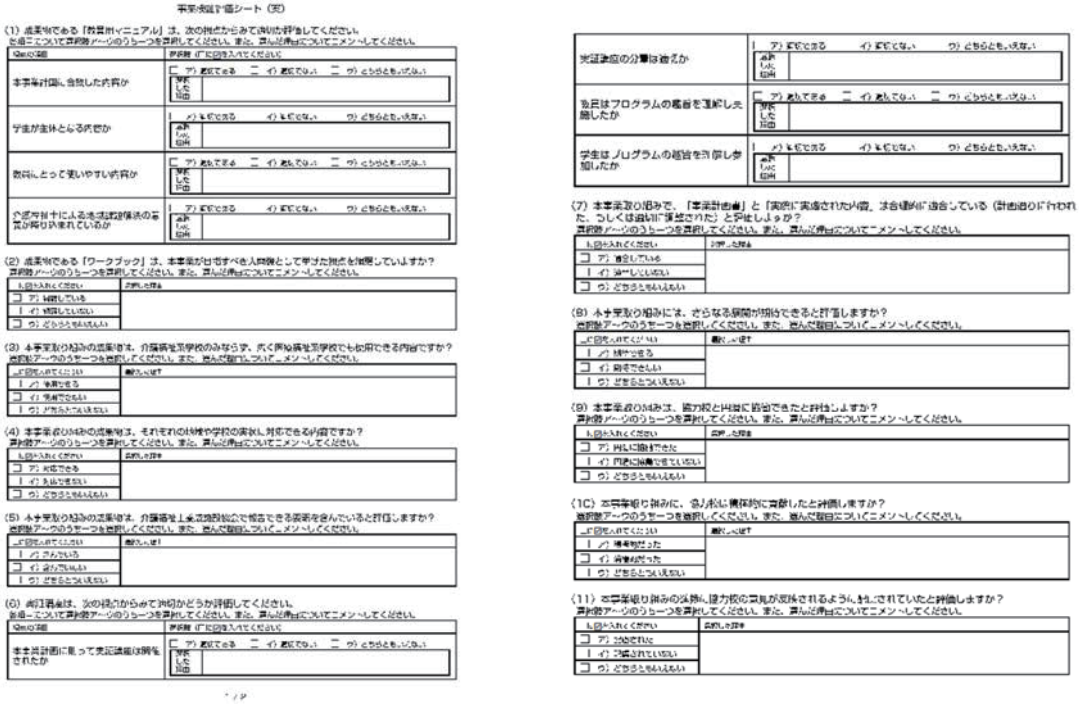
活動状況は、以下のとおりである。

会議日	会議名	内容
９月３日（火）	第２回評価検証委員会	各委員会の動きについて 評価検証の枠組みについて
１０月１８日（金）	第３回評価検証委員会	評価方法の検討 基準値の測り方 全国へ普及するための評価基準

評価検証委員会では、学習プログラム開発委員会が検討・作成しているワークブック（学生用）、ガイドブック（教員用）の各チャレンジの評価項目については、学習プログラム開発委員会で設定していただくこととなった。

総体的な評価は、以下の項目で評価していく必要があるのではないかとの意見が出た。

また、この事業全体については、全国へ普及するための必要条件として提示を行い、その条件を解決するプログラムになっているのか否かといった必要条件の項目整理をし、評価シートを作成した。



事業検証評価シート（案）

(1) 成果物である「教員用マニュアル」は、次の視点からみて適切な評価してください。
各項ごとに下記の選択肢から選択してください。また、選んだ理由についてコメントしてください。

項目の説明	選択肢（○を記入してください）
本事業計画に合致した内容か	□ ア）あてはまる　□ イ）あてはまらない　□ ウ）どちらともいえない 理由
学生が主体となる内容か	□ ア）もそうである　□ イ）もそうでない　□ ウ）どちらともいえない 理由
教員にとって使いやすい内容か	□ ア）あてはまる　□ イ）あてはまらない　□ ウ）どちらともいえない 理由
必要な指導上の注意点・教授法の要点が盛り込まれているか	□ ア）そうである　□ イ）そうでない　□ ウ）どちらともいえない 理由

(2) 成果物である「ワークブック」は、本事業が目指すべき人材像として掲げた視点を反映していますか？
選択肢アーウのうち一つを選択してください。また、選んだ理由についてコメントしてください。

上記から選択してください	選択した理由
□ ア）反映している	
□ イ）反映していない	
□ ウ）どちらともいえない	

(3) 本事業取り組みの成果物は、介護福祉系学校のみならず、広く医療福祉系学校でも利用できる内容ですか？
選択肢アーウのうち一つを選択してください。また、選んだ理由についてコメントしてください。

上記から選択してください	選択した理由
□ ア）利用できる	
□ イ）利用できない	
□ ウ）どちらともいえない	

(4) 本事業取り組みの成果物は、それぞれの特徴や学校の実情に対応できる内容ですか？
選択肢アーウのうち一つを選択してください。また、選んだ理由についてコメントしてください。

上記から選択してください	選択した理由
□ ア）対応できる	
□ イ）あまり対応できない	
□ ウ）どちらともいえない	

(5) 本事業取り組みの成果物は、介護福祉士養成施設以外で活用できる要素を含んでいると評価しますか？
選択肢アーウのうち一つを選択してください。また、選んだ理由についてコメントしてください。

上記から選択してください	選択した理由
□ ア）含んでいる	
□ イ）含んでいない	
□ ウ）どちらともいえない	

(6) 実証講座は、次の視点からみて適切かどうか評価してください。
各項ごとに下記の選択肢から選択してください。また、選んだ理由についてコメントしてください。

項目の説明	選択肢（○を記入してください）
本事業計画に照らって実証講座は開催されたか	□ ア）あてはまる　□ イ）あてはまらない　□ ウ）どちらともいえない 理由
実証講座の分量は適切か	□ ア）適切である　□ イ）適切でない　□ ウ）どちらともいえない 理由
教員はプログラムの趣旨を理解し実施したか	□ ア）あてはまる　□ イ）あてはまらない　□ ウ）どちらともいえない 理由
学生はプログラムの趣旨を理解し参加したか	□ ア）もそうである　□ イ）もそうでない　□ ウ）どちらともいえない 理由

(7) 本事業取り組みで、「本事業計画書」と「実際に実施された内容」は合理的に適合している（計画通りに行われた、もしくは適切に「修整された」と評価しようか？
選択肢アーウのうち一つを選択してください。また、選んだ理由についてコメントしてください。

上記から選択してください	選択した理由
□ ア）適合している	
□ イ）適合していない	
□ ウ）どちらともいえない	

(8) 本事業取り組みには、さらなる期間が期待できると評価しますか？
選択肢アーウのうち一つを選択してください。また、選んだ理由についてコメントしてください。

上記から選択してください	選択した理由
□ ア）期待できる	
□ イ）期待できない	
□ ウ）どちらともいえない	

(9) 本事業取り組みは、協力校と共同に協働できたと評価しますか？
選択肢アーウのうち一つを選択してください。また、選んだ理由についてコメントしてください。

上記から選択してください	選択した理由
□ ア）共に協働できた	
□ イ）共に協働できていない	
□ ウ）どちらともいえない	

(10) 本事業取り組みに、学生が主体的に貢献したと評価しますか？
選択肢アーウのうち一つを選択してください。また、選んだ理由についてコメントしてください。

上記から選択してください	選択した理由
□ ア）積極的だった	
□ イ）消極的だった	
□ ウ）どちらともいえない	

(11) 本事業取り組みの学習に協力校の実践が反映されるような、されていたと評価しますか？
選択肢アーウのうち一つを選択してください。また、選んだ理由についてコメントしてください。

上記から選択してください	選択した理由
□ ア）反映された	
□ イ）反映されていない	
□ ウ）どちらともいえない	

図：事業評価検証シート（評価検証コーディネーター　神山　資将　作成）

今後は、項目整理を行い、学生・教員・地域への調査も行っていく必要がある。

（文部科学省委託事業　事務局）

２．モデル校３校における実証講座の評価

（１）北海道福祉教育専門学校

１．概要

（１）名称　　シンチャオサロン母恋のクリスマス

（２）日時　　令和元年 12 月 9 日（月）13：30〜15：30

（３）場所　　北海道福祉教育専門学校　講堂

２．シンチャオサロン母恋の様子

13 時を過ぎた頃から、地域の方々が徐々に学校に集まってきました。以前もサロンに参加したことのある方も多いようで、気さくに受付の方と会話をしながら進む方も見受けられます。会場に移動すると、主に一年生がお客様を座席に誘導しながら声をかけます。

定刻の開会宣言、澤田乃基学校長の挨拶に続き、一年生はベトナムからの留学生による民族衣装アオザイを纏っての舞いと一年生全員によるダンスがありました。

二年生は寸劇―認知症に関する知識を織り交ぜたもの。認知症が進みつつある母親を持つ家族と介護支援専門員とのやり取りを中心に展開する中に、認知症に関する知識や親子の関わり方の解説を交えるという手法。迫真の演技と、丁寧でわかりやすい解説のバランスが見事でした。参加者はサロンが進むにつれて引き込まれているようでした。

終了後は、学生全員と教員による振り返りの時間が設けられ、気づいた点や次回に向けての改善点などが話し合われ、二年生からは地元で地域の方と共に働き、暮らしていくことへの想い、覚悟が聞かれ、一年生にとっては介護福祉士で働くことの志に触れるまたとない機会になったのではないでしょうか。

写真：シンチャオサロン母恋

３．実証事業を視察して

二年生は認知症の理解というテーマについて共感を得やすい演劇で伝え、一年生は留学生と共に学ぶ環境の多様性を活かしたレクレーションを披露、それぞれに学習や実習で得た知識と経験を活かし自作している点が評価できます。

一方で、参加者への席への案内や合間での声かけなどでは、躊躇したり、譲り合ったり、学生同士で会話したりするところが散見されました。全体としてプログラムの内容づくりに学生の注力が向いていたのか手段（自分たちの担当のプログラム運営）が目的になってしまい、本来の目的である「自ら進んで地域社会に入っていける」（『地域課題解決プログラム・教員用学習指導ガイドブック』Ｐ４）介護福祉士となるためのコミュニケーション力の向上に取り組めていない点が課題といえるでしょう。

本事業で設計・作成された『地域課題解決プログラム』では、指導者が学習の質を向上させるため、学生自らが目標を設定し、評価項目・評価方法を設計したうえで取り組む仕組みを用い、学生が課題解決のサイクルを体現することに有効です。教員は『地域課題学習プログラム』のガイドブックを活用し、サロンの前後の意識の変化を評価したり、学生にワークシートによる目標設定を課したり、課題解決サイクルにより学生の主体性、積極性を引き出

していただきたいと願います。

これからもサロンを軸に学生が主体的に創意工夫して、地域の方と交流することで、自らの社会的役割に気づき、介護福祉士としての仕事に自信と誇りをもって学びを続けていただくことを期待しています。

（地方創生・教育推進ネットワーク　事務局長　清崎昭紀）

（2）関東福祉専門学校

実証講座「パフォーマンス大会」を観覧した感想は、何よりもまず「楽しかった」ということである。大会は「楽しい」を学生達の持つ才能を活かして企画・発表する事を目的の一つとしているが、「パフォーマンス」の質も高くこの目的には適っていた。さらに、介護支援の学習プログラムという観点に広げて捉えると、「主体性」、「地域性」、「多文化性」、「共感性」、「実効性」、のある実践であるといえるであろう。

・主体性

「パフォーマンス大会」への参加は全員参加を原則としつつも、グループまたは個人で企画し、エントリーして、練習を行い、当日にパフォーマンスを行う、という一連の過程は学生の主体的な取り組みである。

・地域性

大会は地域に開かれて開催されており、地域住民、社会福祉施設関係者等が観覧しており、学生やその将来である介護福祉士、あるいは学校や社会福祉施設が「地域の一員であることの自覚」が実感できる取り組みである。自ら（介護福祉士や施設等）のステークホルダーが利用者やその家族にとどまらず、地域社会全体に及んでいることに理解していく手助けとなり得る。

・多文化性

演目は、出身国のダンスから介護現場での一場面をミュージカル風に演じたものなど、多文化性が発揮されており、相互理解を促しており、国籍、年齢や経歴などその背景が多様化している介護福祉士の養成教育におけるダイバーシティー・マネジメントの有力な手段となり得る。

・共感性

「楽しい」という気持ちや「楽しむことの大切さ」の実践の場である。参加者、観覧者が楽しめるように工夫された多文化で様々なパフォーマンスは、「楽しい」を核にした気持ちを自然に共感することができる。

・実効性

学生達が卒業後に介護を実践するのは生活の場である。また、重度化を予防する観点からもアクティビティの向上は欠かすことのできない課題である。この課題に直接的に対応した即戦力の養成の期待に応えるものである。

一方で、一般的に導入していくには多少のハードルはあると考えられ、今後の課題といえるだろう。

モデル校の場合、地域貢献活動・芸能福祉講座を独自のカリキュラムとして開講されており、外部の講師を招聘した授業も行われている。また「パフォーマンス大会」は今回で 13 回目であり、ノウハウが蓄積されていることが伺えた。導入にあたっては一連の授業展開に各校の特性に合わせた工夫が必要である。

（日本福祉教育専門学校　社会福祉学科専任教員　東　康祐）

３）YMCA 健康福祉専門学校

1.　実証講座の内容

実証講座は、以下の日程と内容で実施された。

①　第 5 回目の授業（団地への訪問）

訪問場所 ： 県営吾妻団地 3 号棟 301 号

令和 1 年 12 月 17 日(火)　1 時限と 2 時限の 2 コマで実施される。

当日は、自治会の役員と民生委員、学生、教員等で 30 名以上の方々が参加されるため、自治会館を利用する予定であったが、体操教室で利用しているため、団地の 1 室 2DK の広さの「ふれあいサロン」にて交流を行った。

各グループに分かれて、グループごとに用意してきた質問を確認し、役員や民生委員の方々から話を伺い、その後 2 つのグループに分かれて団地内を案内していただき見学は終了しました。

②　第 6 回目の授業

午後から学校で、3 つのグループで振り返りや情報共有を図り、発表の方法などの確認を行った。

見学の際に、自治会役員より年明けの餅つきイベントのお誘いを受け、学生へ投げかけたところ、7 名の参加希望があり、引率の教員などとともに参加することとなった。

なお、この振り返りでは、地域コーディネーター(YMCA 職員)と専任教員 2 名が対応して学生のサポートを行った。

2.　実施を見ての意見

I.　見学では、テーマ別の 3 つのグループに分け、それぞれ民生委員、ふれあいサロン運営委員、自治会役員などの方々に担当してもらい、テーマに沿って交流を図ろうとしたが、会場の広さの関係もあり、うまく分散して議事を進めることができず、ざわつく場面も見受けられた。

II.　今回は、学生たちが、それぞれの課題を持って活動ができるように、①団地内外の地図を作るグループ、②団地の歴史の作成グループ、③団地の現状を調べるグループの 3 つに分けたものの、議事の進行においては、新たな課題が明確なった。

III. 上記の I を踏まえて、学生は自治会の役員などの説明には、それなりに興味をもって聞いているが、受け身であり、実際に自分たちが議事を進めるという実感を持つことができない様子がうかがえた。また、メモをとることができている学生も少なかった。

IV.　令和 2 年 1 月 5 日の餅つきのイベントにお誘いを受け、参加することとなった。今後も活動に継続されるという点においては意義あるものであった。

（群馬医療福祉大学短期大学部医療福祉学科教授　白井　幸久）

第4章　今後の展望

1. 今後の展開について

2020年度は、以下のことを目標及び行動計画とする。

【目標及び行動計画】

① 「ワークブック（学生用）」、「ガイドブック（教員用）」、「参考資料」の完成

② 実証講座による「ワークブック（学生用）」、「ガイドブック（教員用）」、「参考資料」の効果測定と評価検証

・実証講座を通じた「ワークブック（学生用）」、「ガイドブック（教員用）」の検証と学習成果の効果測定

・地域活性化にむけた活動計画の実践と効果測定（連携した行政、団体、企業、介護施設等の評価・検証、参加高齢者・住民アンケート調査による満足度調査の実施、学生のアンケートと一部面談による効果、運営内容と課題の検証・修正）

③ 全国への普及策の検討

・3地域（北海道室蘭市、埼玉県鴻巣市、神奈川県厚木市）と東京における成果報告会の開催

・全国への普及計画を検討するための研究集会の開催、関係紙誌への広告出稿、効果普及想定地域の専修学校への取組みへの勧奨活動

（文部科学省委託事業　事務局）

2. 目指すべき人間像に向けて

1）根ざすところ

樹木を育てる専門家によると、根っこの張り具合は幹の丈と枝の張り具合を見ればおおよそ見当がつくそうです。なぜなら、深く根ざすほど幹は伸長し、広く根を張る方向に枝も張り出し成長していくからです。つまり、樹木とは幹と枝葉の伸び方を見れば、その根がどのように張り巡らされているかがわかり、その逆も同じことが言え、両者は互いに直接的な影響が及びあう関係であると言うことができます。もちろん、樹木の成長を左右するのは土だけではありません。水と太陽もまた然り。

個性的で美しく活き活きとした樹木を育てるために、専門家は“いかに根を張らせようか”或いは“いかに枝葉を茂らせようか”を思案し、場所（器）と土を吟味して環境全体を整えます。彼らは個々の樹木の特徴を深く理解しており、それぞれに適った環境を整えることで樹木自身が潜在的に持ち得ている「根ざすチカラ(生き抜くチカラ)」を最大限に引き出すよう努めます。また彼らは個々の樹木に最適な土づくりの研究を惜しみません。どんな土壌に根を下すかは樹木の成長を左右する大変重大な要素ですから。

さて、実践力を高めることが大きな課題となっている介護福祉士の現状をこの樹木の成長に置き換えて考えてみると、問題は“根っこ”にあるのではないかという仮説がすぐに立てられます。実践力が伴わないという現状は、樹木に置き換えれば幹や枝葉が順調に（健全に）成長していないことに等しく、言わば花も咲かなければ実もつけることが無い状態にあるわけですから、先ずは根っこに問題があるのではないかと確かめてみるのが初動としては正しい判断であると考えます。

一方で、介護福祉士の実践力を高める土壌とは一体どんな土なのかを確かめておく必要もあります。それにしても・・・。そもそも、介護福祉士とはどんな土を好んで根を張るのでしょうか？或い

は、どこに根ざせば目指すべき介護福祉士像にたどり着けるのでしょうか？

2）生活するところと介護するところ

介護福祉士の専門性とは、対象者が生きがいを感じながら活き活きとした暮らしが継続できるように彼らの日常生活の中に入り、生活支援の専門的な知識と技術を用いて具体的に生活を支援していくことにあります。

ここで疑問が一つ。対象者の日常生活とはどこにあるのでしょうか？答えは簡単ですね。それは住み慣れたご自宅であり、通い慣れたスーパーであり、週に1回掃除をするゴミ集積場でもあるでしょう。馴染みの喫茶店や美容室（理髪店）、お寺や神社の境内、雨ざらしのバス停のベンチや色落ちした蚊取り線香の看板。消防団の寄合所や酒屋の軒先、それから・・・。つまり、対象者の日常生活とは地域社会そのものであるとまとめることができそうです。

前段で生じた疑問の答えが見つかりました。介護福祉士が根ざすところは地域社会であると考えます。対象者の日常生活そのものである地域社会の中に入って、深く根ざし日常生活という土にしっかりと根を張ることで、幹は逞しく伸長し、枝葉は茂り、花を咲かせ実を結ぶ。介護福祉士と地域社会とのよい循環が繰り返され持続されることで彼らの実践力は向上し、結果として地域社会で活躍できる、地域社会になくてはならない介護福祉士が養成される。ただ、ここでまた疑問が一つ。地域社会の中で暮らしている人はお元気な方が多く、介護を必要とする方、特に介護を必要とする度合いの高い方は地域社会の中ではなく、病院や施設の中で暮らしている人が沢山いらっしゃいます。この場合は日常生活の場が病院や施設ということになりますので、介護福祉士としてはやはり病院や施設に根ざすことが最も適切な判断ということになるのでしょうか？社会的入院の問題にも通じますが、治療や介護をするところで、人は希望や喜びを感じながら活き活きと楽しく暮らしていくことができるものなのでしょうか？そもそも病院や施設も地域社会の一部ですから、やはり介護福祉士は地域社会に入っていき日常生活に根ざすことがより適切な在り方であると言えるのでしょうか？ただこの場合は、病院や施設が既に地域社会の一部になっており、地域に暮らす人の日常生活の一部として調和していることが大前提となりますが。

私は実践力が未熟なまま停滞している介護福祉士とは、根ざすところを間違えているか根絶やしになってしまっているのではないかと考えます。しっかりと根が張れていなければ、介護福祉士という“役割”の内側と外側との循環が上手くいかないですし、もしも循環の仕組みができていないまま放置されているのであれば当然実践力の成長は望めません。自己研鑽という意識も当然芽生えないと思われます。

皆さんはどのように考えますでしょか？

3）遊び心と介護福祉士

前段では地域社会に入っていくことの重要性を、日常生活に根ざした介護福祉士を目指すことの必要性という側面から触れましたが、地域社会に入っていくことで得られると予測できる成果には別の側面もあります。6つのチャレンジと学習教材を通して引き出され、養成されると期待できる能力が3つありますのでここでご紹介いたします。それは、「感性」・「Yes and」・「勇気」です。ここで扱う「感性」とは、美醜・善悪・快不快等に対する評価判断が何を意味するかを感じとる能力を表しており、「Yes and」とは物事を肯定的に受け入れ、発展的（活かす・産む）なアイデアを加えて反応する能力を、「勇気」とは可能性に焦点を当てリスクに飛び込む能力を表しています。

この3つの能力のスイッチをオンにするためには“協力者”が必要です。そしてその協力者のエネルギーに火をつけなければなりません。その協力者とは、「遊び心」です。ここで扱う「遊び」とは「Play」と置き換えていただくと、その意味がより具体的に伝わると思います。「Play」の中には心を活き活きとさせてくれる栄養素がたくさん含まれています。皆さんも「Play」を通して実に多くのことを学んでこられたのではないでしょうか。

Playful(遊び心に満ちた)な思考と行動が、感性を磨きYes andを後押しし勇気を発動するエネルギー源なのです。「人生で必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ」(ロバート・フルガム 1990)がベストセラーになって30年が経ちます。幼少期に、誰と・どこで・どのような遊びを・どのようにしていたか(或いはしていなかったか)は、思春期以降の生活に大きな影響を及ぼし人生の質をも左右することを、30 年経過した今、私自身が歩んできた道を振り返ることと様々な支援の実例を通して実感しています。

人は2つの方法で「生き抜く力」を身につけるのではないでしょうか。一つは遊びを通して習得し、もう一つは学習を通して修得する。

この学習プログラムを活用してくださる皆様には、「地域社会」と「遊び心」に根ざした、「遊び心」が思考や行動の中核に保てている“Playful”な介護福祉士(Player)を目指していただきたいと、心から願います。

(学習プログラムコーディネーター　松田朗)

２０１９年度　文部科学省　専修学校による地域産業中核的人材養成事業

地域活動による高齢者支援・介護支援の学習プログラムの研究開発事業

学校法人敬心学園　職業教育研究開発センター（事業責任者　川廷　宗之）

発行年月日　令和２年３月１日
発　　行　川廷　宗之
〒１６９－００７５　東京都新宿区高田馬場２－１６－６
学校法人敬心学園　職業教育研究開発センター
電話　０３－３２００－９０７４　ＦＡＸ　０３－３２００－９０８８